

昭和二十五年十月五日第三種郵便物認可（毎月一回一月発行）
昭和二十六年一月廿四日日本国有鉄道特別掛紙承認（第一八八七号）
昭和二十八年一月三十日印刷昭和二十八年二月一日発行第七期第二号

アラス 譚奇

新時代の風俗雑誌





スペインに於ける宗教裁判、牢獄の内部、

宗教裁判なるものは、新教徒を壓迫するために羅馬法王の隆盛時に行はれたもので、グレゴール第九世の一千二百三十二年に發布した教書の如きは、教書といふよりも、むしろ拷問及び刑罰に關する純然たる法令であつた。其宗教裁判所として、嚴めしき政廳兼監獄の設けられたのは、一千五百四十二年で、ローマに本廳（高等宗教裁判）を置き、各地に支部を設けて、異教徒といへば門閥階級を論ぜず引つ捕へて、處罰したのである。此の時代に於ける殉教者は数知れず、何れもみな殘忍な仕方であつて居る。其の中の有名なものを示すと、セント・エラスムスは轡轡で腹を引き裂かれ、セント・グイウスは油桶の中で浸され、セント・アフラは火焔で焼かれ、セント・ローレンチウスは、鐵條で殺され、セント・カタリナは女で、車裂の刑に處するのであつたが、執行の際車輪が壊れたので、首を斬つた。又、セント・アンドムスは磔に處せられた。それからセント・セドスチアンは矢で射られ、セント・グインセンチウスは、灼熱した鐵床の上で焼き殺され、セント・マチアスは斧で斬り殺された。

此の外貝殼で、肉を削り取るのや、四肢及び鬚を段々斬り離したのや、兩足を牛に引き裂かせたもの等、あらん限りの酷烈を極めて居る。

然るに異教徒といつても、新教徒ばかりでなく、猶太教、其他の教徒も居るので、此の裁判にかけらるゝ者は、非常に多くあつたのである。其中でも猶太人に對しては、特に極刑を用ひたのは、昔、教主基督を迫害して、遂に之を十字架上に磔殺したところの、猶太人に對する復讐から來たのであつた。詰り祖先の讐を、其の子孫に酬ゆる譯であるが、それと同時に、他の異教徒も、みな之れを絶滅すべく、苛酷なる刑辱を行つたのである。其の頃スペインの宗教裁判は、歐洲にて最も勢力のあるものとなり、隨つて甚だ殘忍な刑罰の施されたのも、猶太人がスペインに多く住んで居たからだと傳へられてゐる。

怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

えいじろ

画

奥様、私めはまあ何という幸福な男でございます。奥様の美しい柔らかな、そして弾力に富んだ肉休と、この私の汚らしいからだとは、たった数枚の布きれをへだてて密着しているのでございます。奥様、あなたさまはこの私めに抱かれながら、読書をなさり、手紙を書かれ、時としては私の膝の上でウトウトと快い眠りをなさるのでございます。奥様がこの椅子に腰を下ろしていらつしやる間、私はそのこゝろよい重量感を全身に抱きしめて幸福に酔っているのでございます。

私は腕のいい家具職人でございましたから、日頃の念願を果す為はこの様な秘密な仕掛けのある椅子を作り上げますのには、ことさらにめぐまれて居りました。椅子の内側には食物や水を入れる小さな棚を便利よく取付けて、人間一人がこの中で数日間かくれていられる様に作り上げたのでございます。奥様この私の手紙を読みになつていらつしやる間も、私はあなたの様の背中のうしろでじつと呼吸を殺しているのでございます。

人間椅子より――



その晩、どうして私が蔵の中へなぞ参つたのぞきましよう。俗にいう虫の知らせでもあつたのぞきましようか。この世には、時々常識では判断のつかない様な、意外なことが起るものぞきましよう。その時、私は蔵の二階から、ひそひそ話の声を、それも男女二人の話し声を洩れ聞いたのぞきましよう。もし心の中で嫉妬の火が燃えていなかったら、十九の小娘にどうまああの様な真似が出来ましよう。樟脳のほのかな薫りに混つて、冷い、かび臭い、蔵特有の一種の匂いが、ゾーツと身を包む暗闇の中で洩れ聞えてくる夫と見も知らぬ女との談言に耳をそばだてながら、妬心に身をこがし、身も世もあらぬ思いに気が狂うばかりぞきましよう。

いく夜も続くそうしたあやしい夫の行為に、私はたえきれなくなつて、どうしても蔵の二階のあの女に逢つたうえ恨みの言葉でのろつてやらなくてはならなくなつたのぞきましよう。しかしまあ何と云うことぞきましよう、相手の女と云うのは人形だつたのぞきましよう。私の夫は命のない、冷たい人形を恋していたのぞきましよう。薄暗く、樟脳臭い土蔵の中で、その人形を見ました時には、ふつくらと恰好よくふくらんだ乳のあたりが呼吸をして、今にも唇がほころびそうぞきましよう、その余りの生々しさに私はハツと身震いを感じたほどでありました。いかに名作とはいえ、私の悪戯が、生きた人間ではなくて、冷い一人の人形だと判りますとそんな無生の泥人形に身寄せられたかと、もう口惜しくて、口惜しくてとうとう人形を叩きつぎしまつたのぞきましよう。

一人でなしの恋より――



★ 奇譚クラブ 二月号 目次 ★

口絵寫真 戀に狂つたワン・カット 那 享樂の階級性
口絵 怪奇派小説名場面集 (乱歩の巻) 竹中英二郎画

妖 花

(心の悪魔)

羽村京子 32

糞尿崇拜とトータル思想

處女崇拜と宗教賣淫

比丘尼開眼

琉球の女達

古典に於ける繪像戀愛

惱ましのサディズム

三瀬淑朗 82

島 影 映 86

久松俊介 90

木之下白蘭 134

絹島増夫 89

森山美歌 97

趣味生活と文化

田中芳生 97

切支丹迫害史

漆島迫平 112

痴愚者の手紙
死刑執行奇談

葉村 宏 34
茂木芳久 118

淫

(みだらび)

火

(第二回)

松井籟子 150

破った日記帳
しいたげられるよろこび

川端多奈子 130
林田澄子 108

女嫌いの種々相
男性假半陰陽者

仁比山 等 132



アレキシナの日記
永遠の男性美と女性美

鳥上源一 160
的場 通 144

黒井珍平氏にこたう

伊藤晴雨 84

つわもの哀史
映画とサディズムス

吉井川洋 124
雲井 彰 117

さまようウラニスト達

夜開く孤島

岡真史郎 196

同性愛欲史譚 若衆散華

戸崎平馬 36

變の字問答 (第二話)

浮家鷹三 52

讀者通信

(41) 71 (79)

アブニストの記 らぶ・すれいぶ (第二回)

鬼山絢策 42

クイズ物語

笹田 豊 162

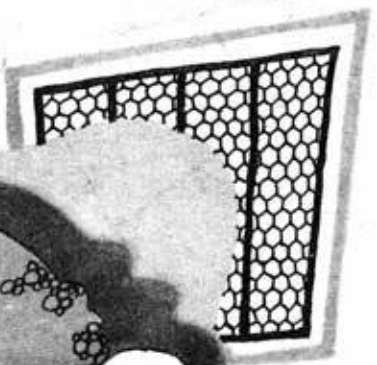
燐 光

久留木 栄 66

花井お梅さんけ譚 女囚獄中記

小町右近 90

硝子便所 (Tobouret de Verre) 芳野眉美 102



妻やの留守の間に、彼は境
のない花園を土蔵の二階へ運
び上げてしまった。

半ば狂せる花と、木下天
香の死体とはさし向いになっ
ていた。舞台のたつた一本の
蠟燭が、赤茶けた光で、そこに
冷たい裸身を照らし出し、それ
が、部屋の一方に飾つてある
佛壇の本棚の音響や、青ざめた
お面の面と一種異様な、陰鬱な、甘酸つ
ぱい対照を為していた。

真の様に、幽かなが花大なるうねりを為し、身体全体は、夕日を受けた奇妙な白い山脈の様に見えた。気高く
舞えた鎖の、不可思議な曲線、滑らかな潤い、谷間の
神秘なる陰影、花本愛はそこに、美の肉の体のあらゆ
る細部に亘つて、思ひもよめぬ微妙な美と秘密とを見
入る。人々のあこがれの的だった美しい人々女は、今はも
う、彼のなすがまゝになつて屹りつけられた小娘のよう
に、いぢらしい程おとなしかった。——垣より



垣ではない。

吉木は闇の中に眼を凝らして、大空にはすむ
品川の呼吸を、若し先方に捕らればせぬか
とヒヤヒヤしながら聞いていた。

板敷の向うでは、低い壁と、時々身動
きするらしい物が聞える。
屋敷裏の赤い灯のついた密室で無言に満ち
た男女の馴れ合いが行われるのだ。諦めからか
わるがわる赤い淫靡を伝へる吉木と品川の
眼前に一体とんがることが行われたらうか。
視野に現れたのは見覚えのある貴婦人だ。
三十余りの大柄なよく発達した肉体に黒つ
ぽい金砂の衣類がネットリと纏いついてい
る。艶々と微かな淫笑の下に、長い目、低い鼻
テラテラと光った厚い唇、といつて決して醜

彼女の夫は戦争の悲惨な犠牲者となつて妻の手の中に運された。
両手足は殆ど根元から切断され、肩胛は破れて肉を出すことも出
来ないであつた。五官のうち、視覚と聴覚とだけは残らない奇
形な肉柱になつた残兵は、そのおぞましい顔の色で、妻にはげし
い憎悪を訴えるのだ。
妻が自分の希望を満してくれない時には気狂ひの様に、その肉柱
を荒れまわつた。
最初のうちは、貞淑な妻であつた彼女も、徐々にこのいまわしい
肉柱を肉の対象とすることに異常な情熱を起はしめるのである。
彼女は何一つ抵抗の出来ない夫を虐げ倒して、残骸の肉を漁ら
すのだつた。——手繰りより



若し私が彼女の項に
あの妙なものを発見し
なかつたならば、彼女
はたゞ上品で優しくて別々しくて
人という以上に、あんなにも強く私の心を惹かなかつたであらう。
彼女のうなじには、恐らく背中の方まで深く、赤黒い様な太い縦
皺が出来ていたのだ。青白い滑らかな皮膚の上に、赤黒い毛糸
を濡れた様に見えるその縦皺が、その残酷味が、不思議にも
エロイ的な感じを与えた。それは遠い梅のひびきがオドロドロ
と聞えて来る夜更の音の中で、一米とわぬ素肌を鞭打たれる彼女
の現状の姿をまじへて私の脳裡に浮び上らせるに充分だつた。
ある日、静子が母の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用
の外国製鞭を持つて来た時には、私は何だか怖くさなかつた。
彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏の様に彼女の肉体を打撃せ
よと迫るのだ。恐らくは長い間の六郎氏の残虐が、とうとう彼女に
その訓練をうつし、彼女は彼の色慾者の、耐え難い悪戯にさいなま
れる身となり果てたのである。そして、私も、若し彼女との
逢う顔がこのまゝ半年も続いたら、きつと六郎氏と同じ病にとり
つかれてしまつたことであらう。——垣より

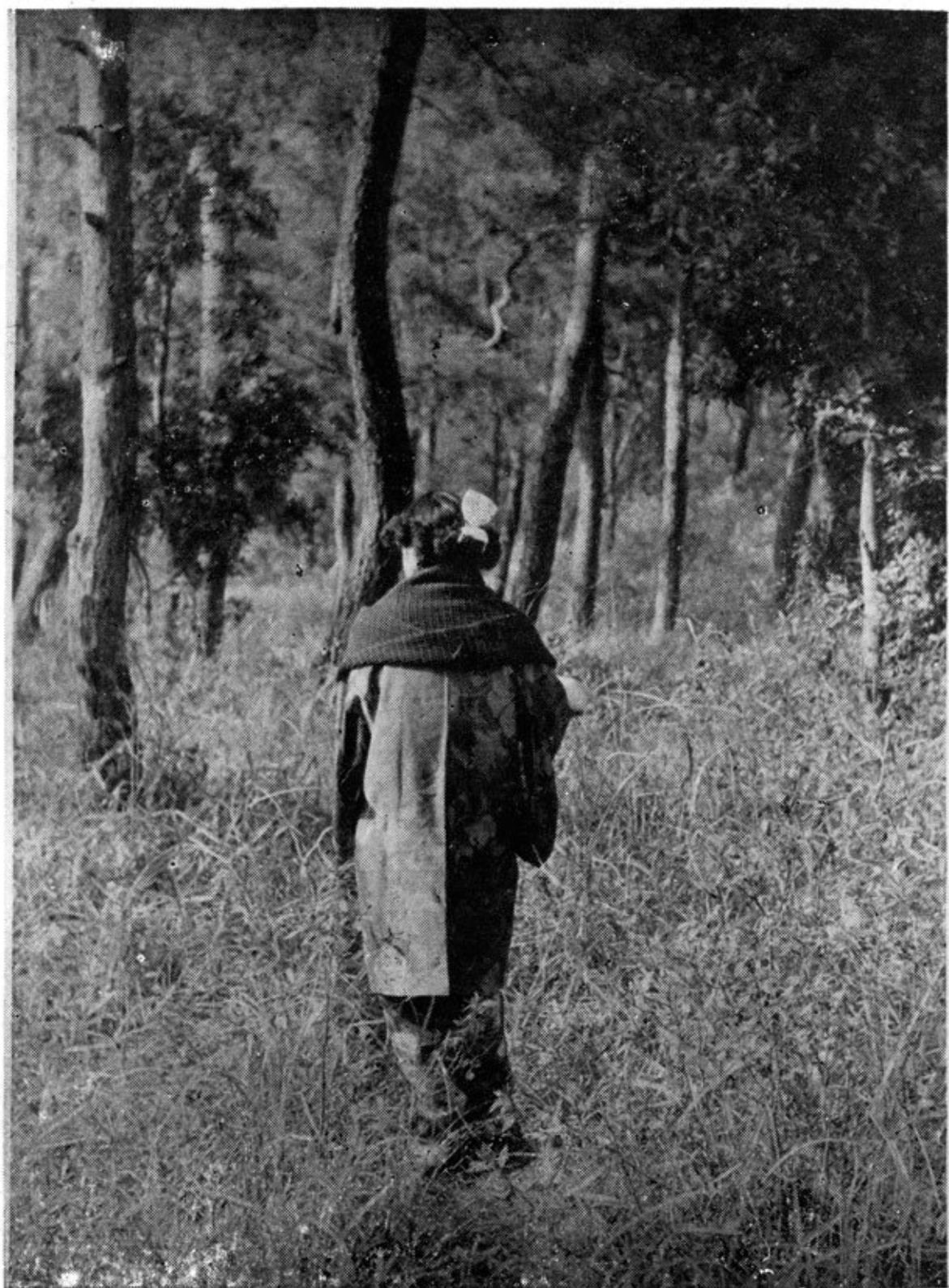


——無常の果より

★ 戀に狂つたワン・カット ★

構成・辻村 隆

撮影・塚本 鉄三



或る肌寒い初冬の夕暮であつた。美しい和服姿の一人の娘がメリンスの風呂敷包を手にして
人気のない松林の中の小道を急いでいた。

と突然、叢の中から飛び出した一人の青年がやにわに背後から彼女を草の上に突き倒した。驚いた彼女が目の前に転げた風呂敷包を拾おうとした時、むんずと青年の手がのびてまるで豆の皮でもむくように彼女の羽織をくるりと剥いでしまった。「あッ」彼女はその青年の顔をまともに見て思わず顔を草の中に埋めてしまった。



「葉ちゃん、お前は俺という男がありながらよくもよくも他の男の所へ嫁いでゆく気になれたなア、さあ、葉ちゃん、お前の本当の気持を聞かしてくれ、ねエ、お願いだ」
何んとかき口説いても只黙つてばかりいる娘に、たまりかねた青年は松茸山の縄張りに使つていた縄を拾うと、嫌がる彼女を無理矢理に抱き起して松の樹に縛りつけてしまった。





「思い直してくれ、葉ちゃん、今迄通りこの俺と仲よくしてくれ、なア、葉ちゃん！」

尙も堅く口をつむつて無言の行を続ける娘に怒り狂った青年は、後手に縛ったまゝ担ぎ上げると、その松林から程近い無人の物置小屋の中へ運び込んだ。

どさりと荒庭の上に投げ出すように横たえると、風呂敷包がとけて中から、彼女が今度婚約した相手の家へ届けるらしい紙箱が顔を出していた。

「えゝいッ、よくも、この俺に恥をかゝせやがつたナ、こうなれば可愛さ余つて憎さが百倍だ。これでもか、これでもか」

向うむきにうつぶした娘の尻を力まかせに下駄で蹴りまくるのであった。

「あゝ、誰か、助けて！」

今の今迄、何んと云つても一言も声を出さなかつた娘が急に救いを求める大声を立てたので慌てた青年は自分の兵児帯を解いて、ぐるぐると娘に猿轡をかませ声を出せないようにしてしまつた。

彼女の頭の下になつた風呂敷包の中の紙箱がめりツという音を立てゝこわれると、中から美しい、色とりどりのセロファンの包紙の色が殺風景な物置小屋をはなやかに彩つた。

「さて、どうしてくれよう？」

餌物を前にした猫のように、縛られて身動きの出来ない娘の姿を心地よげに嗜虐的な眼ざしで眺めた青年は、じつと腕組みをしたまゝ考え込むのであつた。



——今年の盆踊りの晩、この裏山で始めて恋を語りあつてから、身も心も許しあつた深い仲だというのに、この思わぬ娘の変心はなんとした事だろう。葉ちゃんが隣村へお嫁に行くという噂は単なる岡焼きの作り事であつてくれ、俺は——俺は葉ちゃんがなかつたら——

いや、単なる噂である筈はない。それだつたら葉ちゃんがこんな黙つてばかりいる筈はない。ちゃんと結納まで貰つていゝというではないか。

青年は胸の中に燃え上るほむらに堪えかねて納屋の隅に立てかけてあつた天秤棒をつかむと娘の腰をはつしと打つた、「うううう……」
彼女は猿ぐつわの下で声にならない呻めきを上げて棒をさけようともがくのであつた。



蹴つて叩いて殴つた挙句、もう立ち上ることも逃げる気もなく、ぐったりとなつた彼女は本能的にうつぶせになつてしまつた。

——此れ程思いつめている俺の気持がわからないのか——

恋に狂つた青年は更に手にした棒をふり上げようとしたが、この時彼の頭の中に浮んできたのは過ぎ去つた彼女との楽しかつた逢曳きの思い出であつた。あの頃はこの俺も幸福だつた。その幸福を踏みにじつた憎い彼女、憎いが、しかし可愛い女、身動きも出来ず藁の上に転がされた女の姿にいとしさと可憐さだけが胸に湧き上つてくるのをどうすることも出来なかつた。





——あゝ、俺には葉ちゃんを責めることは出来ない。
いとし、いとし最愛の恋人なのだ。縛つて殴つて
俺は始めて自分の彼女に対する本当の愛情を知つたの
だ。あゝ、どうしたらいいのだろう。憎くて可愛い、
女——

——（あなた、みんな妾が悪かつたの、どうか浅はか
だつた妾を宥して、あなたのお怒りになる気持、妾に
よくわかるわ、ねえ、あなたの気持のすむようにどん
なにでもして、ぶつたりだけじゃなしに、もつともつ
とひどく虐めて、妾、本当はあなたが一番好きなの）

——彼女は心の中でそう繰り返していた。そして猿轡
の下でうろうと物言いたげに呻めいて寝返えりを打つ
た。然し、青年はそんな彼女の心中も知らぬげに、棒
をその場へ投げ捨てると、そそくさと出ていった。

享樂の階級性



新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

二 月 号

(第七卷第二号 通卷第五十二号)

妖花

羽村京子

さしえ
玲子



りでにつ、つ、つと紙面を走つてゆく。

「……女は火のついた煙草を器用に……にはさんだ……煙草の火がバツと真赤に色ずいて……ガリズミカルな唄を妖しくかなでながら……紫の煙がゆらゆらと……女はなおも頭を下げ尻を高くして演技を続けた……」

おれは急に恥しいほど興奮してしまつて顔を上げて前を見た。すると先ほどからじつと激しくおれを見つめている若い女の視線にばつたりあつてしまったのだ、思わずわれにかえると、何だかいたたまれないような気持を一度に感じて、投げ出すように本を置くとさつさと次の停留場へ向つて歩き出した。と、

おれが小栗明子にはじめて会つたのは一昨年の初夏のころだつた。そのときおれはある停留場前の本屋で本の立ち読みをしていたのだが。いつもなら恥しくてとても手にとつてみることもできないこうした雑誌を、出張中の気楽さからずうずうしく頁をくつてゆつくり読んでいた。社用で東京に出て思いの外早く用件が片づいたので、おれは予定より早い汽車で帰ろうかどうか迷いながら、のんびりと時間をつぶしているのだつた。

（お尻の花電車？）……

おれは頁をくるのをやめて、ふと目にとまつたこの見出しに吸いよせられた。目がひと

「あの……」——女の声だった。ふり返るとさつききの女が立つて
いる。おれは露骨に迷惑な顔をした。

「何かご用でしょうか。」女は明白にどぎまぎした。

「いえ……あの……わたし……あなたがあの本をおとりになるの
を待つてましたの。（お尻の花電車）つて、いえ……あんなのお
好きなんですか？」

女は非常な早口でそれだけ云うと、おれの顔を見てじつと反応
をうかがった。それからやつと少し落ちついたように、

「すみません。でも、とにかくよかつたら私のアパートまでいら
つしやいませんか？」

「うかがいましょう。だが僕は今日田舎に帰らなきゃならないし
それに第一お金をもつてませんよ。」

おれは正直に言つた。

「いいのよ。気になさなくなつて。」と女の調子が急にくだけ
てきた。おれは自分の無益な警戒心を喰いながら、ほつとして女
に妙な親愛感を覚えるのだつた。

アパートに着くまでの間に、彼女——小栗明子はいろんなこと
を聞いたがつた。おれは自分が三十歳のサラリーマンで妻や子供
もあること、半年程前、妻がお産をした時の禁欲生活から変つた
事に興味をもつようになったこと、小心なので妻に打ちあけえな
いでいるが、かねがね彼女のような女にめぐり会いたいと思つて
いたこと、などを話した。彼女はおれが結婚していると聞いて大
いに失望したようだったが、これからもときどき会つてくれるよ
うにと頼んだ。彼女は二十四歳で、あるオフィスにつとめており
まだ独身だつた。歩きながらおれは彼女を観察する機会をえたが

その日は赤い毛糸のセーターに黒いウールのスカートをはき、ナ
イロンのストッキングに黒い皮の中ヒールといういでたちで、白
い顔にぱつちりした眼が印象的だつた。背はまあ中肉中背とい
うところで、よく発達した乳房と臀部が衣服の上からでもそれと感
じられた。おれはやはり遅い汽車で帰ろう、そうすればまだ五時
間はたつぷりある、などとひそかに心の中で計算していた。いつ
もびいびい泣いてばかりいる赤ん坊と、それにかかりつ切りにな
つていららしている妻の糞れた顔とが一瞬おれの頭にうかんだ
が、おれは何か目に見えない力に引きずられてでもいるかのよう
にずるずると明子のあとについて歩いてゆくのだつた。

アパートは小ぎれいな六畳一間で、女の一人住い特有の甘つた
るい雰囲気があふれていた。

「今日は何だかとても催しちやつて会社をさぼつちやつたのよ」
と彼女ははすつばな云い方をしてみせた。おれはその（もよほす）
という妙に実感的な形容を面白く思った。

「私ね hymen はいたずらして破つちやつたけど、本当はまだヴ
ァージンなの。」こう言つて彼女がいきなり大膽におれの顔を見
たときはおれはひどくどぎまぎしてしまつた。しかし彼女は平氣
で続けるのだつた。

「でも、貞操なんてどうでもいいわ……あなたのお好きなよう
になさつたら。それに私今日はメンスが終つたばかりだから大丈夫
なのよ。」

こうしておれは小栗明子と知りあうようになった。そしてたと
えおれがその後重大な変化なしにこうして生きているとしても、
彼女はそのために、取りかえしのつかない人生の一足を踏み出し

たことになるのだ。願わくば、彼女のその後の運命が、おれという人間をぬきにしても必然的にあなるより仕方がなかったのだと考えるものだ。とにかくおれはその日の出来事をくわしく物語ろう。

二

彼女はおれの顔を見てにつこりと笑った。

「あなた、私があなたの前でウソコしてみせたらいやがる？」

おれはもはや自分の倒錯した心理を強いて隠そうとはしなかった。

「見たいな。」

彼女は押入れから便器をとり出してそれを小さな机の上に置いた。

ストッキングの上端でゴムの輪が喰いこんだ両側の真白い太もとと柔かい臀の曲線、なめらかな下腹からおどけた感じの臍の凹みまで、ぼつとりと肉がついて、料理して食べてしまいたくなるような食慾をそよつた。

やがてウームといきむ声とともに彼女は太い茶褐色の便を一気に排泄した。ぶーんと異様な臭気があたりに立ちこめる。彼女は二度、三度とそれをくりかえした。

すつかり出してしまふと彼女は後の始末をしに便所に行つた次はいよいよ（お尻の花電車）だった。彼女はスカートを脱ぎすてシユミーズの代りに男のような丸首シャツを着ていたので、腰部だけが裸の妙なかつこうになり、膝のところに座ぶとんを当て、尻を高くしたまま胸を畳につけてはらばいになった。桃のよう

尻の割れ目の中の絞り染めのようなかわいさ、……グリセリンでもぬつたらしくそこだけねつとりと濡れていた。おれが新しくとり出して火をつけてやつたピースをみかん色にすき通つた小さな吸い口にはめて、……

一瞬タバコの火がポツ、ポツと赤く色づいて、……

ぶーつと白い煙がおれの鼻先へ吐き出されたおれの口にくわえたピースがまだなくならないのに、彼女は新しいピースを大方灰にしてしまつていた。

「もうおしまいでしょう。熱いのが入ってくるわ。」と彼女が云つた。おれは彼女を抱きおこしてその唇にはじめて接吻をした。彼女はうつとりと目を閉じていたが、やがてそつと目を開くとおれの顔を見てにーつと笑つた。……

……おれが ejaculieren 終ると、彼女は立ち上つてセーターを脱ぎシャツをとつた。

彼女は大きな木の板に自分の体を縛りつけさせた。それは畳一枚にも近い大きさの板でところどころ孔があけてあつた。その孔に細引を通すと彼女の体をちようどうまい具合にいろんな姿勢で固定できるのだつた。おれは板を机の上にのせて、彼女の云うままに、やはり頭を低く尻を上げた姿勢になるように胸と下脚とを板に縛りつけ、その上両手を背中の上で後ろ手にしばり上げた。彼女が自分一人で縛るときは両手だけはどうしても縛られないままに残るのだから、こうしてすつかり自由を奪われたことは大変彼女をよろこばせた。そうしておいておれは大きな漏斗を……
……十一字削除……漏斗の口の先の方に輪ゴムがまきつけてあるので簡単に抜け出すようなことはなかった。それから彼女が

（お尻の酒盛り）とよぶ遊びが始まった。

酒は五合用意してあった。おれはそれをちびり／＼と飲みながら、ときどきその漏斗の中へもあけてやるのである。

だんだんと酔いがまわつてくると、もともと余りのめないおれはピンからじかにジャブジャブと漏斗の中に酒を注いだりした。腸がぐるぐると鳴つてがぼ、がぼとガスが出てくる。漏斗を通つてく／＼と音が上つてくる。酔がまわつてほんのりとあからんだ彼女の背中から腰がたまらなくいい。

「すばらしい酒の肴だよ。」

「何が？……あらいやだ。お尻から飲むと一べんにまわるのよ。ものが二つに見えるわ。ぐら／＼するわ。ああ、何ていい気持ちなんですよ。」

まづばだかで縛られたまま彼女は身もだえしてうわ言のように（気持ちいい）（気持ちいい）と呟いた。そのたびに肌に喰いこむ縄目が柔かい肉を締めつけて、ことさらにおれの官能をあふるのだった。

酒がすっかりなくなつた。彼女は身動きできない不自由な体のままで、しばらく文字通り腹わたにしみ入るアルコールに酔つていた。くぶつと……開いてげつぷを出した。上気した腹がたつぷりと酒を入れてはあはあと喘いでいた。

「あなた、このままで男にするようにして可愛がつて！」と彼女が訴えた。

おれは男色の経験はない。しかし、しばらくたままの彼女にできるだけ苦痛を与えないように注意しながら……

二時間ばかり経つて縄をとかれた彼女が吸収され残つた少しば

かりの酒を出してしまつたとき、彼女はすっかり弱つていて自分で服装をととのえることもできない位だつたが、しばらく横になつているうちに幾分恢復したようだつた。別れぎわに彼女はおれの顔を見て淋しそうに、

「今日は本当にたのしかつたわ。何だか夢みたい。でも、私つていけない女ね。あなたの奥様に本当にすまないと思うわ。」と言つて、おれにもう一度接吻を求めたのだつた。

おれはそれこそ（夢みたい）な気持ちで彼女のアパートを去つた

三

その年のうちにおれはもう二度彼女に会つた。おれが彼女に会うのは東京に出張したときに限られていたし、東京に出ても忙しくてすぐ帰らなければならぬこともあつたので、おれは思うように彼女との約束を果せないのをもどかしく思つた第二回は一回目から一ヶ月もたたない七月のことで、そのときは無理をしてやつと三時間ばかりの時間をつくつて彼女のアパートを訪ねた。その日は火曜日だつたが、おれが前もつて知らせておいたので彼女は会社を休んでアパートにいた。自転車の空気ポンプで彼女の肛門から空気を入れて腹を膨らましたりした外、彼女の裸体をいろいろしぼり上げて吊しなどして遊んだ。彼女がアパートの管理人に空気ポンプを借りに行つたときの会話はゆかいだつた。

「何に使うかつて聞かれたわ。」

「どう云つた？」

「うふ……あのね、お尻の穴から空気を入れておなかをふくらますんですつて言つたの。」

「えつッ」

「勿論本当にしないわよ。何に使うのか知らないけどお好きなことにお使い下さい。だつて。」

おれは思わず吹き出した。彼女は（時間がないのよ）とばかりに大急ぎで裸になる。空気ポンプを押すのは面白い仕事だつた。シューツ、シューツと自転車に空気を詰めるときと同じで、彼女の腹がぐーつ、ぐーつと膨れてくるのだ。みるみるお伽噺に出てくる蛙のように、彼女の腹はコッぱんのような紡錘形に盛り上つた。おれは心配になつてきた。

「パンクしないかい。」

「パンクしてもいいの。」と彼女は、ふくれ上つた腹を突き出して苦しそうに顔をしかめながらも冗談を言つた。

第三回の訪問は十月だつた。実をいうとそのころおれは、子供が大きくなつて妻の仕事も楽になるとともに妻との性生活もほゞもと通りになつて、おれの一時的な異常心理がだんだん正常なものにかえつてゆき、明子のことも前ほど考えなくなつていた。従つて多少もどかしく思ひながらも彼女と会う機会をこしらへることに以前ほど熱心ではなかつた。そのためあつて、七月から彼女と会つていないくせにそれほど会いたいと思つていなかった。ところが突然おれは会社あてに彼女から手紙をもらひそれには近いうちに是非お会いしたいと書いてあつたので、おれは急に彼女と会いたくなつて早速用件をこしらえて上京したのである。

このとき彼女は悲壮なまでに猛烈だつた。いや、全くの狂人だつた。おれをホテルにつれこんで一晩中寝させなかつたばかりではなく、自分の裸体をぎりぎり縛らせて殆ど死ぬかと思う位の

ひどい目にあわせてくれと懇願するのである。おれは半ばはおそろしく、いやになりながらも、強いて自分のサディズムをかき立てるように努力して意識的に陶醉しようと思ひ、がぶがぶと飲めぬ酒をのんだりした。明子の体は二つに折りたたまれ、逆さに吊られ、しばられたまま振りまわされ、ボールのように投げつけられた。無理に水を吞まされつづけた彼女が窒息して仮死状態になつたとき、おれは人工呼吸をしてやりながら生き返らなかつたらどうしようかと思つた。しかしおれもだんだん夢中になつて散々打つたり蹴つたりして朝になると、おれはもうへとへとにつかれてまるで氣狂ひのような精神状態になつていた。そのおれの足もとに、エビのように頭と脚とをくつつけて縛られた明子の体が、背中から尻にかけてミミズ脹れだらけになり手足の関節をすりむいて血を流しながら息もたえだえになつてころがつていた。それを見ておれのおれの心にいきなりむらむらと残忍な欲望がおこつてきた。おれは彼女を足でぐいとひつくりかえすと、そこにあつた二本の棒をとり上げて彼女の……二行削除……

「ああ。腹わたが破れる……殺して……殺して……」このときこの棒のうちの一本が長い鉄の棒でもあつたら、おれは彼女を串刺しにして殺してしまつたかも知れない。

嵐のような一夜が過ぎた後、おれはもう二度と明子に会うまいと思ひながら、しかも同時に興奮の余韻をかすかに楽しみながら家に帰つてきた。すぐその足で会社に行つてみると驚いたことに明子から手紙が来ていたが、その内容は更におれを驚かした。彼女は十一月に結婚するその前に一度あなたに思ひ残すことなく、じめてもらいたいと思つて来ていただいたのだが、これからは私

も普通の正常な女性のように女の幸福を求めてみるつもりだ、というのである。そうだったのか、とおれははじめて前の晩の彼女の気狂いじみた興奮ぶりが理解できた。おれはほつとしたような気持を感じるとともに、心のどこかで妙に淋しい空洞ができてゆくのを意識しないわけにはゆかなかった。

おれは十一月のはじめに彼女から簡単な結婚通知をもらった。山口正夫、同明子と並んでいるのが妙にそぐわない気持だった。それから平穏な日々がつずいて、いつしか彼女の記憶はおれの心の中で薄らぎ、おれたち二人がしやべりさえしなければあの前後三回にわたる出来事はそのまま世間から永遠に消え去ってゆくかのようにみえた。こうして一年ばかりの月日が流れた。

四

昨年の十月におれは思いがけず彼女からの便りをうけとつた。くわしいことは書いてなく、ただ××ホテルに来てほしい、お忙しくて都合がつかないかも知れないができれば何日から何日までの間に来てほしい、というのだつた。おれは自分の馬鹿さ加減を嗤いながら、指定された期間のうちの一日を都合して出かけて行つた。ホテルに行つてみるとその支

配人が万事をのみこんでいてすぐ彼女に連絡してくれたので、おれはいくらも待たずに彼女に会うことができた。彼女は珍しく和服を着ていた



金まわりがよいらしくかなりぜいたくな服装だった。久しぶりで見る彼女の顔はやはりなつかしかったが、彼女は妊娠していた。このことはうかつにもおれは全く予想していなかったもので、世の中の妊婦と同じように彼女が大きな腹をつき出して歩くのがとても不思議に思えた。それももうとてもかくせない、誰の目にも明らかだ段階に達していた。しかしやつれたようなところは見えずかえつて一そう美しくなつたように感じる位だった。

二人とも妙にれて、改つたような気分だった。

「いつ生れるの？」とおれが聞いた。

「今月よ。もう二三日で予定日だから今日にでも生れるかもしれない。と彼女は笑った。おれは自然に話題を二人の間のことにもつていった。

「今日はもうごめんだよ。この前のようなことをしたら一ぺんに出てしまうからな。」

「そうじゃないの。今日はただあなたに私のはだかを見てもらいたかったの。」

おれは最初は何のことかよく分らなかったが、平気であつさりと云つてのける彼女におれは一年前と少しもかわらぬたくましい露出癖を感じとらないわけにはいかなかった。彼女はマゾヒストだった。そしてその中でも特に exhibitionismus の傾向が強かった。彼女の肛門と、それにつづく長い曲りくねつた消化管――腹わたへの根づよい執着とともに。そして彼女は少しも変つていない。おれは、彼女がその夫との性生活はどうしているのか、何故ここにおれを呼ばなければならなかったのか、を知りたいと思つた。しかし彼女の顔はそれらの問いに対して答えることを拒否

しているように見えた。おれはおれの好奇心を断念せざるをえなかった。

彼女はもう立ち上つてする／＼と帯をといて着物を脱ぎにかかつていた。両方の肩をはずすとさらりと衣類が畳の上に落ちてまぶしいばかりの裸の肢体がおれの目にとびこんできた。柔かい肩すつかり乳首が濃褐色になつた大きな乳房、そしてみごとに張つた大きな腰。つき出した大きな腹にまきつけた岩田帯をくるくるとつてしまふと下腹にくつきりと妊娠線の浮んだ、まんまるい子を持つた腹があらわれた。

おれの妻は七ヶ月のころから里にかえつてそこで出産をしたので、臨月の妊娠の腹を見るのははじめてだった。肛門から空気を押しこんで、胃の辺りからデルタまで、つまり肋骨などの骨の箱によつて妨げられていない胴全体がぶくつと異様に膨らまされたのとはちがつて腹だけが丸く、固く、大きくつき出して膨れているのだつた。皮膚がちぎれるばかりに張りつめた西瓜のような腹の中で、ときどきびくつ、びくつと胎児が動くのが分つた。その大きな腹から腰にかけての線、そして体つき全体の異様な動物的な感じが妙におれを興奮させた。明らかにサディステイックな血がおれの中で音をたてはじめていた。

「どう？」彼女はこころよげにこの醜いともいえるグロテスクな裸体をおれにつきつけるように、

「私こんな体になつた私をあなたに見せたくつてたまらなくなつたの。でも、あなた私のこのおなかを切り割いてみたくならない？」

おれはどきつとして耳まであかくなるのを感じたがすでに子供

のようになおな気持になつていた。

「みたくなるね。」

「私もそうしてもらいたいと思うわ。」と彼女はうつとりとして答えた。

あれからわずか三月しか経っていない。あの日おれは彼女にせがまれて、彼女の異常な体に細引をまきつけて彼女をしばつた。そして最後に彼女の……。右手の人さし指を根もとまでぎゅつと、ぴゅつちりと締めつけるぶ厚い筋肉の中に入れてぐるぐると直腸の中をかきまわした。おれが彼女にこんな事をしたのはあとにもさきにもこれが一度である。

帰りの汽車の中で別れるときの彼女の思ひつめたような顔が気になつて、この前のときのように何か彼女の上に変つたことが起るのではないかと気がついたときは、おれはすぐにでも引きかえして彼女に問いただしてみたい衝動にかられたが、おれには妻もあり子供もある、彼女だつて夫のある身だ、おれたち二人はそれ／＼別の道を行くように運命によつて定められているのだ、と考へて、淋しさをまぎらすためにおれはまた盃を手にしていった。

この予感はずくには実現しなかつた。しかし二ヶ月余りたつて年があらたまり、さらに正月も半ばを過ぎて、おれの心の緊張もそろ／＼弛みはじめたころになつて、おれは彼女の最後の手紙をうけ取つた。これまでになくずつしりと重く、三枚の切手がついてあつた。おれは急いで封を切ると最初の文字を見て思わず手がふるえたが、やがて氣をとり直すと、その便箋十数枚にぎゅつちりと書きこまれた文字を息をもつがずに読んでいった。

五

礼二さま――

私のことを随分変な女だと思ひになつたことでしよう。でもいよくお別れをするときがまいりましたわ。あなたがこの手紙をお読みになるころ、私はもう生きてはいませんもの。

本当にいろいろお世話になりましたわ。たつた四回お会いしただけでですけど、私はあなたが私の一番親しい人のような気がいたしますの。あなたがまだ独身でいらつしやつて私がもしあなたの奥さんになつていたら、私は死ななくてもよかつたかも知れませんが、しかしすべては運命でした。私の夫は私より一廻りも年が上で、お金はありましたけれども何一つまじめに話すことのできるような人ではありませんでした。夫婦でありながら生れながらにすつかり他人でした。私の女らしい幸福を求めたいという殊勝な決心もことごとく裏ざられるばかり。無神経な、無感動な、そして動物のようになくましい性欲と食欲とをもつた生き物。本当に人間ではなく生き物つて感じてしたわ。でも何を考へているかさつぱり分らないなりにおとなしかつたものですから、私は私で勝手に好きなように暮すことにして、余り悩まされるということもありませんでしたの。私、簡単にあきらめちやつたのね。それから私の頭がまた狂いだすような気がして、私は随分私をもてあましたあげく、あなたやあなたのかわいい奥さまやかわいいお嬢ちやまに迷惑をかけないために、私は死んでゆきます。でも勿論あなたのせいじゃないわ。ただ私のあのにやな生き物にだけは、一寸しためんどうさい後始末をさせてやりますの。そのことについて

て、つまり私の計画している自殺の方法についてあなたにお知らせすることがこの手紙の役目なんです。でもその前にまだ少しばかりご報告しておかなければならないことがありますわ。

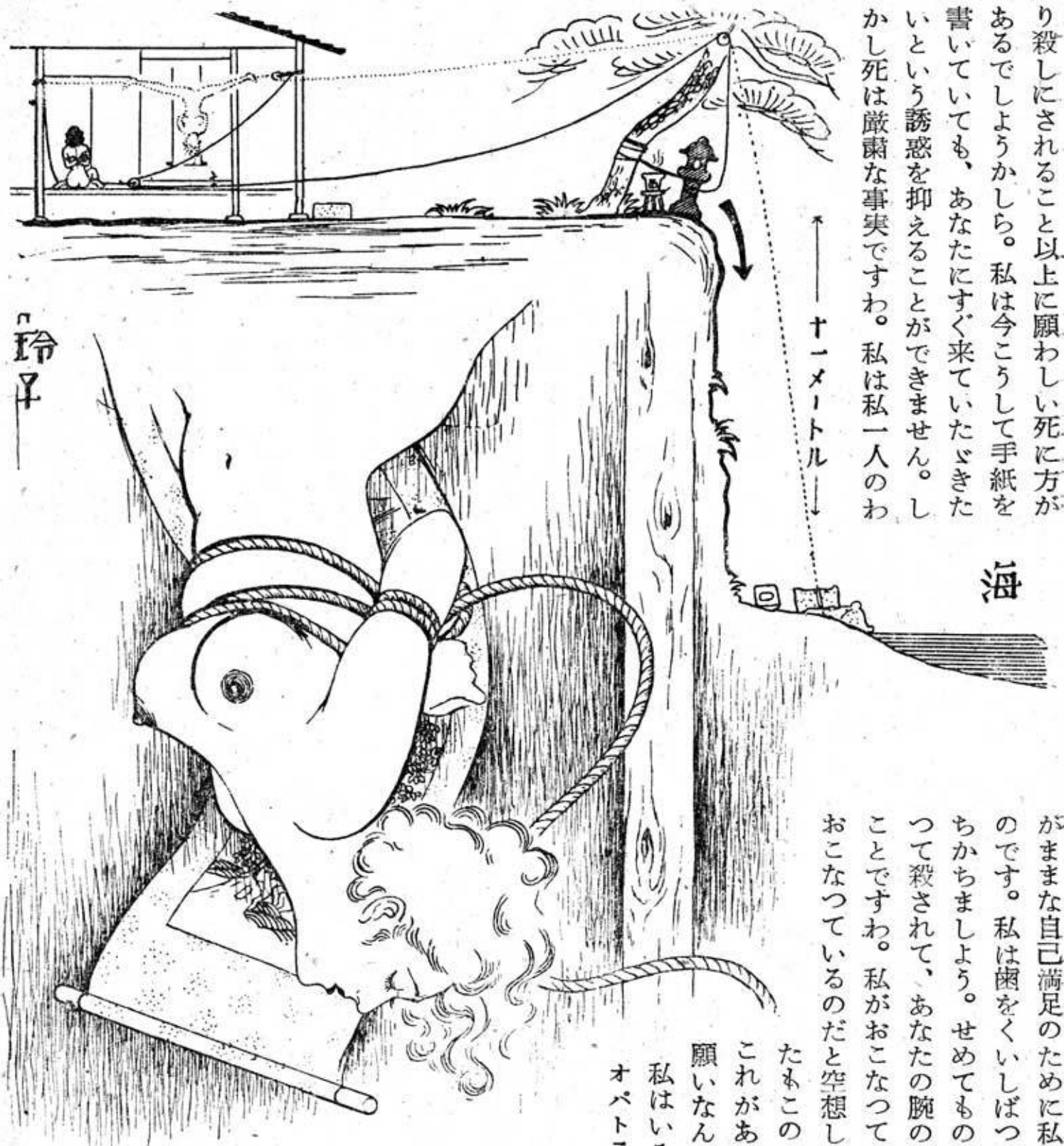
去年の十月あなたに最後にお会いしたときは私はまだ死のうちは考えておりませんでした。あれから一週間とたたないうちに私は男の児を分娩しました。しかし子癇というおそろしい病気にとりつかれて、私はとにかく助かりましたが生れたばかりの坊やはとうとう死んでしまいました。たつた四五日生きただけで。このとき私と夫とを結びつけている最後のものが失われたような気がしました。愛してもいない男の子を生むこと、このことの中にもやはり女の善良な生き甲斐をつなぐに足るものはありましたわ。あるいは、私は胎教というものを信じませんが、坊やが腹の中にいるときに自分のしたことに對する罪悪感をもっていたのかも知れません。とにかく私が(死)を考えたのはこのときからでした。私のことも、坊やのことも、私とあなたとのことも、そして私と夫とのことも、すべてが運命の星によつて定められた予定の進路を進んでゆくのだ、そしてこのことの確かさは坊やの死によつて明らかすぎるほど証明されてしまったのだ、と思うようになりしました。この考えは私の中の生きる努力をことごとく空しくしてしまふに足るものでした。私を、無氣力に絶望の中にとり残された無意味な影と化してしまふために充分強力なものでした。眼界をさえぎられた馬車馬のように、ひたすら(死ぬ)ということだけが、暗転した舞台のまつくらな奈落だけが私の眼前にあるのでした。こうした暗黒の一すじの道を私はこの二ヶ月間走りつづけてきました。そうです、私は何物にもさまたげられないで死

の道をばく進してきたのです。十二月に入つて私の体が恢復してくると夫は間もなく私の体を要求するようになりましたが、私はなおも病氣のおそれを理由に拒否しつづけ、彼にそれとなく金で女を買うようにすすめました。経済的に余裕もありましたし、夫はもともそのようなことを気にしないたちでしたから、それからは三四日に一回位は家をあけるようになり、ときには歸つてから商売女とのことをいろいろ話したりしました。普通の、夫を愛している奥さんでしたら怒つてしまふところですよ。でも私は心にすでに期するところがありましたから、内心ではあきらめていても表面は何気なくうけ流しておりました。そしてとうとう機会がやつてまいりました。一月の中旬に夫は一週間ばかり関西に旅行することになりました。私は留守をお産の前から頼んでいた中年の女中にあずけて、房総の海岸にある夫の別荘に行つてみたいと云いました。そして私は今ここに來ています。冬のひととで掃除もせずに荒れるままになっていたのをきれいに片づけて私は一人ぼっちの自炊生活をしながらこうしてあなたに手紙を書き、死への準備を着々と進めています。ずい分前おきが長くなりましたわ。いくら書いても、かけばかくほどたのしくつてどこまでも尽きない気がしますけれど、ここら辺で私の計画をお話ししてしまわないことにはきりがありませんわね。だつて、この計画をあらましお話しするのでさえ、ずい分長くかかるのですもの。

六

礼二さま――

私にとつて、あなたの手によつて苦しめ、さいなまれて、なぶ



り殺しにされること以上に願わしい死に方があるでしょうかしら。私は今こうして手紙を書いている、あなたにすぐ来ていたゞきたいという誘惑を抑えることができません。しかし死は厳粛な事実ですわ。私は私一人のわ

海

がままな自己満足のために私の周到な計画を狂わせてはいけません。私は函をくいしばって私の矢もたてもたまらぬ気持に打ちかちましよう。せめてもの私の慰めは、私があなたの手によって殺されて、あなたの腕の中で死んでゆくのだと空想してみることですわ。私がおこなっているのではなくあなたの手がおこなっているのだと空想しながら死んでゆくことですわ。あなたもこのことをきつと許して下さいますわね

これがあなたのかわいそうな明子の最後のお願ひなんでもの。

私はいろ／＼の死に方を考えました。クレオパトラのように最も楽な、最も美しい死に方ではなく、最も残酷な、最も醜い死に方をいいえ、それは殺された方、といった方が、いいかも知れませんわ。——私は結局、二股裂きという方法をとることに決めました私の両脚を左右に強い力でひっぱって、股から下腹にかけて二つに引き裂くというやり方です。これより前、私は自分で自分を後ろ手にしる練習をしていました。これは大変むづかしいことのようにですけど慣れると割合簡単にゆくものですのよだん／＼上手になつて自分で縛った両手が自分

ではどけなくなり刃物にこすりつけて切らねばならないようになると、私は乳房の上下に二本の細引をまきつけ、さらにそれを首にかけてしぼるようにしました。あらかじめ細引を結んでおく仕方、締め具合を強くする工夫など、随分苦心しましたわ。それから歯をつかわなくてもよい方法を研究して、とうとう私は自分で自分に猿ぐつわをはめ、両手を背中にくくりつけることに成功しました。これによつて、少なくともこの謎が解けるまでは、私の死は完全な他殺ということになるわけよ。

ところで、野蠻な刑罰の一種として発達した（二股裂き）は、普通二頭の牛または馬を反対の方向に走らせるとか、あるいは弓なりに曲げられた竹や木の弾力を利用したようですが、これらは何れも女一人の力では無理ですから、私は全く別の方法によらなければなりませんでした。私は地球の引力——物体が落ちるとき力を利用しようと思いつきましたの。別荘の裏は十メートルばかりで崖になつていて、その崖つぶちの松の巨木の根もとに石燈籠が一つ立つています。これを崖からつき落しさえすれば必要なエネルギーは得られるのでした。これが私の計画を実行にうつす場所としてこの別荘をえらんだ理由なのでした。あなたは大坪砂男の（天狗）という探偵小説をお読みになりました？その中で犯人が竹の弾性をつかつて一女性を池に投げこむために綿密な力学上の計算とその上実験までして、ついに彼自身は被害者に一指もふれることなしに殺人に成功するのですが、ちょうどそれと同じように私も早速計算と実験にとりかかりました。崖の下は砂浜で崖の高さはちょうど十一メートル、まことにとおあつらえむきの殆ど垂直に近い絶壁です。石燈籠はいろいろ測つてみて、二百キロ

から三百キログラムの間の重さがあると推定しました。私はこの燈籠をロープで松の木につなぎ、下の土を掘つたり鋸子を用いたりしてそれを傾けることに成功しました。これでロープを切ればもんどりうつてころげ落ちることは確実でした。私は燈籠をそつともとのように立て直しておきました。

別荘は海の方に面して南に廊下があり、すぐ八畳の間になつています。その部屋には西側の京寄りに床の間があつてその反対側はやはり廊下、つまり廻り廊下になつていのです。床の間の横は押入れで、北は半分ずつ玄關と四畳半に続いています。私はこの部屋を使うことにしました。私は左足を玄關と四畳半とを隔てる柱に、右足のロープを松の木の上にとりつけた滑車にまわして石燈籠につないで、床の間に背を向けて逆さにぶら下るのです。ロープの線は畳から一間の高さになりますから、手を縛るためにどうしても足指をつかわなくてはならない私は左足に少なくとも二メートル近くの余裕をみておかなければならず、そうすると、左右の脚を一ぱいに開いて向それに裂ける分を加えるとはほぼ同じ長さになりますから、事後には右足が欄間のところまで行くことになります。従つて、事前に両足が同じ位置にあるとすれば、右足は部屋の北端の畳の上から南側の約二メートルの高さの個所まで対角線上を通つて約四メートル移動しなければなりません。ロープがそれだけひっぱられるためには、動滑車を一つ使えば、燈籠はその倍の八メートル落下することが必要ですから、多少の余裕とロープのたるみをも勘定に入れば十一メートルでもぎりぎりのところでは。その代りに私の股にかかる力も同じく二倍の約半トンになりますから、一人人間の股がどれ位の力で裂けるもの

か知りませんが、これだけあればまず／＼大丈夫だろうと思えますわ。ロープの長さについては何度も実験してたしかめてありますから間ちがいはない筈ですの。

最後に、石燈籠を松につないだロープを切る方法ですが、これは炭火をコンロにいれてその上に炭を盛り上げ、よく火がおこつて少し離れて横にわたしたロープを焼き切るまで約一時間かかるようにすれば、その間に私は準備を終える（この図の中で点線を示したのは事後の位置です。）ことができます。この時間が、遅い方にならないのですが、もし早い方に狂いでもしたら大変ですからこの点も充分に実験を重ねました。私の説明は少し分りにくいかも知れませんが上の図をざらん下されば分ると思いますわ。

今ちようど一月十五日の午後十二時をまわりましたの。私はこの手紙を書き上げたらくつすり眠つて、十六日は一日じゆうあなただの想い出にふけつたりこの手紙をよみ返したりして、夕方暗くなつてから往復三十分ほどかかる郵便局までこの手紙を出しに行きますわ。それから石燈籠を傾けて、ロープの用意をすつかりして、おふろに入つて体をきれいに洗つて、またぐつすり眠るの。ひよつとしたら眠られないかも知れないからプロバリンをのんで無理にでも眠つちやうの。そして十七日は朝早く起きて、起きたらすぐ火をおこして松の木の下にもつてゆき、最後のお化粧をして、大急ぎで裸になつて、おふとんや脱いだ衣類もすつかり片づけちやうの。犯人は少しでも部屋の中を乱れたままに残しておくなんてことはしないわ。おそらく指紋だつてただの一つも見つからないことよ。それから足首にロープを結び、猿ぐつわをかけ、両手をしばると、あとはねつころがつて炭火がロープを焼き切る

のをじつと待つばかりよ。ロープを通すための戸障子のすき間が冷たい風が入つてきても、きつと寒くなんかないことよ。やがてロープが切れる、石燈籠が崖から落ちる、私の体はものすごい力でひつばられてはねあがり、裸の白い肉の塊がぐる／＼と宙におどるわ。だけどそれもほんの一瞬间だけ。たちまちぱり／＼と股が裂けて、真赤な血と一緒に、みにくい、どろ／＼した、なまあたの静けさにかえつたとき、二つに裂けた私の体は宙吊りになつたままぶら／＼とゆれているわ。蛙かなんぞのように、まだびく／＼動いているかしら。はだか電燈が一つ、私の無惨な死体をしずかに照らしているでしょう。

それが十七日の朝。十六日に出した手紙は早くても十七日のひるごろにならなければ着かないから、あなたがこの手紙をお読みになるのはそれから大分あとになつてからよ。

礼二さま——これですつかりおしまいですわ。すべては運命の定めたままに動いてゆくのですわ。さようなら、永遠にさようなら。

x

x

x

京子蛇足。——小栗明子（私たちは彼女をもとの名前と呼ぼう）はこうして死んでいった。牧礼二氏は相変らず生きている。彼の妻子のために、そして就中彼自身のために。責めるものは責めるがいい、所詮その人は人間性の深い秘密を知らないのである。

秋深いある日、木枯れゆく寂しい森の中で牧礼二氏は私たちにこの物語りを語ってくれた。このときに見せてくれた事件直後の手記というのがこれだ。

痴愚者の手紙



染田 玄様

七月号には私の手紙を色情倒錯者の手紙として大々的に発表して下さいまして本当に有難うございました。実は先生のおすゝめがなくとも其の後の状況を詳しく御報告したいと思つていたところでした。幸い只今先生の御懇篤な御便りに接し、此んな馬鹿げた手紙でも読んで下さる方が沢山あることを承り大いに勇気を持ちました。それから最初に変厚かましい事です。一つお願いがあります。それは他でもありません。若しこれを御発表下さいますなれ

ば、馬鹿者の手紙とか痴愚者の手紙とかいつた題にして頂きたいと思ひます。倒錯者の手紙では余りにも勿体なく思ひますし、又そういった馬鹿者扱いにして頂いた題の方が私も嬉しいのです。

七月号の手紙では美しい婦人の奴隷となつて、その方の糞便を常食として思う存分酷使され、果ては出来る限り惨酷な方法で鞭り殺しにされたい、その上その肉を料理して喰べて頂きたいと願ひましたが、先生のおつしやられる通りそれは全部が全部、かなえられる性質のものではございませんので

葉村

宏

私の悩みは益々熾烈となつて参るのでございます。此の前にも申し上げました様に私は婦人科医院の下男として若い女の方々から玩弄され酷使されて僅かに慰めてくれるような次第であります。

前の手紙をお出して以後起りました一つの愉快な思い出を書いてみます。それは七月の初めの或る暑い日でございましたが、何んでも自動車会社の社長の奥様とか云われる方がお子様がないので御相談にお見えになつて、看護婦の一人の方から私の事をおききになり丁度今下女中が国へ帰つてゐるの

で、屋敷の内部の掃除夫兼下男として暫く来て呉れないかとの御話でございました。その奥様は三十の背の高いすらりとして、ふち無しの眼鏡をかけられた上品な方で、私は一も二もなく御手伝いにゆく事を約束してしまいました。

医院の女医の主任様には土下座して頼みまして、やつと一週間の休暇を頂きました。その奥様の御屋敷へ参りました。旦那様は夜晩く自動車でお帰りになりますので日中は奥様と二人の上女中だけで男気はありませんでした。最初の一日は、泉水の水替えと芝生の草取りに過ぎましたが、次の日は私の待望の御不浄の掃除をさせて頂きました。水洗便所でございますので貴婦人の排泄物を口にさせて戴くという私の念願は果たされませんでした。それでも美しい奥

様や上女中たちが用を足されたところだというだけで、私は嬉しくてたまらず、それは／＼は念入りに磨き立て、あとで大変お褒めに預つたような次第でございます。

二人の女中さんも、どこか大家のお嬢さんかと思ふ位、揃いも揃つてお美しい方でお齡はどちらも十九とが承りました。特に澄子さんと呼ばれる小柄な方はまるで蠟石のように透きとおつて神々しいばかりの素足の持主で時折縁側へおでましになつて庭で芝生の草をむしつてゐる私に何かお言いつけになられる時、拝まして頂くだけで私はもう天国へ行つたような夢心地で身体中ぞく／＼してしまふのでございます。

私はわざと泉水の上の置物をこわしたり、お言いつけを忘れたようなふりをして、女中さん方に叱られるのを内心嬉しくて待つて居るのでありますが、奥様は勿論のこと女中さんも私を叱りつけるような事ありませんし、お三時に

はわざわざ、私の為にお茶とお菓子さえ出して頂きますので、勿体なくて咽喉へも通らないような次第でございます。

私にはそんなお茶やお菓子よりも澄子さんの真白な御み足の裏や拇指と食指の間をべろ／＼と舐めさせて頂いたり、或は奥様のハイヒールで私のこの頭を蹴とばして下さつたりした方がどれだけ嬉しいか知れないのでございます。

私を庭の土の上に四つ這いにさせて三人の御婦人方がかわるがわる馬にして歩き廻り、私の裸の膝小僧や掌がすりむけて血塗れになるような虐め方をして貰つたり、ノミやノコギリで私の身体を一寸刻みにして頂いた方がどんなにか嬉しいことでしょう。

私はそういつた惨酷な戮り物にされた挙句、指や眼玉や耳は勿論のこと、腸や脳ミソに至るまでバラバラに寸断して惨殺して頂くという空想を四六時中頭の中で描いては一人で楽しんでゐる次第でござ

います。私は本当にそういった殺され方をするために生れてきたようなものでございます。東京では巡査が奥さんに殺されてバラバラに刻まれて河へ投げ込まれた事件がございましたが、私はその巡査が羨ましくて羨ましくて堪らないのでございます。

私は自分の死体をバラ／＼にして頂くばかりでなく、丁度肉屋の冷蔵庫に吊り下げてある牛肉のように人様の眼前にこれが葉村宏と

〔読者通信〕

川端多奈子さま新年号にてあなたの「桃色のベールに包まれて」を読んで僕の今迄求めていたものを讀んで、と思い矢も楯も堪らずこの手紙を出す次第です。あなたは男に縛られて喜ばれるのと違いますが、あの文章を読んでどうもそう感じました。若しそうでしたら是非僕にもあなたを縛らせて下さいませんか。失礼ながら報酬はお望みにまかせます。どうか返事

いう男の肉であると書いて釣り下げてほしいと思うのでございます。そしてだん／＼腐つて臭気を発するようになつて参りましたら、ドブの中へ投げ込もうと肥壺の中へ棄てようと海中へ投じて魚の餌にして頂くとうと自由でございます。

どうかこの哀れな三十男の願いをかなえて下さる貴婦人のあらわれませう。先生の御恵みによつて御尽力賜りますよう伏して御願ひ申し上げます。

を下さい。(神戸 真山佐男)

〔御返事〕

そんな事は私の口からお答え出来ませんわ、私が縛られる事が好きかどうかは、貴方が私をお縛りになられたらお判りになると存じます。報酬なんて結構です。貴方が紳士的に扱って下さいますのなら私北大阪に住つて居りますから電車賃だけ頂いたら喜んで参りますわ、日時と場所、それから目印になるものお知らせ下さいませくわしいことはお目もじの上にて

(川端多奈子)

同性愛
慾史譚

若 衆 散 華

戸 崎 平 馬



人生は短いようでも、何の変哲も無ければ退屈な代ものである。まことに漱石が言える如く、ビールを浴びるよりアルコール半滴の譬え、火花と燃え尽きる一瞬の愉悦は、何ものにも替え難からう。と言つて、誰もが出来る事でない。そこがそれ宿命と言おうもの。此の物語も亦類稀な男色の悲恋物語ではある。

見上げれば淡蒼い空を背景に、仄かな暖みを帯びて桜の咲き誇るのは、何となく人恋しい春の眺めである。舟川采女が、主、堀田正盛の寵童、伊丹右京に、心底深く恋着したのも、其の頃合であつた。

夕かけて暇有るまゝに庭の桜を次々と見て歩く折も折、控えの間の格子が開いて、脇息に倚り此方を見る右京の美貌は、そこばかり暮れ残す眩さなのである。

時折邸内に行き会つて、美童とは知つてい

たが、是程迄とは思わなかつた采女、今は心も空に一步二歩近付いた。

「右京殿、何か良いお歌なりともお聞かせを。」

右京は、につこり唇を綻ばせて

「さあ、それが何うにも艶の有る言葉も出て参りませぬ。とんと、くちなしの園に入つたような具合で」

即座に機智の現れる遇らいぶり、采女は又しても、恍惚と右京の顔に見入るのだ。

苟そめにも主じの情けを受けている人に思いを寄せ、聞き入れられよう道理も無し、と采女は一応は自分に言い聞かせてみるのだが、ならぬ恋と知れば知る程に彌益さる物想いである。夜も風も有らぬ思いに伏し沈んで、眼を閉じれば臉に浮かぶ右京の俤、采女は次第に衰弱して行つた。切なさの余り、当てがきもせずには居れぬ采女だつたのである。

若侍達も朋輩の病臥を捨ておけず、一日打ち連れて見舞いに来る。もと／＼采女も家中の志賀左馬助の稚児である。右京に劣らぬ美貌が、やつれて寧ろ凄艶なものを感じさせる。皆に随いて右京も寢床近く坐り、

「余りお家許りでは却つてお悪かろう。お氣晴らしに庭へ出て、盛りの桜など御覧なされては如何？」

少し首を傾げて采女の顔を差し覗く、その無邪氣そうな口ぶりが、此の人故に痛み煩う身と、采女は口も利けないでいる。是程の思ひも察してはくれず、他人事のような他愛なさよ、と久々に右京に会えた嬉しさと、怨めしさが一緒になるのだ。察してくれずば、まゝよ思ひ死にに焦れ死んで見せよう。とも采女は心を定める。美貌への自信から右京にしてみれば、縦令感付いても、却つて素知らぬふりに采女を遇うのかも知れない。然し又それなれば尙のこと、その冷たい高慢さが、片思いに油を注ぐのである。此の心境は美しく冷たい女に、叶わぬ思ひを寄せては悩む男心と等しいものがある。

所が来合わせた左馬助は、流石に愛する采女の顔色を窺っている内にはつと思ひ当つた。理由を作つて右京らが帰つた後に残ると

思はず難詰したくなつて、

「采女殿、其方の此度の煩らい、何とも合点が参らぬ。拙者にだけ何でも打明けてくれまいか。」

然し采女にしてみれば、右京其の人にさえ打明けられぬ秘恋、まして自分を稚児とする人には打明けようもない。

「左様な苦勞はしてみたい位。幼い時からの悩みで煩つて居りまする」

こう言い捨て、向うむきに夜具を引被つてしまふ。左馬助も強つて是以上は聞き兼ね、歸つて行くのだつた。

後で采女、幼い時からの持病なんて有りはしない。寧ろ生れる前からの因縁で、右京故に焦れ死ぬ約束事かも知れぬと、観念している。

左馬助や又、采女の親たちの祈禱の甲斐で少し快くなつた。と言う噂が、若侍達の間に間もなく伝つたが、それは采女が思ひ死ぬ覚悟を極めたので、却つて少し元氣が出たのであつた。

香を乱れた褥に燻きしめれば、ふと右京の移り香が偲ばれ、雨が降り続けば、此の雨も我が涙には優るまじ、と思ひ、鼓の音が夜更けの邸内に聞えれば、右京の手慰みかと思

う。その切なさを采女は歌に託して僅かに憂さを晴らしていた。

ところへ又訪ねて来た左馬助、ふと見付け、やはりそうだつたと氣付いた。

「こんな心に分け隔てする其方と、生命迄もと契つた拙者、口惜しさ如何許りか。」

と采女を口説く。左馬助にしてみれば、真相を知る程に、采女の想いを叶えさせてやりたくもあり又そうなれば自分は棄てられるのか、と淋しくもあるのだが、やはり恋する弱味で、采女を喜ばせたい一心である。

左馬助の言葉に、ほつとした采女、

「是は世の中の定めない憂さを詠んだもの、それを恋だなど、何とでもお言いになるがよい。」

わざとつんとしてみせる。采女は自分が右京の程よい高慢さに苦しめられながら、自身は自身の態度には氣付かないのである。左馬助は、わざと是も怒つてみせる。切ない手管である。

「ふん、恋に体を煩わせ、不孝者とは其方の事を言うのであらう。」

と采女、赫となつて起き直り、忽ち本心を明すのだ。若い純情さである。

「右京殿を思ひ初めてからというもの、夜屋

となく夢現、とう／＼病の床に、……。我ながら浅ましい。目付の不審も悲しい。右京殿に若し迷惑が掛つたら、と思えば死んでも死に切れず、命の捨て場も無い泰平の世に生れたが身の不運とも思いまする。」

やつれた頬に白く涙の露が散る風情の艶かさに、左馬助は暫し見惚れたが、此の上は何とかして右京の心を動かそうと決心する。

その夜、采女は微睡の内に、右京と共寝の夢を見た。しなやかな右京の指が触れると見て……。ふと目覚めれば、末だ宵の口、太股がそぼつているのは艶夢の故と、せめてもの夢を反芻するのであつた。

夜更けて左馬助が、又訪ねて来た。采女の上を右京も心にかけている。それとなく、右京故の煩らいと告げてみたら、右京は

「御冗談を……。でもお勞わりなされとお伝えを。」

と云いながら頬を染めたと云う。

采女は思い切つて心の丈けを巻紙に書き認め、左馬助に托するのであつた。

待ちに待つた返り事は無くて、左馬助を通じての伝言に

「それ程の思召なら何故お上の御用にも出精なされませぬか。人の口の煩さいものを。」

と間接にも応諾を明かにせぬ右京である。然し、采女の身にしてみれば、思いを告げ得ただけでも安らかな心持、早速床を上げて出仕の支度を始めたのだから、現金なものである。

右京から何の返事も無いまゝに、折も折、三代將軍家光のお成りとなる。庭の池に舟迄浮かべ、遊樂の限りを尽くす内にも、心愉しまぬは采女、何かの折に主君の側近く待つている右京と眼が合えば、つい怨めしさが込み上げて来るのであつた。

右京とても稚児姓として京から求められて、正盛に仕える身、采女の心は今も充分察しられる。然し主君の寵童たるもの他に身を任す事が有つてはならず、と、固く戒められもし、又自分でも慎しんで来た。然し、一日の遊樂の疲れの内に、何となく感傷的な気分になつた所へ、美女の顔を見ると、つい可笑しくもあり、気の毒でもある。人知れず有り合う扇子に、さら／＼と一首認め、そつと采女の袂に入れる。寵妾が家中の美男に浮気すると等しく、怪しからぬ業ながら、春も盛り

の哀傷が、彼に其の氣持を抱せたのだつた。その夜、香を燻き文机には和歌の書物など載せ、一方では高杯に果物を盛つて、采女は

右京の訪れを一刻も遅しと待ち受ける。

やがて、紉の袴に波打たせて、大振袖に前髪立の若衆姿で右京が訪ねて来る。

きちんと手を置いて挨拶するを見れば、恋する弱さに怨みは消えて、思わず其の手を掌に抱きこめる采女であつた。

「殿様のお怒りが恐しゆうて……。なれど今日よりはお心のまゝに任せまする。」

女にも類稀な美貌の唇が、花のように喘いで、じつと見上げる右京の瞳の艶に、采女は何事も忘れて

「必ず離れまいぞ、生き死にも共に、……」腕に力をこめる。右京は頸を微かに肯かせ一層采女の膝に倚りかゝるのであつた。

間もなく用意の床に、右京は袴を脱いで、背を向けたまゝに顔を隠す。采女は態と此方を向かせ、もう一度柔軟な十六才の美童を抱きしめた。

采女も右京も共に今迄は受動的な稚児の立場であつた。采女は戸惑いに似たものを覚えそのまゝ凝然と動かなかつた。と右京の指が静かに伸びて、……。采女の息が弾んだ。……

一つ時の逢瀬に浸りながら、采女は右京の眉が美しく震えるのに氣付いた。采女は思

ず右京の滑らかな肌に手を触れるのだった。
こうして二人は、互に歓びにむせび合い、
何時迄も絶えぬ契りを、と約し合つたのであ
る。

好事魔多しとは昔からの習わし。新知の細
野主膳という男、予てから武道自慢。武士た
るもの武道に通ずるのは当然の理ながら、些
細な事にも刀を振廻し兼ねぬ根性曲りがあつ
た。新参の癖に高慢だから誰も相手にしな
い。此の男が、右京に横恋慕、それも采女の
ような、恋の悩み等は考えもせず、いきなり
直かに口説き付けた。

右京は、あれ程自分を慕い、今は自分でも
命迄もと愛している采女にさえ、容易には色
好い返事をしなかつた程の節操固い若衆であ
る。大体その頃、主の有る若衆は髪を結つて
も末を割つて、はつきり主有る身と示したも
の、それを口説き付ける心臓男の主膳など心
がらからして右京の氣に入らない。

容姿と心ばえを愛でられて、京の地から江
戸へ移し植えられた程の名花が、むざぐざ田
舎じみた悪侍に手折られる筈が無いのであ
る。事を荒立てゝはと、右京が婉曲に遇らつ
ていると、業を煮やした主膳、胡麻すり坊主
の松斎という茶坊主に媒を頼んだ。

右京は松斎の言葉を皆迄聞かず

「味噌すりと思うたに胡麻迄摺るか、茶坊主
らしく致さばよし、向後左様な媒がましき事
申してみよ。」

今にも抜かんずる氣勢であつた。

松斎は此の儘では自分の命が危いと許り、
主膳に報告する。

「若し思い切りならぬにおいては、一そ切り

捨てゝ根絶やししては如何かと存じまする」

此の煽てに乗る程の愚か者で、主膳は
「ならば一命申受ける迄」

苦笑つて氣取つて見せる。

右京の耳にこれが入つた。独り思えらく、
（花は色有るが故に却つて手折られる。なま
じ咲かずば散るまいものを、人並に生れた身
を美しとする人の心の恐しさよ。逃れぬ所に



捨つる命は惜しからね、采女殿とは儚なき縁にては有りしよ。」

此の時思い当つたのは采女に生死は共にと誓つた身、果して言うべきか言わざるべきか迷つた挙句、此の幾月、自分故に病み煩う程に志厚き人を、道連れにする法やある、と決心した。主膳、松斎を首尾よく打果たし其の場を去らず腹切れば落む話と覚悟を決めたのである。

折を窺つて待つ内に、主じの許に大名方二人招かれ、夜更けても物語が弾んだ。宿直の者も思わず微睡に入つた頃合、右京は主膳の不意を襲つた。

流石自慢の武道、肩先深く割られながらも抜き合せたが、初太刀の深傷に敢なく主膳は絶える。松斎をも、と探す所へ人々立ち騒ぎ右京は神妙に刃を捨てた。

目付の吟味に答えて、主膳の横恋慕、身に振りかゝる迷惑は払わねばならず、と、潔く述べ立て、せめて今日の御寵愛に免じて切腹仰付かるよう、と願立てる。媒したものはと問かれても、主膳は新参者故、誰も媒などとは言葉を濁し、松斎をかばう右京の優しさであつた。

正盛は、格別の寵童なり、又その潔さに無

罪の意向である。

然るに主膳の父なる者、片手落を言い立て母は又縁故を辿つて、東福寺首座たりし人を動かす。片手落は政道の曇りと説かれて、正盛も止むなく、右京切腹の裁断を下すのであつた。

折も折、采女は母の許に遊んでいた。所へ左馬助よりの急使で、仔細残る所なく知る。

右京が死なねばならぬか、ふと呟いて采女は、思わず涙が散つた。花のような右京の容姿が眼の前に浮かぶのである。恋の意気地を貫いたが故に死なねばならぬ右京と知つてはさなくとも共に定めた死期、采女は早や心は右京の許へ走つて行く。

顔色がよいがないが、と案ずる母に暇乞いして、それとなく別れの盃を酌み交し、知らせられた通り、浅草の慶養寺へ采女は向うのであつた。

さて来てみれば、辺りに思いがけぬ人集りである。隠れて噂を聞けば

「麗しい若衆と聞くが誠か。」

「誠じや、哀れ只今より腹切るげに聞くは。」

「さて、左程の美童、失う親の心は如何許りであらう。」

「親ばかりか、定めし思う者も有るうに。」

埒なく語り合うのを聞いても、采女の心は早く右京に会いたい一心である。又、痛ましげに語り合う人々も、その実は、噂に聞く美貌の若衆が、我と腹を切つて果てる状を、哀れむ一面に見たい好奇心である。最も是が無ければ、芝居の勘平腹切も、あれ程には見物を集めぬ道理である。

こうして待たれる所へ、右京は、今日を晴れと着飾つて駕籠より降りる。見物の者を見渡して、白無垢に薄紅梅の小袖、縫は露草の袴で歩くのである。事ここに至つては、秘恋に我と殉じて果てる悲壯感と、人前で派手に腹切つて見せる一種露出的なマゾヒズムで、半ば酔心地の右京であつた。

錦の縁を取つた畳が座敷に置かれ、三方の上には紙で柄を巻いた九寸五分が乗つてゐる。その前へ顔色一つ変えず右京は坐つた。

まず豊かな鬢の毛を少し押切つて、介錯吉川勘解由を顧みる。京は堀川に住む母の許へ形見、と頼むのである。

さて和尚が念珠押し揉んで生者必滅の理を説き聞かせば、悪びれず辞世を認める。

いよ／＼三方の刀を押し戴く所へ、采女が走り寄つた。あつと驚く人々を尻目に、

「今日此の始末も皆、此の采女が元、さ、約

東通り一緒に、まずは年上の拙者より。」

言いざま脇差を抜いて襟を押しひろげた。

和尚は元より、吉川も止めるのに一心で縫る。右京も止める。

采女は涙を流した。

「人前を恥じず、腹切らんとする者に、此の上の恥を重ねさせ給うか。若し此の仕草が殿に知れなば、何れは軽くて切腹、重ければ縛り首、此のまゝ死ぬが何よりの身の幸せ。」

成程、それも道理、主君の寵童と密通の事実が明らかになれば当然死罪である。その上に何れは長くは続かぬが衆道の愛である。采女は既に十八、もう三年もすれば然るべき娘を妻に迎え、一家の主となるべき身なのであった。愛と義と、此の二つの並び全うされる為には、二人は此処で死ぬのが何よりの幸せなのであった。何れもが此の采女の心持を理解し、お心静かに、と見守る。と、

右京は思わず人前も忘れて采女に縋り付き今は露な采女の脇へ手を廻す。

「深いお情、言葉にも成り申さず、此の世では、もはや報い参らす術もなし。」

人目さえ無くば、今一度身を摺り寄せて二人切りの愛情に浸りたい思いで一杯である。それは采女も同じ事、腰骨の奥で疼くような

燃えるような思い、袴も濡れはせぬかと慮はかられる程の陶醉境であつた。

然し二人の胸の中に、時間が影を落す。互に瞳を瞞め合つて合図の中に、まず右京が再度肌を開けた。静かに腹を左手で撫でる。

真白な肌に乳首が微紅を湛え、ぐつと露わにした下腹の滑らかな膨らみは、采女ならずとも抱き締めたい程の衝動を覚えさせる。其の左脇へ、いきなり力一杯九寸五分を突き立てた。血潮が向い合つた采女の袴に迄迸つた時、苦痛に右京は身を反らす。

「拙者こそ先へと思ひしに」

と是又、滑らかな不腹へ深々と采女も脇差を突刺した。忽ち血が白い腹を染める。

苦痛を二人共押堪えて、無言で刃先を右へ引廻す。臍の下が、ぱつくりと口を開き、言ひ方ない凄壮さ。人々は酔う様に只瞞めてい

る。二人が美しい丈けに尙凄じいのである。刃を右脇で引抜いた時、二人の顔は寧ろ神々しい程白く冴え、互に強いて微笑んだかと思ふと、苦しい力を刃先にこめて、鳩尾を互に刺し貫いた。戦慄が二人の大肌脱ぎになつた背筋を走り、血は溢れて膝の間から膝の上へ拡つて行つた。然し人々は、介錯の大刀を下げた吉川勘解由さえ、一幅の名画に見入る

ような昂奮に打たれて、立ちすくんでいた。それは、溢れる程の二人の幸福感が、二人切りの雰囲気を選びに投げかけ、眼に見えない壁となつて、濫りに他人の立入るのを許さなかつたのかも知れない。

二人は、生きている間も互に向い合つて瞞み合つていた姿態そのまゝに、死ぬ時も、互の手によつて致命の傷を与え合つたのである。サド、マゾヒスチックな死に方で、是以上烈しい死に方は無かつたであろうし、是以上幸福な結末は、二人には考えられなかつたに違ひないのである。

〔読者通信〕

文代様——新年号の読者通信で拝見致しました。小生は今年三十二才のM的独身青年です。某国立大学卒業後或る学会に關係して居ますが、貴女のあの通信を拝見して是非共貴女と文通してみたくて堪らない思いにかられました。どうか御返事下さるようお願い致します。

(東京、島井吉年)

辻村隆様——縛られた女の写真集は何か小説の筋書に従つて責められてゆくとか、連れ出されてだん／＼縛られてゆく等順序で筋のある様な企画でやつて頂いたらと希望して居ります。

(愛知 姫島三郎)



◇アブニストの記◇

らぶ・すれいぶ

第二回

LOVE SLAVE

鬼 山 絢 策

一

強烈な太陽の光線に曝らされた夏の海！

どぎつい迄に全身にふり注ぐ熱線の下で、私は曾つて経験した事のない激しい官能の刺戟に、狂ほしい迄にふるえて居ました。

私はパラソルの蔭は春美と恭夫と大槻で一ぱいだし、寒いので日蔭へ入りたくもないし、そうかと言って、春美の隣へ寝そべるのは何だか気がひけて、と言うより、畏れ多いような気がして、彼女から三尺ばかり下つた所に腹這いになりました。焼けた砂が心地よく腹と胸を暖めてくれ、首を横に向ければ、眼の前に春美の逞ましい露わな太股がシットリと濡れてうぶ毛の先がピカ／＼と光つて美しく横わつて居ました。

日蔭の中の三人は絶えず何か喋つて居り、私だけがのけ者にされたような形でしたが、これはいつもの事なので、いつもの程度に嫉妬を感じ、いつものように諦めて居ました。



私は仰向けになつて、真蒼に澄みきつた空と向き合ひました。

「お互いは大空のように」

と言うモットーを襪にかけてマンドリンを奏して歩く街頭の詩人があつた。

誰にも大空のように寛大な気持で接しなければならぬ。

私は絶えず卑屈に鬱結した心がバアツと開けたような気がしました。

その時「フ、、、」と春美の笑う声がしたかと思うと

「キアー」

と嬌声が上つて、突然、実に突然春美の軽かい肉体が私の頭の上に降つてきました。

ドシン！と重いショックと鈍い苦痛を加えて、扁平な肉盤が、私の顔一ぱいに無遠慮に圧しつけて来ました。その一瞬に私は反射的に鼻もひしやげる程圧迫された皮膚へ接吻して居ました。それが肉体のどの部分だつたかも分らず、果して性的衝動のためにした接吻かどうかとも分らず、只春美の肉体だと言う事を承知して居るのみで激しく吸つたのです。

「あら！御免なさい」

私の視界が開けると同時に眼の上に丸い膝頭の峯が見え、眼の横にできた太腿の肉壁が写りました。それで今圧しつけて居たのが春美のはりきつた太腿の内側であつた事が分つたのです。

「痛かつたでしょ。御免なさいね、大槻さんが悪いのよ、妾をくすぐるんですもの」

春美は半身を起し、今私の顔を圧えつけた曲線をくの字に立て、眼の前に見せながら言つた。

「いゝ気持で眠つてましたよ」

「済みません、痛くありません？」

「痛くないです」

私の眼は羞恥に戸惑いながらも、眼の前の内股に向いて居ました。そこには

「今お前の顔へぶつつけてやつたのはこれだよ」

と言わんばかりの悩ましい曲線が剃きつけられて居ました。

私は腹這いに寝転かりました。腹這いにならざる得ない状態だつたからです。これ以上仰向けのまゝで居たらパンツ一枚ではどうにも掩いきれない状態に陥るでしょう。

「ア、ハ、ハ、」

と大槻が大声に笑いました。

——春美の太股に顔を押し潰された俺を笑つてやがるな。

私にはそうとしかとれませんでした。

あゝ眠つた間も悪い焦がれた春美の肉体に、その皮膚に一番最初に直接に触れたのがこの時でした。それ迄は、手にも指の先さえ触れ合つた事はなかつたのです。これが私と春美との罪深い因縁だつたのでしよう。そしてこの日の出来事がそのまゝそつくり私の後の生活に現れて来ようとは如何に妄想癖の強い私でも思い至りませんでした。

私の夢想して居た情景の或る一片が、それはホンの初歩の情景の一部ではあつたけれど、現実の世界に、今、たつた今



私の肉体の上に、現実の重量と圧迫と、夢想の世界では到達し得なかつた快い触感とをもつて実現したのです。

春美は何事もなかつたような、例えば誤まつて人の足を踏んずけた時のように、詫やまればそれであとかたもなく忘れ去つてしまふ、あのような態度で大槻と恭夫に映画の話で夢中でした。

三人は半身を起して居ました。男二人はあぐらをかき、春美は両脚を長々とのぼして、両手を後に突つかい棒して居ました。スナナリとのびた両脚の上の方だけ乾いた砂がスーッと刷毛で刷いたように薄く掩つて居ました。太腿の横側の部分はもう海水がすつかり乾いて、白い皮膚が青春の光で、白熱の太陽の光線をはじき返して居ました。

私だけはまだ起上つては不安な状態だったので腹這いのまま、三人からのけ者にされたような恰好で、組み合わせた手の甲に頬をのせて眼を閉じて居ました。

早く興奮が鎮まればよい、それでなければ立つて海へ入る事もできない。

そう思いながら私はいつしか今の甘美なそして苦しく快い重圧感を想い出して居ました。

私は閉じて居た両眼の下側になつた方の片眼を薄く開けて春美を見ました。

春美は向う側の脚をくの字に立て、最も魅力的な曲線を作り出して居ました。上の方だけ砂をかぶつて、太腿の内側や下の部分は露わな肌が出ているのは、スカートや、裾前からチラリとこぼれ出た脚と同様な、効果を見せて居ました。否

砂に半ば掩われた脚と言うものは、その砂が汚ない感じのするものであるだけ、絹の裏地をかねつた脚とは又違つた太々しい、逞ましきを感じさせるのでした。その脚を片眼で眺めているうちに、私には次から次へと妄想が飛躍して、鎮めようとした心の昂ぶりは、益々抑え難いものになりました。

「サアもう一度海へ入るか」

恭夫がノビをして立上りました。二人も続いて立つて砂を払いおとしました。春美の脚についた砂が、ホンの僅かですが私の顔にハラ／＼と振りかゝりました。春美は気がつかないようでした。

「泳ぎませんか？」

と上から私に声をかけました。

「僕は疲れたから、もう少しこうしてます」

「じゃバラソルの下へお入りになつたら？暑いでしょう」

「いえ暑い方がいゝんですよ。まだ身体が冷えてるから」

「じゃ砂風呂してあげましょうか」

春美は無邪気な、子供がいたずらをする時のような調子でそう言いました。

「えゝ」

私は即座に希望するように返事をしました。

春美は私の足の方に廻つて早くも砂埋めにかゝりました。

恭夫も大槻も手伝いました。

「仰向けになつたらどう？」

その時私は稍小静を得て居たので、思いきつて寝返りをし、て仰向けになりました。

熱い砂やら、暖かい砂、湿った砂などが入り混つて、私の肌に触れて来ます。三人の手で、見る／＼私の下半身は砂に掩われました。

もう大丈夫……

と思つた時、私の妄想が又頭をもたげました。

自分の崇拜し、恋する女の手で生き埋めにされる

私はその妄想にゾク／＼する程昂奮しました。

私の胸にドン／＼砂が盛り上つて行くのを眺めて、その快い重量に陶然として居ました。

「この位でいいか？」

恭夫が聞きました。

「もつと上迄やつてくれ」

「ようし、全部頭迄埋めちゃうぞ」

春美がキヤツ／＼笑いながら、私の顔の直ぐ横へ跳んでセツセと砂をかけて居ます。片膝を砂地につき、片膝をあげて居るのが、時折その位置が交替したり、両膝が持上つた時など、私の眼の前に、巨大な女性の太腿と下腹部が、クローズアップされて、

さつきお前の頭へのつかつたのは、此処だよ！と示威するように迫つて来ます。

彼女はこんな無邪氣そうに見せかけて居ながら、内実は男性を自分の足元に踏み従える事を以つて快とするサジストではあるまいか？……外面女菩薩内心女夜叉と言う諺の通り先刻の事柄も偶然のように見せかけて、その実、彼女の方でも意識的にやつたのではないか……

もしそうであつたら私はどんなに満足だろう。外形ばかりか内心迄私の理想通りの女性が得られるのだが……

彼女が正常の淑やかな女性だつたとしたら、私の方で私の畑へ誘つて行かなければならない。それには相当な苦心と勇気が必要になる。それでも彼女がそれに応じなかつたら……私の恋は破滅だ。

だから私は前者であつてくれと心に希い、ソーツと薄眼をあけて、彼女の顔を見ました。

「全部埋めてあげましょうか」

春美と視線が合つて彼女は私の顔をにこやかに見下しながら、いたずらっぽく笑いました。

——そうして下さい。——

と私は心で言いながら、彼女の顔色から、サジズムのひらめきを読みとろうとしましたが、女性の微笑と言うものは、「モナ・リザ」の如く深遠で神秘なものでした。私は彼女から何ものも窺い知る事は出来ませんでした。

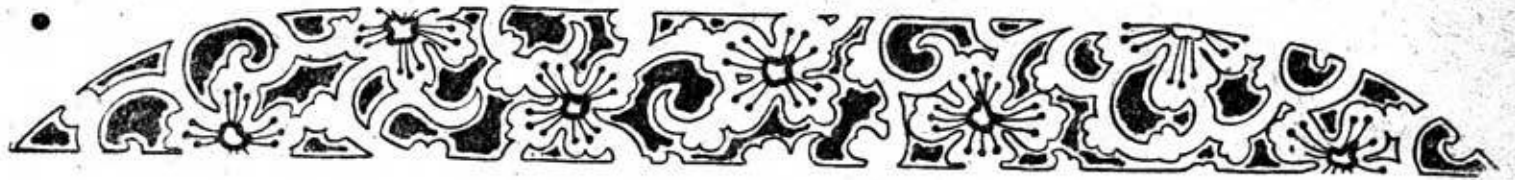
私は首迄埋められました。もう身動きも出来ません。此の儘もつと顔も頭も彼女の手で埋めてくれたら、どんなに喜ばしい事だろうと思いましたが、口に出して言えば狂気の沙汰と思われまうから黙つて居ました。

彼女の無雑作な手運びが、又私の顔に砂をとばしました。

「あら、御免なさい」

白い指が私の頬の砂をおとしてくれました。

彼女に何をされようと、手一つ動かせない重病人のような現在の状態を、私はウツトリとして味わつて居ました。



男達は私の足や腰の方へ更に砂を押かぶせて居ます。

春美は私の傍へ突立つて、上から笑いながら見下しました。巨大な二本の肉の柱が威圧的に聳え立つて居ます。

「重いでしょう」

「いえ、とてもいい気分ですよ」

「そう、じゃ妾達が泳いで帰ってくる迄そうしていらつしやい。どこかへ行つちやダメよ」

三人は笑いさぐめきながら、もつれ合つて汀の方へ駆けて行きました。

一人取残された私は、牛が胃袋から食物を吐き出して咀嚼するように、先刻の彼女の重圧の快感を繰返して味わつて居ました。

二

其の夜、床に入つてからの私は、彼女の幻影に悩まされてどうしても眠れませんでした。

その頃私は何回目かの禁慾生活を厳守して居たのですが、眠ろうとしても、瞼の裏に浮んで来る彼女の「モナ・リザの微笑」に、艶やかな太腿の曲線に、あの瞬間的な快い肉体の重圧に、次から次へと私を惑溺の泥沼に誘い込む手がのびて、悶々と反転しそれと闘う私の意志は疲れきつてきました。

こんなに苦しむ時は寧ろアツサリと遂行してしまう方がいいのだ。その方が害が少ないのだ。

と、良心に口実を設けると、私はバツと蒲団をはねて飛起

きました。堪えに堪えて居たものが、一旦そうと決ると、私の身内からは不思議な力が湧き出てきました。

私は客間から父の愛用の碁盤を部屋へ持込みました。櫃の六寸盤でかなり重いものでした。それと座蒲団を三枚持つて来て布団の中へ入れ、碁盤は蒲団の上に逆さまにしてのせました。そうしておいて私は蒲団の中に潜り込み、碁盤を胸の上にのせ、座蒲団を下股の上に三枚重ねてのせました。私が身体を動かすと、碁盤が沁りおちそうになるので、私は身動きも出来ません。

快い重圧が徐々に重味を増して来ました。彼女が私の上に跨がつたとしたら、もつとく重い、そしてもつと弾力に富んだ変化のある快さを得られるでしょうし、少し位身動きしても沁りおちるようなこともないでしょう。然し他に適当なものがないので、止むを得なかつたのです。

私は両手で座蒲団をグツと抱きしめて、静かに上下に揺り動かしました。

妄想の中の彼女は、理想的な残虐で暴慢なものになつていました。

鎌倉の砂浜で、私を首迄砂に埋めて、彼女は私の顔の上に馬のりに跨がりました。「サアどうだ！」とグイグイとおしつけて来ます。傍では恭夫や大槻が立はだかつて見下し、アハア笑つて居ます。他の見物人も面白そうに輪を作つて笑いながら、羞恥で真赤になつた私の顔を見て居ます。

私は蒲団の中へ頭迄潜り込みました。

彼女は私の顔中一ぱいを豊かな尻の下に敷いて、グリグ



と尻を動かして私の頭を砂の中に埋めて行きます。

彼女は立上つて、私の胸の上に乗りました。そして足で私の顔に砂をかけて、私の頭も眼も鼻も口も砂の中に埋めてしまいました。

暗黒の中の彼女は更に凶暴となり、全裸となつて私の両手を縛り、長い革の鞭で散々に私の背中と言わず胸と言わず打つてくち打ち抜きました。それでも少しも痛みは感ぜず、只快感のみがその一鞭々々に加わるのでした。

彼女は勝誇つたように私の胸の上に腰を下し、さまざまの悪罵を吐きかけて来ます。私はその重みに堪えきれなくなり気が遠くなるような内に歓喜の絶頂から虚無の世界に猛烈なスピードで転落して行きました。

私が恭夫を訪問する時は、必らず何かしら手土産を持つて行く事は、前にも述べましたが、次第にその品物が彼女を本位とした、花とかフランス人形とか、終いには「こんなものつ貰たんだけど、僕が持つてたつて仕様がなから……」

と言つて、プローチや化粧品のようなものを迄買つて持つて行きました。それを受けてくれた時の春美のあどけない無邪気そうな喜び方は、私を充分満足させ、この次にはもつと彼女の喜ぶものを見つけて来ようと思ひました。

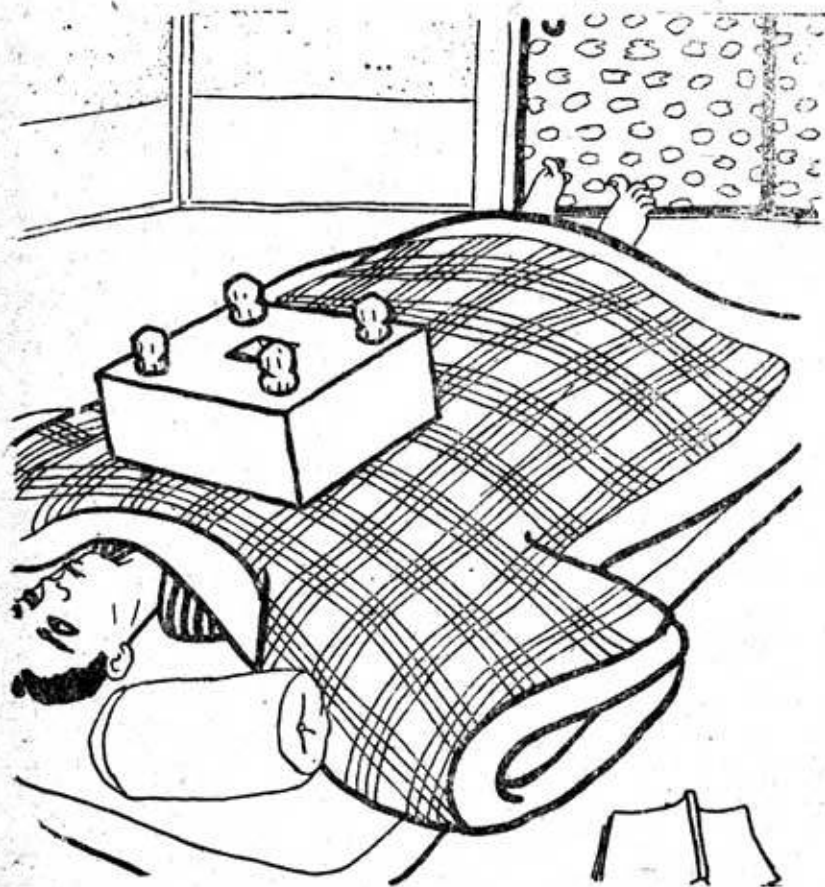
大槻も私と同じ位の回数で彼女に会つて居るようでした。ですから大槻と打つかる事は始終でしたが、大槻は始めのうちは、時にチラリと私に敵意を向けて来ましたが、そのうちに私を哀れむような蔑むような眼を見せるようになって来

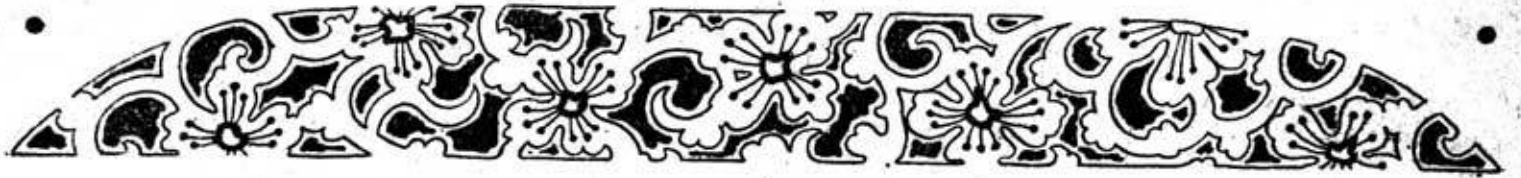
ました。

春美の私に対する態度は、いつも微やかで、あの鎌倉の時のような蓮葉な行為や素振りは見せなくなりました。

それと反対に大槻に対してはかなり親近の程が深まつて時に依ると私の眼の前でふざけたり、喧嘩したりする事がありました。

そんな時も私は身を灼く嫉妬を内にかくして、例の傍観者の態度でニヤ／＼して居ましたが、どうやら自分の敗北を悟つて、一人になると居ても立つても居られない焦燥と失望と懊悩に苦しみました。





恭夫が私の家に来る事もちよい／＼ありましたが、春美が恭夫と一緒に来た事も二三度ありました。

私の家は地坪が三百坪あり、それに五十坪ばかりの相当癪つた純日本式の二階家が建つて居ました。

父は小間物の間屋でしたが十年も前に番頭に委して現在では金融と地所と家作のあがりて収入を立て、居ました。

戦前の相場で百万近い財産は残して居たでしょう。その父の財産が彼女に対する私の武器の一つでした。

春美が初めて家に来た時には、その意外に豪壮な構えに驚いたようでした。父や母にも私は紹き合わせましたが、その時春美はボツと顔をあからめ、初々しく淑やかに挨拶をかわしましたが、その時の彼女の印象が、何故か、失望を感じた時の私に一縷の希望をもたせたのでした。

三

もうその頃では、春美と二人きりで映画を観に行く程度には、いくら親近度の浅い私でも交際が進んで居ました。

暗い客席で、彼女はピツタリと私に身体をすり寄せて来ました。私の腕には腕を、腰には腰を寄せてくる彼女が、私にはもつたない程有難く感じ、何か身分不相応の不義の悦楽に耽つてゐるような感じを受けました。

もしも結婚できたら毎日でも斯うして居られるのだ。

いや、表面は妻として迎え入れても彼女を世間並みの妻として扱うのは、却つて彼女への愛情が薄らくだらう。私は私なりに彼女を女王様のようにして仕えたい、風間は一応普通

の妻と夫としての応待をしても夜は女王と奴隸の姿にかわるのだ。

もしもその夢が実現したら、私は死んでも悔はない、どんな障害をのり越えても彼女と結婚しなければならぬ。それなのに自分の態度はどうだ、大槻の眼にあまるふざけ方を見ても、いつもの臆病な傍観者で指を咥えて見るふざけまさは何だ。男なら大槻と戦え！

春美の快いクツションのような接触を受けながら、自分を叱り自分を励ますのですが、さて大槻と正面から戦かうつもりでも、あまりにも容貌と言ひ、肉体と言ひ、言語動作の男性的魅力に富んだ彼とでは役者が違いすぎて我ながらひけ目を感じるのでした。

映画の帰りに喫茶店でお茶を飲む時、彼女は大槻の噂を決つてしました。

大槻を批評し、彼がうわべは貴公子然として居るが、一皮向けば厚かましくて、エゴイストで、打算的な人間だと酷評しました。その時の春美の瞳は真剣に憎悪に燃えて居るようでした。

そう言う事を聞くと「満更でもない」と思つたりしましたが、やがて私の敗北をはつきりと思ひ知らされる時が来ました。

それは一つは私が大槻の家を訪ねた時、彼の家は父も普通のサラリーマンで、ありふれた中流の下の生活程度と言つた感じの借家暮しでしたが、彼の部屋に入つた時、先ず眼に入つたのは、赤坂の「とら屋」の洋かんの折でした。



それは二三日前私が春美の家に持つて行つたものと、折の大きさが同じものでした。大槻は何も知らぬのか、その折を眼の前であけて、残り少なくなつた洋かんを切つて私にすゝめました。それが私が春美に贈つた物と同一のものである事を決定づけたのは、帰りぎわに今迄背を向けて居た方に振返つた簞笥の上に、私が春美にやつたフランス人形が、私を見下して私のお人好しをあざ笑つて居るのを見た時でした。

もう一つは猶決定的な事柄でした。春美の留守に訪れた時丁度恭夫も居合わせず、応待に出た母親の口からヒョツととび出したのが、一週間程前に、春美と大槻が、箱根の仙石原に二晩泊りで旅行して来たと言うのでした。春美は同窓会の親友ばかり、女同志で旅行したと私に言つたのですが、それは実は大槻と二人きりの旅行だつたのです。

私の顔色を見て母親もハツとしたようでしたが

「まあ、あれも年頃ですし、大槻さんも来年は卒業で、秀才ですから勤め口も大体決つてゐるようだし、まあ仕方がないと思つて居ります」

それは、此処迄来てはもうかくしても無駄だと思つた母親の私に対する意思表示でした。

「そりや結構ですね。それじや僕も何かお祝いをあげなけりやならないけど、式はいつ頃あげるんですか」

私の声はふるえ、吃りながらも強いて平静を装つてそんな風に二人の間の念をおして見ました。

「いえ、あなた、まだ何もそんな所迄行つてゐる訳じや御座いませんのよ。そりや来年の話ですもの。そんな御心配は結構

で御座います。あの子もあなたにはずい分御迷惑をおかけしましたし、親しくして下さつて、私もほんとうに有難く思つて居りましたんですけど、どうかこれからも永く御交際下さるようお願い致します」

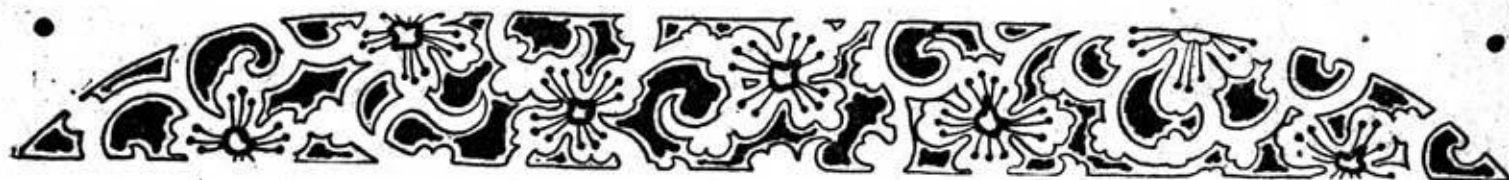
彼女の家を辞してから、私はどこをどう歩いたか、記憶がありません。映画館へとび込んで見ては直ぐとび出し、おでん屋へ入つて、コップで酒を一息に飲んで見たりした挙句、いつしか足は、昔童貞を失なつた街、玉の井に運んで居ましたが、あの狭い入り組んだ道を魂の抜けたようにフラ／＼とさまよい、結局何処へもあがらずに家へ戻つて、コソソリ床に入りました。

私は不覚にも枕を涙でとめ度なく濡らしました。そしてその夜の「彼女」は一層暴虐で私を苦しめました。

もう会うまいと思つて寝たのが、一夜あけると只彼女が恋しく、学校も休んで午前中から映画を観に行き、午後になると又大槻の所に持つて行かれるんだなと思ひながらも菓子折を買い、彼女を訪れて居ました。

春美は今迄と少しも違わぬ態度でニコヤカに私を迎え、菓子折を仰山に喜び、あどけなく無邪気で淑やかに、私に接しました。昨日母から一伍一汁を聞いて居るに違ひないのに、斯うも済まして居られるものでしょうか。私は女の芝居の巧みさに呆れましたが、又それが一種の悪魔的な魅力と變つて感じてくるのには我ながら訝かしく思ひました。

眞の傍観者である兄の恭夫の方が、この日は少し気まずいような顔つきで、ぎこちない所が見えました。彼は一寸顔を



出して、直ぐどこかへ出かけて行きました。

コーヒーを注ぐ春美の顔を私はジッと見つめました。既に処女を失なつた女、自分の望みをたちきつた女、自分を操つて居た女！

そんな風な気持で彼女を見たかつたのですが、近頃益々成熟して、眼にうるおいを増し、私の好みにピッタリはまつた眼と言ひ、唇と言ひ、表情の動きの美しさと言ひ、私にはどうしても彼女を憎む気が起らないのでした。

これ程に想つて居た女性に、二年近くも交際して居て、遂に自分の想ひの一言も打明けられなかつた意地地なさ、不甲斐なさに、我ながら悔を新たにしました。

「あら、イヤですわ。私の顔に何かついてまして？」

春美はチラと私を正視してニッコと笑い、左手で頬を撫私した。彼女と視線を合わすと未だに慌て、我からそらす、まはど迄も甲斐性なしの男でした。

「私は失恋と不自然行為の過度で、一時は強度の神経意弱になり、自分の意地地なさを夜毎に責める自虐の程度がひどくなつて、益々陰気な性格におちこんで行きましたが、幼ない時から精神的な苦痛を堪え忍ぶ修練をして来た私には、いっしか諦観の境地にどうやら氣持をおちつける事が出来ました。」

四

私は大学を卒業すると、父親の友人の軍需会社へ勤める事になりました。

その頃から太平洋戦争に入り、戦争がだん／＼激しくなるに連れて会社の仕事も忙がしくなり、あれやこれやと雑用が出来て、諦めたとは言つても、時につけ折に触れ、春美の事を想出して憂鬱になつて居た私は、その頃はいくらか忘れて暮せるようになりました。

母は私の嫁探しを始めて居る様子でしたが、一日私を呼んで

「もうそろ／＼お嫁さんを貰つた方がいゝんじやなくつて」と候補者の写真を何枚も見せました。

私はあれからも時々春美を訪れては居ましたが、学校を出ると恭夫が間もなく出征したので行き難くなり、彼女が大槻と結婚したかどうかを確めもせず、其の後私の身辺も多忙になつて来たのでそのまゝになつて居ました。

さて自分の結婚と言う事を考えると直ぐ又春美のことが脳裡に浮んで来ましたが、今更どうにもならない事ですし、又其の頃は多少私も年をとつて、人生観も変り、私のような人間は、極くありきたりの好きでも嫌いでもないような女房を貰つて結婚に依る性生活をエンジョイする事なく、もつと実質的な生活面の新天地を拓く事に依つて、平凡な、月並みな生活をした方が、私の病的な性癖も正常になるであらうと考えました。

それには私の好みの型の女性などでない方がより健全であると考え、知人の紹介で極く平凡な見合い結婚で、あさ子と言ふ二十二才の春美よりは一つ年下の女性を妻としました。

あさ子は山の戸の銀行員の娘で、家もあり裕かな方では



ない家柄の娘でしたが、非常に従順で、淑やかで、私に対しても、両親に対してもよく仕えました。

そう言う性格が私には最も不向きな質なのです。春美と交際して居た頃の私の夢に描いた妻は、美しく、嬌慢で、我がまゝで、コケツテイツシユで、社交的で、勝気な女性を理想にして居ましたが、あさ子は今あげた条件の総べて反対の対蹠的な立場にある女性でした。

然し人間の誠実には心を打たれるものです。あさ子が、肉体的に私を愛して居たかどうかは分りませんが、精神的には私を尊敬し、愛慕して、日常の些細な事にもよく女らしい気使いを配ってくれました。

平常の夫から見れば、まこと典型的な良妻の見本だったでしょう。私も次第に彼女を精神的に愛するようになりました。いえ、それは愛情には違いありませんが、今から考えれば彼女の誠実に酬ゆるお義理の愛情だったかも知れません。

私達の性生活は極めてアツサリと至極ノーマルなものでした。妻が満足して居たかどうか私は今になつて考えて見るので当時は妻に対してそこ迄気は配つて居ませんでした。

結婚生活半年ばかりで、私にも赤紙が来て、横須賀海兵団へ入りましたが、戦争の事は多く語るのをよしましょう。

私は四年内地や外地を転々として昭和二十三年に帰つて来ました。

あさ子は慎ましく私の帰るのを待つてくれました。五つになる男の子供が母に教え込まれて居たものか「お父ちゃん」と言つて、私に抱きついて来ました。

あさ子は泣いて喜んでくれましたし、私も生甲斐を感じて我が子我が妻を抱きしめて、これから又新しい生活の第一歩を踏み出そう、と人並みな希望と勇気が溢れて来ました。

父は一時経済的に大打撃を受けたようですが、其の後又立ち直つて、昔の通りとは行きませんが、財産は千五百万程度に盛返して来て居りました。

昔の百万の財産は今の二億以上にも相当するのですから、現在の千五百万では生活も昔程豪奢ではありませんが、私達のために荻窪に家を見つけてくれ、私が前の会社が解散して職を見つけて居るうちに、その年の暮に父は亡くなりました。母は弟の許に引き取られ、遺産もどうやら円満に分けあいました。

私は一躍五百万の財産を得て、有頂天になりました。それでも一応定職を持つた方が良いと思い、大学時代の池崎と言う友人と二人で出版を始めました。

営業関係は一切彼に任せ、私は五十万ばかり投資して、編集の方を道楽半分にやつて居りました。

まあこの辺迄が私の一番幸福な、平凡な家庭生活を得られた時代だったでしょう。

生活が豊かになり、身辺が落ちつく、私はあさ子の愛情には充分感謝して居たのですが、「一寸浮気して見ようか」と言う気持が起りました。

そんな気持から池崎と二人で銀座のキャバレーに行つた時そこで大膽なデザインのイヴニングを着て、女王の如く振舞う春美を発見したのでした。

(続く)

変の字問答 変の字問答 変の字問答

変の字問答

第二話

浮家鷹三

春です。

と言つてもそれは、暦の上で年が明けたというだけ。まだくほんとうの冬の寒い寒さは、これから本格的です。

その一月上旬の或日曜日。今日は朝からよい天気で、それに風も無い故か、日中はポカ／＼と割合に暖かでした。

この日、私はアノ去年の秋の夜。バラック建の一ぱい飲屋で、思わず問答を交した手伝職の「源さん」(職と名前は、アレから後に判つたのだが)の自宅に招かれて、今日も又なにか変の字に関係のある、彼の意見や質問を聴いて呉れと言うのでした。

源さんの宅は、この炭都I市の目抜通りの裏筋にあつて、しもたやの二階を借りていたのです。

そして来て見ると、さすがに江戸つ子の彼らしい気性をそのまゝに現わしたかの様に、座敷の裡はキッチン／＼と小気味よく片付いていてそれに何よりも私の氣持を暖めて呉れる真つ先の印象は、その座敷の真ん中に、デンと据つた大型の丸火鉢でした。

と言うのは、私が終戦直後に大阪から、今のこの北九州に来て、爾来炭鉱に籍を置きつゝある事は、既に第一話に於て述べた通りですが、何しろ炭鉱地帯の住人は、そのお手のもの、無煙炭又は微粉炭を焼いて造つた「ガラ」及「豆炭」を特別な安い値段で配給されるので、何も態々高価な木炭を購つて迄使う必要はないのです。

従つて私の家庭でも過去七年近く、木炭を使わないから自然火鉢は無いのでした。

でも火鉢は無しに行けるでしょう。

(然し何と言つても落付いて話の出来るのはアノ昔情緒のなつかしい、ドツカリ据つた大火鉢の前に限る。)と私は思つていたからでした。

勿論。石炭ガラのおこつた七輪の前では、話が出来ないと言うのではないのですが、まア例えて言えば、瓦斯でスキヤキをするのと木炭火でするのと、どちらが落付いて……。という事になるのですが、然しそんな事は余り固執する問題でもありませんので、それよりも早く変の字問答の本筋へ急ぐ事に致しましょう。

大火鉢の内では、これも源さんの氣前と見える上等の桜炭が、チン／＼と威勢よく赤い焰を立てゝいて、その火鉢の周りを囲んで座

石炭や、ガラをおこす為には、薄い鉄板で拵えた手提式の七輪で煮炊にも暖房にも一切それを用いていたので、炊夫暮しなら先ず一生

つたのが、私と源さんとそれから今日は他にもう一人。これは源さんとは平素から至つて気の合う仲良しで、変の字に関する話にも些か興味を持つていられるという人で、表通りの古太屋さんの主人の「男女田」さん。

一寸変つた姓のこの人を加えて都合三人。いよいよ本年劈頭、昨秋からの続きとみるなら第二回目の変の字問答の幕は切つて落されました。

「本日は先生、どうも誠にお忙しいところをお招び立て致しやして、恐縮に存じます。」

と先ず源さんが、司会者気どりで私にそう挨拶します。

（私は一寸も忙しい事はない。退屈で困つてゐるのに、源さん仲々お世辞が旨い）

そう思つて私は何だか可笑くなりました。

（それに又、先生等と呼びやがる）

「こら……」

私は源さんを「メツ」と睨みました。

「へへへ……」だつて先生だから、先生というより仕方がありませんや。ねえ男女田さん……」

と今度はその男女田さんに救いを求めて、然し彼は、一寸首を縮め、頭を抱えて見せます。そんな他愛もないところが、私と源さん

とをアノ秋の夜の会見以来、もうこんなに親しくさせた所以でもあつたのでした。

「まあいゝじやありませんか先生。私達二人が質問して、貴方が答えて下さるとすれば、こいつは矢つ張り貴方を先生と呼ぶより仕方がありませんねえ。それにどうもこう、物事には総て一方の「旗頭」とか「主将」とかいふものが無くては頼りないですよ。その意味からしても、先生と呼ぶ人を一人捲えておかなくては、ワレか俺かの三人一様じやア気分が出ませんよ……。先生結構じやありませんか……」

こう男女田さんの御意見です。

（そう迄言われれば仕方がない。ようし源の字の奴アトでウンととつちめてやるから……）

私は左様覚悟して、そこで先手を打つて、私から先ずこの男女田さんに質問の第一矢を放つて見る事にしました。

「時に男女田さん早速ですが、貴方は古本屋の店をやつて居られるそうですが、近頃ヒネリモノの方はどうです。自由時代のこん日、相当出物があるでしょう……」

とたづねました。すると――

「オヤ……これやアどうも、話の受手が違ふじやありませんか。まるで反対ですよ、

然しまア訊ねられれば、お答えせぬ訳にもゆきますまいて……」

男女田さんは、一寸、そう皮肉つてから、然し割方氣さくに語り出して呉れるのでした。「そうですねえ――大体が戦前より今は遙かに風紀の取締りが大目で、所謂自由時代が現出している訳ですが、だからと言つて近頃ヒネリ本がそうジャンク／＼出ると言う訳でもありませんよ。いや、出ているのかも知れませんが、何しろ近頃の社会そのものが、もう昔の様なヒネリ本と常本との境を、吹っ飛ばしてしまつてゐるのでは無いでしょうか。実際見ように依つては、近頃のはそのヒネリモノ的な本の方が大方だと言ひ度い位ですねえ。……例えばですよ、戦前迄は、一寸したエロだとかグロだとかでも、そう言うものを撰つて纏めて載せてある一冊本を、ヒネリ本とまア大体見るのでしたが、それが近頃は違います……。今言つた様な伝で行けば、それこそもうどれもこれもヒネリ本だと、言わなければなりませんからねえ。――

性愛秘戯画。責絵、責写真。艶笑芸術等々その本全頁に亘つてなくとも、大抵何処かをそれらで埋めているものが多いんですから従つて、昔のチャチなヒネリ本なんぞ、全く

糞喰えですよ。それ共、余程門外不出の逸品なら別ですが然し又そんな大物はわれ／＼有ふれた古本屋になんぞ、まア持込む人はありませんや」

いや、さすがに男女田さん中々の雄弁ですそこで又、私は猶も質問を重ねます。

「御説ごもつともです。ところで、ではもう一つお訊ねしますが、只今のお説の中のその責絵、責写真ですが、あゝ言つたものゝ場面は、戦前は非常に落帖するお客さんが多かった様ですが……つまり自分の希望の絵や写真等を、カミソリか何かで頁の奥から上手に切取つて了つた後を、素知らぬ顔でまた売戻しに来る……と言う様な……。」

「成程——それも又、御道理なお訊ねです。

然しその落帖の方も、近頃は割合に無い様です。尤も私等は井の中の水で只今のところ関東。関西方面の事迄は知りませんが、まア何処とも、人間の心理というものには、差当つて大した変りが無いものと見ますと、……矢張りその様じやないでしょうか？

と言うのは、その道の理窟でよく言われます様に、〃見られないものは猶見度い。無いものは猶欲しい〃のが人情で、今どきは、責絵や写真を何も態々落帖して迄秘藏しなくと



も、いくらでも次々に傑作が現われて、しかも容易に手に入るからでは無いですか。それともう一つ例を挙げますと、戦前の若い人はセックス物等金力があつても、つい恥しいので正面からよう買わず、万引したりする場合も割合多かつた様ですが、それが近頃はどうです……何しろ小学校五、六年生の児童でもいきなり〃ワッ〃と店内へ雪崩込んで来て、うわア——はだか／＼、と大騒ぎでヌード写真なんかの頁を、バラバラめくる位の元気が

あるんですから、もう昔とは全く雲泥の差です。従つて勿論。先に言つた様な意味での万引も尠く、金さえあれば欲しい物はなんでも恥かしがらずに、サツサと買つて行きます。こんな方面にもアブレの進出傾向が目立ちますねえ……どうですこの辺で御判り願えと存じますが……」

そう言い終つて男女田さんは、茶菓子をつ〃ポイツ〃と口の中に投り込んで、源さんの汲んで出したお出花で、咽喉を潤すのでし

た。

「いや——どうも誠に、参考になる話を聴かして頂きまして有難う。お蔭で私も智慧が一つ増えましたて……」

私は、今日もどうやら愉快に弾みそうな、変の字話のこの場の予感に、思わずニツコリ微笑んで、光に火を点けました。

するとこの時迄私と男女田さんとの問答中から、物言い度くてムズ／＼して居たらしい源さんが、今度は突然に大きな声で始めました。

「先生ッ——それに男女田さんも不可ませんよ。だって、責の話ならあつしにさせて貰わなくちやア——ねえ先生、そうでしょう。」

この前だつて、責の話はあつしが始めたんですア。——不可ねえなアどうも、ひとのお株を奪つたりしちやア……まあ落んだ事は仕方がねえやナ。

ところで先生。あつしやア思うんですがねえ。近頃の映画や芝居にやアもつ／＼その責の場面の入つたやつを、どうしてドン／＼作らねえんでしょうかねエ。

あ、言う場面のものが、お客から受けるツてえ事の判らねえその道の人達じやア無えと思うんだが、……矢つ張りあ、言う場面を演る

と、その筋からお叱りが出るんでしょうか？

然し、それにしちやアあの「肉体の門」でえのが演れたんだし、他にも未だストリップで、リンチ場面のある現代物を演つた劇団もあるんだから、そいつが時代物でアノ日本髻の素晴らしい別嬪を、思いつ切り責める凄いやつを演つて見せりやア……どれだけお客が欣んで詰めかけるか知れやしねえんだが……」

源さん、いよ／＼熱を上げ出しました。「オイ／＼源さん——そんな事を言つたつて君のその気持と、世の中の人の気持が皆んなおんなじだとは言えないよ。あんまり大きな事は言わぬ方がい／＼んじゃないかね。——あとで困りやしないかいハツハツハ」

私は笑い乍ら、そう源さんをタシナメしました。

「ナアニ——大丈夫。誰の気持だつて、おんなじでさア。昔から、〃黙っている奴の尻は臭い〃と言いましてね。一寸ひとが變つた事をしたり言つたりすると、やれ彼奴は變態だとか何だとか言いますが、その癖、蔭では手前の方が余つ程變態じみた事を、したり好んだりしている人が多いもんでさア。……」

論より証拠、一寸例を挙げて見ますが……あつしやア一昨年の春。東京から来て演つ

たアノ「肉体の門」を見ましたがね、アレが何故あんなに大衆に持てたかつて言う事を、一体どう言う風に考えてますかね……。

（無論。それやア——ラストシーンのクライマックス。あのボルネオ、マヤのリンチ。だ）と言うんでしょう……どつこいそいつが違ふんでさ。

大体アレはアノ時代としては、可成り大膽な演出である事が、随分喧伝された故もあるし、又實際その裸体リンチの場面に魅力を感じるから、でもあつたでしょう。——なら——こそ同じ肉体の門でも二回目の——続肉体の門の時ニア、一回目に比べて客がウンと減つたんでさア。時勢の流れツてえ事も確に考えられはしますが、あつしに言わせればですよ、矢つ張りあの「続」の方のは、第一回の時の様な凄惨なリンチの場面が無え為に、人氣が落ちた。と、そう思うんですがねえ。……

が、まアそれは一般の人達の事ですが、あの第一回肉体の門の中でも、あつしが一番魅力を感じたのは、先刻も言つた「マヤのリンチ」じやねえんですよ……よござんすか、先生も男女田さんもよく聴いて下さいよ。こゝんところが、あつしの言わんとする話の「ミソ」なんですから……」

源さんは、語調にいよく力を入れて面を紅潮させ、もうとつくに冷えて了つてゐる茶呑茶碗のお茶を、ガブリと一口乱暴に飲んでさて、猶も話を続けます。

「大体あの第一回肉体の門を觀て、ラストシーンのボルネオ、マヤのリンチが一番魅力的で氣に入つたと言う人は、まアあつし等にどうこう言う権利は有りませんが、〃責〃というものを見る變の字考察からゆけば、未だ〃道遠しでしょうね。……」

あつし等にやア、マヤのリンチより寧ろ、〃お町〃のリンチ場の方が余つ程魅力的だつたと思ふんです。

だつて、マヤなんぞア洋装で、スカート一つの裸にやなるが、縛られるのは後手じや無え。両手を上に挙げて、吊されるのも一寸背延びをした恰好で済して了うんだし、あれじアまるで〃縛られた女の魅力〃つてえものはゼロと迄は言えねえが、まア精々二十パーセント位にしか見られねえ。

尤も、世間のお方にこんな事を、どつちがどうと大つぴらに訊けたものでも有りませんが……」

いやもう放つておけば、源さん何処まで喋るやら判りません。

「どうも、おつそろしく源さん雄弁だなア。それじアまるで、主客顛倒の形じやアないか……」

男女田さんが、そう、水をさします。

「なアに……言うだけ言わして貰わなくちやア、あつしは氣が納まらねえ。……それに、あつしは唯、映画や演劇に、物凄いの〃責〃の場面を取り入れたものを演つたら、世間のお客さん達にどれ丈人氣が出て、見度がる人が多いかつて事を、先刻先生が、お前だけだと言わぬばかりに言いなすつたから、あつしは〃世間一般の人の心理も、大した変りは無え〃と言う事を証拠立てる為に、とうとう肉体の門を引つ張り出しあまつたんですア……全くですよ。何か、何時か機会があつたら世間のこの道の同好者に、訊いて見度いもんでさア……何がつて？焦つてえなア。その、お町のリンチと、マヤのリンチと、どつちの場が、魅力的で、氣に入つたか？つて事をでさ。……」

無論。〃裸が一番魅力だ〃なんて言う人じやア話になりませんがね……」

私は堪らなくなりました。

「いや……源さん。もうその位で、君の言わんとする所はよく判つたよ。」

いかにも、源さんの言う通り。実は私も、あの空氣座の肉体の門は見ましたが、リンチの場面では、お町の場の方が、確かに魅力的だつたと思います。

「お町が仲間の礎を破つて、男と無償で遊んで、ネグラに帰つて来る。」

そのお町に〃ヤキ〃を入れんとして、何氣なく装つて歸つて来た彼女に、仲間の数人が飛び掛つて行く。

助けてえ——救してえ——と哀願するのを耳にもかけず、瞬く間に長襦袢一枚に剥取るそれから後手に縛り上げて、柱に繋ぐ。

あの時の劇の進行ぶりが、何とも言えない魅力的だつた。唯、出来ればお町の軀を縛るとき、あんな一重縛りでなく、せめて三重四重に巻き縛つて欲しかった。と、こう言うのだろう。源さんどうだ？」

そう言つて私は、源さんの余り廻りくどい話振りに、よい加減ウンザリして了つたので反対にこちらから疊みかけてやりました。

「うまいッ図星ッ、当りきでさア。」

然し、先生も人が悪いなア。——散々ひとに喋らしておいて。話の〃オチ〃を、かつさうなんぞア……」

然し、源さんはそう言い乍らも内心〃我が

意を得たり〃の嬉しさが隠し切れぬか、ニコ／＼として、やがて気付いて新しくお茶など替えるのでした。

「どうも、大変かわつたお話で愉快です。

私なんぞは、未だ／＼この道の素人も同然ですが、然し伺つてみると、中々意味深いものですねえ。源さんも、これでどうして隅におけぬ、変の字の大家ですよハハハ……」
男女田さんも、いかにも愉快そうでした。
「困るねえどうも、怒りますよ、あつしやア



男女田さん。変な褒め方をしなさんな……
……ところで先生。いつかの晩に、もう少しと言うところで聴き損なつた、あの〃猿轡〃の話。あいつを今日は一つ是非お願い致します。こいつを聴かなくつちやア何と言つても今日の寄合いは意味なしでさア。」
源さん、とう／＼思う壺に私をはめて了つた様です。

私は、素より源さんが、今日はそれを言い出すだろうと、予期していた事なのでしたから、別段あわても致しません。

新しく淹れて呉れた
お出花の香りを、ゆつくりと賞玩し、咽喉を潤しておいて、偕ボツ／＼と始めました。

「私がこの前、猿轡の話を聴かそうと言つたのは、源さんがお内儀さんを縛つて、乳房に縄が掛るかどうかを試してみ、若い女の乳房というものは、柔かいのに弾力があつて、

まるで〃シヨリ〃の様なものだから乳房に掛けた縄目は直きにずれてしまう。

という話だつたので……そこで私は、その〃シヨリ〃の様で思うまゝにならないと言ふ事で、一寸似通つている個処が、人間の顔の内にもう一つあると思う。それが即ち猿轡を嵌める時の鼻つ柱の事なのだ。

そも／＼人間の口に、猿轡を嵌めるといふ事の目的は、言う迄もなく相手をして声を上げしめない為、言い換えれば〃我れこゝにあり〃という事を、加害者以外の第三者に知らしめるのを、不可能ならしめる為なのだ。

それを、もつと具体的に説明すると、被害者をして〃救い〃を求めしめない事を目的とする。

……こう言う事になるのだが……判りますかね……?

ところがだよ、被害者が第三者に対して明かに〃救けてえー〃とか〃誰か来て呉れえー〃とかの言葉になる発声をしなければ、いけないつまり救けて貰えないと言ふのなら、先ず普通猿轡の役目は果せる訳だが……いゝかね、こゝんところの理窟が、中々やゝこしいよ……。

先づ人間の口に猿轡を嵌めたとして、果し

て絶対に声の洩れない様にする事が、出来るか否に就いてが問題なんだ。

え？……私はどう思うか？つて、私は断然、否だと言いだす。何故つて、まア考えても御覧——人間が声を出すのは、その口からか、鼻からか、どちらからでも息が通う事に依つて為される事なのだ。従つて、絶対に微かな声さえ洩れない様に、猿轡を嵌めるといふ事は、同時に息の根を止めるという事になりはしないかね——。

「だつて、映画などで見ても、猿轡を嵌められた女は、もうそれだけで声をあげないし、新聞に出てゐる強盗の記事を読んでも、家人の手足を縛つて猿轡を嵌め、それで声を立てられる事なく、泥棒の目的を達しているではないか——」というかも知れないが、それは被害者が「自分はもう猿轡を嵌められたから声は出せないのだ」という自己観念と、「声を立てたら危害を加えられる」という恐怖心それからもう一つ、「声は出せても、言葉にならぬから（鼻から出す息だけでは「ウ」と「ン」しか発音出来ない）駄目だ。だから黙つていよう——この三つの理由でおとなしく、黙つてゐるのだ。

たとえ「救けて呉れえ——」という言葉の発

音は出来なく共、「我れこゝに在り」だけの事を第三者に感付かせる目的ならば、「ウ」でも「ン」でもよい筈ではないか。——

言葉にならぬ呻声でも、第三者をして「はて、おかしいぞ」の念を起させれば、やがてそれが救いの因になる事を知つていて、被害者がその術を用いたとするならば、この場合猿轡の効果は、さして無かつた事になる。

つまり猿轡というものは、発声を抑制する目的には役立つても、発声を絶対的不可能ならしめるには役立たない。

こういう結論になる訳だね。そこで私の話もまた、大変遠廻りをした様ではあるけれど話を元に戻して、先刻言つたあの乳房の「シコリ」に似た鼻柱の骨ね、あれに就ての話の「オチ」を言つて了おう。

人間の口に猿轡を嵌める時、何かの布切れで、口と鼻を塞ぐ訳だね……。

「アレーッ」と叫んで、救いを求めんとすると、忽ち古手拭の猿轡。もうそれで完全に声を封じられて担がれて行く「そういつた場面がよく映画や小説に出て来るんだが、考えてみれば馬鹿々々しい話だよ……。

古手拭一本で、口と鼻を一緒に縛つたつて、鼻の骨は絶対に上つてゐるんだか

ら自然、口、頬、鼻の間に幾分の空氣の通う隙間が出来るんだ。まア梅毒かなんかで鼻の缺けた顔でない限りはね——

すると、息が洩れる。息が洩れるという事は即ちこれ、何等かの声が出せる、という事になる。鼻の骨というものは、これで中々固いものなんだ。（こゝで私は自分の鼻を押えてみせる）

だから、鼻の骨のある限り、猿轡もそう手つ取り早く嵌めて、真の効を奏する事は難しいのだと私は思う。

どうだね——この辺で鼻と猿轡の關係が、乳房が「シコリ」の様で縛り難いという事、及び、縛つても直ぐにずれたり、緩んだりする事と、話がよく似てゐると思わぬかね——更にひつこい様だが、最後にもう一言、言わして貰うなう、私ならどんなに嚴重な猿轡を嵌められても、息の根が止まらぬ限り、何等かの声は出して見せる、という事なのだ——私は、こゝ迄を一気に語り終つて、激しい咽喉の渴を覚えました。

「ウム……なアる程ねえ。いやさすがに先生の話は、こちとら達の様なとは、又一段と趣の変つたところがありますア。あつしは生れてこのかた、先生のいま話された様な事

ア、まだたつた一度も、聴いた事も読んだ事もなくつたんでさア。いや、全くねえ……」

源さんは、宛ら感に堪えぬという様に、――ホツと溜息をつくのでした。

「まったく、まことに何えほ何う程、奇々妙々な、それで少しも淫猥な感じを起させずにしても、セックスの香り、ほのかに漂う様な気持です。」

私等も貴方がたの様に、今少しこの道の機微に、通じる事が出来ていたら、或いは現在の様に嬢ア関白で追いたおされる様な事は、無かつたかも知れぬ、とも思われますが……」

男女田さんもまた、そう言つて何故となく溜息をつきます。

丁度この時でした。階下から

「男女田さん、奥さんですよ……」と言う階下の老主人の声でした。

「そーら、来よつた。今も話した嬢関白ですよ。では、私はこれで失礼させて頂きます。いずれました、……いえ、今日は日曜で、店の方が大方忙しいんでしょう……では……」

男女田さんは、そくさと帰つて行きました

た。

すると源さんが、あたかもそれを待つていたかの様に言いました。

「先生ツ、一杯やりましょう。あつしや早くから気は付いていたんだが、何しろあの男女田さんがからきし下戸ときているんで、それで遠慮してたんでさ。」

そう言い乍ら、早くも彼は立上ります。

「駄目々々。私はまだ……病院暮しなのを、知つてる筈じゃないか。とても、チュウーなんてべら棒なもの、飲めやしないよ……」

私は、源さんがてつきり焼酎を出すのだからと思つて、そう断りました。

「ヘッ……そこに抜かりがあるもんか、つてんだ。先生ツこれならいゝんでしょ……」

そう言つて、彼が戸棚の中から取出してきたもの、それは紛れもなく、純良××葡萄酒でした。私はこの源さんの、がさつな癖にどこかしんみりとした人情味に「ホロリ」としてうたれました。

最早 言うべき必要はないでしょう。

彼が注ぎ私が注ぎ（といつても小さなグラ

スカップで）いつか二人はホンノリと、身内が温つてきた様です。そして、それから彼と私の腹臓のない、うち解けた会話が、しばし弾むのでした。

「それにしても源さん。お内儀さんは未だ帰つて来ないのかい……」

「なアに、もう追つけ帰りませアね。何せ一年一回しかやらさねえ里帰りなんでさ……」

大方おふくろの、萎びた「オツバイ」でも飲み過ぎていやがるんでしよう……」

「うちへ帰ると源さんが、縛つたり吸いついたりして離さないからねえ……」

「じよ冗談じゃありませんよへ、へ、」

「ハッハ、」

二人は、お互いに顔見合せて大笑するのでした。

(第二話完)

(お詫び)

新年号で予告しました続・錯乱の倫理及び地獄図絵の二作は都合に依つて発表中止のやむなきに至りました。御期待下さいました方へ謹んでお詫び申し上げます。(編集部)

比 丘 尼 開 眼

び く に かい げん

久 松 俊 介



奈良の大仏開眼の千二百年祭が開かれたのは去年の十月であつた。大仏奉賛会の行事が数多く大仏殿の前庭で行われた。真言宗の法堂がその五日目に取り行われた。

その日から、生駒郡伏見の里の奥深い山蔭の尼寺に住んでいた俗名お菊の姿が忽然と消えた。尼寺と云つても庵に近く尼僧一人がやつと住み得る建物である。その尼寺は真言宗に属していた。

お菊はその日大仏殿へ行くといつて尼寺を出た。そのことは西大寺の駅前の果物屋で少しばかりの柿を買つた時に話していたとその果物屋の主人は云っている。

お菊の住んでいた尼寺は、近鉄沿線あやめ池と西大寺の中間にある精神病院の裏山を六七丁上つた崖下の断層の地に建っている。その周囲四五丁には一軒の家もなく、全くの一軒家である。いつの頃に建つたかは不明であるが、庵主はもう幾代となく變つて、お菊が

この尼寺に住み始めたのは去年の春であつた。前庵主の姪に当ると云われ、前庵主が病床に就いた時からこの尼寺に來た。年は二十四才と町役場の台帳に記載されてある。本籍は吉野郡下市町とある。

お菊の失踪を人はとりどりに噂をした。あのような淋しい一軒家の尼寺では若いお菊さんは住むに堪え切れなくなつて逃げ出したのだ。無理もない話だ。

又、別の噂が飛んだ。お菊さんには好きな男があつたんだ。その男と駆け落ちをしたに違いない。その男はこの夏からあやめ池の遊園地に流れ込んで來た「左巻の龍」と云う遊び人だ。駆け落ちしたのはその男だ。と、真らしく話をした人もあつた。

又、別の噂が飛んだ。お菊さんは若くて美しい。一人住いの尼寺へ村の若衆が毎夜のように夜這いに行く。氣の弱いお菊さんはそれに堪えられなく、人知れず姿を消したのだ。噂は噂として流れたのみでその真相を知る者は誰一人としてなかつた。

お菊は下市の割箸職人佐藤与吉の一人娘として生れた。

下市の町は鮎と彌助ずしと割箸の生産地、それと吉野川下りと大峰山の登り口として知

られている。町は駅から山へ一本の道筋である。その両側には山又山である。鮎釣りの客や吉野川下りの船客や、大峰山の登山者が目当てであろうか、この小さな町に小料理屋がずい分と多い。

お菊は父の与吉に連れられて小さい時によくそれらの小料理屋に行つた。

「うちのオカンはつれない奴や。菊、大橋まで行こう」

駅近くに大橋がかかっている。その橋ぎわに「よしのや」という小料理屋がある。与吉が飲むのはその「よしのや」である。そこには小文字と云う大阪から流れてきた女がいた。与吉の相手はその女であつた。与吉と小文字は幾度か枕を一つにした。与吉の女房のきよはそれを知つていた。与吉は夜仕事を終えて家を出る口実にいつもお菊を連れて町遊びに出る風を装つた。お菊が七つの春、いつものように父与吉に連れられて「よしのや」に行つた。親子丼を喰べさへれた。風遊び疲れで父が酒を飲んでいる間に一人で暗い部屋に寝てしまった。ふと眼を覚ますと隣の部屋で声がする。

「おい、………よし、おれも櫟つてやる………こう、こうするんや」

「こう？　こう？　こうでつしやる。いや、くすぐりたい！　いや！」

父と小文字の声であつた。

その声はみだらな声としてお菊の耳に響いてきた。お菊はもう父与吉と一緒に「よしのや」へ来るのが嫌になつた。

又こんなこともあつた。

与吉と母のきよが朝から激しく喧嘩をした。父はその日箸割りの仕事を捨ててぶいの家を出てしまった。母のきよも風過ぎから裏の清吉さんの家で酒を飲んでゐた。夕方お菊はそつと清吉さんの表口に立つて「オカン」と呼ぼうとしたが声が咽喉から出てこなかつた。すぐそこ家へ帰つて釜に残つていた茶が、いを一人ですすつて寢床に這入つた。

「きよ、こい！　抱いちやろう！」

その声でお菊は眼が覚めたが声を立てなかつた。

父と母はお菊の横に寢床を敷くと二人ともさつと床の中にもぐり込んだ。

「お前のこわい顔を見ると、おれ、堪えられん」

「よしのやに行くとええ」

「阿呆！　わいの女はお前一人や……」

「いや、そんなこと……」

「ええやないか……」

その後は声がしなかつた。

七つの年のお菊には、父が「よしのや」で又母と父が何を取り交しているかが解ろう筈はなかつたが、不快なみだらな思いがした。

お菊の隣の家に大工の龍つちやんがいた。

その父も与吉と同じ割箸を職としていたが、龍つちやんは大阪で大工の年期奉公を終えて十八の時に下市へ戻つて来た。吉野、上市などへ毎日のように出稼ぎに行つてゐた。

終戦の翌年の夏、今まで止められていた盆踊りが河原で復活することになつて、一週間も前から毎晩のように稽古が続けられた。十八になつたお菊もその稽古に加わつた。夜更けの一時頃まで稽古が続けられた。

「お菊ちゃん、手をかしてみ、こうして踊るんや」

「こう？　教えてくれる……」

龍つちやんはお菊の手を取つて踊つた。

稽古が終ると龍つちやんとお菊は肩をならべて家に戻つた。

盆踊りの当夜が来た。……鈴木主水というさむらいは……音頭の声と太鼓の音が河原に響き渡つてゐた。三重に輪を組んだ老若男女の群は「コリヤサ、アリヤサ」と音頭に合せ

て踊つた。踊りがすんだのは夜半の二時も過ぎていた。人々は潮の引くように散つて行つた。

お菊は龍つちやんに誘われるままに吉野川の堤を川上の方へ上つて行つた。吉野川の流は早い。ゴウゴウと流れる音が今夜は何故かお菊の耳に甘く聞えてきた。月は高く空に浮いている。お菊は引かれるように龍つちやんの後について歩いた。と、茂みの中でガサガサという音がした。お菊はハット立ち止つた。男も女も顔を見られまいと面を地に伏せていた。お菊は見てもならないものを見たような気がした。その場を走り抜けると無意識で龍つちやんの身体にしがみついた。龍つちやんはお菊の肩をそつと抱いた。そのまま二人は静かに歩いた。

「あれ、見た……」

「知らん……」

「ええことしてゐるんやで、きつと」

「知らん……」

「お菊ちゃん！」

龍つちやんの声は上ずつていた。

お菊は、「よしのや」で父と小文字と云う女が交していた言葉がぼーと頭に浮かんできた。

「お菊ちゃん！」龍つちやんはお菊の身体を抱き上げると茂みの中へ這入つて行つた。その夜お菊は始めて男を知つたのである。

それからはお菊と龍つちやんは毎夜人目を忍んで逢つた。二人の仲が人の噂に上らぬ筈はない。

「お菊ちゃん、気をつけろよ。龍兄には大阪にも上市にも吉野にも女があるというこつちや」そつとこつち注意する人もあつた。だが、お菊はその言葉を信じなかつた。あれほど自分を心から愛してくれている龍つちやんに、他に女の人があろうなどと云うことはとても信じられなかつた。しかし、そのことが事実であることがやがて解つた。その年の秋、上市の女と云うのが龍つちやんの家に尋ねて来た。龍つちやんはその日は吉野口へ大工仕事に出かけて家には居なかつた。その女は龍つちやんの父親に、自分と龍つちやんとはずつと以前から夫婦約束がしてある。自分は今、上市の小料理屋で前借をして年期奉公を勤めている。来年の春にはその年期もあく。その上で夫婦になると云う約束を固く結んであると云うのであつた。父親ははたと困つた。龍とお菊の仲を知らぬではない。「よく来てくれたが龍は吉野口まで仕事に行つてゐる。三

四日は戻らん。まア上つて一休みして……」と云うのを「いいえ、一度お尋ねすればこれからは来安い。今日はこれで戻ります」と、その女はすぐ帰つて行つた。

総てを裏切られたお菊は何に頼る術もなく苦しみ苦しんだ。その結果求めて行つたのが御仏の世界であつた。

生駒郡伏見の里に住む叔母を尋ね、その叔母に連れられて行つたのが奈良市の真言宗の某寺であつた。

老僧が不在と云うので、今年仏教大学を出た息子の若僧がお菊に会つてくれた。

「仏門に帰依するには心に固い誓いがなくては……若い女の身です。心を乱さぬように。と云つて、御仏に仕える身であるからとて、己の身体を金しぼりにする必要はありません……」

若僧は心優しくお菊に話してくれた。顔形が美しいばかりでなく、その心の美しさがお菊に泌々と伝わつてきた。お菊の仏門の生活はそれから始つた。こうしてお菊は叔母の尼僧の死によつて伏見の里に移り住むようになったのである。お菊がその尼寺に来た頃、里人は「今度来た尼さんはほんまにきれいや。若いのに一人であんな淋しい尼寺に住ませて

おくのは可哀そうや」「お前一つ話相手に行つてあげては」「阿呆云え」「気がないでもなからうが」などと他愛もなく話し合つていた。

春三月とは云え山肌はまだ冷く、夜などは冷々とする。人里離れた尼寺の附近では梟の声も聞える。

夜更け、お菊はただ一人で小さくなつた炭火に手をかざして静かに眼を閉じていると、過ぎ去つた生活の数々が頭に浮んでくる。

(過去を思うまい)これが教えの一つであつた。(ただ未来来世を念じて)これも教えの一つであつた。だが、若いお菊にどうして未来のみを念じておられよう。仏門に這入つて以来一日として胸から消え去らないのは、始めて教えを解いて下されたあの若い師の坊の姿であつた。身の焼きこがれる思いで過してきたこの幾歳いくさせ。だが、そのことは一言も口には出せぬことであつた。龍のために一度傷ついたこの身体で、師の坊を恋しいと思うことさえ罪深いことのように思われた。邪念を打消すには余りにも苦しい若さであつたが、如何に思いをつのらしたとてどうにもならぬことであつた。ただただ邪念を打消すばかりだと望え乍ら胸の高鳴りを鎮めねばならなかつ



た。

「今晚は、今晚は……もうお寝みでございませうか」

表で男の声がした。軽く戸を叩く音が混つている。

若僧への思いはふつと消えた。

「はい。どなた？ どなたです」静かに問い

返した。

「里いもを掘りましたので遅々ですが少しばかり持つて来ました」

里人がいつも心にかけて、畑に出来たものを届けてくれると云うことは死んだ叔母からも聞いていた。

「それはそれはご親切に……」

お菊は座を立つて表戸を開けた。さつぱりした単物を着た若い男が立つていた。手には縄をかけた籠を持つている。

「喰べていただくと思ひまして……」

「まあ上つて一服して行つて下さい」

若い男は遠慮なく火鉢の横に坐つた。お菊は茶を注いで出した。若い男は別にこれと云う話もせずしばらくして帰つて行つた。

その翌晩も又その翌晩も別の若い男が畑に出来たあれこれを持つてお菊を尋ねてきた。

お菊は一人居の淋しさに心打ちとけてその男らと話合つた。毎晩のように四五人の男が入れ替り立ち替り一人ずつ尋ねて来た。別に長居をすることもなく、軽い世間話をして帰つて行つた。お菊はもう今までのように早くから表戸を締めず、今晚も誰かが来てくれるであらうと心待ちに待つようになつた。

ある晩遅く、お菊がこの尼寺に居ることや

どうして知つたのか、ひよつくりと龍が尋ねて来た。

「お菊ちゃん、すまなかつた、許してくれ」

龍はお菊と顔を合すなり詫を云つた。

（今更訛を云つてどうなる……）と、お菊は心の中で思つたがその色は顔に出さなかつた。

「あれ以来おれも下市に居られなくなつて方々を渡り歩いてゐた。お菊ちゃんがここに居ると云うことを聞いたので一言詫を云いたいと思つて尋ねて来た……」

事実、お菊が下市を出た後、龍は女たらしであると云うことが隣近所一帯にひろがつたので、面恥ずかしくなり、手に職があるのを幸い、ぶいと下市を飛び出してしまつた。だが、今の龍は以前の龍ではなかつた。大工職は手につかず、全く遊び人の仲間入りをしてゐた。しかし、そんなことは龍の口から一言も出なかつた。

「今はどこに居られますの？」

「大阪、今宮で親方について働いている」

龍は出まかせを云つた。

「そう。まだお一人？」お菊はそう云つた後でハツトした。聞かなくてもよいことを聞いてしまつたと思つた。

「お菊ちゃんにすまんと思つて心が一ぱいで、どうしても嫁をとる氣になれん」

それから龍はくどくどとあれ以来の身の上話をした。どこまでが本当であるか信じられないがお菊は黙つて聞いてゐた。時間は知らぬ間に過ぎて行つた。龍はふと氣づいたように腕時計を見た。

「おや、もう一時が過ぎた」

お菊ははつとした。これから駅へ行つても大阪行きは勿論、奈良行きの電車もない。

「お菊ちゃん、すまんが今夜泊めて貰えんやろか。明日の朝早よう誰の眼にもつかんようにそつと帰るよつて……」

この夜更けに追い返すことも出来ない。

（この人一人寝かしてわたしは起きていよう訛に來た身で変なこともすまい）お菊は心の中でそう思つた。

「どうぞ。余分の蒲団がありませんで、私の蒲団でお一人寝んで下さい」

お菊は床を敷いた。だがとうとうその夜、お菊は衣の紐を解いて龍に抱かれてしまつた。

龍は満足氣にその翌朝早く尼寺を出て行つた。その姿を一人の若者が見た。お菊のころへ畑のものを持つて来る若者の中の一人で

あつた。

その日一日中お菊は頭が重かつた。尼僧とて若いお菊である。ここ幾年かの禁慾の世界が解けて、身体はぐつたりしてゐた。里人の手前もあり、昼日中から横にもなれず、やつと陽が落ちると、寝る氣ではなかつたが床を敷いて横になつた。夜の更けて行くのも氣ずかずそのまま寝込んでしまつた。ふと眼を覚ますと自分の横に誰かが寝てゐる。（あれッ！）起き上ろうとすると強い力で抱きしめられた。

「昨夜はお楽しみでしたなア……わいにかて一べん位……」

その声には聞き覚えがあつた。

それから毎夜のように若い男が入れ替り立ち替りお菊の床の中を訪れた。

人が替ればその色情の模様も替る。お菊はついにそのよろこびに浸つてしまつた。

春が過ぎ夏が來た。若い男の出入りは絶えなかつた。

ある夜、龍が又尋ねて來た。

「おれ、あやめ池に住むようになった。近くやよつてこれからちよくちよく来るで。なアお菊さん、こんな尼寺一そうのこと飛び出したらどうや。おれ、なんぼでも世話さして貰

う

嘘とも真とも知れぬ言葉であつた。龍はその夜も泊つて翌朝早く帰つて行つた。

いつしか秋が来た。

龍と里の若い男たちとは不思議にかち合はずにお菊を訪れていた。荒淫のためか、それとも仏門に在る身の、この所行を恥じてか、

お菊の身体は次第に衰えてきた。この春、ここに移り住んでからの夜々のことを考えるお菊は空恐ろしくなつてきた。正しく売春婦にひとしいわが身の行い。と云つて、今となつてはこの情念をどうして断ち切れよう。身の衰えを感じ乍らも男の肌なしでは一夜も過せぬお菊であつた。

ある日龍は凄味を帯びた顔つきでお菊の前に現われた。

「おい、お菊！ お前はおれの顔に泥を塗つたな。何もかも知つてゐるぞ！ きれいな面をしやがつてもお前の身体はもう腐り切つてゐない！ もうお前なんか未練なんかあるもんか！ おれはあの若造たちを一人一人斬つた上、お前の毒婦振りをこの土地にふれ歩いてやるぞ！ お前のような奴は明日にでもくたばつてしまえ！」

龍はあらん限りの毒舌を吐いて帰つて行つ

た。

（もしこのことが里人に知れたら……男たちの間にもしものことがあつたら……）お菊は氣も狂わんばかりに泣いた。その時、ふと頭に浮んできたのは、あの若い師の坊の美しい姿であつた。（あッ！ どうぞお許し下さいませ！）

大仏開眼千二百年祭の大仏奉賛会の行事に師の坊が加わると云うことをお菊が知つたのはそれから数日後であつた。

お菊は意を決した。

真言宗の行事の日が来た。秋晴れの奈良は行楽の人々で賑つた。お菊は人目を避けるため、興福寺の細道から五重の塔のわき道を抜けて博物館の横手に出た。そこから大仏殿へ急いだ。南大門をくぐつた時、三丈余の仁王が左右からじつと自分を見下している身に鬼氣を感じて逃げるように走つた。

行事は既に始まつていた。金色の鶏尾を頂いた大屋根の大仏殿が秋空にくつきりと浮いている。その前に飾られた大祭壇の上には緋の衣の老僧を中心に十数人の御坊の姿が見えた。周囲は人垣で埋つてゐる。お菊は人垣の隙間から尋ねる師の坊の姿を求めた。だがその祭壇の上には見当らない。どこかにおられ

る筈、ただ一目、陰ながらお目にかかりお詫とお別れの言葉を申述べたい。お菊は尙も四辺に氣を配つた。（おられた！ おられた！）祭壇の角隅に置かれた大太鼓の傍で、じつと立つたまま念じる如く眼を地上に垂れておられる師の坊の氣高いお姿。（お許し下さいませ。わたくしは不倫の女となりました。明白にも、いいえ、たつた今地獄に落ちて行きます。何卒お許し下さいませ。師の御坊さま！）お菊は心の中でそう叫んだ。（師の御坊さまは柿がお好きとのこと、心ばかり持参致しました。ただ一つ、わたくしもいただいて参ります）お菊は持参した柿をそつと人目のつかぬ所に置き、その一つを自分のふところへ深くおさめた。

お菊の姿はすぐ大仏殿から消え去つた。

龍と若者たちの間には何の争いごとも起らず、それから二三日して龍の姿もあやめ池から消えて行つた。

去年の秋のこの出来ごとがまだ里人の噂話から消え切つていない。

お菊はどこかで若い命を絶つたのであろうか？

×

×

×

燐^{りん}

光^{こう}

久^く留^る木^き

榮^{さかえ}

夕の白々しさは

私に自虐的な

喜びを與える



大広間から見える景色は美しかった。特に春雨に煙っている姿は何ともいえないぬ情感があつた。川はゆるやかに流れていた。水ぬるむころの清澄な流れも春雨に打たれては人情にぬれそぼつ処女の裸形のような感じがあつた。赤い鉄の錆のような色合の鉄橋もそんな目には妙になまめいて深い故郷の人恋しい思い出に連るようだった。芳子はこの景色をみていると自分がその水にひきこまれるようなわびしい自虐感が湧いてきた。「誰かきてこんな私を殺して呉れたらよいのに」



芳子はそのとハンケチの端をかんだ。そのハンケチに赤いルージュの跡がにじんできた。朝起きて夜寝るまで——いつも誰か違った人が自分の横にいる。毛深い人。柔しい人。暴つぽい人、娘みたいなお人、種々の男が一夜の夫としてかすずいて行く。変態的の人おいた。柔しい慈父のような人もいた。胸の下に病氣をもつた悩める人も、愚かな悲しむべき女性の弱い心理を巧みに利用する男も、また妖しいまでに恍惚とした境に誘く不思議なテクニクをもつた人もいた。然しいつしかそんな男の穿鑿もあきあきするほど平凡なしがたない娼婦になつていた暗い暗い灰色の壁、押せば押すだけ退き、ひけばひくだけついてくる、いつでも人間の意志をふみにじり、生きて行く力を喪失させようとする壁、その壁があるだけだった。

美しい川の景色とは似ても似つかぬ低い流れ、暗い水底には踏み
にじられた良心の残骸が幾つも幾つも重なっていた。芳子はその良
心の残骸をも見透そうとして川の面をじつとみつめた。激しい、流
れでもない。かといつて峻烈な自分のきびしさをたたえていないで
もない……。柔和な柔しい微笑、楼主のように金のことを抜きにし
て考えれば或いはこの川も本当になごやかな春の景色になじむもの
ではあるまいか。芳子はじつと考えこんだ。

芳子がM市のT楼につとめてもう一年になる。小さい時から人口
の多い国の常として、いつ生まれたとも知らず人から人手に渡り次
第に成長した彼女には淡いロマンスも、語るべき恋人もなかった。
たゞむりやりに貞操を奪った伯父と称する男や、散々虐めさいなん
だ伯母と名のつく悪人にくらべれば……まあここは住みよい世界で
あった。ありきたりの道徳とか。ありきたりの感慨とかそういうも
のは彼女に通じなかった。たゞ売れつ妓というので上玉扱いにされ
ざるお偉方に抱かれ、また翌日は別のオエラ方に抱かれる。その意
味がわかるようでもあり、わからぬようでもあった。

彼女は楼一番の売れつ妓になると大広間の横の川にのぞんだ。鏡
の間を楼主にいつて自分専用のものでしてもらった。破格な取扱
いであつたが金に目のくらんだ楼主は、自分の要求する客は必ずと
るという条件で彼女のこの願いを入れた。

新しい部屋に移ると、わずかばかりの身廻り品をきちんと整頓し
お湯にはいると、それからうつすら薄化粧し、窓際の欄干に腰かけ
て客待つ間、いつもの川の水に魅入つた。その川の水は大広間から
みた時とくらべどこかゆとりのあるようでもあり、それだけ又孤独
の憂いをたゞえているようでもあった。わずかばかりの時間一日の

うちで客の来る前の一刻……この一刻が彼女たちに許された自由の
時間なのだ。芳子は二十三才という熟れ切つた肉体の両の乳房を着
物の上から両手で押え、なおもしつように身体の内部からわきあが
つてくる虚無感、淋しき、孤愁——そういうものをおさえつけよう
とした。

さきほど仲居のお杉姉さんが、

「ちよいと芳ちゃん、今夜はお若いお役人よお父さんがね腕により
をかけて可愛がつてやつてといつてたわ。ほんとうに御苦労さん。
なんでもね。お父さんの息子。ほらこの前これやつてサツにあげら
れたでしょ。あの時のデカさんよ。内々ですましてくれたのは芳ち
やんにお思召があつたからなの、だつて。イケスカナイ奴それにと
つても変態ですつて」

「で、お姉さん、その男ぶつたりなんかするのかしら……。変態つ
て……」

「そりやね、私んどこに泊るのはほんとに始めてだから誰も見た女
はないの。だがね大松楼のお留さんがいつた。その人は女を泣かせ
るコツを心得ていて泣き声が聞えぬうちは満足しないつて」

「まあ、姉さんそれ、本当？」

「お馬鹿さんね、芳ちゃんたら。留さんや私が嘘をいうと思うの
でも芳ちゃん、留さんの事を信ずるならいい加減に泣声出しちやい
な、でないといひどい目にあうよ、でなきや何さそんな奴すぐヘナ
ナにしてやるのよ。そういう手もあるわ」

「まあ厭な姉さん——」

「でも芳ちゃん——本当にいけすかない奴だわ」

「本当に厭やわ」

お松姉さんの帰ったあと芳子はボンヤリしてしばらく川に見入っていた。もしこの川に自分の総べての未来が写してあるとするなら——今しも降りかかった火の粉を消すすべもないことがはつきり画きつくされているだろう。その火の粉をあついで思う気はあつても求めてさけようとする意志は芳子にはなかつた。「変態」といつた言葉が別に恐怖を与えるというのではない、縛られ、殴られて弄ばれることがあつても、それは仕事であつていわゆる遊びではない。そんな遊女哲学のわからぬ芳子でもなかつた。

然しそれより気になることが二つあつた。その一つは「変態」といつたお松姉さんの顔が燐火のように輝いたこと、それと、それは或は誰にせよ、どんな好感のもてる好男子にせよ、或はお偉方にせよ……どうも今晚の客の遊ぶ動機というものが不純のものである、ようなこと、この二つが芳子の気になつた。

このように不純な心得の人にはえてして性病にかかつた人が多い芳子は性病にかかることを何よりも恐れた。怪しいと思つた客の後には必ず病院にかけこんだが——今晚の客は病氣をもつていて——という感情だけがその夜の商売心理を減茶減茶に押しつぶしてしまふ。あの地獄の責苦にも似た無形の精神的拷問。彼女は性病をそのような意味で恐怖した。

従つて芳子は今夜の客を断れば良かったと思つた。だがそれも後の祭りである。

客待つ間の一時間、夕方の景色を、あの川の奇妙な流れを、芳子は肌寒い思いで眺めていた。「若い人」とお松さんは言つた。売ッ妓になつて年老いたお偉方ばかりでどこか物足りない昨今……或はエゲツない男であればよいという内心の期待もないではない。だが

妖しい娼婦の心理。無数の青い燐光をともした提灯が音もなく川底を流れ歩いて行くようだ芳子は素裸のまま後手にくぐられ鵜居に吊られ泣きはらした目でじつとそれを魅入つている自分を想像した。金に縛られている自分——いつそこのようなめにあつたら、どこか自分の胸の中にこりかたまつた不安のしこりもとけようもの。一日一分。一日一糶だけ指先から少しずつ脂を抜きとられて行く生活、いつそ一思いに息の根をとめてもらつた方がいいのかもしれない。薄暮の美しさ——白々しい感情——普通の人間にはそれ程白々しい無味乾燥な夕暮と思えなくても芳子たちにはその白々しいという形容詞の方がよつぽど情感的であつた。灼熱の恋よりも白熱の灯。ぐれんの炎よりも青白い燐光、そういった表現の方がしつくりしたうすら紅い紅色の光を部屋の中にともしこともできる。毎日毎夜それにみなれている女と、外から始めてきた男と、いつもそれを眺め暮している人達とでは色の感覚にたいする表現にむしろ逆なものがあつた。芳子はその逆の光の中でのたうつていた。いや少くともそのうのたちち回らされている自分を想像した。

一昔前だつた。性病衛生講座があつて、始めて廓以外の人と……少くとも自分たちを買う目的で近接する人たちと異つた種類の人達をみた。その中に一きわ若い青年がおり激しい情熱的な言葉が幾つものその男の口から飛び出すのを聞いた。星のように輝く目と澄んだ川の流れのような視線の持主。いわば芳子たちにはどうしても理解の行かぬような種類の輝きだつたが、その若い医学者の顔がふと浮んできた。するとかの想像の今夜の客——みにくい顔の青年がいつしかその若い医師の姿にかわり、彼女を責めさいなむ姿を見に集つてくる人々の顔がみえた。

温和な物欲しそうな楼主の顔、何だか芳子の美貌にしつとめいた感情をもったお松姉さん、どうにも鼻持ちならぬ強つく婆の楼主夫人。白豚のような娼婦お雪、お政、お知恵、等、等、等。彼女、等が鏡の間々に押寄せむさんにも自由を全く失つて鵜居から吊された自分にむかつて一せいに嘲笑をあげていようだ。——芳子はそんな図を思い浮べて思わず肌寒い思いに駆られた。

たとえ全員が見に来なくても、名うての変態性欲者が自分をなぶるとなると、楼主や、お松姉さん位はきつとそんなあられもない姿を見にくるだろう。

羽をむしられ逆吊りにされたにわとりみたいなあわれな恥かしい姿。

恥かしい姿には馴れている娼婦ながら、何だか背筋を冷めたい虫が走るように思われた。そんな芳子。そんな愚かな芳子を笑うかに春風がたもとを駆けぬける。

川の水は物もいわずに流れていた。その川の水のように重たい。黒い。時には白く光った流れの中に、自分自身を殺して行かねばならぬ運命——

彼女はつと立上つて手鏡をもつてきた。淡い夕暮の光を照らし、その鏡がキラリと反射した、その手鏡に美しい自分の顔形がうつつた。スナナリと細くて長い額、眉、黒くて澄んだ瞳、どこか純情でどこかふてぶてしく。どこか運命の不思議な糸、その糸であやつられていような視線、それにふつくと肉付きのよくなつた頬。すらりとして生き生きとした白い鼻。みずみずしさをたたえ、躍動するような生きた唇、最近のあまりの美しさに芳子は自分でもうつとりするくらいだった。

もし出来ることならば自分のように美しい人に恋したい。彼女は妖しい胸の時めきを覚えた。

昔ナーシヤスというギリシヤの美少年は、虹の橋の上からエーゲ海をのぞきみて海水に映つた己れのあまりの美しさに自殺してたとか。彼女はナーシヤスの君を羨む気にはなれなかつたが彼は幸福だと思つた。

自分たちに許される自由というものがあつたら、涯しもなく美しい想像をすること。……それだけ、それ故にあまりにも美しく成熟した自分自身に心酔することもまた自虐の愉悦というだけでなく、

◎次号(三月号)予告◎

三月号一月二十日発売

らぶ・すれいぶ(第3回) 鬼山絢策

淫 みだらび 火(第3回) 松井籟子

回を追うて愈々好調、次号ではクライマックスの興味溢れる場面が息もつがせず大展開します。

鉄格子の中に 小坂多美枝

—女囚私刑体験記— (其の二)

受難記 岡田咲子

(或る女の告白より)

喜多玲子・画 柱に縛られた女の各態

妖異聚楽第 戸崎平馬

心中雑考 七条美樹子

他誌の絶対追隨を許さぬ本誌独特の異色ある内容
と迫力ある小説真実溢れる告白に御期待下さい。

人間としてこの世界にのみ許された大きな自由、大きな喜びではないのか。彼女は自分自身を何とか激しくせめてみたいような希望にかられていた、この希望が川の水をみているうちに波のうねりのように増加し、ふとわきおこつた渦の中心にひきずられるように彼女を吸いよせた。

みにくい顔の青年、松子姉さん。楼主。それらにいいめられる自分。その自虐的な空想がぐるぐると小さな頭の中で回転した。抜け出したい。抜け出したい。とは思ふ。しかし人間の世の中に出てもたいしてかわりはあるまい。何だか激しいいきどおりがその渦の中からわいてきたそのいきどおりを殺すためにもいじめられねばならぬ。麻縄で身動きならぬように縛られ、鞭打たれ、足蹴にされるその痛み、傷ついた胸にも自虐の悦楽の痕がそして口にはまたうめき声すらたてられぬ猿轡がはめられている。……そういう姿でそういう姿で……。

彼女はふと……真実純白な両腕にくいこんむ縄目を感じ思わず身震いした。やがてその空想もさつた。激しい後悔をのこしてしづかに夜のとばりがやつてくる。一日一日。それは後悔の連続だった。その後悔の連続ではあつたが——未知のものにたいする激しい渴望があつた。

「今夜のお客はどんなにかしら」

お松姉さんの声。そして彼女の噂に描いた醜い若い男の顔が瞬間に浮んだ。きつとその男は、あのアラビヤナイトの魔術ジバルのように口が耳までさけているのかしら。或は又インドの魔術師のように両の目に紫の焰をもやしているのかしら。彼女はとんでもない想像をした。或は出歯亀のような男かしら……何か不吉な予感。

(読者通信)

表紙の色彩、図案、構成のすばらしさには唯々感嘆の限りです。益々みがきのかゝる事を期待します。十二月号の口絵は傑作だと信じます。新年号のは卒直に云つて少し落ちるのではないでしょうか？口絵写真についてですが、これらの写真が真に幻想を呼び情感を引き出すには同じ画面に女達を縛ることに喜びを感じているらしい男亦是女を写し出す必要があるのではないのでしょうか、同じ意味で新年号の玲子女史の「吊り下げられる女」にもこれらの背景がいるのではないのでしょうか、十二月号の「フランス貴婦人の変態性生活」の口絵があれ程迄の迫力を持つているのはそれだけの画面が能動受身の二つ極を間違いないく描き出しているからだと思ひます。内容全般について編集

部は「一部の要望に応えすぎた嫌いあり」と妥協声明を發しておられるが、これがどの程度の妥協を意味するのか判りませんが、飽くまで貴誌のユニークさが失われないことを祈ります。貴誌が毎月何部売れるか知りませんが何の意見も述べないだらう大多数の読者は貴誌の今迄の編集方針に十分な賛意を表しているのに違ひないのですから。しかし何れにしても読者の声を尊重してゆく貴編集部未来には洋々なるものがあることを確信しています。(T・O生)

【お答え】

真面目な御意見として有難くお受け致します。私達は一部の要望や或る種の権力に媚びて編集方針を変えようと声明したのであります。編集者の良識を御信頼の上御支持下さい。

(編集部一同)

われた。静かに後ろの唐紙があいた。——背筋をサツとよぎる冷たい空氣の渦。

「芳ちゃん、お客様がいらつしやつたわ」

柔しい、だがゾツとするあのお松姉さんの声だ。芳子は胸ふさが
る思いで川の水をみた。出歯亀か、ジバールか、魔術師か、彼女は
息をのんだが……そして目をつむつてふりむいた。——
目をひらく。アアツ——

お客にいわせればこんな芳子の表情が何ともいえず純情で美しい
そうである。客は微笑をたたえていた。恐らく満足に似た微笑であ
つたろう。芳子はそういう客の顔をまじまじとみた。それは余りに
も想像を絶した姿だった。

恐らく二つの不純な動機から悪い人と想像していた彼女……お客
はその想像を超えた柔しさをたたえていた。静かな嘘のような平和
な微笑をたたえ、満面に柔和な開花したばかりの桜のような恥らい
をすらみせていた。——それはジバールとか、印度の魔術師とは思
いもよらぬ、例のナーシヤスみたいな美しい青年だった。それを見
た途端、芳子は思わず足がスクムのを感じた。

所詮女とは愚かな動物だ。頬が火のようにほてり……まだ自分の
中にもこんな感情が失われずに残っていたのかと見えるような恥辱
がバツと顔を走った。

「まあ……なんて、なんて意地悪なお松姉さん。きつとお松姉さん
の悪戯なんだわ」

芳子は寂しく心の中でつぶやいた。そしていつかふしめがちな
り、その刑事とかいう男のために愚かな微笑を送っていた。

【読者通信】

新年号に「桃色のベール」に包
まれて——縛られてみて——を書
かれた川端さんの手記を読ませ
て貰いましたが、余りにも短か
く簡単なのでがっかり致しまし
た。家事等で多忙とは思われま
すが我々愛読者の為（縛られた
女）を代表して、もつと詳しい
文章を書いて貰うよう編集部の方
々に御願い致します。それと
川端嬢と喜多女史のコンビの小
説もついでに頼みます。（現在
は松井女史と喜多女史のコンビ
ですが）誌上ではありますが女
性一人が増えてうれしく思いま
す。（A・Y生）

○本号から川端嬢の破つた日記
帳を連載しますが、只今心理的
に突込んだものを書いて貰って
いますから何れ本誌上に発表い
たします。（編集部）

○新年号は本当にうれしく拝見

しました。特に私の好みを察し
て特別に心を用いて編集して頂
いた様な気がして嬉しくてなり
ません。「マゾヒストの果」な
んと生々しい記述でしょう。次
に「あなたのムチの下に」私は
これにも全く感激しました。た
まらなくなつて何度も何度も繰
り返えして読み続けました。角
田氏の幸福感が羨ましくて堪り
ません。欲を云えばその後毎日
曜日にされた奉仕の有様もどん
なであつたか記してほしかった
ですネ。私は私の力で出来る限
りの月謝を差し上げますからど
ぞ私を奴隷として扱つて下さる
御婦人にお逢いしたいと存じま
す。（横浜Y生）

○角田氏の原稿は其の後変つた
面白いものがいろ／＼届いてお
りますので、今後機会を見て漸
次発表致す予定でありますから
御期待下さい。（編集部）

夜の曲

夜は私の虐げられる

蓐であつた。

一体これがああ静かな、嘘のような、平和な微笑をたたえ、満面に柔和な開花したばかりの桜の蕾のような恥らいをみせていた男の仕業とは――

芳子は縛られて痛む四肢、身動きならぬからだ、叫ぼうにも声もせず、不自然な恰好に刻一刻苦しくなつていくわが身を呪いつつ、青いすきとおるような美しい肌をし、澄んだ湖のようなはかりしれぬ寂寥感にみちた男の顔を眺めて思わず深い溜息をついた。

――あの詮すべもない愚かな狂想が完全に実現しようとは――

芳子は目をつむつた。不覚にも涙が一すじ銀の玉となつてまるくふくらんだ桃色のまぶたの末端に湧き、流れ星のごとく尾を引いて消えた。

これまで、縛られ、さいなまれ、遊ばされ叩かれ、責められたことは何度でもある。だがそれはまだ芳子が娼婦という名をもらわなかつた遠い遠い昔のことで、かすかに記憶に残っている位だ。それが今突然よみがえつてきた。縄で縛られ責められつづけた少女時代伯母が御飯粒を一つこぼしたといつては叩き、石鹼の使い方が荒いふき掃除がおろそかになつたといつては縛りあげ、夜どおし物置に投げこまれ、薪と塵と蚊の中にはつて置かれた、その記憶が、いま

まざまざとよみがえつてきた。

両親すらわからない芳子。それとサジズム的要素を多分にもつていた伯母――悪人だつた。極端に悪人だつただけに芳子としても反抗のありつたけをしつくして、泪一滴すらみせなかつたのに。それが今あふれでるとは――

「不覚だ。」

そういつても遅い。

「でも、どうしようもないの」

一目ぼれというのだろうか。この刑事という男をみた途端、芳子は全然さからえぬ女になつていた。そしてなかばこの男だけは本当に親身に愛してくれる、暗い重い灰色の川の底から救いあげてくれる……とそうひそかに期待していたのに。そのひそかな身勝手な願いが破れたせいでもあらうか。

とに角、湧き出た泪……

だが男はそんな泪なぞまるで無視したように坦々として今行われた落花狼藉の跡を始末していた。

芳子の着ていた大輪の牡丹の絵のついた赤い結城のあわせをていねいにたたんで、その上に帯を折りたたんでのせ、緋の襦袢や、男の情慾をあふるためにわざわざここの楼主が京都から取寄せたというピンクの腰巻などをいづれもキレイに折りたたんで部屋の片隅に片付けた。

芳子は身動きのできる唯一の首を左に廻しじつとそんな男の動作に魅入つていた。

「まるでどこかのお嬢さんみたいな感じ」

芳子は痛さ、苦しさを忘れて、思わず微笑した。

「何て、変っている人でしよう！」

変っているといえは動作だけでなく、物の見方、考え方も変っているようだ。今夜の口説き方から変っていた。

はじめ窓際に立つてふりむいている芳子のそばにより、こんなところには全くきたこともないというおどけた表情で、さも思いつめたように、かき口説き始めた。

「芳ちゃん、こう呼んでいいの？」

「芳ちゃん、駄目だ、僕は本当に芳ちゃんが好きになっちゃった。」

「川に見入っていたねえ、その芳ちゃんがふりかえったポーズ、素晴らしいねえ、僕は芳ちゃんが好きで好きでたまらなくなつた。ずっと前、仕事でこの家に来て、用が引けてこの道を歩いた時。芳ちゃん、僕は君をみそめた。僕は君をみると駄目なんだ。理性を失う思わず胸が熱くなる。あゝ……芳ちゃん。芳ちゃんは美しい。素晴らしい目をもっている。きれいに磨かれた肌。形がよくととのつた耳。鼻。唇、それにルージュの跡が印象的だつた。芳ちゃんはきつと素晴らしい審美眼をもっているに違いない。僕、芳ちゃんにほれたよ。ほれただけでもない、妻にしたいとすら思つたよ。」

だがね残念なことに芳ちゃんは娼婦だ。パンパンだ。そう思うと僕の胸ははりさけるようだ。僕は警察官、この垣はとてものりこせそうにない。あきらめよう。あきらめよう。所詮妻と呼ぶにはふさわしくない。似つかわしくない。つまらないと思ひ。そう信じこもうとした。だが駄目。今迄僕の一番軽蔑視し劣等視していた淫売その淫売の芳ちゃんにほれるなんて。僕は勉強してうんと偉くなつてやろう。仕事に打込んで出世しよう。身を粉に砕いて働こうんと

疲労しよう。スポーツもやる、読書もやる、そして、君のことを忘れよう、あきらめようとした、だが駄目だ。芳ちゃんこの気持がわかつてくれるかい」

美しい熱情に沸る青年の口から洩れる思いもかけぬ求愛の言葉「柔しい人」

そう思ひ、そう信じただけに芳子はうつとりと聞いていた。

「うれしいわ、芳子！何ともいえないの、ほらこんなにドキドキ心臓が打つてる」

芳子にはじりよつて男の手を内ふところに入れ、左乳房の上に置いた。ドキドキ、ドキドキと大きく躍動して流れる血の響き——

芳子は男の顔が紅潮するのを見た。見ながらあまりのういういしさと、純粹さに、遂に一寸からかつてみたくなつた。思えばそれが間違ひのもつた。

「貴方！貴方みたいな方からこんなに思つて戴くなんて本当に光栄ですわ。だけど私はごらんのようにみすぼらしい娼婦ですの。つまらない本当に卑しい職業ですわ。でも貴方！私はこんなに胸がわななくほど感激していますのよ。職業の貴賤など考えません。職業で人をみるなんて。それはエゴイズムというものですわ。立派な人のすることじゃありませんもの——」

「じゃ、すると、僕はエゴイストだね」

「ええ、そうよ。本当に、本当に愛情を感じてれば結婚すればいいじゃないの。そんな不純な考えいやだわ。好きなら好きで、好きなようにしたらいいじゃないの」

「うん、わかつた。芳ちゃん、その言葉はうれしいよ、僕感謝する」

はじめ男は恥じるように赤くなつた。そして例の柔しい微笑を浮かべたが、この男特有の鋭い視線をきらりと光らせて、低く、まるでひとりごとのようにつぶやいた。

「いつたな、ようし、今にしろ」と。

この言葉は殆ど無意識的に出たものだが、静かな部屋のこととて忽ち芳子の耳にはいつた。

「まあこの人は、やつぱり、本当に私を愛している」

彼女はその男の眩きの中に野生じみた嗜虐的な愛情をみた。

「縛られるかもしれない」

彼女は胸があつくなり体がジーンとしびれてきた。それと同時に薄ら寒い得体の知れない戦慄と予感が一緒になつて背筋を走つた。だが次の瞬間、芳子は自己をとりなおし、反省し、娼婦で客扱いになれている筈なのに、思わず声を荒だてたことが妙に恥かしく、思わず顔を赤らめた。そんな芳子の顔に男の鋭い視線が突きさすように迫つてきた。

「わかつた。お前の本心が……」

男は再びつぶやくように低くしかも重い冷めたい声でいつた。そして手にしたタバコを一息すると蛇のような目で、芳子をにらみ、「さ、芳ちゃん、裸になるんだ」

と微笑しながらいつた。その途端、芳子は目がくらくらとした。「とうとうきたわ」

元来娼婦は客の前では裸になることはしないのが常だ。芳子も今迄、裸になれといわれても、自ら裸になつたことはなかつた。だが今冷酷な目と、稀に見る美貌と、総べてを忘れさせる平和な微笑とを眺めていると、自分の意志とは別に身体が勝手に行動しているみ

たいで、まるきり力がなく、長い帯がとけ、ひとりでに着物がずりおちて行つた。

芳子の着物が腰巻を残し、総べてずり落ちた途端、男はニヤツと笑つて、なめまわすような視線で芳子の全身をみまわし

「な、芳ちゃん、君はさつき、好きなようにしろといつたね、さ、いうことを聞くんだ。いじめてやる、俺を苦しめ、そしつた罰だ」

といつつ近づいてきた。芳子は予期していたもののハツと思うだが反抗の意志も力もない。男はいきなり両手をうしろにとると何時用意したのか、刑事専用の捕縄で力まかせに両手首を縛りあげ、それを首に吊り、あまつた紐を胸にまわして、器用に、固くX字型に結んだ……あつという間もない出来事だつた。

男はそれが終ると、芳子の前にすわり、両手で芳子の頬をささえひたいに一つキスをした。

「これが僕のかなわぬ恋の贈りものだ、許してくれ」

男は低くつぶやいた。

芳子は急にしめつけられた麻縄の肌に肉にくいこむ痛みと、恥かしさと、苦しさと屈従の幸福感を、男の意志を燃えたたせたという喜びと、娼婦特有の卑屈感とがいきりまじつて一種異様な性感となつて体中に渦巻いた。男のキスでその渦の中から一つの永遠に忘れることのできぬ喜びがめばえ始めたが——そのめばえを意識はしたものの、半面また彼女自身自由を奪われることに深い不安と後悔とを覚え、恐怖に脅えきつていた。

だが男はそんな感情を全然無視するかのように一本の日本タオルと赤い絹の幅二十センチ、長さ二メートルくらいの細布をとりだすと、彼女の目の前でちらつかした。そして彼女がアツと声をあげか

けた時彼の手は素早く弾丸のように芳子の頭と口にとんで右手で強引にタオルを口中におしこみ、こすつても、もがいてもとれぬように歯と歯の間にくいこまして絹ひもをかけ頭に一回まわし、歯と歯の間でかたく男むすびに結びそれを今一回まわし、今度はひろげて鼻とあごがかかるように巾広く一重にかけ、頭のうしろでキューツと力一杯引きしぼつて括しあげた

その苦しみ。

芳子はまるで息がとまるかと思われた。思わず足をばたつかせ、上体を波打つてのたうち廻つたがのたうただけ首がしまり、窒息せんばかりであつた。男はそんな芳子をうつむけに長く寝かせ、ピンクの腰巻を引剥がすと足を折り曲げさせ、十字形に組んで嚴重に腰紐で縛り、そのあまりを両手に廻し体が弓なりになるまで引きしぼり、四肢が一緒になるまでやめなかつた。

足の痛み、腕のいたみ、首にくいこむ縄の痛み、呼吸は息が絶えぬというのが不思議なくらい。男はそんな芳子を仰向けに転がし、再びニヤリと例の美しい魅惑的な微笑を浮べると……

……芳子の顔の左右におくと……

……今や、苦しみと痛みと束縛で芳子の体はカメレオンのように種々雑多の感情が溢れ出しこうなつては後悔も、理想も何もない、たゞ責められ、もてあそばれる現実があるだけだつた。苦しい、楽しい感極まつた興奮……！

男はなお平然と無表情に、かくも興奮し、さるぐつわの間からわけのわからぬうめき声をあげる芳子の体を見下しつゝ、そんな動作を繰り返してやがて、ある一つの×××に似た奇妙な器具

を取出し、それについている四本のナイロンの二耗程度の太さの釣糸のうち二本でその器具がそこに安定するように……

……つつけ、他の二本をピンと緊張させ、それぞれ……字なりに曲つた。その乳房をもとどおりになおすようにその紐を上引張り、男は余りをサルグツワの中をとおして両耳朶に直結したそれから両手で芳子の顔をつかむと左右に廻した。すると乳房が上下にのびちじみし、耳朶が切れんばかりに曲り例の器具がピクピクと動いた。男はポケットから白い鳥の羽根をとりだし、芳子の脇腹をくすぐりはじめた。身もよもあらぬ苦悶の表情、泪にぬれ、汗にぬれた顔、紅潮した四肢、胸、腹、男はその姿をたのしむかにくすぐりつづける。やがて彼は部屋の隅においてあつた鏡台をはずし芳子の全裸がいやでも彼女自身にみえる位置に鏡をおくと、どうだ思い知つたかといわんばかりにほくそえみ、タバコに火をつけいかにもうまそうに吸いながら長く息をぬいた。

ゆらゆら昇る紫の煙、あの煙のようにはかなく自身のいのちが消えて行くものであつたら……。――

芳子の頭の中にちとそんな考えが走つた。だがそれも苦痛と血の激流に押しながされ、絶間のない蠕動運動が体中のいたるところでおこり、いたるところから興奮の嵐が内部に吹きこんでいった。動かれぬこと、虐められること……、それだけがこんなに快感を呼ぶとは――

芳子は手を下されんでも次第に感度を高めていった。それなのに男はやがてもつとも残忍な手段で手を下し始めた。

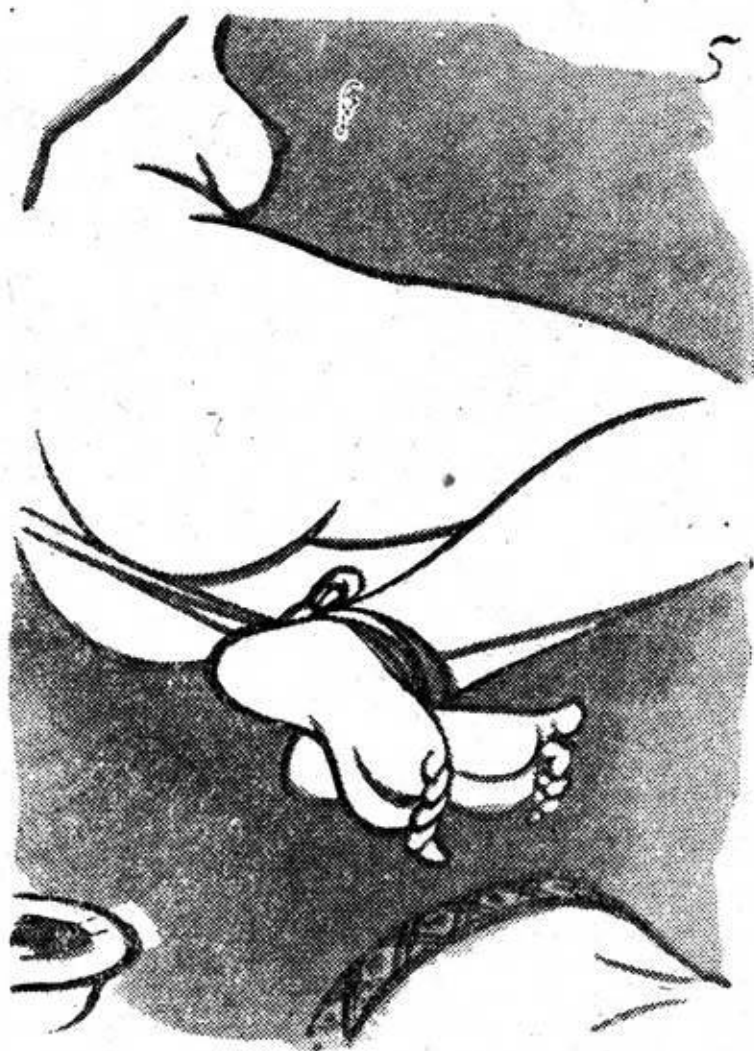
一服吸い終つた男は

「芳ちゃんお前も一服しなよ」

といいながら新しい光をとりだすと、わざと芳子の鼻腔深く挿入マツチをすつて火をつけた。その時の苦しさ

何という責苦、聞いたこともみたくもない言語に絶した責め方だ。呼吸とともに鼻の奥から胸にしみこむ紫の煙、辛い、むせるようなニコチンの棘のある煙が、のどをさし、鼻の粘膜を刺し、鋭いクシヤミが連発する、そのクシヤミが充分ぬけきらぬ、その圧力で耳がガンガンなり、目と鼻と前額部が割れるように疼き、頭がジンジンする。よもやこれ以上の八大地獄、拷問、責苦はあるまいと思う。芳子だつて別に煙草がきらいではない。しかし無理じいに鼻からのませられる煙草の味、あゝそのえもいえぬ苦しみ、逃れようとしても逃れることもできず、さりとて呼吸せずにはいられぬ。その一息ごとに深まり、高まる苦しみ、仲途窒息し、仲途覚醒し、煙と空気のカクテルで泡立つ、胸又胸鞭打ちのように肌には傷つかずしかも充分責めつけてあますところがない。この男独創の煙草責めだしかも……

芳子があろうことかこのむせかえる煙から逃れようと、頭をふり煙草を振り落そうとすれば、耳朶の糸で乳房が動き、………作動して熱い火の塊が腹の中から湧きおこる。かといつて頭を動かさずじつとしておくにはあまりに苦しすぎる。ひどすぎる。



芳子は無茶苦茶に首をふり、うめき、のたうつた。男はそんな女の哀れな姿をみながら、くいこんだ麻紐や釣のテグスですれ血のにじみそうな場所にベニシリン軟膏をぬり、乳房などの粘膜質に感度を高める意味でメンソレをぬり、汗ばんだ所をアルコールでふいたやがて芳子の胸一杯つまつた煙が、口に押しやられ、サルグツワの間から蒸気のように発散した。男は情鬼の長となつてその煙をすうでもなく、またこんな哀れな女を不憐がるでもなく、遠くはなれた窓に寄つてじつと芳子を見守つていた。

汗と脂と煙と……煙が、ニコチンが体中を廻つて行くようだ……意識を失うには余りの体の苦痛が激しい。声をあげて泣くには迫りくる快感に悩殺される……のたうつには自由は奪われ、何かわけのわからぬ機械で減茶減茶に体を分解されるような感触……それだけ嵐のような……性的暴風雨であり革命であつたのだ。

やがて煙草の火が鼻に迫り、鼻がジンとする程熱くなつた。多分鼻が焼け焦れるだろう。きつとただれるに違いない。あゝもう美貌とも訣別だ……いやこの世とも訣別だ……

そうどこか遠い遠い胸の中で、薄れ行く自意識がささやくような感じた。どこかけだるい。それでいて鋭い。どこか広大な、それでいて束縛された快感。――。

やがて極限はきた。芳子は四肢をこわばらせると意識が遠のいて行くのを知った。男は鼻の焼ける寸前でタバコのもえさしを引きぬいた。それからぐったりなつた芳子の縄をときほどこき、かるがると抱きあげ湯殿にはこぶと彼女の意識が回復し、精気がでてくるまで冷水摩擦し、一生懸命もんだ。芳子はそんな男の善意を夢うつつの中で記憶している。或は本当に夢であつたのかもしれない。苦しい疼痛と束縛の中から解放された。感激と、そのあとにしのびよる虚脱感、或は重苦しい娼婦の世界から抜け出す努力はたゆまぬものながら、いま一つのチャンスをつかむとするならこんな男の善意と我が身とを一つの試練の後に得た今、今においては、二度とあるまい。

芳子は迫りくる虚脱感と戦いながら、重い川の底の意識の中から無意識的に男をかきくどいた。今まで有形無形の奴隷化されていた生活を愛の奴隷化することによつて救われようという切ない彼女の願望を彼女の至誠を彼女の弱々しいまなざしにこめて力一杯男をにらみつけた。男はそんな彼女をみると始めて微笑し、彼女の体を拭きとつて寝台にはこぶと、改めてさきほどと打つて変つた、柔しい完成されたテクニクをもつて彼女を喜ばした。それは涯しない夢の連続であつたが——真実これまで無数の肌に接しながら芳子が未だかつて味わつたことのない甘美な夢であつた。——男は夢が過ぎると再び彼女の手足を今度は彼女の腰ひもで緊縛してしまつた。しかし彼女はそんなことはついぞ意識もなく、深い谷間、紅の夢幻の国にさすらいしずかに、やすらかな寝息をたてはじめた。

x

x

x

【読者通信】

毎月の貴誌を拝見しております。すと風俗誌としてのユニークな面が感ぜられますが読者は性的錯倒の傾向にあるものに置かれこれらの者の賞讃に貴誌の基盤があると思われまふ。フロイド等の学説をまつまでもなく錯倒の傾向は人間性に根ざしておるもので古来両性を陰陽にたとえ夫婦の愛情が献身と犠牲の交替によつて培われていると云われまふ。その行動的表現として紐と鞭を用いて嗜虐と被虐が行われ発達段階として同性愛の芽ばえが見られます。一方性をストイックするモラルが人間の自由な行動を規正し戦前の国民道徳のように性本能を子孫繁栄の具にしてしまつたのですから人間性に根ざした性風俗の発表は決して悪いものではなく家庭に於て賞味されるべきでしょう。たと錯倒を反撥する空気が世間になくは云えない。それはどんなに健全な性行為でも公衆

の面前で行えないと共に錯倒の遊戲も個人の寢室に限るべきであり、又錯倒の傾向を変態性慾症のそれと同一視するからです。私は大学の研究室でいたましくも火をもつて肉体を焼いた嗜虐症患者の写真を見せられました。が、醜惡の一語につきまふ。

貴誌は犯罪雑誌や精神病患者の病状記録にならないよう錯倒の傾向の取扱ひ、テーマにも風俗誌としての立場を明確にしてネロの残虐も文化人の眼をもつて視ていただきたいと思ひます。又取締りのボーダーラインを覗う通俗誌と一線をかくした編集を願う次第です。(東京亮吉)

(お答え)

人間精神中には極めて健康的な面とそれに反して惡魔的な成分とが共存していますが、吾々此の人間精神中の惡魔に捧げる供物としての社会的効果を狙い安全弁としての役割を果たしたいと思つています。従つて御意見には全く同感でありまして吾々もそういつた線において今後努力してゆく考えであります

(染田玄)



朝眼がさめたら

腰紐で縛られていた。

或る意識の流れが、或る重い川の流れが一条の光によつて照らされると、そこに白い隈取りか、紫の虹が燃え、新たな意識がめばえる。そのように絶望と不安におののいた闇夜に新しい一条の朝の光がさしこむ時、静かな芽ばえがおこり、万物は生気をとりもどす。芳子もまくらもとまでさしこむ、此の朝の光の中で目を覚めた。

まだ部屋の中も心の中もぼんやりかすんでいる。だがすがすがしい、新鮮な朝の空気が部屋にも胸にも肉体にも充満している。芳子は昨日のことはすっかり忘れていた。忘れなければ商売がなりたたぬ。でもこの気持のよいのはどういふわけかしら、醒がえりつつあるものの感激にみだされてる自分。そこにはこれまでの長い娼婦生活のうちでまだ一度も味わつたことのないフレッシュな感情のほとばしりがあつた。

芳子は胸まで美しい絹ぶとんにくるまれ、本当に、幸福感につつまれて、ぐつすりねていた。それだけに新しい感激は大きいのだ。「ひとつ起きようかしら……美しい川の姿でも眺めなくっちゃ」

思うとでもなく思い「あゝ」と小さな嘆声をもらしながら、起きあがろうとして驚いた。

「し、し、縛られている」

四肢が全然動かないのだ。

それもその筈、和合の幸福感をしみじみ体内に留めるため昨夜、件の男が彼女を緊縛し去つた。そんな事は遠い、遠い昔のような重い流れの中に埋めつくし、もう完全に忘れ去つていた芳子である。彼女は「縛られている」ことの発見と同時にその事を思い出し、一片の夢みたいにはのかな昨夜の出来事を目に浮べて、驚きと、恐れと恥らいで頭をガンと殴られたようなショックをうけた。

「あの男は？」

彼女は思わず附近をみわたした。いつもなら好悪にかゝわらず、誰かだらしなない男達がぎたなく自分の傍で寝ている筈である。だが、みよ、誰も、此の部屋にいないではないか。……きまつて昨夜の情痴の跡をみせつけられるような、乱暴な、またみだらな生活の残渣、酒びんだの、肌着だの、煙草の吸殻だの……そういうものが無造作にころがつている筈なのにそれらしいものもない。きちんと整理された部屋の中には綺麗にたたまれた彼女の仕事着が部屋の片隅に重ねられており、たゞ一つ、鏡台のむきが少し違つている程度である。

彼女はそれらのものをみた時、縛られた自分を尻目に着物をたゝんでいた冷酷な男の情慾を思い出した。あれからまる十時間あまり、しばらく、だるまのようにころがされていたのだ。部屋の中には静寂がたゞよつていた。彼女はその静けさの中で男の逞しい腕、むねの厚み心臓の鼓動を思い出していた。どこで味わいどこで彼の体をだいたのかしら、縛られているのに出来る筈はない。そう思つても体にしみこんだ彼への思慕は高まるばかりだ……あゝどこか男の体臭でも残つていないか、彼女は頭をもちあげ、身をくねらして

フツンの襟をかいでみた、だが、そこはえりあかすらない、男の思
い出を止める何もないのだ、彼女はうら淋しい気持で無駄な努力を
やめた。

「あゝたゞ一人身動きならぬ哀れな女一匹これこそ今の娼妓生活に
最もふさわしい姿だ。あゝ……」

芳子はぼんやり天井をみていた。手足の感覚はしびれて全然なく
なっていた。わずかにのこされた自由。体の筋肉をひきつらせて体
の機能が完全にいとなまれるかたしかめてみた。昨日とくらべ別に
苦しくもない。男の心に残されたわずかな善意のせいだろうか。首
になわがかかつておらず、例の変な器具もはずされ、サルゲツワも
とられていた。

だが昨日とかわつてどこか、ゴワゴワした皮膚に糊のついたよう
な感触、そんな感触のところが二、三、あつた。その途端、芳子
は気付いた。はかない娼婦稼業の女がそれと知る男の欲望の所産
だ。彼女は思わず手をにぎりしめた。

きつとあの男のせいに違いない。あの色の青白い、ニンフのよう
な男……。あゝ残酷な、人とも思えぬ陰惨な性格……。だがあの青年
も結局男なのだ、人の知らぬうちに……。いや夢かもしれない、何であ
つてもいい、縛りあげた上で歓喜するとは……。縛られていることも
忘れて彼女はみもだえした。

すると手の首にくいこんだ細紐が柔かくキューツとしまつた。

「おや！」

彼女はそこに不思議なものを発見した。

「そうだ、昨日、縛られた時は、細くて強い、麻縄だったが……」

「それが腰紐にかわつて……」

「おかしい」

そう思った時、彼女は昨夜の夢を再び思い出していた。

「あれは夢であつたか、はたまた現実であつたか」

彼女は、山田俊夫と名のつた、鈴をふるような、その声を思い出
していた。

一夜の妻に昔語りも不要だから、哀調をこめて囁く、彼の生いた
ちをきいた。父が誰とも知れず、戦争から学校、警官となるまでの
いきさつを彼女は余りにも自分と似た生いたちだと思ひながら一緒
にねた。縛られたまま一緒にねる……。その何と心地よいことか……

だが追憶は結局、美しい一片の白屋夢である。今となつては、そ
の美しい出来事も果してあつたことか、はたまた彼女の妄想であつ
たか、よくわからない。だが少くとも、彼の心の中に、彼女の小さ
な歴史の中に、或る革命をもたらす一要素になつたことは間違ひあ
るまい。だが何といても自分一人をこんな風に縛りつばなしにし
てはつておくというのは余りに残忍すぎる。せめて自分自身でこの
縄がきれたら、芳子は再三みもだえした。その身もだえによつて柔
い絹ぶとんが動き、涼しい朝風が肩をよぎつた。だが一体これから
どうしようというのだ。きつとみはてぬ夢をみたのだ、あの楽しか
つた嬉しかつた愉悦のリズム、その味は一片の夢とさり、ただその
心地よい心情だけが今尚彼女の心の中に暖く残つていた。だが今更
そんな味にひたりきつていない場合ではない……。

縛られているということが彼女の感情を現実にはひきもどした。

「お松姉さんなんか、こんな……。あゝ何でこの姿がみせられよ
う。まして楼主に憎いのは、あの男のことだわ、もし誰もこなければ、
いついつまで、こうしてじつと縛られていたいのに……」

芳子は目をつむつた。すると突然、ふつて湧いたような不思議な感情が爆発し、次第に高まつてきた。

俊夫さん！

口の中で彼女は今や恋する人の名を呼んだ。全く一夜の夫。しかも縛りつ放しで帰るような残忍な男、その男にたいする思慕が急激に高まり、加速度的に増加していくのを知った。

「結局、私はあの男に惚れこんだのだわ。あの男の暴力に……、それでいい、それでいいじゃないか」

芳子は唇をかんだ。

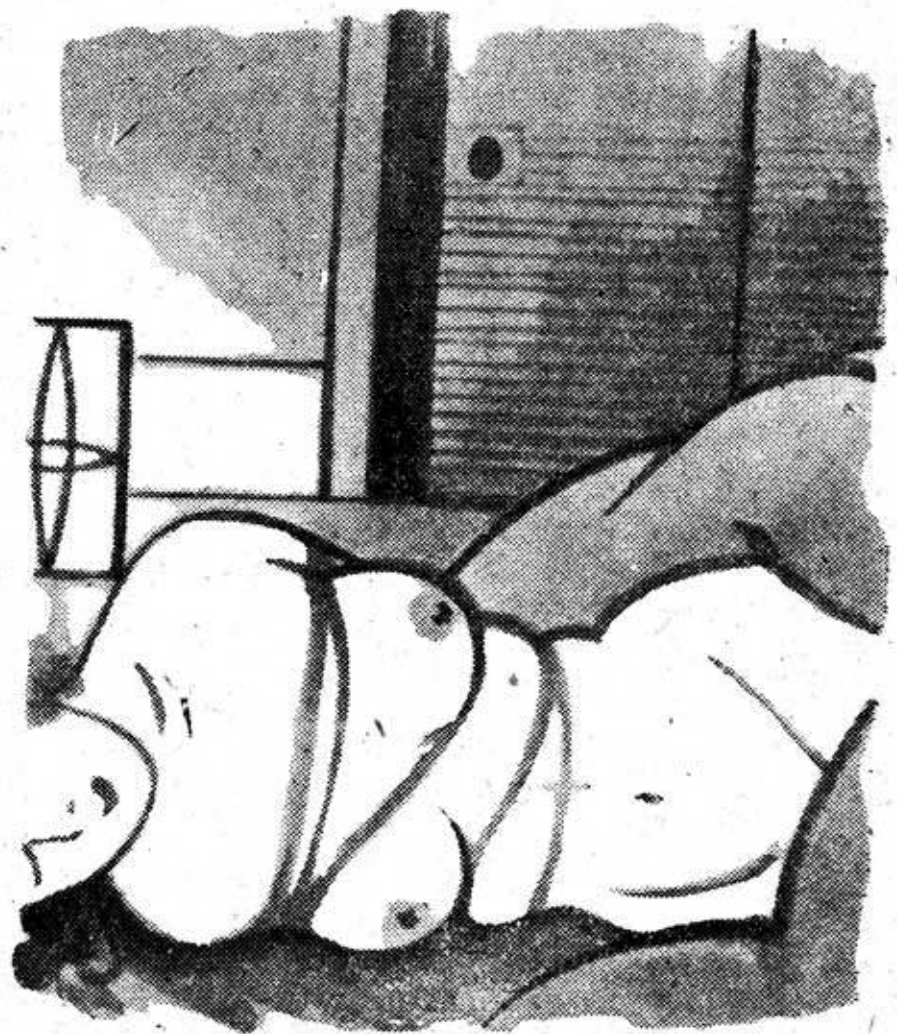
美しい銀の玉が思わずそのふくらんだ両の目からあふれててとめどなくころがり落ちた。

朝は静かにあけていく。あたかも芳子が味わつた、余りに美しく白痴的な性の悦楽の黎明で、あるかのごとく……

だが自然はこの美しい、余りにも幸福感にみちあふれた芳子をつとそのままそこに寝かしておこうとは思はない。やがてこの芳子の幸福も無情な、聞きなれた、平常であればむしろ親しみをすら感じるお松姉さんの足音で完全に打ち落された。

障子が静かにあく、芳子は薄氷をふむ思いで、お松姉さんの顔をながめた。お松姉さんはいつものように綺麗にメイキヤツプし、三十九という年がまるで、三十そこそこに見えた。

「まあ芳ちゃんいつまで寝てるの、もう九時よ。それに俊ちゃんね、今旦那様と話しをしているのよ。とつてもいい話らしいの……さもうおきよ。何さ、たつた一晚位で、しつかりおしよ。いくら俊ちゃんが強いつていつたつて、三十そこそこよ。たかがしれてるわ、さあおきて……、あら、芳ちゃん貴女、泣いてたの、枕がこん



なにぬれてる。ほんとにやけるわねえ——、でも芳ちゃんの、この美しい顔、ほれぼれするわ」

お松姉さんは勝手に入つてくると芳子の顔をのぞきこみ、まじまじと眺めていたがやがてどうしてもこれ以上自己をおさえかねるという風にそつと芳子のひたいに接吻した。

ピリツと電氣にふれたようなケイレンが芳子の肌走る、恥かし……いやそれどころではない、芳子は顔から火が出る思いだつた。お松姉さんは、そんな芳子の顔をあかず眺めていたが何をおもつたか、ふとんの上にうまのりになり、そのまゝ芳子に抱きつくつと両手で彼女の顔をかゝえ、無茶苦茶に接吻の雨をふらした。芳子は

よけようにも体の自由がきかない、かといつてお松姉さんの重味は加わるし、それに昨夜責められた、節々が痛む、彼女は思わず

うーむ、む、むむ、あー、あ、

と悲鳴をあげた。お松姉さんはそれでもかまわず接吻の雨をふらしていたが、やがてフツンの下に手を差しこみ、芳子の肩のあたりをなげた。その手が二の腕にくいこんだ腰ひもにかかるかとハジかれ

たようにとびさがった。芳子は観念の眼をとじた。

「まあ、し、しばらくは、一体どうしたつていうの」
お松姉さんはせきこんでたずねた。だがそこは仲居の手なれたところ。事情をのみこむより早くパツと芳子の絹ブツンをめくつた。

赤い裏地が目燃えるようにおどりだした。だが、

お、みよ、

それよりも、白い純白のシーツの上に、がんじがらめに縛られた輝くような芳子の全裸の体が横たわっているではないか。ただでさえ美しい芳子の桃色の肌に喰いこんだ緋の腰紐、手も足もうしろ背中にも縛られ、腹部にくいこんだ紐のためヒョウタンみたいに腹がくびれている。

マーッ

お松姉さんは思わず叫びごえをもらし、目をみはった。だが次の瞬間にはもう完全に我を忘れ、その美しさに吸いよせられるもののように芳子の傍ににじりよつた。

「美しい。ほんとに美しい。こんなに美しい裸体をもつた人がいようか、これまで芳子の身体は何度かみた、だが今朝のように美しい身体は……」

お松姉さんは思わず腕をのばして芳子の肌にさわつてみた。すべ

すべした、これが人間の肌かと思われするような感触、その感触の下から生きた、力強い、ゴムのようにはねかえる、肉体の弾力にみちた反射が、小さなケイレンとなつてわきおこつた。指の先で胸のふくらみをついてみる。縛られた腹のくびれをなせる、そして遂に誘惑にまけ力一杯、二の腕をつねつてみる。

うう、ああ、ううつ、む、む

弱い悲鳴が芳子の口からもれる。体が波打つ。それをみるとお松姉さんの体中の血がカーツと逆流するように湧き立つて行つた。いきなり芳子の顔の上に馬のりになり、その重い、大きな尻で芳子の口の蓋をすると、余つた二本の腕で、胸といわず腹といわず、腕の乳房、脇の下、内股と、いたるところかまわず力の限りつねりまくつた。芳子の薄桃色の、雪の肌に、赤い虹のようなアザが幾つも残つた。

悲鳴ならぬ、悲鳴がお松姉さんの尻の下からおこり、芳子の体は岸辺にうちよせる波のようにゆれ、岩にぶちあたり、無残にも砕け散つた。お松姉さんはまるで狂気のような振舞つたが、ものの十分もすると、彼女の方がくたびれ、ぐつたり参つてしまった。その時、廊下の方から歩いてくる二人の足音と、話し声がきこえてきた。「あ、あれでもね、松井君、君の署長は話がわかるんだし、それに俺の娘ということにね、すりや文句ないよ。ワシだつて、あの娘には一目も、二目も置いてるんだし、決して純情さは、失つてないからね」

「それですよ、僕が惚れたのは。始めは美しさだけだつたんですが今は違うんです」

「うむ、それも、わかる……さすがは俺の甥だな、俺もそうやつて

今の家内をもらつたが……いやこれは別の話だ……」

話し声は次第に大きくなつた。

その話声を聞くとお松姉さんは、あわてゝ飛上りつゝに芳子の体の上に絹ぶとんをかけ泪の跡をハンカチでふいた。そこへ、楼主と松井青年が打連れて現われた。二人は並んで枕もとにすわつた。芳子は身も心もすくみあがる、氣持だつた。

「実は、芳子、松井君が、是非お前をと所望するので、改めてお願いに來たわけだが……」

楼主はそういつて芳子の顔をみた。芳子は狐につままれたような不可解な顔をしていた。そこに白痴的で言うに言われぬ美しさ、あどけなさがただよつた。

「いや、何さ、そう驚かんでもいい」

楼主は語をついだ。

「松井君は、ワシの異母弟の長男だ。少し乱暴だが心は柔しいまた

将来性ある青年だ……どうだ一緒に暮したら」

芳子の顔から思はず白いものがあふれ出た。

「松井君はいうんだよ、娼婦をしても自分がこれと見込んだ女なら生命にかえても自分のものにしてみたいつて。ま、いわば、女冥利につきるつてわけさ。ワシもお前の純情さには惚れこんだし、かねがね、こんな生活から足を洗わせたいとは思つていた。どうだ一緒に暮す気はないか。」

それを聞いて、芳子はかすかにうなずいた。

うなずくよりも早く鳴咽がこみあげしやくりあげて泣きだした。いつしかその傍に松井俊夫がにじりより、楼主も、お松姉さんも消えてなくなつた。出ていく皆の足音が消えた。芳子は無我夢中で泣きながら縛られた体をころがし、其のまゝ松井の前にころがつていつた。

糞尿崇拜とトーム思想

三 瀬 淑 朗

河豚中毒に人糞を用うる説は支那にあるが、支那に限らず未開人はすべて人糞を解毒用としたのである。それで思い出すのは、直接

に糞尿を使用するのではないが、支那の解毒薬として知られた「人中黄」である。「人中黄」は別に「黄龍湯」「還元水」などの名が

あり、俗には「糞清」と呼んでゐる。その製法は、冬期に竹筒へ甘草を入れて上下を栓して糞壺の中へ浸して置く。立春になつて取り

出して風にさらし、陰乾しにしてから竹筒を開き、甘草を晒らして使用するのである。「人中黄」の主効は、悪瘡類、熱病、殊に蛇毒を消し、毒箭による負傷には内服と外用とで効を奏するのである。而し人糞よりも諸動物の排泄物は、更に広く用いられた。その理

由は所謂トーテム思想によるもので、ある種の動物を特にその種族の聖物とすることから、その動物の排泄物にもある畏敬をさへげたのである。その中でも最も有名なものに、ペルシヤに於ける牡牛の尿がある。此の尿は、教会の入口の水盤に盛られて、善男善女へビン詰にして頒つた記録があり、結局聖物である故に万病薬だったのである。

同じ習俗でエジプトの聖牛の場合には、更にグロテスクに行われた。斯うした動物崇拜思想によるものでなく、特に指定した薬料としては、猿の排泄物など有力なものである。猿の糞尿に対しては、諸所の種族が靈藥視し、珍奇な迷信をさえ抱いている。インドでは猿や孔雀の糞尿を媚薬として、その卓効を疑わなかつた。我々が鷲の糞を美顔料として疑わぬのと等しく。

排泄物を聖視することは、人間のそれへ対する場合の例も多い。例えばローマ法王のそれを説くまでもなく、卑近なところでは、少し以前までは本願寺坊主が巡錫中に排泄した物は、すべて信者へ「お垢」として頒けたものである。

が、動物の糞尿へ対する場合は更に多い。それは前記トーテムの理由に依るものである。随つて聖物としての糞尿は、単なる薬料ではなくて、呪符と同様に尊敬されていた。インドでは淨身法として象の尿に打たれるという事があるがそれは日本人が滝に打たれるのと同様であらう。

性器崇拜の中に、性器を魔除けとする風のあることは御承知であらう。即ち、雌駱駝や雌馬の死んだ時に、その局部を切取つて家の入口へ釘付けることに依り、魔神の侵入を妨げ得ると云う風俗である。

此の糞尿に依る方法も同巧異曲、間接の性器崇拜とも云わば云える姉妹関係なのだ。

かゝる聖視法で日本へ輸入されたものもある、もつとも日本では糞尿がそのまゝ神格化するという古来の思想古事記に依るが有るので、強ち珍らしいとは云えぬが、試みに密教で行う歓喜天の祭祀法を見ると「月の初に当り清潔な室内に牛糞を以て円形の壇を作り、云々」とある云うまでもなく牛はアリヤン民族のデーモンの近ずき得ざるものと考えられたのである。すべて淫神の祭祀法には、何かの糞尿を使用して円を作り、その祭壇を限ることが述べてあるが、いずれも魔神の危害を避けんがためである。

此の糞も聖視は当然として、種々な風俗を生み出している。その一例には、インドでは葬式があれ

ば、その帰りに会葬者は急いで葬場を離れて、日没まで屋外におり夕方に牛糞に触れて穢を払つてから屋内に入るのである。

糞尿と犯罪を結ぶものとしては多くの場合、糞尿の溜を隠匿所として使用する程度であり、他は単に糞尿をまきちらして人に迷惑と威嚇を与えるという、頗るユーモラスな犯罪である。これは神代の昔天照大神以来、近頃は某大臣に至るまで、その被害者は多数に上つてゐる。

犯罪の隠匿所としては、死体若しくはその一部、他の物品を埋める事で原始的地方的な方法である。釈迦の大弟子の一人カルダイは姦婦とその情夫である賊に計られて首を斬られ、糞尿中に埋められた。現代の特に都会生活者の間に或る隠匿所としての糞尿は決して蔑しるにされてゐないことは周知の事実である。

(終)

黒井珍平氏に答う

伊 藤 晴 雨

あなたの告白文中小生に関する点を私は一読者としてお答えする。箇条書きにして記述された事は責の絵を狭義な性慾の対象物（或は玩弄物）として観て居る人には誠に尤なお説と首肯いたしますが日本髪が嫌いだとかいう自分の体験から出た自己本位の日本髪排斥のお説には賛成出来ない。婦人の美は絶体毛髪に在りと信じます。婦人から頭の毛を取り去つて喜ぶのは印度のある地方にある野蠻人ばかりでクリ／＼坊主に毛髪を剃り落して眉毛迄脱いてしまつてあるのが美人だそうです君は野蠻人では無いだろうから現代のパーマネットの結髪にも入れ毛や付け鬘をするのを御存知ですか。又君は元祿以来日本の文芸絵画等に現れた賣場を目を通して居られるでしょうが、君は現代の美人画家として第一人者といわれる鏑木清方氏の美人画きを見た事がありますか、清方氏の絵を写真という点から見たら或は欠点だらけであるかも知れませんが絵画全体を流れる品位には他人の及ぶ可ら

ざるものがあるのはお判りになりませんか、私に対する一より三迄は全く同感で耳順以上類齢に近い七十二才の私の絵が若いあなたの御賞讃を得ようとは思つて居りません。又私の責めの絵は私の趣味に叶つた構図と色彩を以て心の欲する所に従い意の趣く儘に卒直に筆を走らせて居るのでありまして現代の青年のみを対象にして居るものではありません。私の絵を見て気味が悪いなどという君自身は何という小さな膽ツ玉ナンドと申上げたい、血が流れるのがイヤならそんな物を見ない方がいい、ではないか、私は元来江戸風俗画家として第一流の新聞社の挿画を担当し第一流の演劇の相談役となり現代一流の有名人と交つて居りましても責め場の絵を商品化した事はありません。只今国家警察の依囑によつて旧幕時代の政刑図録を執筆中ではありますが私の主旨といたしましては「責場」が目的では無く風俗を画くのが目的で明治に生れて大正風俗画を一つの分水嶺と見做して居る私は君の賞

讃の辞を目標にしては居りません。紅葉山人を引合に出された事は私に取つて誠に光榮の至りですが君は桂舟、年方、永洗という人々の美人画の眞の価値がお判りになりますか、ペンと鉛筆を持ちモデルを使わなければ何にも画けない画家や面相（筆の名）一本、満足に使いこなせぬ様な帝展の有名なさえある世の中ですから自己の告白などというものを進んで書いて得々として居る性格の君の批評の如きは私には一絲一毫の影響も示唆も与えて頂けない事を残念に思います。

此一文に対する読者の反駁を期待するといふ冒頭は自己を批判の中心とした思ひ上つた成り上り根性であると思う。私が嘗て雑誌「人間探求」に九回に渉つて連載した私の自叙伝は大見得を切つてシコを踏んでサア来い来れと世間に呼びかけたものではありません。私の過去を知りたいという人々の要望に答えた迄であります。今私の周囲には日本全土から寄せられた責に対する質問や実験談で汗牛棟

充の感でありますので甲是乙非十人十色どころか百人百色千人千種紅紫燎爛の感があります。

喜多玲子さんの絵に対しては心から敬意を表しております、殊に近來メキ／＼と腕を上げられたと思ひますがまだウチ若い女性を好奇の眼を以て煽てる様な讃辞を呈するのは少し早いと思ひます。こういへば君は玲子を褒めた反動かと云われるかも知れないがチト失

【読者通信】

KK通信第三号に男子裸体の責の写真撮映に成功したとあります。が実に得難い珍しい企画と思ひます。是非発表して頂きたいと熱望する者です。又そうした絵も是非本誌の口絵に掲載してほしいと思ひます。
(愛媛A・N生)

新年号「天邪鬼」氏の言葉を承り我儘な希望を小生もいさゝか申し上げさせて頂きます。同氏の意見は理論的に非の打ち処のない立派すぎる意見である。然し吾々の奇クを愛するのは他誌に見られざる特異な題材をひつさげてあらゆる角度から此れを深く掘り下げて探究してゆく真剣な勇氣と努力に強

礼ながら何とやら釣り方我が仏尊しヒーキの引倒しという譬もあります。私も嘗て東京読売新聞社の演芸主任として劇評家として数年新橋演舞場の實際家として又新派の幕内にも関係し一流の（俳優映画人も含む）と交り其主流とする職業と趣味は江戸時代の考証という極めて堅実な仕事でありまして責め場の絵ばかり職業にして居るのではありません。

私の体験と経験から申しますと責め場を好

む人は大抵小膽な人、他人の前ではロクにハツキリした口も利けない様な人間が一度筆を取ると奔馬の如き文章をかいてよこす人が多い。これは「あまとりや」「人間探求」等其他の座談会に出席して屢々体験した処で一々例を挙げたら際限はない。

新年号の「僕の記録」の作者珍平先生に答える事かくの如し。

い共感を呼ぶものである。その為当然セックスの問題にも言及し取扱わるべきであるのに、同氏の意見の通りであれば勢いマンネリズムに陥り皮相的な進歩のないものとなりはしないかと案ずる次第です。勿論KK通信上の編集者の決意を聞き意を強うして居りますが如何なる時態に立ち至つても吾々同好者の唯一の雑誌として発刊して頂きたい。そのため価格が倍になろうとも巷間に溢れる無味乾燥な雑誌と同一のありふれた内容にならないよう若し公刊誌として不適当なものは別の方法によつて配布する等、私達の唯一の頼みの綱を断ち切ることをないよう願ひます。新年号の記事を見て十二月号以前に比して集録せられた有為な

題材が今一步の処で相当削除されていて残念でなりません。是非十二月号以前の線でお願ひします。
(鳥取県 K生)

○

新年号の読者通信四一頁の京都H生の御意見並に六五頁の神田生の御意見誠に同感であります。それに反して「僕の記録」の黒井珍平氏の述べられる髪が嫌いであるとの項は氏が幼少の頃の恐しかつた記憶が因をなしているものであつて、氏個人の主観に過ぎない。女の責め方が古来の方法であればその風俗は矢張り昔風にしたいものです。近代の責め方であればバーマネントに華やかなイブニングドレスを着てもいい、それがそろばん責めエビ責め等となれば、たと

え全裸であつても頭は日本髪にして結綿のかのこが乱れ落ちてゐる方が風情があります。この点伊藤晴雨先生は私の尊敬するところであります。変の字問答の六二頁に「純日本風の」とあるところが私も本当に好きなのです。私が何故かくも日本髪のことをとやかく云うかと云へば、それは日本髪を持つあの形が一つの美術品と思ふからです。あの髪形的美さは今昔を通じて内外を問わず二つないと思ひます。長い髪はロマンチックであり、黒い髪は女の可弱さ責められるにふさわしい条件の立派な芸術品であります。
(京都T生)

○黒井氏の論に対する賛否の両論中一応反論をのせました。異論の方は御申出で下さい。
(係)



島影

映

處

女

崇

拝

と

宗

教

賣

淫

聖母マリアが永遠の処女として信仰されていることは世上周知の事実であるが、この母にして処女であるところの女神は世界の各民族間に於いていくらかも同種の信仰が見られるところであつて、エジプトの女神イシスの如きはその好適例であるまたエジプトの神聖なる牡牛アピスも父を有せず、ただ太陽の光線

によつて受胎した牝牛から生れたのであつて、その母が第二の子を持たなかつたことは、聖霊を娠んでイエスを生んだマリアがイエスの他には子を有しなかつたように信じられていたのと同様である。しかも事實はイエスの他にも尙幾人かの子女を有したのであることは史家の研究に明白なことであつて、近代の科学から解釈してまた処女であり乍ら母たることも肯定し難いところであり要するに幼稚な信仰が示す矛盾に他ならないのである。

この間の消息を識る為には、先ず古代人の社会生活を観察して、彼等の処女に対して抱いたところの神秘的な概念を究明しなければならぬ。

処女は、未だ汚されざる故を以て、古代人に甚だしく神聖視された。人類生活の進化発展に資して重大な意義する火が、古代人に尊重されたことは非常なもので、ペルシヤに於ては拝火教なるものをさえ生ぜしめた程であるが、その火を造ることの困難な時代にあつて、火種を保持し守護することは、おゝむね神聖な処女の役目とされた。一族から扱ばれた彼女等は、名誉を以て聖

壇上に燃えている不断の浄火を永遠に絶やすことなき為の神ビスタに貞操を誓つて一生を捧げなければならなかつたのである。このような慣習は後代に至つて畸形的に処女崇拜を強要することになり、妙齡の処女を神殿に隷屬せしめて、これを神女と称したことは各国の史蹟に数多の例を見るところである。ネブカトネザル大帝時代のバビロン及びフェネシヤに於て、それは殊に盛大であつたらしい。

ペルーでは、太陽神に奉仕した処女は終身閉居しなければならなかつた。また修道院で一生不犯で送つた処女の他に、俗にあつて終生純潔を通すものもあつたが、これ等は世人から大なる尊敬を受け、これに崇拜と讃嘆の念を表する為に、「オツクロ」と呼ばれたのである。この名は彼等の偶像教で神聖とされたものであつた。

メキシコでもまた祭壇に仕える女の任期は僅か一年に過ぎなかつたが、必ず純潔な処女でなければならなかつた。斯かる尼僧の意義に関する大父アコスタの解釈によれば「悪魔は処女性を守る彼女等によつて奉仕されることを望んだ。それは本来不潔なる精霊である悪魔が、清浄な処女等に仕え

られるという名誉を火神から得たいから」であつた。

ローマ大神の侍女やギリシヤの女僧と同様に、ペルシヤの太陽神に奉仕する女僧も純潔であることをその資格の第一条件とした。

またポンポニウスメラによれば、セナのガリアの神の託宣を伝える九人の女僧は一生処女を通さなければならなかつた。

このような信仰によつて、民衆の無智と僧侶階級の芸術的政略が結合した結果は、必然に彼の浅ましき迷信、宗教売淫を招致することになつたのである。それは彼女等の無智な信仰が、僧侶を以て神と異身団体であるものとする観念を生じたところに由来するもので、その処女を神に捧げたものとして神女等は、その淫を僧侶に囁くを以て身にあまる光榮と思惟されたのである。

この迷信が一般的になると初夜の権利を彼等の尊敬する人物、即ち僧侶或いは酋長に与えることを以て名誉とする奇怪な風習をさえ生ずるのである。

キニベツ、エスキモー人では高僧がこの権利を持つて、花嫁は処女を失つた花嫁を医師から受け取らねばならなかつた。

類似の風習は、あるブラジル種族にもあるという。そしてある場合には、酋長がこの権利を持つのである。ニカラガでは、花嫁に結婚の前夜を祠殿に住む僧侶と共に過ごした。

十五世紀頃のある旅行記に記されたところによれば、テネリフェ島の原住民は、酋長と共に一夜を過ごしたことの無い妻を持つものはなかつた。そしてそれは、婦人にとつての大なる名誉であつたという。

同一の権利はまたアダマウアのバジエルの酋長も持つていた。ヘロドタスに従えば古代のアジルマチデーの王も、これを有していた。マラバルの海岸では、花嫁を先づ王の許に送り、王は八日間これを殿中にとどめる。男は斯く王から性的洗礼を受けた女を妻とすることが、光榮とされたのである。また王は三日間自分の花嫁を最高位の僧侶に預けなければならなかつた。

中世紀に於てフランスのある地方では、同様の権利が高僧に与えられたといわれている。タスマニアでは、ヨーロッパ人に淫を囁くことが女の名誉だと考えられていた。それはヨーロッパ人が彼等土人の眼に高貴な存在として映るところに起因するの

女淫に耽ける僧侶



るという信仰は、明白に宗教売淫の行われていたことを物語るものに他ならない。

此処に於てマリアの事蹟を考察すれば、後代の宗教家がこのような伝説を創出したのでない限り、イエスは要するにマリアの宗教売淫に由来する一私生児と解される他はないのである。

このような信仰に於て神に捧げられた処女はそのまゝ神の妻たる意味を有し、そこに生れたものは決して不純な子ではなくして神聖な神の子と認められるのである。

女自身斯く信じ、世人がまたこれを怪しまなかつたのは勿論であるのを思えば、この秘密を握る僧侶階級が、その上に民衆を籠絡して如何に悪の権力を振つたかは、想像するに猶余りあるのである。

である。

我が国に於ても近世まで存した、子供のない女が神仏に祈願をこめて申し子を授か

現代に於ける処女崇拜の正理に関しては
処女が単にその肉体の清浄なる理由のみを以て理解するには余りに複雑な感情の問題

が残されるであろう。

処女が、その未来に於て妊娠という大きな自然の使命を有していることは、それ自体に於て尊重すべき理由を持つていのであるが、尙それ以上に、彼女の許容によつてそれが達せられるという点に、尊重すべき点を持つていゝのみならず、如何なる子孫を生産するかという期待が伴つて、処女尊重の根底が少からず強められてくる。

アフリカ土人の間に行われる、父親が娘のラビアに環を通してその処女性を保護する慣習からも、斯かる処女崇拜が宗教的信仰とまで高められる時にはそれが露骨な性器崇拜教と如何なる関係にあるかに思い及ばざるを得ないのである。

モーゼの律法は念には念を入れて、古代ギリシャの処女に対して結婚前の男性に身を委ねることを重い罰によつて禁じている然して初夜権について領主及び僧侶の絶対的権力が宗教売淫と結びついて如何に可弱き処女の上にふるわれたか、それは又別の機会に述べることにする。

× × ×

古典に於ける絵像恋愛

絹 島 増 夫

異性の身体を彫刻した立像に恋着心を抱いて、之を汚瀆する一種の変態性慾即ちピグマリオニスムに類似したものとして茲に挙ぐべきは、絵像恋愛であつて、私は之に絵像性フェチスムスという名称を与えたい。

此の種の変態性慾に関する歐洲の文献はまだ十分に調査しないが我國の文献には之に関する挿話や小説を看出することが稀でないから茲にその二三を挙げて見る。

「古今集」の序に、遍照僧正の和歌を評して、「歌のさまは得たれども実少し。たとえば絵にかける女を見て徒に心を動かすが如し」とある。しかし単に美人の絵に見とれて心を動かしただけでは、まだ生理的であつて、変態性慾とは

云われない。さりながら、絵画に懸想恋着するものに至つては病的である。

「太平記」に、一の宮が源氏の優婆塞宮の女の絵像に恋いこがれて氣病いになつたとある記事は、或は例の小説的作品かも知れないが若しそれが事実ならば、慥かに絵像性フェチスムスと認むべきものである。

「洞院左大将の出されたりける絵に、源氏の優婆塞宮の御女、真木柱に居隠れて、琵琶を調べたまひしに、雲隠れしたる月の、俄かにいとあかくさし出でたれば、扇なうても招くべかりけりとて、撥を挙げてさしのぞきたる顔つき、いみじくうたけて、にほやかになる氣色云ふばかりなく、筆をつく

恐い、隠士千代鶴が石山寺に詣で、紫式部の絵像にこがれたことが描いてある。

「御伽百物語」に、京都の儒生篤敬が、名匠菱師宣師の描いた衝立の美人画に恋着し、その美人が画より抜け出して、篤敬と夫婦になつたということが書いてある。

しかし、此の伝奇は既に瘦啓という書生が、画美人と契ると云う支那小説に描かれている。絵像そのものに恋着するのでは無いが、その恋人の姿を絵に書いて愛情を継続したものには、「本朝二十四孝」の戯曲に、八重垣姫が愛人勝頼の絵像に向つて、「回向しようとお姿を、絵には書かしはせぬものを、魂かへす反魂香。名画の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お声が聞きたい」と怨じたような挿話もある。

してぞ書きたりける。一の宮この絵を御覽ぜられ、限りなく御徳の懸りければ、この絵をしばし召し置かれ、見るに慰む方もやとて、巻きかへしまき返して御覽ぜられるれども御徳さらに慰まず。(中略)あやにくなる御徳胸に充ちて限りなき御物思ひになければ、かたへの色異なる人の御覽じでも、御眼をだにもまはされず」とある。

江戸時代の小説には、絵像恋愛を一の挿話として、その中に描写したものも尠くない。例えば西鶴の「三代男」には、陸奥のある名家の女が、絵にかいた美男の姿に恋着して都に上り、その男にめぐり逢つて契りをこめたという筋の叙事があり、山東京伝の「安積沼」には、平清盛が嚴島弁天の絵像を

× × ×



女囚獄中記

—花井お梅懺悔譚—

小町右近

私は千葉で生れて、六才の時から他家へやられたんです。他家へやられて十五年、縁あって実家へ戻りましたが、十五年も傍にいなかったのですから、父は私を可愛くも思わなかったでしょう。勢い妹の方が可愛がられたんです。

私が酔月待合を開いたのは明治二十年の五月で、其時は父と私と峰吉、それから下女と下男とでした。妹は散々私に不義理をして家を出ていたのですが、何処かにかくれていて私の稼業を狙っていたらしいのです。それからまあ父と折合がかなかつたので、始終もめました。父は最初私が待合を出すのを嫌ったのです。ところが芸者を廢めて何か稼業を

しようという時に、やはり昔取った杵ずかだ、待合がいゝと勧めた人が多いので、其頃は私も分別はあつたとはいえ、二十四じやまいませんか、たかゞ女でしょう、つい釣りこまれて待合を開くことにしたんです。

十五年も傍にいなかったのですから、愛が薄くなつていたには相違ありませんが、しかし血を分けた中で、分け隔てをしなくてもいいと思うのです。父は一旦人手に渡したのだから、世間の手前そうしたのか知れませんが大体父も頑固私も頑固で、瘦せても枯れても土族の家に生れ、さむらいで暮らして来た癖が抜けなかつたのでしよう。

まず私がお客様の注文物、お座敷で女中の働き方、それに就て色々言ふと、お前のように一人ではばかり威張り散らし、勝手な事いつ

たつて、私はじめ利きはしないつていうのです。其の上父は乱暴でした。酔月について片肌を脱いでかゝつたのは私なのに、私が何か云うと、酔月の名儀人は私だ、何事も私がいゝようにするから構つてくれるなというのです。私はいくら情理に暗い女だからつて……

峰吉は以前は源之助の処にいた者なんです。あそこを失くじりましておん出されて、ひどく困つて身の置き処も無い。以前は何うにか暮らした者の子だそうですが、親にも別れ兄弟も無い男でした。で抱えたのですが、今になつて見りや私のおせつ介でした。兎に角不憐だと思つて抱えてやつたのですから、義理にも私の為に忠義を尽さなければならん筈でしよう。犬でさえ、ね、人には馬鹿もあり伶俐もあり、思うようには行きませんが、峰吉

は表面は旨いことをいつてました。私の為に出来る限りは尽すといつてました。で私は宅の事は一切任して置きました。私の時代には芸者は悪くいえばヤンバラでしようけれど、台所を覗くような客な真似をしないのがタデでした。

私は父と衝突して毎日のように言い合いをしました。親には勝てぬから終いには黙つて了いますが、腹の中の虫は納まりやしませし、じり／＼すると酒なのです。酒を呑んだり家を出たりするのは、私が悪い、しかし酒を呑む……のは父の加党人に峰吉があるからです。

峰吉は私の飛び出したあとで、福田屋のおかみさんに「酒は呑む、呑めば歩く、それで定つた人でもあるかといえは誰も無い、何処というアテなしの遊びに金を使つてゐるが金は自分が働いたように心得て有ればあるだけ使つて、始末がつかない。早く言や馬鹿でしょう、あんな女を主人としていた日にや、これだけにした財産が台なしになるつて言つたんですつて。」

「お父さんと紛争が出来て、家を出て了つたのはいゝ幸だ、私達も安心しましたつて。」
何というあくたいでしょう。

柳橋の家を売つた時の金が千五百円あつたのですが、それも父と妹が引き出して目茶目茶に使つてしまつたし、そうしては私を邪魔にする不情理つて、何処にあるもんですか。

すると突然父は二十七日の朝休業の札を掛けたじやありませんか。お前は着のみ着の儘の人間だ。おれのする事は指でも差せるかという有り様なのです。此の日の朝は芝居見物のお客様が五十人程見えまして、休業札を御覧になつて、こりや如何したのだと云われた時は、私は顔から火が出たのです。

私は死ぬ気でいました。八官町の隠居所に井戸があり、そこへ身を投げようとして、長谷川の主人と本阿彌さんに止められたのです。それからくさ／＼して、其方此方と歩く中に色々の考えが出て来る。又峰吉が憎くなつて来たのです。それやこれや、非常に腹が立つて来まして、ジリ／＼して来たのです。其頃は夏のとつつきで、いやに照りつけましたから、頭が一層こんがらがつて、お酒は呑んでいましたし、もう半氣ちがいでしたよ。

初めは自分だけ死のうと思ひました。が考えりや考える程峰吉が悪い、彼奴を残しておくには及ばぬと不図胸に浮んだのです。家内にこれだけの不和を起こさせ、私にこんな難

儀をさせてたゞ見てゐる奴なら生かして置いても為にならぬ。憎い、憎い、今に見ろ。これが私の一生の過りでした。

二

私の入獄したのは明治二十一年四月十八日でした。かねて覚悟はしてましたものゝ、まん更よい気味も致しませんでした。

「お前さんが新入りかい」

「さあ此処へお出でよ」

「ナニ愚図々々しているの、ソナ生意気な新入りがあるかい」

「お前さんは火つけかい、ちん／＼かい」

二番五十余人からの女囚に取り巻かれて、最初に質問されたのが、これでした。此時分の牢名主はあの女警部お勝、支倉さくらかつでございまして。牢名主は二人の女囚を小間使いとして使つて居りました。一人は原、一人は長谷川とかいゝました。二人を自分の両わきに置きまして、随分威張つて居りました。是はお役人様も大目で見えていらしたのでういます。「ハアお前さんが梅さんかい、女警部のお勝たア妾のヨツたぜ。憚んながら此の地獄で牢名主、ばかにしたもんでもないよ。何とか挨拶をしたらどう。さつきからつんとお済まし

でないか、此処は男をたらす場所とは違ふよ。」

でも私は黙っておりまして。何でも彼でもハイ／＼して。

時間が参りました。さア寝ようという段になりますと、面白いのでムいます。

布団は五布で、それを三つに折つて、ぐる／＼と念の入つたお柏に寝るのでムいます。

上には西国巡礼の負いずるのように、第何番某の用という文句や其他色んなことが書いてあります。それが五十余人一室に枕合せに寝るのですから、丁度めざしの行列のようです。枕が四角ですから、寝ている所を見ますと、四角い柱を二本横たえ両方から頭を並べたような体裁でございます。

寝方の順は、第一番の上座が牢名主、其両方から左右に別れて、年代の古い者から順々に下座に並べたのでムいます。

便所のじき傍ですから、ほと／＼困りました。臭いのはどうか我慢も致しますが、夜中何時でも其処へ来てたら／＼と音を立てるのですから……そして「新入りさん、掃除だよ」といいます。それから歌を歌わされました。歌わぬと締め殺してもかまわぬというのです。

三

私ははじめ洗濯工になり、次いで練玉工に転じ、機織工に移りました。監房の中では、看守も世話役もあつたものではありません。強い者勝ちで、犯した罪の重い者程豪ら者としていばり、そして尊敬されるのです。

鼻緒工の時分、皆の弁当に穢い物を入れてあつたので、看守に告げたら、女警部が先棒で私の足をかつぱらいハンカチで包んだ石で打擲され、頭へ鉄を突つ刺された事がありました。

減食ですか、左様でムいます、並の御飯はブリキの小さな金盃位ですが、減食というとお茶碗の丸さ位の物で二十三年頃の御飯は竹筒ぼうの中に入つておりました。それにお菜もつきます。お香の物三切れか六切れ、看守などはちつとも注意して呉れませんから、炊事場に働く者が適宜



にやります。で減食されて居る者も、自分の氣に入っている者には沢山やりますが、氣に入らぬ者には減食されていなくても、あゝ彼女なら少くともい／＼というような具合で、それは実に乱暴でした。

四

暗室は随分困るものです。広さは一間四方もありましょうか、下は板の間になつて、直かに坐つて居るのです。が、暖かい時分はともかく、寒い時分は中々坐つて居られたものでムいません。

今はなくなりました。が、昔寒稽古に、それも新橋や柳橋には沢山無かつたのですが、吉原の下地つ子などが、明けつ放した縁側へ出ましてね、膝つ小僧をむき出し、筑波風のビュ／＼吹く方へ向つて、鼓や太鼓や三味線の稽古をするのでしたが、一通りの辛さではない。太鼓を打つ者などは指の先きが割れる

のです。其手を水の中へ差しこんでやるのでしたが、随分酷いものでございます。しかも寒三十日の間だから切ない。がそれは三十日の長い間とは、え、夜だけの僅かな時間、殊にあかりがあるから宜うございますが三日も四日も真つくらな室で暮らすのですから寒いこと実に堪りません。起つて見たり、躊躇んで見たり色々をやつて、たまに羽目に凭りかゝつて見るのですが、まんじりともされるものではありません。それに外からは始終言葉がかゝります。其時は規則としてハイと返辞をするのですが、私は何時も黙つて居りました。呼ばれる程黙つていたのです。すると別条がないと思うのか、面倒臭いと思うのか、ことごとと靴の音をさせて行つてしまひます。

それから氣に入らぬ人が食物を持つて来ると喰べません。暗室といつても、呼吸のつけだけの穴がございます。食器を入れたり、又覗いて見る処で、それを受取れば仔細無いのですが、氣に入らぬ者だと受け取りません、すると「七号々々」と幾度でも呼びますが、私は返事をしない。しないと中を窺つて居りますが……。

屋根の上に来る鳥の声をきいて、あゝ夜が

明けたなと思います。食事を受取つた処で真暗ですから、探り手で受けて膝の上へ乗せるのです。暗室の味を知つた者はどうか知りませんが、切めの者だとたゞ泣くだけです。箸は逆もつきやしません手ずかみで頂くのですめくら、めくらだつてまさかこんなさまは致しますまい。御飯もお菜もごつたです、ごつたに掴んで口へ入れる、口へ入れて初めて今日のお菜は何だと知るのです。

五

病人はみじめなものでいます。食物にまで甲乙と毛色を分けるのですから、私も最初は驚きました。第一器物の汚いこと、私も虫を殺していましたが、みじめな目に逢わされている同囚の爲、上官が注意するようどうせ獄内で死ぬのですから、減食も手錠も暗室も恐れませんが、私はむら／＼としました。私は突つか／＼つて行きました。

ひどいのは後ろ手つこに縛り上げるのです。お芝居でする佐倉宗五郎です。同じぶらんこでも、学校でやるのならですが、牢のぶらんこは後ろ手つこで足は爪立て、よう／＼板の間へ着くか着かぬ位、身体をもがけば縄がメリ／＼締る、目が眩む、身体中がしびれる。

病監人は御規則で冬は布団が三枚ずつ着せられることになつてゐるのですが、それが看護婦の氣持一つで氣に入れば三枚の者へ四枚、氣に入らなければ三枚の者へも二枚、甚しいのは一枚あてがつて、文句をいうと、今死ぬ奴だつて用捨はしない、何を贅沢こく、此処はお前等の我儘をする処ではないぞといつて酷いじやありませんか、撲るのです。

榎田のぶですがね、子供のまんま、お嫁にやられて亭主を殺した、あの女も病氣してからは酷い目にあわされました。食物をやるにも、大小便を取るにも邪慳に扱つて、ちつとよいとお掃除をさせたりするのです。そうかという、自分の氣に入つた者には、寝起きの世話から、寝台のとりかえやら、豆にして布団も干してやりますが、氣に入らぬと濡れようと汚れようと一向構いません、其儘寝かして置きます。

荒川きみ江といつて、窃盜で這入つた十七八の娘がありました。可哀想に何ういう事情でしたか聞きませんでした、入獄後発狂して、だん／＼色情狂になつたのです。

それは本当におかしかつたのですよ。おかしいのはおかしいけれど、当人になつて見れば可哀そうでした。皆は面白がつて戸ばたき

して笑うのです。がそれが昂じて、暴れ出して手が付けられなくなりました。それを別室へ離してでも置くどころか真人間でもない氣狂いを、後ろ手つこに縛りあげ、そして庭の松の木へつるすのです。当人は夢中でヒイ／＼泣くの、ちつとも手を緩めません。撲つたりたゝいたり、見ていられません。

私が飛び出して行つて松の木から下ろしてやると私の膝へ取りつくのです。あゝ可哀そうに思うので、私はお願いしてきみ江の介抱を一人で引き受けました。六ヶ月程たつて其氣狂いは治りました。私は賞められるだろうと思ひの外、あべこべに「きみ江」と怪しい交りをしたような噂を立てられました。実に口惜しうございました。

六

何が辛いといつて、十中の八九まで煙草の呑めないことでしょう。酒に目のない人でも呑まれぬとか、呑まないとか覚悟をすれば、監獄でなくとも忍び得られるだろうと思ひますが、煙草だけは誰にだつて酒のようにいきません。私は酒の為に人の命まであやめたのですから、酒はつく／＼恐ろしいと考えて、夢にも見ぬようにしましたが、煙草は呑みた

かつたのです。看守さん等が呑むのを見ると引つたくつても呑みたい氣がします。それは私一人じゃない、その苦しさ憂さといつたら一通りでは無いのです。それが十日たつ二十日とたつ内に、煙草のことも忘れました。

それから初めて暮らす冬。北海道あたりに比べたら、何でもないでしょうけれど、外を冷たい風がビューと吹く晩に、膝小僧を抱えこんで眠むれないのも憂いものです、しかしそれも当座で。

十五ヶ年の間に二度ばかり雪責めにあいまして。此時も血の涙でした。明治二十六年の冬です、私と外に二人が雪掃除に當つたので雪も寒国なら粉のようだつていゝますから、寒さは激しいにしても扱いゝでしようけれど、東京の雪はびしょ／＼で扱いにくい、それに其雪掃除は三人で三日かゝつたのです。

というのは、煉瓦の溝、深さは私が立つて恰度乳首あたりまであるんです、其溝へ雪を放り込んで置いたのですが、長く斯うして置くと煉瓦が割れるというので、三人は其掃除役に当てられました。男なら工夫もありましたろうが、女だから初めは上の方からそく／＼取つていましたが、だん／＼手が届かなくなつたので三人共溝の中へはいつたのですよ、

堪らない、身体はぐし／＼に濡れてしまつたのです。掃除をしてから煉瓦を磨きました、あとで私は病氣になるし、一人は眼を潰し、一人は半潰れになりました。

それから三十一年でしたか、下肥汲みをしていづかりました。雲雀のチイタク空に鳴いている時分なら、のどかなもんだと洒落れてもいられますが、あいにくの大雪、いつも軒へ来る雀さえ足を縮め首を縮めて鳴いてるじゃありませんか、私は一丁程隔つた処へ担いで行くので、間にだら／＼上りの坂があります、坂の中途には笹簾と松林があつて雪が一杯なのです。芝居が好きでしたから、あんな道具立を見ると好い氣持でしたが、其舞台へ立ち現われたのが、下肥を担いだ私でしょう。雪道で足はつる／＼と、減食を喰つた後で疲労はしてる、私はへたばろうとしました。おまけに坂の所々に雪かきの人達が三十人ばかり居て、下肥を担いで行く私を見かけて、面白／＼に笹簾の雪を浴びせるのです。

七

下肥で思い出しますが、女警部の支倉勝が威張つていた時分は、皆頭が上らなかつた、役人まで一目置いていたので、それがお先棒

で私は始終いじめられました。或る時でした私が掃除口に立つてると、勝は肥を柄杓で一杯汲んで桶へ移すふりをして、それをまあどうです私の頭へぶちまけたのです、私は泣いて皆に洗って貰いましたが、獄中の獄とはこれなのです。

此の肥汲みは減食の罰を受けた者が、三十日間やるので、それから下駄の掃除、便所掃除という規則ですが罰が二回重なると六十日三回になれば九十日です。私は罰を喰つてやらされたこともありましたが、最初は罪亡しだと思つて願つてやりました。

辛いのは女の土方で

しよう、第一慣れぬ処へ、意地悪い相棒に遇つた日にやり切れません、後からこずかれでは肩も減入る位、目もまわりますよ。

たべ物は、以前は達者な人と病監の人と違いましたが、今日のところは一片に、朝はお味噌汁、昼は時の物、夏は馬鈴薯に豆、冬



は薩摩芋に切干、荒布に大根にしめ、それから茹藕かばんこで、これ位おいしくない物はないでしょう。晩は味噌汁。この味噌汁の冷たいのは誰しも弱っているんですよ。お汁は煮すごしてさえおいしくないのに、冷たくな

つてからじや本当にいやです。取締りや何かと七号はよく喰べ物の小言をいうだの、七号はぜんへ着くとじろりと見渡すのが癖だのと云われましたが、自分の為にはばかり云つたのではありません、意地汚ないぜんの上を見渡すのでもなかつたのです。

食卓は十人一組、五人宛向い合つて戴くのですが、大店の煤はきで屋飯を喰べるようなものでムいます。今申しました冷たい晩の汁は十人の内五人まで口をつけやしません。お湯だつてそうです、何しろ大勢ですから、土瓶でという訳にいかず、大きな桶へ汲んで来てそれから一杯づゝ汲むんですから、生ぬる

くなつていて余りいゝ気味はしません。夏はまあ一週間に一遍位鯨汁に鯨汁、冬も同様豚と馬肉、これを此上もない楽しみにしているのですから哀れなものです。正月の元日には餅が二片と数の子が出て、それから鮭の切肉と鰯のお汁が三ヶ月に一度つきます。

八

お風呂は一週間に一度の事もあれば、五日目になることもあります。夏は一日の内に二度も三度も身体を拭かせるんですね。一房二房三房四房とありまして、一番から順に入る筈なのが、強い者勝ちで、私のような意気地なしや新入りはいつでも後廻しにされるんです。

一番監一房と声がかゝりますと、どか／＼出て来ます、それで止りやいゝが、二番監三番監一しよに出て来て入り乱れです。取締りがこれ／＼お前はあとじやないかと咎めるようならいゝがこいつ等のような悪を一々成敗出来るかという顔で見えています。

去年の七月までは、号令で入つて号令で上つたのですが、十五人一しよに入るのでした、が、只今は三十人、電気風呂です。で一番も三番もどん／＼裸になつて飛びこむ、熱いと

いう者があれば、温いという者もある、喧嘩です。

髪は兵庫といつて、紙よりで前をしぼつておくあれです、まるで桑名屋徳藏の芝居に出てくる島の女そつくり、おまけに筒袖だから猶似ていて。一週間に一度日曜日に油が出ます。以前は髪を洗うのは一年に一度位でした。月に一度や二度洗いませんとねえ、縁起を担ぐ訳ではありませんが、月四回の巳の日にはみを洗うのだといつて、女は髪を洗つたものです、何ぼ監獄へ入つてゐるからとて、年中ざんばら髪、火をつけりや燃えるようないゝものじやありませんまい。

髪を結うのは自分です。万事自分の事は自分でするのですけれど、片手が無いとか病気だとかいう場合には他人に結つて貰うんです。

九

罰のいろ／＼を申し上げましょう。

欠伸をしたつちや減食、役人を睨めたといつちや減食、二言目には減食ですが、考える減食位いやしい罰はありません。減食すれば当人は弱つて、二度と罪を犯さぬようになるだろうとの考えかは知れませんがさびしい

ものです。

暗室の事はおはなししましたね。

それから窄衣さくいです。窄衣というのは革で胸をギユツと締めるんです。それは、肌へじかに掛けてその上から着物を着せるのですが、男でも一遍で懲り／＼するのがあるそうです。昔は棒鎖ぼうさというのがあつたそうで、棒鎖にかゝつて二日三日、一週間と立たせられると腫れるので、足袋も股引も破れると聞きました。無論男囚の罰、女囚の方にあつたか如何かは聞きませんが、此窄衣は殆んど棒鎖でしょう。何分直接に肌へ革を掛けて平気で歩く者にはもう一つ、もう一つと革を順々に掛けて／＼締めるのです。すると身体が動かなくなる。医者が附いてますが、どんな剛情者でも様子がかわりますから其時は解きます。女では山口ツネが六七度かけられました。

性は善ですから、誰しも二度と来たがつて罪を犯す者もない筈ですが、よく来ますよ。

淫売が一番多く次ぎに酌婦です。どんな罪かというと前借金を踏んだとか何とか、女郎にもこれが多いのですがそれから埼玉あたりの工女中には窃盗もあります。がやはり前借を踏んで、踏むのじやない、勤めが辛くて逃げる

捕まつて借金踏み名とされるのが多いのです。

人殺しは私位でしょう。放火は少ない、あとすれば恋の為です、支倉勝のような強盗もあります。勝の外に名高いのは内田マツ嬢のお政です。女で名高い拘兎もあります。本所に蚊がなくなれば大晦日、あすこばかりじやありません。市ヶ谷も本所に負けない蚊の酷い処で、溜つたものじやないのです、規則で七月一杯は蚊帳を吊らせません。蚊に攻められて夜も落ち／＼眠られぬ位辛いことはまたとないでしょう。樺戸という処は蚊がひどくて、その囚人は蚊に食われて手足を腐らした者が多いそうですが、蚊に責められるのは看守に責められるのと変りません、人によつて腐るんですから、手首足首なんかまるでかさのようになりましてね。

羽村京子さん

あなたから頂きました黒井珍平氏に対する反駁のお手紙はスペースの都合で四月号に掲載します。尚次号の原稿は至急御送付下さい。

小坂多美枝さん

女囚私刑体験記その二の生々しいリアルな表現には感を打たれました。引続いて続篇の御送稿をお待ちいたします。

(編集部)

悩ましのサディズム

森 山 美 歌

妖しい香気を吐く毒のある花の咲いている私の限り無い性の神秘への憧憬。私は十二月号にロマンチックなサディズムと云う短文を書かせて頂いたけれども、それは私の愛慾の露出症的表現かも知れないわ。でも快樂には限度というものがあるか知ら？ 行いました生真面目な夫婦が隣室の姑に気兼ねしつつ傍に寝ている子供の寝息をうかがい乍らの十分間と、情痴の甘い夢に酔い痴れてありと全ゆる戯れに悶えのた打つ歡樂と較べる時、そこに皆様は差異をお認めになる事が出来まして？、それと同じ事。そしたら、出来る方は何も抑える事もなく仕たい放題楽しむ方が余程幸福というものじゃないかしら。

だつて誰にも迷惑をかけるではなくその人達だけの秘密の世界の出来事なのだから。ただ私の性の倫理は私達の環境から、生活から出発してその範囲内の、最大限を楽しむという事なの。だから健康を害する迄やったり、怪我をしたり余りにも不潔だつたりそんなのは大嫌い。飽く迄艶かしく愉しく、常に馥郁としたロマンのヴェールに包まれた情痴、私達だけの秘密の快樂の花園——之が私達の生き方です。ですから陰惨なものつて好きませんわ。

悩ましい残虐のけだるさ。でも、肉慾の最高のものは相手を苦しめ恥しめて遊ぶ事ですもの。又はそうされる事ですわ。あれなんて快樂のほんの初歩のもの。丁度支那料理で云

趣味生活と文化

田 中 芳 生

趣味と云えば非常に上品に聞えるが、それが、食慾及び性慾に其の本源を置くと云う事は誠に興味ある事柄である。そこで本誌に乞わると、儘に自分は其の事に付いて少しく述べて見ようと思う。

元來趣味と云うものは全然それが美慾からのみ出発して居なくてはならないものなのであるが、多くは単なる興味と云う事と同一視され、若しくは混用されている。

これは非常な誤りであつて趣味と云う言葉と興味と云う言葉は劃然と區別されて居なければならぬものである。之は英語で云えば直ぐわかる事で趣味は taste (テースト)

興味は interest (インテレスト) である。

テースト、インテレストと云えばハッキリ異つた意味である事がわかる。であるから絵画に趣味を持つとか音楽に趣味を持つとか云うのは適当な使い方であるが、狩猟に趣味を持つとか角力に趣味を持つとか云うのは全然誤りである。

何となれば角力に於ける勝負、狩猟に於ける獲物を打ち落すのそれは全然美慾とは關係なく単なる興味から出発して居るからである。

故に狩猟に行つても自然の美を見るとか角力に行つても其の男性的肉体美を見るとか

えば前菜位に相当するつまらないものですわ。

男だつて一人より二人、二人より三人と多い方がいいのは快楽の倫理の常識ですわ。私は彩色の絵を持つてるけど、数人の男が一人の女性の全ゆる所の快感帯をめぐり専門に受け持つて献身してるといふ凄いのなの。どの様に道心堅固な貴婦人でも長谷川一夫や海老藏の様なきれいな男数人に裸にされて愛されたら「精神」なんていくらえらそうな事云つたつて身体が云う事聞かないわすぐにしびれてきて、ほかほか燃えてきて、あとは云わぬが花。

バンドーラの筐は私達人類に未知と憧れと夢と希望を与えてくれました。そして私は十二月号にあと一人意になつた男性が欲しいとさゝやかなる願望を全智全能の神に祈つたのでした。そして、寛容なる神はヴィナスの使徒美歌に一人の男性を授けて下さいました。

三吉——之は私が以前から飼つてゐる奴隷。土曜日の午後から月曜の朝

迄は私の寢室につながれている人間の顔を持つたけだものなのです。それ以外の時は彼は人間に立ち返り十九貫のスポーツで鍛えた体を濃茶のダブルに包み、大学出の青年社員として何喰わぬ顔で日本橋の大きな商社会社に勤めてますわ。こつぱいすわね。先々週の土曜日に正男を初めて私の家に連れて三吉の存在を知らせ正男をも私達のグループのメンバーに仕上げてしまいましたの。

× × ×

勿論三吉を見せる前に私と正男は数回あつてますわ。私の技巧の前には正男は完全に私の虜になつてしまいました。その場面の写真や絵を見せ、本を見せ、そして三吉との事を面白おかしく話して聞かせましたの彼がどの様に興味を持ち期待したかは私達の行動で知る事が出来ましたその修技のあと正男を私達の密室に案内したのです。

土曜の午後、いつもの様なあの愛撫と戯れのあと三吉を犬の様に四つん這いにさせると革で作つた手枷足

云うのなら全く美慾から出発するのであるから趣味と云い得るが、勝負のそれや獲物のそれは決して趣味ではなくて興味のそれである。

斯く興味と趣味とは全然其意味を異にしたものであるが要するに趣味の対照なるものは必ず純美術品或は美術的なもの又は自然でなくてはならないのであつて、悉く美術的な要素を持つものでなくてはならないのであるから趣味の対象と云うものは実に其の範囲が広い。

而して如何なる機関を通じてこれ等のものが味わられるかと云うに、それは主として眼と耳と通ずるものが多いのである。音楽にしても絵画にしても眼と耳とから入るものである。

此の総べての趣味の源泉である所の美慾は何から出発して居るか云うのに、それが

性慾と食慾と云う人間の二大根本の慾望から出ている。此の事は誠に興味深い事である。

而して此の美慾が性慾食慾の後に発したと云う事は、原始人類の歴史に徴して見れば明かな事実である。原始人類は他の動物のように生きる為めの食慾と子孫を作る為めの性慾によつて生きていたのである。食物を採らなければ人間は生きて行かず生殖を行わなければ又悉く死滅してしまわなければならないからであるその二慾が最も根本的なものである事は明かであろう。然し乍ら人間の慾望は何時迄も一ヶ所に固定しては居ない。一つが満足されれば更に次の慾望が生ずる。しかもそれが向上し洗練されてゆく。斯の理由に依つて最初は単に食物に依つて満腹し、生存を続けて行く事に、或は単なる機械

枷をはめ、首輪につけた鎖で柱につ
ないだのです。それだけでなく緋の
腰紐を開いた口に喰わえさせて顔を
柱にぐるぐると嚴重に結わえつけた
のです。顔を動かす事が出来ません
何故こうしたかつて？それはあとで
解りますわ。それから——もう一つ
の首輪があるのです。それは直径一
寸位に締められる革製のもの。勿論
鎖付きですわ。それを何処にはめる
かは御想像願います。とに角私が彼
を犬の様に這わせて散歩する時は専
ら之の方を愛用してますの。

私は此の鎖を持つて彼のお尻を蹴
り飛ばし鞭打ち乍ら家の中を散歩し
ますの。その日もやつぱり之をはめ
て鎖のはしを別の柱につなぎました
柱の一米位の高さの所に最近環をつ
けましたの。之で料理すべき三吉の
態位ができたのです、その頃玄關の
呼鈴が聞えてきました。丁度六時か
つきり。正男の来る約束の時間です。
三吉はギョツとした様に哀れな恰好
のまんま目をぱちくり致しました。
且那でも帰つて来たのかと思つたん

でしよう「旦那らしいわ。見つかつ
たらお前殺されるよ」

からかい乍ら私はガウンを着ると
正男を迎えに立ち上りました。

正男は派手な紺の背広に臘脂のネ
クタイというダンディなスタイルで
私と一緒に此の寢室に入つてきたの
です。桃色の照明でなまめかしく浮
かび上つた密室。私は此の部屋を出
る時三吉の体の上に私の緋の長襦袢
をかぶせて出てきたのです。私達は
部屋に入ると長い長い抱擁と熱い
く火の様な口吻けの雨。

「どう素敵な部屋でしょう？ルイ王
朝時代の貴婦人の拷問部屋に似てる
と思わないこと。その長襦袢の下
に奴隷が居るのよ。あさましい姿を
あとでゆつくり見せてあげるわ」

そう云い乍ら私達は裸になつたの
です。そしてゴム引きのレインコー
トを絨毯の上に敷くと私は強烈な催
淫薬の入ったキューラソを持つて来
て腰を下しました。首から乳房にか
けて私はこの甘いお酒を注ぐと正男
はシェパードの様な舌力で私の体を

的な生殖作用に依つて生存を
續けて行く事に満足して居た
のであるが、次第に其の慾望
が拡張されて食べるという事
と生殖という事だけでは満足
されなくなる。

単なる食慾からならばどん
な風に其の食物が料理されて
あつても又どんな風につけて
あつても差支ない訳である。
腹さえ満ち生命をつなぎさえ
すればいいのである。

然るに単に食べるだけでな
しに眼で見ても美しくする事
を欲し、刺身につくるとか、
それにつまを添えるとか、又
赤い刺身ならば白か青の皿に
盛るとか、食器迄も苦心する
ようになる。これは全く眼の
為め食物を舌以外に眼で味
うのである。こうして総べて
の食物と云うものが発達し料
理法の進歩と云う事になつて
来る。

斯く食物は元来全然味覚で

味うべきものであるが料理法
から食器の発達まで及ぶのは
全く美慾からである。そうし
て美慾は単なる食物ばかりで
なく次第に其の範囲を拡げて
其の飲食する家屋、家具其の
周囲の風景、さては給仕人に
迄及んで来る。更に百尺竿頭
一步を進めては、適当な温度
に温めるとか冷やすとかし、
同時に音楽を聴きながら食べ
るという事になる。斯うなる
と食慾は主体ではあるが、美
慾が非常に加わり、味覚の外
に視覚聴覚温覚等迄も含んで
来る。

一方性慾の方は如何にと云
うに、始めに於てはたゞ単に
その生殖器関に於て生殖作用
をだけ営んで居ればそれで満
足されて居たのであるが、是
もそれだけでは満足されない
即ち単なる生殖の為めのみ
あれば、其の器関さえ完全で
あれば例え眼が半分潰れて居

へろ／＼と舐めるのです。素晴らしいカクテル。この様なカクテルを何べんも作って飲ませると正男は身も魂もすっかり溶け爛れて来ました。私だつておんなじです。やがて私は立ち上ると部屋の隅へ近づいて長襦袢をバツとひんめくつたのです。そこにはさつき申上げた見るもあざましい姿の三吉が現われました。恥知らずな姿を同性の然も初めて逢う正男の前に曝して——顔をそむけ様にも縛られてるのでどうにも出来ないのです。

「おいけだもの！」私は正男を抱き締め乍ら片足揚げて三吉のお尻を踏みつけました。

「この方は今日からお前の御主人になる方なんだよ。素晴らしい美青年でしよう。お前の様に不恰好な豚じゃないのよ。お前のその顔は何なの。ひしやけた蛙みたいじゃないか。正男さんのきれいな顔を見るとげつぶが出そうだよ。お前なんか、そうやって死ぬ迄居るのが身分相応と云うものよ」と

三吉を嘲りののしり乍ら、見ている前であられもない遊戯を楽しんだのです。

そしてその遊戯が一時間ばかり続いてから、三吉の唇に、顔にベツベツと唾をひつかけると正男も三吉の顔をつねり、なぐり鼻をつまみそして又ベツベツと唾をかけるのです。それを私は足の裏で踏みつけ顔中こすりまわす。見る／＼三吉の体は私達につねられ、噛まれて紫色に、又赤い歯型で染めあげられてしまいました。三吉は苦痛にう／＼う／＼とうめくのです。「このでぶが一寸こうしてやるとすぐけだもの並みに目を細めるのよ。よく顔見てごらん」と云い乍ら私の手指は器用に伸びるのです。すると面白い様に三吉の表情が変るのです。とう／＼私は彼の顔を縛つた腰ひもをほどいてやりました。やつと三吉は物が云える様になつたのです。私は矢庭に立上ると鞭を手にしてびしりつと彼を続けさまに鞭打ちました。

「やいこのデブ！お前は私達のけだ

ようが、足が半分足りなからうが、かまわない訳であるが中々そうも行かない。即ち美慾が加わつて来て、顔も美しくなければならず、髪も好くなければならず、体格も立派でなければならず、声も好くなければならず、更に着物も美しくなければならぬと云う具合になつて来た。此れは男子の方からのみ云つたようであるが、婦人に於ても同じように美慾から男子を求めるようになる。そうして生殖機関以外に視覚の上から所謂美人、美男子を求める事になる。又声は聴覚の美を求めるのである。

又単なる性的行為ならば如何なる所に於て行われても満足されるわけであるが、次第に美しい方へ進んで家屋を撰び、更に部屋を撰び、又温度迄快いものが撰ばれるようになった。

此処に非常に面白いと思うのは食慾は料理や器物が進んで如何に食慾が満足しても食べなければ満足されないが、性慾に於いては生殖作用を別にして美慾だけで満足する。美慾である程度迄は性慾の代理をする事が出来るという事である。例えば人は己れの恋人の姿を見、恋人の声を聴いて居れば必ずしも生殖行為をしなくても美慾は勿論満足し性慾さえも或る程度迄満足する。所謂プラトニックラブがそれである。

これが重要な点であつて、これが裸体芸術恋愛文学の生命ある所である。例えば美しい裸体を対照とした美術品即ち彫刻や絵画は直接性慾の対照として見る事は出来ないが十分の美を味う事が出来、その美感の根柢に性慾があるのである。

即ち簡単に潜在意識で性慾

ものなんだよ。一生こうやつて鞭打たれる奴隷なんだよ。何だいまぬけみたいな面しやがつて」

そう云い乍ら私は三吉を所構わず打ちすえるのです。正男も面白がつて三吉の顔を蹴り又鞭打ち時々私に抱きついては口吻けするのです。

そして翌日の日曜日の午後は三吉を例の様に後手に縛り滑車で吊り上げ又両の足もV字型に別々に広げて吊り上げ。口紅で三吉の顔や体に丸や色んな絵画を淫らに書き正男の禪で片目だけ隠して頭に鉢巻きし、私のよこれたズロースを口に押しこんで猿くつわをかませ。——私達は盛装して銀座に出たのです。西銀座のサヴォイヤで香り高いコーヒを味い乍ら、あの拷問部屋に三吉がたつた一人でぶら下つてると思うと愉快で愉快で堪らないのです。ナンシイで血の滴る様なビフテキを頬ばりながら、今度はどんな方法で、あのデブを苦しめ様かと想像をたくましくして相談するのも楽しいものでしたわ。

x x x

此の様にして私達三人の妖しくも淫らな遊びが毎週土曜から日曜にかけて展開されてるのです。私の今の願いは私の様なサドの女性が欲しいのです。青白い焰を胸に秘めた濃麗な、たくましい年増の美人。私はミユツセのガミアニの様にその方と同性愛になりますわ。そして二人で三吉と正男を拷問したいのです。そして又変化のある素晴らしい遊戯が展開される事でしよう。読者の中に東京の方で私達の仲間になりたい女の方は居ないかしら？健康であくまで悩しくセニヨリタの情熱を秘めた耽美主義的サディズムの女性は是非私にお便りを下さいまし。人生のよりよき楽しみは私の肉体と精神から与えられる事でしよう。

私はその方と一緒にたつて、美しい痺れるような夢の天国の建設に努力したいと思うのです。

が満足されるのである。併し美術品を鑑賞する場合に直接性慾を喚起しては不可である。静かな鑑賞は出来ないが美慾を満足させる根底には必ず性慾が其潜在意識として働いて居るのである。此の性慾の潜在意識なしには決して絵画彫刻に於ける人体、文字に於ける恋愛美と云う事は感じられないのである。又実際の美人を見る際も、自ら根底には性慾が働いているのである。誰でも美人を見ている人に汝は性慾を起しているナと云えば、ナニそんな事があるものかと答えるが、潜在的には性慾が働いているのである。

斯くの如く食慾でも性慾でも必ず美慾が加わる。而して美慾によつて美を味わうのは趣味であるから一見遠い様な性慾と趣味とは関係が深いのである。

的生活と云うも美慾を満足せしめ、趣味に生きる生活であるが、性慾と食慾とに其の源を発し其の根底にそれが、横たわりそれが向上し、洗練されて始めて実現されるものである事を忘れてはならない。

趣味は科学と共に文化生活に重要なものである。生活を科学化する事によつて文化生活が行われるのである。

しかしその趣味の根底には性慾と食慾とがあるのである。人間の二大根本的慾望は遂に文化生活の根底にもある唯それが向上し洗練されて、やがて最高の文化生活、理想の文化生活に到達するのである。

この意味に於いて文化生活の元は趣味生活に根ざし、趣味生活の根底には人間の二大本能が大きく影響しているといふことがお分りと思う。

硝子便所

(Ta bovet de vesse)

芳野眉美

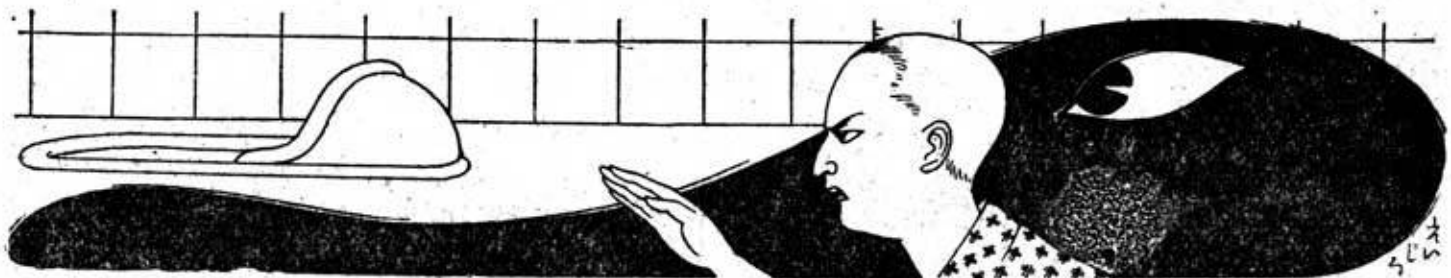
1

東北線の列車の中で、私はぼんやり考えていた。何故東京から飛び出してしまったのだろう。東京の方が有名な大学はいくらでもあるじゃないか。家の人達の反対を無理に押し切って出て来たものの、はたして合格出来るかどうか。私はまた新しい不安におののいた。が、とにかく私は東京にいるのがいやだった。たえられなかったのだ。あのうつろな一日一日、机に向っていったい何をしたいのか、私はいらだたしかった。無闇に腹だたしかった。やる事が何もないのだ。自分が生きている事すらめんどくさかった。何か知らぬ、たえず恐怖が私を襲った。私は家を飛び出した。そして悪魔に魅入られた様に省線の走る音にひかれていった。死ということが、これ程身近に感じられたことはなかった。私はつかれている休みたかった。無心に母親の乳房にすがる幼児がうら

やましかった。憎らしかった。やにわにその幼児を突き落したい衝動にかられた。私はすがりつきたいのだ。

友達は受験で頭が一杯らしい。私が話しかけてもろくに返事をしない。私はどこでも孤独らしい。寂しい。今にも降り出しそうだった空から大粒の雨が落ち始めた。窓をしめる音がとどころで聞こえる。雨は本降りになった。外の景色がぼつとかすんだ。私は車内を見ているより仕方なかった。きたない汽車。この古ぼけた汽車にふさわしい様に、受験の学生と労働者風の人達ばかりだった。その寒々とした空気——早く仙台につけばいい。列車はのろのろと雨中を走っていた。私は意味のわからない恐怖におそわれた。たえずおののいた。

私の目が私の横にうつた時、私はハッとした。そこに女がいる。女は化粧していた。決して美しくはなかったが、厚化粧の見るからに肉感的なその女は私のひしがれたあわれな心をなぐさめるのには十分だった。この車内に似合わず美しい和服姿は私の心をわきたたせた。そし



て、私はなんのあわれみもなく捨てられていく薄いやわらかな紙を私の胸一杯にだきしめたいと思つた。真赤な口唇をふいた紙、草履でふまれた紙。駅員が無造作にくずかごにはき寄せるのを、どんなにうらめしく眺めていたことか――

私はねてしまつたらしい。汽車はまだ走っている。私は便所にたつた。私がドアの前に立つた時ドアは内からあけられた。私はぎくりとした。あの女――私の顔を見るとほゝえんだ様だつた。そんな気がした。私はあわてて入つた。急いでドアを閉めた。そしてあゝ、なんという偶然の恐い事だろう。そして、なんという人間の弱さ――

私は見た。

真白なタイルの上に、まるでチューリップの花の様にまるまつた紙がかすかにゆれている。私は夢中で手をのばしたほのかなしめり、私は接吻した。

何を書きだしたかわからなくなつた。少し気を落着かせよう。あの時の強烈な感動は、なんと云つて説明したらいいか、私は言葉を知らない。私は言葉をうらむ。唯、そのまるまつた紙が、如何に私の目に美しくうつつたか。そして、その時の私の心が、どんなに目に見えぬ恐怖におそわれて、すくいを求めていたか。

2

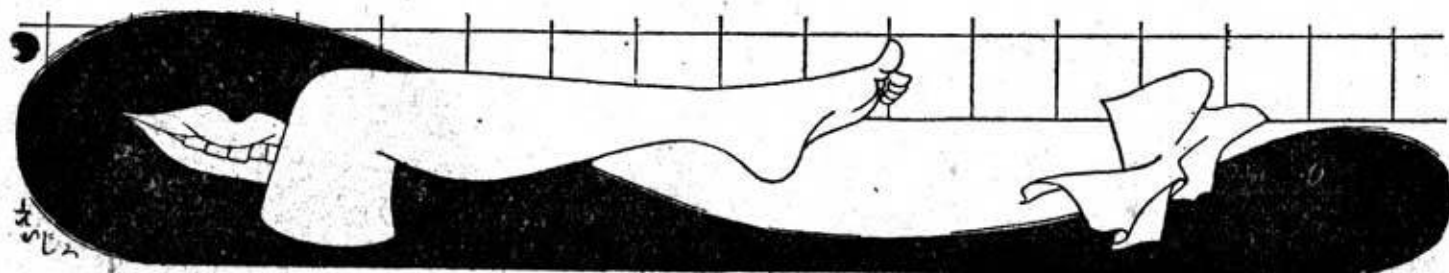
あれから二月たつた。そして五月合格した友達の身に

比べて、なんとあわれな自分の姿だつたろう。試験の答案用紙を見つめながら、幾度あの紙に接吻しただろう最早うすれ去つた女の香を求めながら、何度かきまわつたか、東京に帰つた私の手には、ぐちゃぐちゃにちぎれたあの紙がしつかりにぎられていた。そこには、ただ、やわらかさだけが私を救つてくれた。

雨のそぼ降る夕暮、ある盛り場の劇場の前で、私は自分の分身を見つけた。私は立ち止つた。ぼろ／＼の衣をひつかけた一人の男が、何か紙をたべている。まるで、はほうりこみ、のぼしては食いちぎる。そして、男はよろよろと雨の中を歩きだした。やがて駅の女便所に消えていった。彼はそこで何をしたらう――

私はおかしくなつた。そして悲しくなつた。自分があわれで泣きたくなつた。だが、その夜ふけて、私の足はとある公衆便所の前で止つていた。

雨はやんでいった。私は戸をあけた。真暗で何も見えない。そのせまい暗黒の世界に立つた私のいいようもない恐怖と歎息。破れた小窓から風がつめたくあたつた。その風だけがこの世界での唯一の生き物だつた。私はポケットから懐中電燈をとりだした。手がかすかにふるえている。私は今未知の世界に入ろうとしている。その世界は私にとつて如何に作用するか、そこに始めて私が生を感じるか。その世界はこの指のわずかな動きで現実に私の目の前に現れるのだ。私は、見えないドアにもう一度



ふりかえった。
私はつけた。
こわれた便器。
赤黒い血痕。
水。
尿はいまにもあふれそうだった。私はしやがんだ。そして、手をそつとひたしてみた。つめたかった。胸にじんとひびいた。

便器よ

あなたは

御婦人の秘密を知つていらつしやる――

3

何故私の足は便所の前で止るのだろう。何故私の目は便所に入る女の姿にすいつけられるのだろう。

予備校など行きたくなかった。だが、家に居るよりはましだった。行つていれば自然に時間はたつた。それだけ時間から強迫観念を受けるのが少くなる。唯身の安定の為、私は予備校に行つた。

走る電車の窓から私は外を眺めていた。真昼である。私はふと。公衆便所に今一人の女が入ろうとしているのに気づいた。私はあわてて次の停留所でおりてひつかえた。女はまだ出て来ない。私は静かに戸をノックした。

内から確かに反応がなかった。私は待った。やがて女は出て来た。和服姿の年増だった。

それは水洗便所ではなかった。わずかに尿が底に見えた。そして、そこにひとつの紙が浮いていた。私は便器に腕をつつこんだ。しかしなか／＼とどかなかった。私はぎゅつと顔を便器の中へ押し込んだ。新しい無気味な快喜ともつかぬ旋律が私をかすめた。犯罪と道徳がごつちやになり、神と悪魔がその位置を交換したみたいな気持だった。

私は思い出した。

半分朽ちたアパートの階段を登つて、暗い廊下に立つた私の前を、しどけない寝巻姿の若い女があわてて通り過ぎた。女は黒壁の中に消えたが、それは便所だった、そこに一人の少年がいたので友達の部屋をたずねるために声をかけようと思つた。が、ふと気づいてみると、その少年は女便所の戸にぴたり顔をつけたまゝ、私の存在さえ気がつかないのだ。私は奇妙な幻想にとらわれた私はその少年を見続けた。やがてその少年は着物の裾を気にしながら出て来た女と入れかわりにドアの内に消えた。私は近寄つた。そして、そこに小さな穴を見つけた。予期した通りだった。私は見た。少年は棒立ちになつて便器を見ていた。

私はその時、激しい怒をおぼえた。何故だか知らないそして今、私は楽しい何故だろう。



4

新しい奇麗な便所なら古典的な美しい夢を。こわれたきたない便所なら悪魔的な美しい夢を。私はうろつきまわる。そして、私はそこに私が生きている事を知った。それは誰もが知らない私の世界だった。脳がないナメタジウオの世界だった。しかし、私は不満があつた。何かしら私の世界はつめたすぎる。そう思った、あまりにも空想的現実だった。そして女がいなかった。あくまで仮空だった。どこか安定したところがないものかしら、もつと美しく夢を持たせてくれるところはないのか。

省線のある駅で私はあるにおいをかいだ。私はふら／＼とそのにおいに導かれた。私はぎくりとした。女便所のガラスに、女の黒い影がうつっている。それは肉体だった。現実の「女」だった。そして、その美しい幻影を私は失神した様に見つめていた。やがて影は消え失せた。

ドア、あなたは、なんていじわるなんだろう。あなたのかげで、その御婦人は何をしているの？

ドア、私はあなたを殺したい。

あわただしく階段をおりて来た一人の美しい人がいた。あまり若くはなかったが、その上品な身なりは、おもわ

ず胸さわぎをおぼえさせた。その人は便所の入口でつと立ち止った。この駅の便所は男女共いつしよだった。みるみる当惑した表情が、その美しい顔をよりいつそう美しくさせた。その人はあきらめたようにひつかえした。私はがっかりした。

が、その人は階段の途中でまた前よりあわてた様子で便所に消えた。私はおもわず入口にへばりついた。そして一歩一歩戸に近ずいた。そして、その人の出てくるのを待った。

私はそこで何を見ただろう。使用していないあの人の紙が、便器一杯にまかれてあつた。私はしばらく呆然とつたつていた。それは美しかった。その紙の下の秘密のほのかな香を味わった。すぐにこわす気がしなかった。私は一枚紙をめくった。そしてまた一枚―あゝ、そこには―

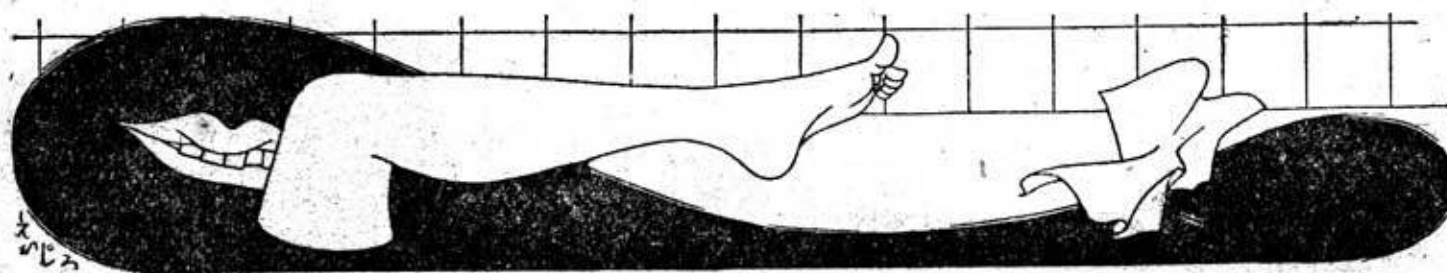
真赤な細長い紙のかたまり。

湯気が―赤い血が私の口からぼとりと落ちた。

5

私はどこまで行くのだろうか。そして今、私はどこにいるのだろうか。私は精神病患者なのか。そんな事はどうでもいい。私は、女のあたたかい尿がのみたい。ほしい。ほしい。

私はむさぼり読む。そして、手紙を書く―貴社の座談



会に出席されたコブラグニアの女性の方を紹介して下さい。

その返事―

由来こんな性癖におち入る人は、素質はすぐれており、いわゆる頭が良い人が多いのです。同一の傾向として、一つの事に熱中し、深く深く入りやすい。どうかそういった熱情を、健康な外の仕事に導いて昇華して下さい。出席された方は、本人の御希望で、住所はお知らせしない事になっています。

勝手にしやがれ。と思う。昇華出来るぐらいなら、恥をさらして手紙など書くものか。私はゆううつになる。

6

私はさまよう。夜の街を。夜は、私にとって最良の友達だ。夜が来ると私は歩きたくなる。あれから、私はあの駅の便所にはいかない。自分がなんとなくかわいそうで、あの便所を見るのもいやになった。

何政こうも女の尿にひきつけられるのだろう。私は考える。幼児の時代は殆ど皆尿尿の心酔者だという。口唇で吸いとる快感について排尿する快感と排便する快感とを覚える。確な事だと思う。が、何か私にはものたりない。幼児の潜在意識がそれ程激しいと私自身思っていない。

7

私の見たものは、女の白いお尻だった。

暗い小さな便所のつめたい空気をふるわせて、真白なお尻は輝いていた。その皮膚のすべ／＼としたやわらかさ誰も見ていないと思つてゆう／＼と用をたしている女はなんと魅力あるものだろう。私はじつと見つめていた。私はあまりにも戸に近づいて、中を凝視している自分に気づかなかつた。幸いに、この小さな便所は、私以外誰もいなかった。

女は出て来た。そして、戸のそばに居る私を見て、何かはずかしそうな顔をした。

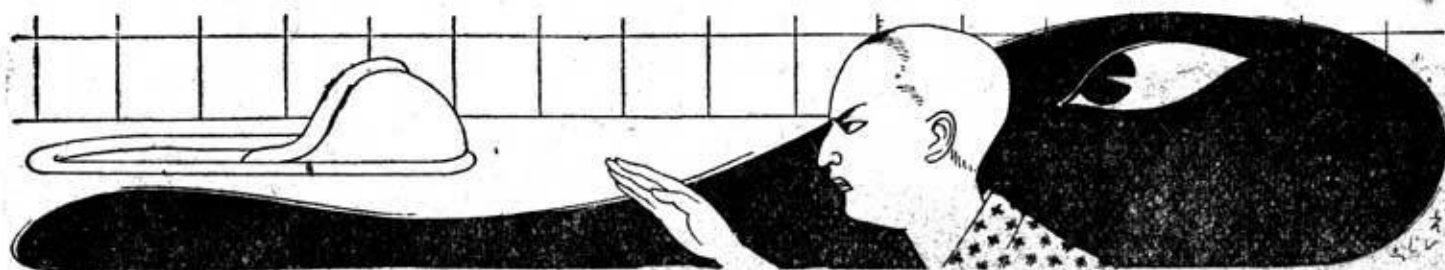
私は便器の中に手をつつこんだ。何がまつているのだろう。液体は小さな粒になつて水にちつた。何かやわらかいものにさわつた。おもいきり引つぱつた。

それは、女のズロースだった。

もう長い間水にひたつていらした。そこには、なつかしい女のおいはなかつた。ひろげてみた時に、二つ三つ落ちた赤い綿の切れ端と、大分いたんだ薄黒いきたないこの薄い布を、いつまでも手に持っていた。

そこに何かあつた。何もなくても、それは女のズロースだった。

私は、急に自分がおそろしくなつた。何か知らない、激しい脅迫観念が私をおそつた。犯罪をおかしたんだ。



私はそう思った。ただそう思った。理由はなかった。あわててズロースを便器の小さな穴に押しこんだ。そして私は逃げた。うしろから、あのいやなポリスが、大声をあげて追ってくる気がした。私は走った。走った。私は気がついた。どこの焼け跡にいるのだろう。どこかの街なのだろう。遠く、盛り場のネオンが夜空に消えていた。星はなかった。

私は石に腰をおろした。ぼんやり夜を眺めていた。

8

つめたい風が私にあたつた。つめたく星が私を見ていた。夜空はあまりにもつめたかった。

灯がもれて、私ははつとした。が、それは台所からだった。私は待つている。新しい家が出来て、私は一つの発見をした。それは、道路に面して便所があり、その下の小さな窓は、透明なガラスだった。そこで、私は、たま／＼、紙の音を聞いた。

今夜は、なんて寒いんだろう。私は待つていた。一匹の猫が垣根から首を出した。そして、私を見ると、甘える様になった。私に近寄ると、私の着物の裾をもたげて下駄の間に入ってしまった。猫ちゃん、寒いかい。私は話しかけた。私はしやがんだ。

裾から首を出して、猫はたまに外を見た。道を通る人が、何度もふりかえつて私を見た。おかしい人だと思っ

ていた。

何かあく音がして、灯が見えた。私はいそいで猫をだきあげると、垣根に近寄つた。

白い便器が見えた。そして、可愛い二つの足が見えたしやがんだ。

私は猫をしつかりだきしめた。

私はうろついた、ようしやなく吹きつけるつめたい風も、寒々とした周りの景色も、私にはなんの感傷もおこさなかった。

私はどこまで行くのだろう。

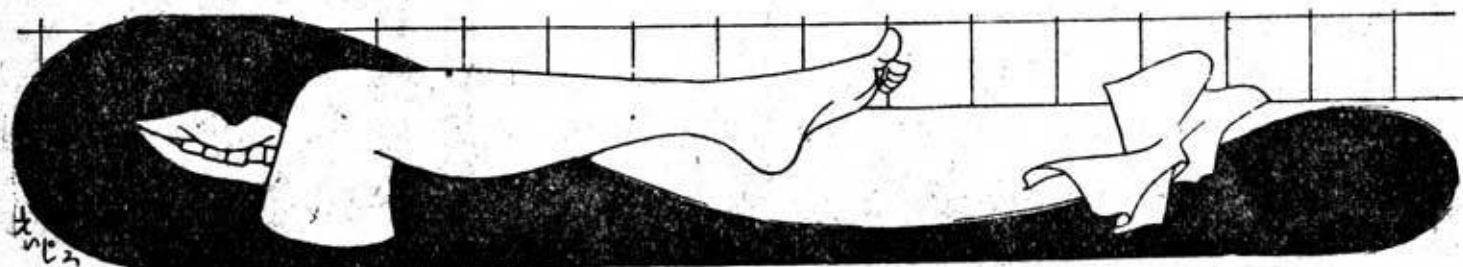
私は置き忘れたズロースが、風にゆられているのを見た。

私は幾度も寝返つた。なんというこのいらだたしい気持、私はねむりたかつた。だが、私は目をあけている。私は、何を求めているのだろう。私は天井を見た。何もなかった。それは、毎日見る天井だった、そして、そこに

見ている一人の人間―私があつた。それは死んでいても生きていても、別に、なんの問題もおこさない、みじめな、馬鹿な、あわれな一個の人間像だった。私は毎日私を見ていた。そして、見る日の来ない日を待つている。

時計が一つ打ち、やがて二つになり、また一つふえた。私はおきあがつた。そして、木戸をあけた。私は外に出ていった。私はある家の二階の物干に、忘れられた一枚のズロースを、じつと見つめる。

夜の世界に、その真白なズロースは静かにゆれていた。





しいたげられるよろこび

林 田 澄 子

それは私が町の高等学校を卒業して家の手伝をしながら、のんきな毎日を過ごしていた二十才の時でした。小さい時からお転婆で其の上、家は村でも一二と云われた地主で、お嬢さん〜と皆からちやほやされて何不自由なく育てられ、学校もずつと副級長をして女王のように我儘だったのです。

私都会には出たくてならなかったのですが何処にもある通り、昔気質の両親がどうしても承知して呉れず、毎日々々の平凡な明け暮れにあき〜してしまいました。私の家の分家に当る真樹さんが戦後三年のシベリアの俘虜生活の末、村に帰つて来たのです。私より七ツ年上の二十七でしたが、真黒に日焼して、見た所、がつちりとして、なか〜頼もしそうでした。村へ帰つて三月もすると、彼は同じシベリア帰りや、復員して来た人々と一緒になつて、この村を改革するのだと云つて、〃民主グループ〃と云うサークルを作りました。そうして此のグループの人達は毎晩彼の家の二階（下は作業場で、二階は居宅の様にしている別棟で、復員後彼はずつと此処で起居をしていました）に集つては夜遅く迄激しく口論し合っていました。

私も初めは泥臭い農村青年の寄合位に思っていました。休日にはダンスをやったり、会員同士で伯耆富士と呼ばれる大山へ登山をしたり、中々、ハイカラ（此の地方にはまだこんな言葉が日常使われています）な事をやり出したので、だん〜女の人もサークルに加入して行く様でした。特に貧農の娘が多かった様です。私も好奇心で此の会合に顔を出して見ましたが、マルクス、レーニン、主義とか、唯物論とか弁証法とか、頭の痛くなる様な本を一心に勉強しながら、その合間には名前を呼ばないで〃同志〃〃同志〃と、まるで明治維新の志士なんかが使つた様な言葉を使つて口論していました。（これはお互の自己批判と云うのだそうです）壁には働く者による働く者の政治を〃共産社会の政治は先ず俺達の村から〃〃働かざる者は食うべからず〃〃完全なる男女平等を〃等々のスローガンが貼られてありました。私は一瞬、ふ〜んと鼻の先で笑いましたが、グループの人々の真剣さには何か共感を呼ぶものがあつた事を申上げておきます。こんな事が二度三度と重なる内に何時か私も皆と一緒に自己批判なるものをやる様になりました。生活改善の研究とか、或いは楽しいリクレーションの集いに

はたしかに私の心を楽しませるものはありませんでしたが、なまけたり、申し合せを破つたりした時の相互批判と云つて皆から、集中攻撃の舌鋒を浴びせられるのだけは、うんざりさせられました。

二

大分前置きが長くなりましたが、此の様にして私も一かどのグループのメンバーになつていましたが、其の年の秋、グループが主体で、村役場の乱脈を暴いて村長を辞職させ、真樹さんを村長候補に立て、相手の保守派の加納さんと一騎討の選挙を行つたのですが、二十票の差で真樹さんが落選してしまいました。と申しますのは私達の部落の票が半分近く逃げているのです。これはきつと裏切者が敵に内通しなみに違いないと云う事になり加納さんと最も親密に交際していた私の家の関係から私が其の裏切者の張本人だと刻印を捺されたらしいのです。

其の夜の選挙批判会は、ものすごく殺気立つたものでした。先ず真樹さんから「今次選挙は何故破れたか」についての自己批判がなされ、次いで討論に移りましたが、何となく皆の視線が私に冷たく注がれているようで、ますますぐずぐずと黙っていますと、何時も私と

事毎に仲の悪い幸子がヒステリックに

「澄ちゃん、貴女何故自己批判しないのさ、

原因は貴女じゃないか」

と叫ぶと「そうだと親爺の作戦にうまく

乗せられて、裏切りやがつたんだ」と達

治が尻馬にのつて離れ立てると、もう皆んな

が、まるでそうきまつたように口々に私を攻

撃し始めますので、私もかゝつとなり

「何にさ、あたしが何時裏切つたの、証拠が

あるなら出してごらん」

「ふん、偉らそうに云うな、お前の親爺は加

納の選挙参謀じゃないか」

「お父さんはお父さん、妾は妾さ」

激しい口論の末、もう私は夢中でした。こ

んな奴等に、学校時代は、あたしの奴隷の様

に使つた貧乏人の子らに、と口惜しさが湧き

上つてきて、

「何さ貧乏人が……」

云つてしまつてはつとしました。グループ

員の絶対口にしてはならない鉄則の言葉をと

う／＼私が口にしてしまつたのです。

一瞬、皆は息を飲んだ様ですが、たちまち

ものすごい怒りの言葉となつて私の周りに殺

到して来ました。

「何を裏切者、殺せ、殺してしまえ」

「死ぬ程恥かしめてやれ」

「裸にしろ、裸に」

それ等の言葉が、一かたまりとなつて、真蒼

になつた私の耳へが／＼と云う程響いて来

るのです。やがて達治が皆に何か云つた様で

すが、私には、はつきり聞えませんでした。

「手出しをせずに黙つていろ」とでも云う様

な意味の事でも云つたのでしよう。

一同は部屋の一隅に固まつて燃える様な眼

で私をにらんでいました。達治が立つて私の

傍へ寄つて来ると、ぐつと私を抱きしめて、

帯の結びめに手をかけたのです。

「何をやるのさ」私は右手で思い切り達治の

頬を打ちました。ピシッ／＼と云う音と共に醜

くゆがんだ真黒な顔を見ると夢中で立ち上つ

て逃げ様としましたが、すでに帯はとけて私

の体は、はすみでくる／＼／＼と、こまの様

に廻つて壁際につんのめつてしまいました。

「アアッ」と声を出して、前を押さえ様とす

る私の手が強い力で払われると、襟首をむん

ずと掴まれたのです。私が着物の片肌を抜い

てその手はずそうとしましたが、足をはら

われて仰向けにころりと転がされてしまつた

のです。そして両手を拡げられてしつかりと

膝で押さえ込まれてしまいました乳房が着物

の襟でしごかれて、くると外へ出ました。

もう私は気が狂いそうでした。恥かしさよりも口惜しさの方が、幾層倍強かつたのです。女王の様に気儘に成長した私、此のグループにも皆の様に階級斗争とか何とか、そんなつきつめた気持ではなく一種の退屈しのぎ……と云えば誤解があるかも知れませんが……そんな軽い気持で入っていただけに此の屈辱は堪えられないものでした。

達治の手が私の腰布にかかった時は、今までの怒りと別に云いようのない乙女の羞恥に体がふるえ出しました。「い、いけない、誰か、誰か——」恥かしさに身をもだえるのかまわず、腰布の結び目がシューととかれるとばつと左右に開かれてしまいました。もう僅かに乙女の生命を守っているズロースのゴム紐に手をかけられた時は、私は思わず泣き出してしまいました。

「お、お願い、ねえ、達治さん、それだけは許して」

こんな大勢の前で同性も幾人か加わっている席で親にさえ見る事をゆるさなかつた全裸を、こんな奴等の前に……と思うと眼の先が真暗になる様な口惜しさと恥しさで、私は泣きながら左手でズロースを押さえ、右手で達

治の顔をめちや／＼に叩いていました。傍で見ている奴等（私はあえてこう申します）にはこんな面白い見物はなかつた事でしよう。

この時です。鼻息を荒くして傍で見ていた幸子が、やにわに私の腋毛を二三本、力一ぱい引き抜いたのです。余りの痛さに、思わず手を離れたすきにすかさず達治の手がズロースを引き下げてしまいました。あゝもう駄目／＼露わにされた私の女の部分に刺す様な皆の視線を感じると、すーと全身の力が一時に抜けて行く様な虚脱感にくつたりとした時私の腰からズル／＼とズロースが二本の足を伝って引き下げられてしまいました。

三

虹の橋を渡っている様な気持。身体がぶら／＼と左右にゆれる、手首が痛い、腕のつけ根が抜ける様だ……

また夢心地の私の臀部にビシ／＼と、刺す様な痛みが体中を駆けめぐって、よう／＼意識が元に返る。あゝ、恥かしい、苦しい。何とした事か、私が意識を失っている間に両手両足を細紐で縛られ、時計の振子の様にロ－プで天井から吊り下げられているではありませんか。

鞭は情容赦なく、私の尻を乳を太股をビシ

／＼と打ち続けるのです。気の遠くなる様な苦しき、痺れるような痛みを堪えるため喰いしばっていた唇が切れたのか口の中に甘酸っぱい液体がしみこみます。汚ないお話ですが、私は思わず知らず御小用を洩らしてしまっていました。

やがて失神一步手前で、下された私は皆の前に仰向けに寝かせられました。もう口もきく気力とでなく、ぐつたりとした私に幸子が蜂蜜の罐を持って来て体中に塗りたくるのです。べと／＼とした感触が、まるで蛇の舌でも舐めまわされている様な気味悪さですが更に其の上に唐辛子の粉をふりかける。其の辛子が鞭打たれた傷跡にしみ込むのです。

もうろうとした私の知覚で切れ／＼に思いつく出させるのは、まるでけもの／＼様に大の字に逆吊りにされた事と幸子に一番大事なものを剥り落され、皆が下卑た嘲笑を投げかけた事等でした。もしあの時真樹さんが皆を止めてくれなかつたなら私の体は一体どうなっていた事でしよう。

熱を持ってズキ／＼と痛む体を真樹さんに抱かれて泣きました。恐しさの後に来る薬にもすがりたいさみしさ、力強い男性にしつかりと抱かれてやさしく慰められている時の

氣持。胸をしめつけられる程のいとおしさ、いつしか真樹さんに自分から身体をすり寄せてゆきました。

この夜、私は処女と「さようなら」を致しました。此の事件は何時か村に伝わり、私は父から激しく叱責されましたが、何処迄も、嘘だと白を切り通しました。そんな事を父に白状するのは今迄の私の誇りが許さなかつたからです。グループの人も皆この事については口を割らなかつたので事件にならないですみました。あの事件を頂点としてグループの活動も次第に下火となり、四冊の情勢と相俟つて次第に有名無実的な存在となつて行きました。

特にあわれだつたのは、此のグループの責任者であつた真樹さんでした。すつかり人が変つた様に無口になり、眼ばかりギラ／＼と光らせて自棄的な日を送っている様でしたが翌年の春、大山々麓の旧陸軍演習場の開拓団に加つて入植して行きました。私とてあの事以来、家からも村の人からも白眼視され、堪えられず、真樹さんの後を追つたのです。

標高三千千米余の中国山脈随一の高峰を誇る大山の高原で二人きりの新生活を始めたのです。そして一緒になつて私は始めて夫の口か

ら、あの事件の指揮者は一番私の味方であると思つていた、夫の真樹其の人であつた、と聞かされた時の驚き、皆様方にも充分おわかり、戴ける事と存じます。

シベリア三ヶ年の捕虜生活、更に其の源は憲兵下士官として地方民に絶對的な権力をふるつていた三ヶ年の軍隊生活中に彼の血液の中にこゝろいつた性質が徐々に大きく芽生えてきたのでしょうか。しかし私が其の事を知つて氣付いた時は遅かつたのです。私も又その渦中の人となつていたのです。見渡す限りのすゝきの原に堀立小屋の様に建つた二十坪余りのバラック、馬鈴薯を常食にする様な原始生活の中でありながら夫は一步たりとも私をそばより離さないのです。

夜な／＼私は一糸纏わぬ全裸で責め続けられました。寒風の吹きすさぶ冬の夜、真裸で庭の木に縛られて一時間も二時間も責め続けられると、寒さを通り越し知覚は薄れて何んともなく、うつとりと快い眠りにさそわれるのです。

すつかり冷え切つて凍死一步前の私の裸体はやがて夫の手で納屋の乾草の中に横たえられて全身を一時間も二時間も摩擦されるのです。そして身体が回復するあの時の疼痛、い

えそれにも増して全身をかけめぐるしびれる様な快感は縄より鞭よりも何倍か強いものでした。

このようなはげしい愛情の生活がどうして此の開墾と云う重労働に堪える事が出来ましよう。加えて其の年は近年まれな大旱害で頼みにした陸稻おかほも全滅となり、私達は再び山を下りて生れ故郷へ帰らねばならなくなりました。そして私達が結ばれる原因となつたあの思ひ出の二階で只今同棲生活を送つて居ります。

彼は現在某官庁の職員として真面目に勤めて居ります。役所では皆からも信用されて評判も極めてよいのですが、彼の家庭での暴君ぶりは、あの開墾地で私の身の上に加えたと同じ激しい愛情の発露の連続なのです。

奇譚クラブの新刊が届けられると、私は夫と一緒にインクの香も新しい雑誌の頁を繰りひろげて、期待に胸をわな／＼かせ乍らむさぼり読むのです。次には夫のシベリヤでの変つた生活の思ひ出でも投稿したいと相談して居ります。

切支丹迫害史

漆 島 迫 平

☒ マゾヒズム

「打ちたければ打つて下さい。焼きたければ焼いて下さい。斬るなら斬つて下さい。苦しみが酷ければ酷いほど私は嬉しいのです」

切支丹宗門改めの奉行を前にして、百パーセントのマゾヒズムを発揮しているうら若い娘がある。しかも美しい処女となれば誰でも男という男の十中八九はサディスト的興味を抱くのは当然であろう。

娘は手と足をまるで猿のように縛つて天井にぶら下げられ、釘を針山のように植えつけた棒で身体中を殴りつけられたが、いかにも心地よさそうにしているので、表面怒りながら内心喜んだ奉行は、大きな釘抜きを真赤に焼いて、あらわな胸の真白く美しい二つの隆起をぐさぐさと挟んで力まかせに引きちぎつて

しまった。乙女の黒髪はさらさらと揺れて、丹花の唇がピリリと痙攣した。

「あんまり酷い人非人、お前もお母さんの乳房で大きくなつたのではないか！」

それが彼女のマゾヒズムの限界であり、意識の限界でもあつた。

一切食物も与えずに四日間暗い牢獄に投げ込まれた娘は、慄々最後のマゾヒストの法悦にひたらせるために、一糸もまとわぬ裸体にして引き出された時、奉行は危ふく卒倒するところであつた。癲病患者のように皮と肉とが爛れていると思ひの外、彼女は漆黒の髪を波うたせて黒真珠の瞳、虞美人草のように朱い唇、しかもその全身は四日前の惨事も何処へやら、大理石のように滑らかに白かつた。やがて炭火とビロードの粉の一面に撒き敷かせた土の上を、此の美しい全裸の処女は手

足を縛られて引きずり廻された。次いで彼女は仰向けに台の上に縛りつけられて、鉄の熊手で胸と云わず腹といわず、ズタズタに引つ掻かれた。娘はそれでも奉行の方を見てフンと鼻で笑つたので烈火のように怒つて「畜生！小娘のくせに生意氣な奴だ、今度はこうだ。見やがれ！」

鍋の中には鉛がぐらぐらに溶かしてあつた鉄の杓子でその鉛の熱湯を汲んで、娘の鼻の穴に流し込んだ上、蠟燭の火をじつと臉の上を押しつけるのである。何ともいえぬ異臭がして、ギリギリと歯ぎしりの音がした。ブスブスと肉の焦げる音が混つていた。

「ゼズス・クリスト！」

「畜生！まだくたばらねえのか！」

「サンタ・マリア！」

娘はぐにやりとした。魂が白い鳩となつて



行われた。全裸にして立木に結えられた男女のキリシタン宗徒達は、灼熱した鉄の鋏で、その陰部を焼かれた上、身体を一寸刻み五分試しに寸断され、或は大きな石を首に結えられて海中に投げ込まれた。

有馬の領主とな

天へ上つていった。――。
マゾヒスチックな法悦の境地を彷徨する狂的な信者の前には、たとえ鉄火の苛責が迫つてきても、それは彼等の殉教心をあふり立てるに役立つだけであつた。

然し此れに対して刑罰を加える立場にある奉行や刑吏たちは反抗が激しければ激しい程そのサディスティックな血を沸き立たせて殉教者達の肌を血に染めていった。長崎の首席奉行水野河内守守信は、予て宗教の戦場であるこの長崎の町の征服を誓つたのであつた。今までにない斬新で途方もない惨虐な拷問が

つた島原の領主松倉豊後守重政は一六二七年一月、帰来早々、布令を出して島原地方の代官や庄屋たちに、キリシタン全部の名簿を作成せよと命じた。そして生れたての赤坊に至るまで総べて登記された。

全く奇抜な新しい責道具が考案された。それは「切」「支」「丹」という三つの極印がらなつてゐる鉄の烙印であつた。字をより大きく明らかにするため、又苦しみを大きくするために極めて大きく作られてあつて、これを火で真赤に焼いて殉教者の額や頬に刻みつけるのである。

此のおぞましい拷問の前に大勢の信徒を棄教させることに成功したが、極印を額に押され右食指を切断されても棄教しない頑強な男もあつた。又顔を炬火で焼かれ鼻孔が爛れて腐り落ちる責苦を受け、更に長い間、体の方々を吊されたが遂に意を通し續けて釈放された領主の小姓もあつた。

島原附近の山寺という所には、八十人の住民が集団でキリシタンとして生活し、共に死ぬ事を誓つてゐた。彼等は竹矢来の中に閉じ込められていて、順番に一人一人呼び出された。入口では番兵が棒で酷く撲つた。若干の者はこれで命を失い、他の者は手足を折られて、へと／＼になつて帰宅させられた。然しこの迫害も前に述べた口ノ津の受難（十月号所載）に比べると比較的軽いものであつた。

引續いて行われた主な責苦は、女を衆人の前で柱に縛り、極印を押した上、下着迄除いて恥辱を与えたり、手足の指を切つた上、裸で衆人の中に曝したりした。棒で撲り二枚の板戸の間に挟んで酷く締めつけ、又、顔と体中を熾で焼かれた。熾を口の中、目の上、腹の上にのせ、薬を焼いて顔を炙り等した。そして最後は女はすべて全裸体にして曝した。この様な言語に絶した責苦に対しても彼女

達は勇敢に堪えて、役人たちは根負けしてしまふ程であつた。それで、更に火で真赤に焼いた鉄鋏で手足の肉をゆつくりと鋏みとられ、次いで骨までばらばらに切り刻まれた。

灼熱の刑

松倉豊後守は高来の本領で更に本格的な迫害を加え初めた。多くの棄教者の中で六十八才の老人トマスとその子ヨハネ以下十数人の男女があらゆる暴虐の試練に堪えて結局次のような灼熱の方法で火刑に処せられた。トマス老人と息子のヨハネは多量の炭火の上に横に並べられた棒の上に横たえられた。二人の兵卒が足を他の二人が手を押えて、ぐるぐる廻しにして脇腹から或は仰向けにして炙つた。彼は体中が焼魚のように焼かれ、皮膚一面にひびが入つた。それでも遂に転ぶことなく頑張り通した。

二人共火が内部に廻つてくると、ひどく苦しむ、彼等の口から微かな煙が出た程であつた。この責苦が終ると二人は二本の柱に縛られた。彼等は頭を縛つて耳を切られ、息子の

如きは頬を半分そがれた。二人共額に烙印を受け、傷の手当をすることも許されず、まる一日地上に放置された。

婦人達は全部、裸になることを命じられ、一人一人奥の部屋へ呼び出された。そしてその秘密の部屋で口に出せない程の淫靡な数々

三才の幼女は火の中に投げ込まれ、目も当てられず死にかゝつてゐる所を母親の前に引き出された。十三才になる少年は、火で真赤になつた陶器の壺を手で握めと命じられ、両手でそれを暫く持ったまゝでいた。十六才の若者は「アベ・マリヤ」を二十回唱える間、烈



火の真只中に立たされていた。若者は少しも苦しみ様子がなく、ただ足が痺れるような気がするだけだと言つてのけたので、執行役人は怒つて棒で打ちのめした。

然しこの様な火炙りの刑も次に彼等が地獄の一丁目と恐怖している雲仙ヶ岳の硫黄責めから比べると生やさしいものであつた。二月二十八日十六人の殉教者が投げ込まれることになつた。

殉教者たちは先ず馬に乗せられ、最も峻しい所では彼等は火口を示す番人の小屋まで駕にのせられた。火口に着くと皆は着物を剥がれ、首に綱を結えられ、気の向いた時沈めたり引き上げたり出来るようにされた。

最初に呼び出されたルイス・新三郎は淵に飛込めと命じられて、熱心にイエズスとマリ

の拷問を受けた。弱り果てたトマスが将に絶命せんという瀬戸際、四本の指を切られ、そして跡形もなくするため首に大きな石を結えつけて海中に放り込まれた。

翌朝、子供達は両親の目の前で拷問された

アに加護を祈りつゝ飛び込んだ。内堀作右エ門はその同僚に誰も自分から生命を捨てゝはならぬと言つたので、それから他の人々は自分で飛び込む事を拒んで役人たちに投げ込まれるのを待った。次々に火口に蹴込まれて、最後に内堀は何度も投込まれたり引き上げられたりした。彼等の遺骸は縛つてあつた綱で引き上げられ、更に大石が結えられて火口の底へ投げ込まれた。

何度投げ込まれても絶命しなかつた者は瀕死のまゝ引き上げられて死ぬ迄、体中に煮え沸つた硫黄泉をぶつかけられた。

女たちは狼嚙をかまされ、裸体の背中に長い柄のついた杓子で湯を注がれ、次いで湯に漬けられた。この処刑は生き乍ら皮を剥がれるようなものであつた。これで殆んど息を引きとつた。

雲仙岳の硫黄責

十二月二十五日、雲仙岳で肥後のイエズス会の平修士ミカエル・中島の前代未聞の処刑があつた。

中島は八通りの種々の拷問を受けた。彼は木を束ねて手足の関節を外された。そして木製の大きな車で巻き揚げられて、水をはつた

桶の中に投げ込まれた。水責めに会つた末、彼は血と共に水を吐かされた。次いで、日のかん／＼照る戸外に曝された。大きな黒雲が空にかゝり、快い微風が吹いてきて彼の気分を爽やかにした。翌日彼は雲仙岳の硫黄責めにかゝつて身体からぶす／＼と紫の煙を放つて焼死した。遺骸は火口の深淵に投げ棄てられて二度と人の目に触れなくなつた。

豊後の領主竹中采女正重信はキシタンの墓をあばき、焼かれた骸を掘り起すことを命じ邪教徒の屍でも容赦しないと宣言した。死者の次には生きてゐる信者を悉く絶滅する決心をして先ず手初めに將軍より渡されたキシタン名簿に登録してある宗徒より始めた。

男三十七人、女二十七人、計六十四人の者が召捕られた。奉行は彼等をすべて雲仙へ送れと命じ、役人たちは宗徒が棄教しなければ死ぬまでこの拷問を続けると通告した。

宗教のために生命を失ふことに非常な幸福を感じてゐるキシタン殉教者たちは最後迄あらゆる迫害に堪え続け、犠牲によつて天主の下へ行ける喜びに熱狂的となつた。

彼等は五組に分けられて雲仙に連れてゆかれた。

八月三日、第一隊が連れ出された。男は皆

着物を剥ぎとられ、彼等が互に励ましあうことの出来ないように別々にされた。そして各々腕を一本ずつ、両足を一本と都合三本の縄で縛られた。大きな石が首に吊された。彼等は裸の背中に湯をそゝがれた。この湯は侵蝕性のものであつたから、その湯のかゝつた所に有毒の傷がつき、名状し難い苦痛を与えた。この惨しい拷問は日中だけか夜中にも続いて行われた。

——数日後、この恐ろしい拷問に堪え切れなくなつた多くの信徒が転んだ。夫が転べば妻も又これになつた。

但し一人の朝鮮の婦人イサベラはどうしても屈服しなかつた。「お前の夫は転んだぞ」と聞かされると「妾は、天に永遠の夫を持つております。ですから妾は此の世の夫に従うわけにはいきません」と答えた。そこで彼女は湖の傍に連れてゆかれた。周りには六百余人の見物人がいた。然し天候が急に悪化して彼女に対する刑罰は中止された。

翌日イサベラは雲仙に連れてゆかれた。彼女は二時間あまり石の上に立たされ、それから首に大きな石を吊された。口の中にいくつかの石を入れられ、頭の上にも載せられた。「若し此の石が落ちたら、それはお前が棄教

した印だぞ」と役人は彼女に云つた。

彼女ははつきりと「いゝえ、石が自然に落ちましても妾は心を変えませぬ。何故と申して、石が頭から落ちないようにするのは、妾の力では出来ないことですから」然し、此の石は落ちずイサベラは首の石の重みさえ感じないかの様に平然としていた。

翌朝、彼女は更に拷問を受けた。裸にされて手足を縛られた上に煮え湯をかけられた。

役人たちはイサベラが拷問に屈せず、尙もいろ／＼の方法で責めさいなまれるのを待つていたのでがっかりした。そこで役人達は彼女に云つた「私等は十年でも二十年でもこの拷問を続けよう」「十年二十年は、ほんの束の間、若し百年生かして下さつたら、妾は天主様の御意にかなうために、休みなしに、この同じ苦しみに耐えるように、この年月を使うことを仕合せに思いまする」

拷問十三日の後、兵卒たちは彼女を町へ連れ出した。彼女は食わず、眠らず、山で十日を過して来たのであつた。彼女は立つ事が出来ず全身傷だらけであつた。

彼女は奉行の前に連れ出された。随分と手数をかけて、彼女は手をとられ、その手で棄教の手形の下の方へ名を認めさせられた。こ

の上一言も物を云うことを許されなくて彼女は帰宅させられた。

采女正は雲仙岳が、その短氣の氣性には余りにも遠過ぎるので、遂に隣村の稲佐に殉教者を遣わし、そこで、硫黄、硝石、黄土を混

映画 云 SADISMUS

雲 井 彰

此の一文は青空の様な柔かいセーターの胸のふくらみとか、一寸靴下を直す美しい娘の魅力の判る方だけに判つていたゞけだと思います。(そんなのよりストリップの足やむき出しの乳でないと満足しないと云う人には味気ないでしょう。)

僕が一番強烈に気に入つて五回も見て、まだ見たいと思つてゐるのは、伊の「荒野の抱擁」です。映画そのものとしても感心し、ラストの思想設定が上手く、何回もホロリとさせられたのですが、僕の眼目は(魅力)はホヤ／＼の若妻ジョヴァンナ(カルラ、デル、ボツジョ)が、初夜もすまさぬ中に、ギヤングに捕われ、縄をかけられて運ばれる。そしてピストルを背につけられ、手を後にされて、セーターがやぶけて

ぜた湯で、大釜の中で煮させた。

次に又新しい拷問方法が発明された。部屋の上の隅に四本の長い綱を張りめぐらせ、この綱に罪人の手足が縛られた。体は激しい勢いで廻転させられた。四本の綱は振られ束に

半分乳をのぞかしたまゝ夫を目の前にしながら身もだえしつゝ連れ去られて行く。最後にギヤングがつかまり夫の手に帰る迄の一時間にあつたのです。

ジュゼツベ・デ・サンライスは、此の間息をもつがせぬリアルな鋭い手法に(日本映画の)とつてつけた様な「責」的なものはいさゝかも匂わせずに成功してゐるので、同好の氏に一見をすすめます。どこから見ても文句のつけようのない素晴らしい作品です。

他に心理的サディズムの最高作品は「ガス燈」バーグマンとボワイエの演技は手に汗をにぎりました。

他には「新しき道「奴隸の街」」のラストシーンの久我美子に魅力あり。たゞし後

して引きしめられた。体はこの力の中に集まり縮むのであつた。次いで綱は緩められた。すると綱は勢よくもどつて、犠牲者は氣狂のようになり、感覚を失つたほどの激しい衝動を与えた。

一六二七年、島原で実に残酷極まる拷問が行われた。若干の人々は細縄で手足を縛られ而かも縄が肉の中に食い込んで千切れるまでに締めつけられた。又或る人々は水責めを受けた。その他の人々に対しては、硫黄や猛烈な臭気を発する物をつめた竹をとり、これを殉教者の鼻孔の一方に押し当て、無理に口を閉じさせ、その結果、顔に潰瘍を生じさせ、灰を他の鼻にさし込んだ。この刑は彼等の息の根をとめ顔を爛れさせた。

次の恐ろしい刑罰は、竹を尖らして錐のようにして肉の中に突刺し骨迄通して時には傷の中で竹を折つた。又火縄に火をつけたのを体中とくろきらず押し当て、或は犠牲者の手足を縛つて吊しておき、ひどく撲つたのであつた。若し罪人が氣絶すれば生き返えらせて同じ事を繰り返すのであつた。

其の他竹鋸で腕や胴体をゆる／＼と切断する方法も行つた。

(完)

手でなくて、だらりと下へたれていたので稍不満足。〃虹を描く男〃のヴァージニアメイヨの縛られてもがく二秒間、たつた二秒ですが、それがたまらなく好いので、三回見ました。〃快傑ダルド〃のヴァージニアメイヨ、これは犬の様に鎖をつける程度でたいした事なし。〃サムソンとデリラ〃〃アラビアンナイト〃〃ジャン・ダーク〃〃征服されざる人々〃〃腰拔二挺拳銃〃等があるが、何れもたいした事なし。

〃海の征服者〃で海賊の親玉が、さらわれて来て後手に縛られてころがつている女の顔に酒をふきかけて女がもがく所、その胸乳に魅力あり。(テクニカラーなので)

〃荒原の征服者〃ジョンレスリーにビューンと男が投縄をかけ、ぐいと引よせてキツスするその呼吸が面白かつた。これなんかサジズムの醗酵味でしょう。

〃アンナとシヤム王〃でリンダダーネルが姦通したため、刑場で足に鎖をはめられ鞭で叩かれる場面があります。その時、執行人がさつと乳あてをひつぱぐ、彼女がはつと手で胸をかくしてち／＼こまる。この呼吸が真に迫つて好かつた。

以上を読んで何てつまらんと思われる人

があるかも知れませんが、僕としては見た目が仰山ですから必ずよいとは限りません。僕は映画を好く見るので、右にあげた外にずつと／＼長い時間賣場がある映画を知っています。然し、ちつとも面白くない。

例えば〃次郎吉格子〃の高峰三枝子等は全く申分なしの条件で、縄で縛る所がある縛られてころがつている時間が二十分近くある。刀を背にさし入れてぐ／＼しめつけて、うめく所もある。誠にもつていたれりつくせりだから面白い筈なのに、ちつとも迫つて来ない。アホ見たいにつまらない縄だか人間だかわからない程くる／＼巻いた写真より、新年号の写真の如く、たつた一巻きでも魅力ある場合もちやんとあるのです。

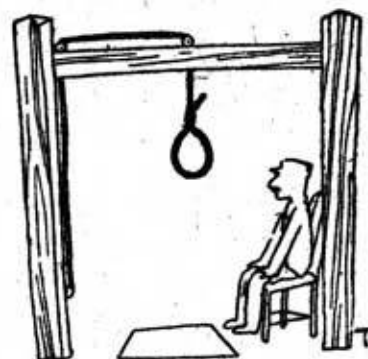
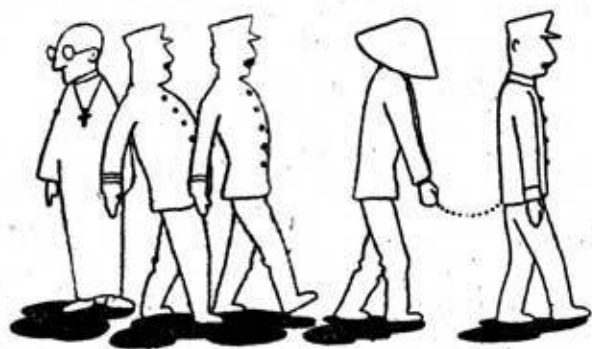
それから同好の方への忠告ですが、映画館の表に飾つてある写真は、女を縛つた様な場面がある場合、万に一つも本当の映画にはあらわれないので、客寄せにスチール用としてわざと別に写すか、若しくはカットされているという事を御承知下さい。だまされぬ様に。

×

×

×

死刑執行奇談



久 芳 木 茂

江戸時代の死刑執行と言え、随分残酷を極めたもので其の囚人の身分に依つても相違があつたが、普通刑罪と言え、切腹又は斬首で、その他罪によつては、火刑、磔刑、鋸引き、八裂きなど、いう極刑さえ行われた事があつたと云われる。

明治になつてからも五年頃までは、死刑は総て斬首で、明治三年頃までは、尙江戸時代の旧慣を踏襲して、日本橋を中心にして東京を二つに区分し、一方は鈴ヶ森、一方は千住骨塚原の刑場で死刑を行つたということである。

現在のように、絞首台による死刑執行が行われるようになったのは、明治五年以後の事で、監獄法が施行されるようになったのは、ずつと遅れた明治二十二年頃の事であつた。以来、今の世に至るまで、多少の設備こそ改良されたが死刑は依然として絞首台に依るものとなつてゐる。

従つて強盗殺人とか強姦殺人とかいう兇悪犯の死刑囚は皆絞首台によつて処刑されたものである。

素人の眼から見たならば、刑務所の労役な

どと云うものは、随分苦しいものゝように考へられるものであるが、懲役人であつてもやはり普通我々の生活と違つた処はなく、只だ赤い着物を着て、規則責めの下に、機械の人形のように働くだけが違つてゐる位である。

邸宅、居室も立派で、衛生とか清潔などは行届いてゐるし、今日ではラジオも聞かれるばかりでなく、時折は映画も見せて貰う事が出来るのである。只だ自由を拘束されてゐるから面白くない。決して進んで行くべき処でない事は云う迄もない。

江戸時代には、一般罪人に対し、裁判を秘密に行ひ、行刑は徒らに衆人觀視の前で行つたものであるが、今日は夫れに反し、裁判は之れを公開し、処刑は成るべく秘密に執行するようになって來てゐる。これが文明各国の通義とする処である。

であるから、昔江戸の頃は、火刑とか磔刑とか云う事になると、その囚人を馬に乗せ、罪状を記した高札をかざし江戸中を引廻して衆人に見せたばかりでなく、その残酷無比の火あぶりや磔の執行を、つぶさに人々に見せたものであつた。それが今日では、死刑囚が絞首台に上される所は刑務所内でも片隅の

秘密場所、係官以外絶対に見られないようになつてゐる。

勿論、これが正当の事であつて、若しそうでなかつたら、嚴肅なる刑務所の規律を紊り自由拘束の本質を傷うの虞あるばかりでなく、社会の風教上に不良の影響を及ぼし、公衆をして刑罰に押れしめ、警戒の念を薄弱ならしむるに至る弊害を免れない事は必然である。刑務所が、不浄の場所であると云う事は、昔も今も変りはない。成るべく参観などはさせぬがよい。

◇

然し死刑執行が、江戸の昔とは違つて、如何に人道的に改正されて来ているか、また明治以後に於いても如何に改められて来たか、それは知つて置いても好い事であらうし、また人々の知りたい処でもある。——それが絶対秘密の中に行われているだけに、その感は一層深い事であらう。

其処には、時代の風俗、文明の進展と相伴つて、昔を偲ぶような面影はなくなつてゐる。極悪の死刑囚も亦、恵まれたものと云えよう。

さて一度び、死刑の宣告を受けると共に、その囚人は、普通の囚人受刑者として取扱わ

れる可き者ではなくなつて来る。そこで宣告と同時に、その囚人の居所（檻房）は、刑事被告人等と同一の未決囚人を収容する拘留檻内に、一室一人として拘禁される事になるのである。

つまり死刑囚となると、受刑者ではない事になる。それで未決囚人と同じ処に収容される訳である。——そこで、普通受刑者囚人は赤色筒袖の獄衣を着ているのであるが死刑囚となると、自分の着物を着るのが原則となつてゐる。然し、死刑囚などになると、先ず大抵、着物を差入れてくれる者などはない場合が多いし、着たきりの汚れた衣類では、衛生上不潔でもあるのと、一面普通人と區別するためまた尙死途の晴衣とするに不体裁であると云う処から、特に浅葱色の獄衣を貸与して着せる事になつてゐる。だから浅葱色の獄衣を着ている囚人は死刑囚と思へばよい。

従つて、彼等は絞首台に立つ時も、その最後を飾る死装束は、この浅葱色の獄衣である。昔は兎も角、現在では、殺人を行つたものでも、其の罪の情状によつては、決して死刑とはならないのであるから、死刑を宣告せらるゝものは、全て極悪無道の重罪人に限られてゐる。従つて、そういう死刑囚に、死装束

の晴衣や、その他の差入れ物をしてくれる者などはあろう筈がない。

但し、前にも述べたように、死刑囚は受刑者でなく、未決囚人と同様なのであるから、自身に正当な所持金があるか、差入れ物をしてくれる者があれば、自分の好む書物、食物を差入れて貰う事が出来る訳である。然し、差入れてくれる者などはないから、勢い浅葱色の獄衣が死装束になる訳である。

只だ、一組、嘗て東京監獄で執行された、男女夫妻の死刑囚は、男は紋付羽織袴、女は紋附の着物、晴れやかに着飾つて、絞首台に上つたというが、これなどは前後を通じて唯一と云つてよい、珍らしいものである。

◇

判決で死刑の宣告を受けて確定しても、特に法務大臣の命令がなければ、死刑を施行する事は出来ない。また女性の場合は、その女が懐妊している時は、医師の診断に依つて執行を止め、産後一百日を経過から、更に大臣の命令を受けて執行する事になつてゐる。

従つて、宣告を受けた死刑囚でも、大臣の命令が出ない間は、何時までも拘留所内に置く訳である。普通大抵判決後一二ヶ月から永きは百日位は、執行されないで置かれる。

兎に角、判決後、相当永い期間執行はされないのが普通であるから、当人の希望によつては他の受刑者と同様、何か仕事をさせる事になつてゐる。——前にも述べたように、死刑囚は受刑者でないものであるから、規則としては何の仕事も科せないのであるから、相当永い期間、徒らにぼんやりと死を待たしむるという事も、却つて本人の精神上面白い影響がない処から、希望によつて仕事をさせる事にしてゐるのである。

◇

大抵の死刑囚は、覚悟の上とは云え、いざ死刑を宣告された後数日間、相当に煩悶懊悩して、なかには荒れ狂つたり幾度か破獄を企てたりする者もあるが、日が経つに従つて教誨師の説教などによつて、順次心も静まつて行き、一週間後あたりからは、非常に従順になつて行くのが普通である。寧ろあれほど兇惡無残な奴が不思議がられる者ほど、死に対する覚悟がつき易いように思われる。

従つて、死刑囚で脱獄した者は少くない。前後を通じて、多数に上つてゐるがその中で一番最初に脱走した死刑囚について述べよう。それは確か明治二十九年の十二月末であつた、某監獄の死刑囚が脱獄逃亡した事があつ

た。尤も其の囚人は間もなく捕縛されたが、其の時は秘密裡に苦心の大活動をしたものであつた。——今日の如く、脱獄者があつた場合、四十八時間以内は主として刑務所の手で搜索を行い、その以後は警察の手に任ずという規則が定められたのは、其の事件が動機となつたもので、監獄係官の捜査方面の事が定められるようになったのも、それから後の事であるといわれている。

右の如く、男の囚人は案外、早く従順になるのが通例であるが、女の死刑囚になると、これは又月経その他の関係があつたりして、精神上にも変化が激しく、泣きわめき、狂い廻つて取扱いに困難を感じさせる者が多い。尤も之れは、死刑囚ばかりでなく、一般受刑者でも、女囚には激しい狂暴性を起す者が多い。殊に月経後は比較的よいが月経前一二週間は女囚の最も危険性の多い時であるらしい。

其処で、女囚の死刑執行は、そうした生理的变化の時期をも考慮して、その執行が行われるようにするのであるがそれでも意外の狂暴を突発されて、思わぬ失態を生ずる事があるのである。

これは、その最も激しい、且つ稀な実例で

はあるが、ある時、貰ひ子を二人殺し、且つその殺人の現場を見つけて意見した自分の母親まで殺したという三十代の死刑女囚があつた。——愈よ死刑執行の日が来てまず一通りの順序を経て、絞首台近く連れて行くまでは至極従順で、最後の期にせまり辞世が詠みたというので、筆と紙とを貸し与えると、仮名針流ながら、一首の狂歌とも和歌ともつかない辞世を認めた程であつたがいざ目隠しをする段になると、

「私は目隠しなどには及ばない。見てゐる奴を一人残らず睨み殺してやるのだ。」

と云つて、どうしても目隠しをさせない。然し典獄の命令で、無理にさせると、いきなりそれを取つて捨てたがそれからが大変で急に暴れ出し、狂い廻つて、どうしても絞首台に上らせる事が出来ない状態になつた。こゝうなると女の力も馬鹿に出来ないもので如何とも手のつけようがなく、遂にその日は死刑の執行が出来なくなり、延期する事となつてとうとう典獄は進退伺いを出さねばならぬ結果となつた。

其処で、更に大臣の命令を迎ぎ、数日の後又改めて執行する事になつたが、その時も荒れ狂つて仕方がないので、遂に柔道の当て身

を食わせ、多少静つた折を見て、漸く死刑を執行したという話もある。

但しこれなどは前後に例のない事件であるが、慨して女囚の方が、男囚より斯うした場合、兇暴性を発揮する場合が多いといわれている。



其処で法務大臣から愈よ命令が来ると、その当日の朝、刑務所長は、死刑囚を呼び出し厳に

——本日法務大臣の命令に依り死刑を執行すと云い渡すが、その時には何の某と其の囚人の名を読み上げる。——獄内では、何時も番号で呼ばれているのであるから、入獄後初めて自分の姓名を耳にする訳で、この点でも感慨無量の次第であらう。——そして執行状を見せてやる。

此の刹那は、誠に悲壮なもので、どんな兇悪な囚人でも只だ首うな垂れて悲痛な面持ちになる。然し思つたほどの動揺を表に現わさないものである。——それは死刑執行と定まると、その当日の朝食には、特別平日とは異つた御馳走を食べさせてやる。だから其の囚人は、さては今日が死刑の日かと、其の時既に胸について、顔色も変れば、身も震わせる

という訳である。従つて、愈よ執行状を読み聞かせられる場合は、多少覚悟を定めている訳だからである。

死は人生の終局であるから、法の許す限り愛憐を垂れ仁慈を加えてやれば、安心立命して死地につく事が出来るのであらうから。施行前には特別の滋養飲食物を恵み与えるのであるが、美味佳香と雖も、その時の彼等には食うて其の味わいを知り得ぬ状態になるのが多いであらう。然し中には、悠然と其の美味を味わう者もあるのである。

斯くして其の後、一定の運動をさせた上、愈よ時間が来ると、看守が檻房へ迎えに行つて、死刑場へと連れて行くのである。——時刻は例外のほか午前×時と定めてある。

——然し、此の場合如何なる兇悪な囚人と雖も、自身で歩いて行ける者は、殆ど無いと云つてよい。まるで魂の抜けた人形のようなもので、看守たちの肩にすがつて引ずられて行くのである。無理もない事であらう。

死刑場は、必ず獄内の壁側の片隅に設けられてあるもので、其の側には教誨堂がある。まず囚人は其の教誨堂へ連れ込まれる。此処で教誨師（僧侶）から最後のお説教を聴聞する事になつてゐるが、心の空になつてゐる彼

等の耳には、おそらく何も聞えぬ事であらう。然し教誨師は、兎に角、過去、現在、未来に亘り諄々と説いて聞かせる。それから、其の堂内に安置してある阿彌陀仏を教誨師自ら左手に捧げ、其のお袖に縋るやうにと、紐のやうなものを右手に持つて、囚人の前に差出しその紐を握らせようとするのであるが、かういう際になると、余程修養の積んだ強い信念を持つ僧侶でもない限り、大抵の教誨師は、その人自身が既に失神したかのようになつて平生は立派な信念信仰を説いていても此の時はまるで中風患者でもあるかのように、ブル／＼震えてしまつて、腕が伸びないので、囚人の方も、眼こそ開いてはいるが、もううつろ心で、これもその紐がはつきり見えないのか、手が思うやうに動かないのか、手を動かしても其のお袖を掴むことが出来ないのである。かくて暗中でも模索するやうに、やたら手ばかり動かしても、徒らに空間を掴むばかりで、なか／＼仏陀のお袖にもがることが出来ないのである。これを眺める者も、誠に一滴の涙なき能わぬのである。

強盗殺人強姦なぞという猛悪の惨害を極めた凄惨の持主である彼等でも、死の直前に至つては、人の性は善なりと云える如く、その

多くは婦女子の温順なるものゝように、態度一変するのが常である。

稀には、大声を叫び、兇暴になるものも居るが、それは男より女の方に多いようである

◇

さて、教誨堂での最後のお説教が終ると、白布で眼隠しする。そして静かに二間ほど離れた先の絞首場に連れて行くのであるが、こゝに至れば、歩けるような者は一人もなく、殆ど教誨師と看守の肩にかつがれて行くようなもので、憐れを極めた姿である。

二十数年前までは、刑場は絞首台と云つたように、高い台の上にあつたので、囚人はその台を登らされた訳であるが現在では台ではなく、平地を歩いたまゝで、絞場の床板の上に立てるようになってゐる。

これだけで、囚人の精神上、大きな相違があるわけで、恵まれた訳である。これによつて心の苦痛がどれだけ減じてゐるかわからぬ——囚人が床板に立つと。

此の時、看手の一人が、左右の柱に設けてある、鉄の太い輪に通してある、八分位の太さの縄を持つて——来て右と左から、交互に——巻きつけるのであるが、この際柱についてゐる金の輪がカラン／＼と音を響かすのが

シーンと静まり返つたその場面に、何とも云えぬ嫌な感じを立会者の耳に与える、囚人が立つ刑場床板の上から、五六間程離れたところには、刑を執行する裁判所の検事、書記、

刑務所長、教誨師が椅子に腰を下ろして、厳肅な面持で、鼻一つすら咳一つせず、静かに立会つてゐる、——その囚人の立つてゐる床の下は、コンクリートで造つた地下室になつていて、立会者の方からは、その地下室が眺められるようになってゐる。——その地下室の前には、監獄医が立つてゐるのである。看守は、頸に縄をかけ終ると、すぐ其の場を立去つて地下室に下りるのである。

この看守ぐらい酷い役目の者はないので、特別給与があつても、さて誰一人として私が勤めませうと申出るものは、多くの看守中一人も無いのである。

そこで、抽籤で定める事になつてゐるが、ある時看守中最右翼の者に当籤した処、彼は、こればかりは許してくれと頼んだが、命令一下遂に其の任に着いたなどという事もあつた。まこと看守にも氣の毒なこと、全く希望者などは一人もない。これも情ある人間として無理のない事である。

◇

準備が整うと、看守長は一応点検して、刑務所長の方に向つて報告しますが、決して声は出しません、只だ目札の合図をするばかりです。

かくて、執行の命令が降るや、その刹那、兼て地下室に降りてゐる看守は、囚人の立つてゐる床板（四尺四方位）の、下の懸金を外すとバタリ床板は下にさがり、囚人の身体は地下室にぶらりと吊り下がる。

前方の立会者からは上下の状態終始が丸見えであるが、このカチン、バサンという響きのする時は、どのような人でも顔にハシカチをあてゝ、まともに目視してゐる者はない。

この際、首にかけた縄が、横に曲つてゐたので、囚人に苦痛を与えるような事があるので看守が下から身体を抱いて、静かに死なせるようにするのであるが、それだけこの看守の仕事は酷い嫌なものとなつてゐる。

そこで医者が脈を診る、数分後には大抵絶命するが、長いものになると十四分位脈の絶えない者もある。

医者から、絶命の報告があると、茲に刑の執行が終つた事になるので、立会の役人一同は立去るのである。

そこで頸から縄を外し、身体を横たえてや

る。その間に予め囚人の間で工作せしめてある、棺を持ち運んで来てそれに収容し、屍室に二十四時間置いた上、一定の刑務所墓地に埋める事になつてゐる。その際、若し親戚故旧で遺骸の受取方を請う者がある場合には、刑務所長は下附する事が出来るが、殆どそういう事はない。

また時として死刑絞首後、数時間にして息を吹き返すものがあつた場合は、更に相当の時日を経過した後、大臣の命令を待つて再執行する事になつてゐる。但しこうした実例は今までにたつた一人あつただけであるという

◇

ある年、某刑務所で、滅多にない死刑執行が一人あることになつた。その前日棺桶を急いで囚人受刑者に造らせた。終業時間が切迫していたので、造る事は造つたが、その儘工場へ置き放しにしておいた。翌日死刑執行をやる前に、準備点検中に此の事を発見して、係官は大きに狼狽し、

「オイ、棺桶持つて来たか?……なんだ工場へ置き忘れた、早く持つて来い。今すぐ使うのだ。」

なぞという不用意の言葉を、死の直前の死刑囚に聞かせた事があつた。この時の言葉は

果して彼の耳に何と響いた事であらう。身の重き罪とは云え、死に行く者に対しては、誰もが憐れさを感じない訳には行かない

(読者通信)

貴誌に於けるが如き緊縛に対する趣味は小生に持ち合していません。小生のサディスティックな場合は女をスレーヴとして扱い主として革鞭による虐待に興味を覚えます。尙その際女は全裸として自分は上半身裸体下半身に乗馬服乗馬用長靴をつけ、最も苦痛多き拍車を付けます。第二にマゾヒスティックな場合、女を猛獣使い或は荒馬馴しとして前述の如く乗馬服、乗馬靴をつけ特に鋭い拍車と革製の編み鞭と乗馬用革鞭とを持つて打ち拍車によつて苦痛を与え裸身の男の上に跨がりあらゆる芸当を仕込みます男は成る可く芸を覚えず厳しい鞭の下に喘ぐのです。

(東京・A・M生)

私は只今或る紡績工場の寮に住込んでおります二十二才の処女でございます。今年の春ふとしたことから町の書店で御誌を見つけて以来愛読者になつてしまいました。編集部の方々にいろいろお願いしたいこともございますのですが、何分十畳の部屋に六人も同居しております人目が多いところですので大変かなしく思つて居ります。

これも人の世の、ある一つの風俗であり、一つの死の選び方である。

この夏に送つて頂いた写真を拝見しました時はほんとうに私の気持を満足させられました。私も一度そのようにして縛られてみたいと思ひました。誌上の読者通信の方々に御便りを出したい気持も起りますが、若し御返事を頂いたとき工場に知れたらと思つて無理に自分の気持を押えております。そのうち私の工場へ勤めに出ます迄に経験しました事柄でも書いてお送りしたいと思ひます。その時はよろしく御願ひ致します

(大阪・時山加代子)

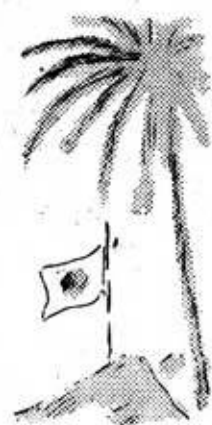
○御送稿をお待ち致します。

(編集部)

新年号読者通信の玉房芳郎氏の全裸体を鏡に写して行ふ云々は小生も同感です。K通信四号の青柳謙次氏の秘密日記の画と文には強うたれました。あゝいつた真実の告白や日記は小説でないものだけに大変うれしく思います。読者の絵もつとめて載せて下さい。新年号の渡辺良夫氏の言われ通り貴誌の真実の告白は私達同性愛に悩む者の代弁でもあり大きな慰めでもあります。広い日本にはこういった徹底した雑誌が一つ位あつてもいいと思ふのです。

(福岡・田岡 隆行)

つわもの哀史



吉井川洋

—

どーなもんじやろかい

××が立つよー

かえりーにはー かえりーにはー

はーらが減るよー

トラックがヘッド・ライトを遮蔽して走つて行く。そのトラックの上から、こんな歌がきこえる。歌声のなかに、調子でもとるのかガン／＼と運転台の上をた／＼音があたりにひびく。

こゝ南の国、バンコックの北、ロツプリーの町からさらに一里ちかく北に入つた日本空

軍の根拠地には、比島作戦を終つてこちらに転進した飛行第〇戦隊が駐屯していた。

昭和二十年四月、東も西も、南も北も、敗戦の様相は濃いかつた。

「いつたい、これでどうなつて行くのだろうか。」

これがこの部隊にいるものゝ多くの考えであつた。比島で米軍に散々た／＼かれ、台湾に引きあげてからさらに戦力を消耗し、ようやく、十何機かの戦闘機でこゝに転進して、さて、こゝでこれからどうするのか、と思つてみると、こゝに来ててもやはりどうにもならなかつた。飛行機は飛行場の周囲の竹林の中に

突つこんだまゝ。英軍の飛行機は、比島作戦のそれにくらべると極めて閑散にはあつたが、ちよいちよい出て来る。出て来ても、部隊長以下、防空壕のなかにとびこんで敵のなすがまゝ。もつとも、邀撃戦は禁止されていた。が、禁止されなくとも、飛び上る勇氣のあるものが果してこの部隊に何人居るだろうか。比島の空中戦で、すっかりドギモを抜かれたこの戦車戦隊は、水鳥の音にさえおびえた平家の軍勢よりもお戦々兢々としていた。それでいて、夜になると、自動車を駈つてロツプリーの街にとび出した。半分、いやほとんどがやけ気味であつたかもしれないが、そのやけ気味にしても、少し程度が過ぎていた。皇軍と称していた威信もなければ、見栄も外聞もなかつた。それが、いまのトラックの上での歌である。もしタイ国人のなかに、日本語を解しているものがいたらどう思うだろうか。

トラックの前を、茶塗りの乗用自動車が一台、ほとんど周囲が竹林の中に舗装路を走つて行く。

乗用車はすうつと音もなく止る。行くてには鉄条網をめぐらした門が見える。

銃の負い皮に手を通した歩哨が近づく。タ

国軍の歩哨だ。

歩哨は近よつて、乗用車の前に立てゝある
ちいさな赤旗に気づくと、さつと銃を上げた
「捧げ銃」の礼。赤の小旗は日本軍将校。し
かも佐官が乗っているのだ。

もう一人の歩哨が、重い大きな扉を音を立てゝ開ける。乗用車はすべり出す。そのあとに止つてトラック——さつきまで大声で歌つていたトラックも走り出す。ボンネットの上で青旗がぱた／＼と音を立てる。大尉か、中尉か、少尉か、とにかく日本軍の尉官が乗っていることには間違ひはない。

歩哨はまたも「捧げ銃」をした。

二

「菅、きようは、どこにする。」

「そうですね、戦隊長。少しはおもむきを変えてみたいですわね。」

「ハ、ハ、俺もそう思つていたところだ。

どこかこう、変つたところはないかなあ。」

そう戦隊長なる人物が言つたとき、助手席に居た桜田少尉がふり向いた。

「菅大尉殿、ホテルはどうです。」

「なんだ、なんだ、桜田はもうそんなところを知っているのか。」

「いや、ちよつと聴いたものですから。」

「あやしいぞ、こいつ。」

乗用車はそんな話のなかにいつか竹林を過ぎて、広々とした野ツ原を走っている。マンガーの木が一本、ちいさな森のように見えるロータリー。

自動車は躊躇もなくそのロータリーから左に折れる。警報も出ていないのか、街の灯がチラホラ。ロッブリーだ。そのロッブリーの街の入口を扼しているかのように、夜眼にも白い三階建。ホテル・ロッブリー。

乗用車はそのまゝに音もなく止る。助手席から、桜田少尉がガチャリと軍刀の音をさせて降り立つ。ゴボー剣の運転手が、あわてゝ後ろのドアを開く。高梨中尉が下り、菅大尉が下り、最後に、ひよろりとした体に、肩をむりにいからした戦隊長と呼ばれる人物。いずれも半袖半ズボンの防暑服。右の腰には拳銃を下げ、左の腰には軍刀がぶら下つてゐる。

「前進！」

と、戦隊長の声。

自動車に命じたのか、それとも、いまそこへ下り立つたつわものどもへ言つたのか。とにかく、どちらもその辺の呼吸はわきまえて

いたのであろう、自動車はスリツと前にすべり出し、菅、高梨、桜田の将校は、革靴の音も高らかにコンクリートの階段を上つて行く。いとも鄭重にボーイが出迎えるかと思つたが、誰も出て来ない。

建物はまったく洋風だ。が、突き当つた広間には、ヤシか、バナナかパムイヤか、ともかく南国情緒ゆたかな緑樹が、高い天井裏までとゞきそうに見上げられ、その根元の大きな鉢とともに、日本内地の植木鉢などとはおよそかけはなれた雄大さを示している。その周囲には、おもに藤で造られた大小さまざまの椅子が、或いは横向きに、或いは入口のほうへ、或いは奥に向つて、客のないわびしさを物語っている。

「オーイ。」

桜田少尉が叫んだ。が音沙汰がない。

「オーイ。」

こんどは菅大尉が声をはりあげた。

やがて、コツ／＼と靴音がして、白ずくめの洋服を着たボーイ。が、顔は黒かつた。

「クレーヤン、メーヨー？」

と部隊長。

「ハ、ハ、ハ。戦隊長こゝでは支那語は通じませんよ。」

と菅大尉。

「なるほど。じゃ、誰か英語でやつてみる」

「女は、居ないか。」

高梨中尉があやしげな英語でそう言つたが、ちんぷん通じないと見えて、そうなくてさえ大きい目玉をギョロリとさせただけのボーイ。戦隊長は、拇指をなかに挟んで、左手の拳をにゆうと突き出し、右手の人さし指をそこへ……。

何たる表現。部隊長ともあろうものが。内地での精神訓話はどうした。が、事ここに至つてはこれよりほかに策はなかつたのかもしれない。

ボーイはうなずいた。うなずいて、左手の人さし指と拇指とでまん丸い輪をつくり、そのうえを、右の手のひらでポンポンとたたいた。所かわれば品かわる。同じことの表現でもこう違うらしい。が、どうも部隊長の表現よりボーイの表現のほうが上品な感じ。

やがて四人は半円形の階段を上つて二階へ……。

階下の豪華さにくらべてこゝはまたなんと殺風景。廊下の両側にある室を開けてみればベットが一つポツンとあるだけ。そのほかに何もない。大きくもない普通のシングル・ベ

ットが室の半分を占領しているのであるから室の大きさも推して知るべし。

ボーイが四つの室を開けて、ヤシ油のランプに灯をつけて廻る。

戦隊長を先頭にした四人は、階段を上つてすぐ左手の部屋へひとまず落つく。

三

トラックはホテル・ロツプリーのまえでちよつとスピードを落したが、そのまゝ行き過ぎる。

街だ。電燈が家の中に光っている。

靴屋、靴屋、時計屋、理髪店、飲食店、そうした店が、間口、一間か一間半の狭い軒をならべてごたごた。中国や台湾のそれのように悪臭は甚だしくないが、異国の感じは十分。街中を通り過ぎたトラックは左に折れる。道は暗い。ペバイヤか何かの樹が高く低く道の脇、家の庭に茂つて、ちよつとした住宅街かとも思われる。

トラックは十字路の広場に止る。

助手台から、メンコの数で昇進した杉田少尉が下りる。後ろの、荷物なみの連中は、左に右に後ろに身軽くとび下りているが、誰が誰だか光のないこのあたりではとんと見当がつかかねる。が、そのなかで、いちばん若い

矢田兵長と三波兵長は、他の連中に言葉をかわすのもどかしとばかりに、十字路を右にとつてすゝむ。

住宅街かと思つたら、そうでないらしい。

二階建、——もつとも、このあたりに平家造りは見当たらないが——その二階建も内地のそれとは違う。階下はただ幾本かの柱が土台のうえに突つ張っているだけ。壁もなければ囲もない。二階建というよりも、足のついた家といったほうが適當かもしれない。が、暗いから、それらの姿もはつきりは見えない。

矢田兵長と三波兵長は、家の軒にさしかけたような階段を、がたりがたりと上る。上つたところに三坪ばかりの広間(?)がある。

街中には電燈が光っていたが、こゝにはそうしたものは無い。わずかにヤシ油のランプが一つ、暗くあたりをにこしているだけ。床は板張り、壁も板張り。その壁ぎわに六尺ばかりの腰掛が二つ。ニッパの団扇がその腰掛のうえにころがつている。右手の壁に安物のちいさな鏡が一つ。突き当りは左右に廊下がのびているらしい。

が、そんなことはどうでもよい。いましも広間の中央では、四人の女が、肩と腰を振り振り踊っている。たしかに手と足の動作をお

すれた肩と腰のみの踊り。

タララムムラア、タララムムラア、

どこかで聴いたよらかな節だと思つたら、それがさつき、トラツクの上で、つわものどもが聲をはりあげていた節とそっくり。いやじつのところ、つわものどものほうが、その節を真似ていい加減な日本語に替えて歌つていたわけ。それも野卑な日本語に。

南国では珍しい太つちよな体に黒の洋装をしている女。背も高い。顔の面積も広い。その後ろで踊っている女。これはさして特長がない。日本の浴衣を染めなおしたような派手なワンピース。顔がほそいから髪の毛が豊かに見える。その後ろの女は二人よりもずっと老けて、引き巻いたような髪の下にばかに鼻の目立つ顔。だが、浮世の風を吸い過ぎたためであろうか、頬骨が、鼻とともに目立つてとび出ている。

最後の女——といつても輪になつて踊っているのであるから、どれが先だか後だか判らないが、とにかくその女は、日本人にいちばんよく似ている。どれも黒い顔に、あの独特な真ン丸いというよりもギョロツとした眼にひきかえて、この女の眼はパツチリとしているがさほど気にかゝらない。三人の女の口が

大きく、口紅が紫に光っているのにひきかえて、この女唇は形よく整っている。いわゆる眼と口からなり立つたような他の女に比較して、この女は丸い顔の輪郭にそれぞれ釣合つた眼鼻だちをそなえている。やゝ細い腰の線にしつくり合つた縞のスカート。

「あゝ、ヤダ。」

踊つていた輪のなかで、そう叫んで、その輪からとび出した女、それがその女。

ちようど、矢田兵長と三波兵長がその広間の入口に立つたときであつた。いや、矢田兵長の姿を見たその女がそう叫んだといったほうが適當かも知れない。

「おゝマリ。」

矢田兵長がそう言つて手を差し出すのと、

マリなるその女が、矢田兵長の首ツ玉にかじりついたのがいつしよ。

「ね、行きましよう。はやく、あつちい。」

二人は手ツとり早く、広間の突き当りを右に折れて、あつちい行つた。

とり残された三波兵長は、六尺腰掛にドスンと腰を下ろす。

「すこし待て、ミナミ。」

ようやく読解のできる日本語で、太つちよの女がそう言う。どうやら三波兵長の敵はそのなかにいないらしい。

しばらくして、それらしい女が出て来た。



男の手をとつて……。先客があつたのだ。彼女は階段の下り口まで男——もちろん足の細い、色の黒い、眼の大きな、髪ばかり長いタイ国人であつたがの背をボンとたたいてくると踵を返し、すぐその足で、三波兵長のまえに伺候する。

三波兵長、なんとなく水臭い感じ。

が、それでもどうやら破談にはならなかつたようである。その証拠に、二人はもつれるように、矢田兵長の行つた廊下とは反対側の左の廊下に姿を消して行つた。

いまの女も、多少、日本人に似通つたところがあつた。矢田兵長の女よりはずつと劣つて見えたが……

四

「そうするとなにか、日本人に似た女がいちばんいいというわけか。」

と戦隊長が言つた。

「それはなんです。やはり我々日本人は、それが当然だと思います。」

高梨中尉が堅くるしい口調でそれにこたへる。

「が、なんにしても遅いぞ。」

と、菅大尉。

「兵は拙速をたつとぶ。どうだ桜田少尉もう

一べん催促してみろ。」

「は。」

といつて桜田少尉が立ち上つたとき、階下のほうでガヤガヤ。どうやら桜田少尉は助かつたらしい。

女が四人——もつともこれが三人や五人では、待ち詫びていたつわものどものほうで同志討ちがはじまらないとも限らない——ポイに案内されて、やつと到着に及ぶ。

「敵艦見ゆ。」

「いや、航空母艦見ゆ、だ。」

「どちらにしても、五十歩、百歩。」

「五十歩と百歩じゃ、倍と半分。海南島まで行く間に内地に帰つてしまふ。」

「戦斗準備。」

「まてまて、目標の選択だ。」

女が来たとなると急に元氣づく室の中。

女たちは、

「こんばんわ、おきき。」

とでも言うべきところであらうが、その言葉がわからないのか、それとも、お初見参で遠慮しているのか。四人の女はともに室の入口に来て、大きな目玉をギョロリとさせただけ。

「お入り。」

敵には弱く、部下には強く、そのくせ、女にはやさしいのか、その辺はともかくとして戦隊長の声音が打つて変る。がやはり、女たちは入口に立つたまゝ……。

「菅、貴様ア、どれにする。」

「さあ。……ま、戦隊長からいゝ奴をとつて下さい。」

「高梨、桜田、どれがいい。」

ほつそりとして、いや、瘦せて、のほろがいかもしれない。瘦せて頬骨の高くとび出した顔の部隊長が、日頃の神経質を度外して、眼をかゞやかせ、そう言っている間にも、女の頭のとつべんから足の尖端までなめつくすように見ている。

色白で童顔の菅大尉も、にやりにやり。桜田少尉はもう別の生命でも動いているとみえて、赤い顔でうつむいている。無理もあるまい少尉といつても初年兵よりもまだ若い二十一。高梨中尉ひとり、ばかによそよそしくそつぽを向いてタバコを吹かしている。そのくせ、案外気はあせつていられるかもしれない。女は——と、よく気をつけてみて驚いた。なんとこれが、さつき矢田兵長と三波兵長の上つて行つた家で踊つていた四人。そういえばなるほど服もさつきのまゝだ。ちよつと違



うところは、シユロの葉か何かで編んだハンド・バッグと呼ばれるものを左手に提げていることだ。

「じゃ、菅。俺はその右の端にする。貴様らいゝやつをとれ。」

部隊長の目標選択が終ると、あとは右へならえ。菅大尉が、あの暗い広間で二番目に踊っていた特長のない女をとり、高梨中尉が太りつちよの顔の面積の広い黒い服を着た女を

とり、最後に、いちばん若年の桜田少尉が、いちばん年の行つた鼻と頬骨の目立つ女を有難く頂戴した。

さて四人、いや八人は四つの室に分散遮蔽する。

殺風景な人間が閉じこもつたのであるからおよそ殺風景な存在である。といつても、道

端の枯木とは違う。若い血がうずうずと通っているもの、このあたりの表現は小説家でもむつかしい。表現にも雰囲気というものがある。淡い電燈の光とか、友染の布団がどうか、十何夜の月が窓に明るくうつて、遠く夜汽車の汽笛が二人の情熱をどうしたとか、その室の中にはそういうものがない。ヤシ油のランプはあつたが淡い、という表現にはびつたりこない。うす暗い、というほうである。色のついた布団もない。馬の背に置くようなキザキザの毛布が一枚ベットのうえにのびているだけ。それもなんだか、かびくさる。月もなければ夜汽車の音もない。

が、そんなことは、こゝに居るつわものどもにはどうでもよかつた。戦隊長なる人物は上衣をとり半ズボンを脱ぎ、それでもこれだけは気になるのか、皮のケースにはまつた拳銃をそつと枕もと近くに置いた。

女は、男よりさらに度胸がよかつた。スカートをぐつと押し下げ、上着といつしよにくるりと丸め、ポイとベットのうえへ。あとはシユミーズ一枚。どうやら、その下のものはないらしい。

「君ア、いくつ。」

「無理に雰囲気をかもし出そうとしたが、あいにくと言葉が通じないのか、女はだまつたまゝ白い眼でちらりと男の口もとを見ただけそれでも男のほうは、男の生命だけは動いているらしい。

「あんた、ヤダ、知つてるか。」

「え、ヤダ?。」

「飛行機のヤダ、かわいゝヤダ?。」

「あゝあ、この女が矢田兵長のあいかただったのか。」

■戦隊長の顔がほろ苦く変つて行く。

が、ともかく目的だけは達したようであつた。甘酒と唐ガラシを一度に飲み下したような顔で室から出て来た戦隊長の姿を見ると：

××××××××

翌日、矢田兵長はバンコック郊外のドムア
ン飛行場に派遣され、桜田少尉は軍医のまえ
に立つておかしの恰好をしていた。

が、やはり、その日も終つて暗くなると、
赤旗を立てた乗用自動車は竹林の中の舗装路
を走つていた。

車は昨夜と同じように衛兵所のまえで止る、
タイ国軍の歩哨が「捧げ銃」をする。昨夜と

同じところで、同じように。
たゞ違つてゐるのは、昨夜うしろに続いて
いたトラックが今夜は見えないことであつた
乗用車は音もなくすべり出す。今宵もロッ
ブリーの街の灯を求めて……。 おわり

☆ 破つた日記帳 ☆

川 端 多 奈 子

去年のお正月からずつと毎日欠
かさず書き綴つていた私の分厚い
当用日記、それを何故破つてしま
つたのか今になつて考えてみると
その時の心理が自分ながら不思議
なくらい。でも、今度編集部から
私の日記を是非誌上に発表したい
と云われて、あゝ、あの日記のあ
の時の事、破つてしまわなかつた

ら、と思つたり、又、あの時破つ
て棄て去つておいてよかつたわと
いう安堵との入り混つた気持でち
ぐはぐになつたり、……………
そして結局原稿紙を押しつけら
れて書かなければならなくつてし
まつた。後から思い出して書くん
だから楽しかつた事や嬉しかつた
事ばかり残つていそうで、私少し

不安なんだけど、若しそれでもよ
かつたら、破つてしまつた日記帳
のうら覚えを書いてみようかしら
だから、事実と少し位違つてたつ
てごめんなさいネ。
六月二十二日(日) 曇

つたのに、それが終つて帰りの電
車の中で、なんであの様にほのぼ
のと楽しかつたのかしら、今日の
呼び出しを行こうか行くまいかと
心の中でためらつてゐる中、とう
／＼私に行く決心をさせたのも、
あの何んだか知らない楽しさのせ
いだつたかしら。
梅雨つてなんでこのように蒸し
暑いのでしょう。閉めきつた部屋
の中はまるで蒸風呂のよう。裸で
いる私はいゝのだけど、他の人は
可哀そうなくらい。でも、縄をく
るぐると巻かれると、思わず汗が
じつとりとにじんで、それが肌の
上でべとべとと乾かない。
私の肌指一本触れない男の方
が憎らしいと思う。ポーズをつけ

今日で二回目の日、此の前の時
最初なので堪えられない位恥しか

る時位、言葉だけでなく、じかに身体にさわつてくれたらいいのにでも、力一杯綱を締めつけるとき男の方の熱い息がと私の頬にふれる。身動きも出来ない。そして手足の先の方からだん／＼と快く痺れてくる。「あッ」私は口に巻かれた手拭の下で思わず叫び声をだしそうになつた。腕の皮膚が二本のロープに挟まれたのだわ、その痛さ、じつと唇を噛んで辛抱する。何事もなかつたように。やつと終つて解かれた豆しぼりの手拭に私の口紅が赤くついていていた。

七月十八日(日) 晴

日曜日だと思ふとなんとなく気が持がうきうきして、思わず寝過してしまつた。慌てゝ洗面所へ走ると硝子窓越しに、もう朝の陽がきら／＼とさし込んで、勢よくしぶきを上げた洗面器の水が白い水玉となつて素足の上にくつもこぼれる。ゆうべの夢はなんだつたかしら？寝足りた身体は隅から隅ま

でぶち／＼とはちきれそうな元氣一杯、何か大声で思いつきり愉快な歌でも唱つてはしやきたいような氣持、ランランラン……。

でも、ちよつと氣になつて、寝衣の襟をずり下げてみる。あら、ゆううつになつてしまふわ、あれから五日もお風呂へ行けなかつた二の腕の縄のあとが、うつすらと残つてゐるじやないの、……ウッフ……、これは私だけのヒミツあの時の事、ちよつとびり思い出してみる。下窓からひんやりとした冷氣が板張りの廊下の素足に触れるあゝ、今日も暑くなるのだらうな

でも仕方がない。次の普通列車を待つ。

今日はどこか遠くへ行くらしいつて言つてたけど、どこへ連れてゆくのかしら？ちよつと不安になる。海水浴場行きの人達がホーム一杯に溢れるようになってきてやつと満員の電車がやつてきた。

此の前のように裸でぎりぎり縛られたらイヤだなアと思う。お風呂へ行つても我慢したい位のぼつてりした肉つき、自分でもヌードには自信があるのだけど、縄を使われるのだけは閉口だわ、だつて身体にきつい縄目がついてとれないんだもの。まだ誰にも触れさせない事のない自分の肌が縄でいましめられてゆくのはいとほしいと思う。

駅のポストの前に見覚えのあるベレー帽が見える。そしてカメラ道具入れの鞆、それを見て思わず私の胸がどきんと鳴る。あの中にロープが入っているのだわ、私の

肌の脂を吸つたことのある。

暑い、暑い。本当に暑い、鼻の頭に汗がふき出て出がけに叩いてきた薄化粧も忽ち落ちてしまふ。

折角山の頂上迄登つたのに登山客が多くて駄目、谷川の岩の上で撮るつもりがこれも又キャンプの人達が大勢いて結局ブトに噛まれて疲れただけ。つまらない。

それでは夜を待とうと、木蔭で午睡して、さて目的の松山に登る都会の灯がきら／＼ときらめいていて美しい。愈々松の樹に縛られてといった時、猛烈な蚊軍の襲来マグネシウムを焚いてやつと一枚とつたきり。

身体を動かして肌にとまつた蚊を追おうとするのだけど、松の樹にぎり／＼縛られているので背中がすれて痛い。やつと縄を解いて貰つて慌てゝ服を着る。今日は本当にこりこりしてしまつた。

(未完)

女嫌いの種々相

仁比山 等



女嫌いといつても、色々の種類があるから、便宜上、左の五種に区別して考えて見よう。

性的冷淡に由る女嫌い

第一種の女嫌いは、性慾の缺乏に基くもので、此のような者の多くは先天性精神障碍に因るのである。この様な実例は、クラフトエビング、ハムモンド、フォーレル等

より報告せられたが、併し男子に於て性慾の全然缺乏するものは先づ極めて稀有といつていい。但しフェールブリンゲルの説に依れば、男子に於ける先天性性慾の缺乏は他の学者の思惟する程に稀なので無いとのことである。

世の中には極端な女嫌いがあつて、女の匂いを嗅いでさえ嘔吐を催すというような男子もあるが、併し此のようなものを以て必ずしも性慾の缺乏せるものと看做すことは出来ない。その中には後に述べる処の性慾顛倒や、或は一種の強迫観念に属する潔癖等に基く者も尠く無い。性慾の缺乏したものは女嫌いと言ふよりも寧ろ女に冷淡無頓着なもので、所謂「性的冷淡」と称せらるべきものである。

性慾顛倒に由る女嫌い

第二種の女嫌いは、性慾顛倒のものに認めるもので、即ち同性を愛するものである世に所謂女嫌いの中には之に属するものが最も多い。このような性慾異常なるものは如何に佳人麗姫を見るも毫も心を動かさず且つ同性の愛には先天性及び後天性の二種があるが、後天性のものに於ても、久しく之に耽るものは遂に女嫌いになつて了う。

ギリシャ古代の学者ヘシオード、シモニデス、ユリピデス等が女嫌いであつたのはイワン、プロツホの云つた如く、当時ギリシャに広く行われたる男色と密接の關係があつたことは殆ど疑がない。

事情境遇に由る女嫌い

第三種の女嫌いは、自己の事情境遇から女嫌いになつたもので、シヨーベンハウエルが女子を罵倒し、之を嫌悪すること甚し

かつたのは、少年時代より実母との仲が悪く、少しも母性愛の温味を解していなかつたのと、また一つには壮年時代に微毒に感染したためである。又ストリンドベルグの女嫌いも、其の名作「馬鹿者の懺悔」に徴して知らるゝが如く、その一身の境遇事情に關係があり、又「男女と性格」を著して女性を罵倒したワイニンゲルも、婦人に対して不幸不愉快なる経験を持つていたからである。

自己の学説に基く女嫌い

第四種の女嫌いは、自己の学説や觀察に基く女嫌いで、例えば、精神病学者メビウスが、女子の生理的精神薄弱なることを論じ、或はハインリッヒ・シュルツやエツアルド・マイエルが男性的文明を讚美し、或はベネデクト・フリードレンデルが男子間に於ける同性の愛或は少くとも生理的交情を嘆美して女性を排斥したるが如き類である。

自己の性癖に基く女嫌い

第五の女嫌いは、自己の性癖に基くもので、例えば女子を外面如菩薩内心如夜叉、

五障三従の悪人と信じ、或は女子を不潔汚穢視して、之に接するのを嫌悪するの類である。此のようなものは主として感情の強い神経質の男子に認める処で殊に潔癖の著しい者の中に女嫌いを見ることが多い。

女嫌いの実例

我国近古の雜書隨筆の中から女嫌いの若干例を挙げて見よう。

「賤の小田巻」に曰く、——志道軒は女と出家とが嫌いにて、婦人出家の中、来りて聞く人に交り居れば、段々と当て口をいゝ出して、後は居堪らぬようになる故、彼が辻には婦人坊主来らずと。

「梧窓漫筆拾遺」に曰く、——龜田鵬育の語りし備前の僧士井上嘉膳は、婦女を惡みて一生不犯なり。姉に逢うにも一間を隔てゝ尊敬せり。これは非常の行なれども、世人好色の戒ともなるべし。婦女を惡みけるは、後梁の先主蕭登に似たり。一生不犯なるは唐の陽城の兄弟に同じ。

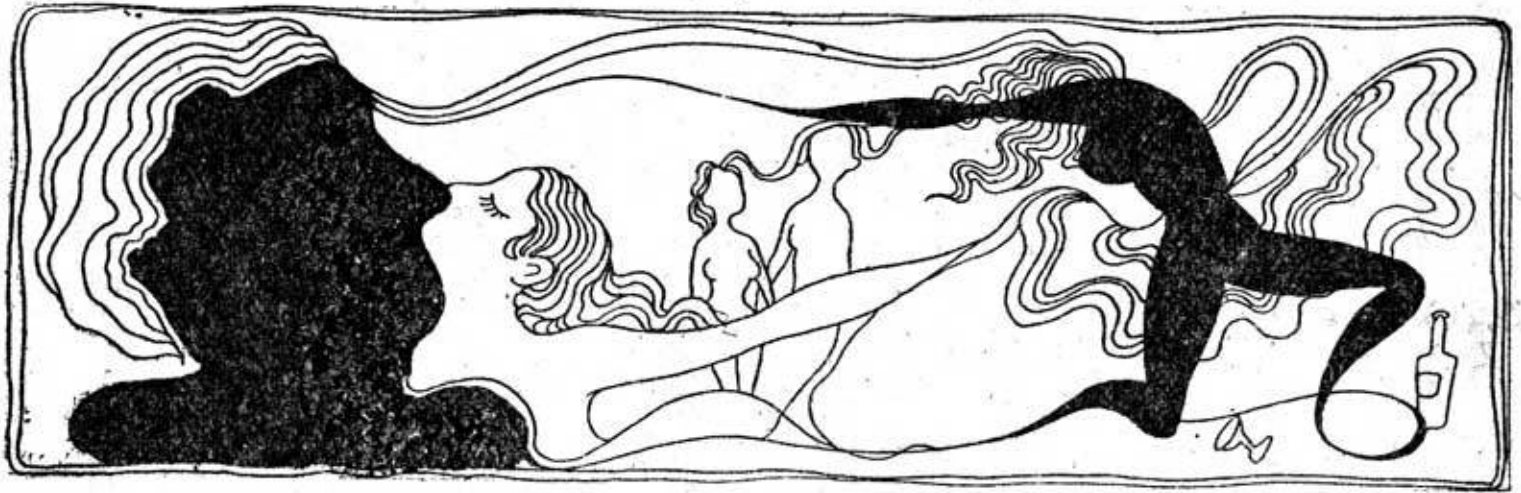
・「隨意錄」に曰く、——尾張人岡村雲八者、性惡婦人、衣服飲食、猶婦女之所製者則、知其臭、而不欲衣食之云々。

「甲子夜話」に曰く、——信州を領せる或侯の婦女を殊更に嫌いて、其の匂いをも厭うと云う。それ故、奥方もあれど対面せらるゝまでにて、各別に離牀し、すべて女は近ずき寄せぬとぞ。

又領邑に鯨漁を業として富める者あり。女嫌いにて、下女など厨下に奔走するの外身近くに女なし、然れども妻なしと云いては吝嗇の譏を受くとして、京都又は近領富家の娘を妻に迎うるに、もとより別居して、たまさかに呼び見るのみの体ゆえ、妻も倦み果て遂に別れ去るとぞ。

以上の諸例は果して性慾の異常に因るか或は神経質性の癖習、潔癖に因るか、因より明かでないが、兎に角、女嫌いの稀有で無いことは此等の実例に徴しても明かである。

現代に於ける有名な人では、西本願寺の前法主大谷光瑞氏が女色を好まず、本願寺に奉仕していた奥女中や他の女子を殆ど解雇して、身の世話を美少年や雛僧にさせた云うことは、世に隠れもなき事実で光瑞氏の性的生活の普通でないことは明かである。



琉球の女達

木之下白蘭

1

酒場「珊瑚」の室内は薄おぼろに曇つていた。それは天井の円蓋ドームから、夜霧みたいな光が落ちてゐるからである。円蓋はちやうど、処女達の胸に豊かに隆起してゐる乳房のように、オパール色の半円球を雪白の天井に二つならべて盛り上つてゐる。お紅はその広間の奥で踊つていた。

何処かの遠くで銀線の上を球が転がつてゐるやうに、幽遠な……かと思ふと、砂利を入れた空罐を振るみたいな変調の多い音波に揺られて、白豚のお紅と、いたずらなお客に愛称されてゐる三窪紅子の、豊満な肉体が蠱惑的な律動を作つて回転してゐるのだ。

その踊を、矢張り広間の片隅に席を受持つていた与那覇麗子は全く輕蔑しきつた眼で評価してゐた。田舎廻りの曲馬団あたりにいる零落した踊子達が、すり切れたレコードに合わせて跳ねたり飛んだりするのと異なりやしないぢやないの、氣品が無くつて、低俗で……何さ……全くあの身体ときたら、色こそ白いけれど豚肥りつて奴ぢやないか……酔の廻つた麗子は客の前でそう毒づいた。

と、いうのは、麗子は何故かお紅が、急に最近になつて、極めて強度の悪意をもつて、こちらが町雄作に接近するのを、妨害しようと企んでゐることに気づいたからである。

町雄作は、アパート紅麗荘の息子でありながら、二階の九号室を占拠してゐる青年なのだが、紅麗荘には、その名前のせいか多くの若い独身女性群が住んでいて、男つ氣といえはその雄作と、経営主の町雪江未亡人の義兄に当たるといふ老計理士の二人だけである。

そんな関係からか、その雄作を中心に、女達の暗闘が常に絶えな

いのである。殊に雄作を好いている麗子が北隣りの八号室を占有し雄作の室を挟んで南隣りの十号室に、矢張り雄作を愛しているらしい、もう珊瑚でも古顔の豊麗な美貌と巨体をもつ三窪紅子が住んでいるのであるから、自ら、生ずる嫉妬反感がその働き場である酒場珊瑚にまで延長されるのも、蓋し無理はなかつた。

それにもう一ついけないことが別にあつた。それは二月程前に東京の方から来たという、朱実のことに端を発している。彼女も亦、麗子やお紅達と同様に、珊瑚の経営者である議間嘉平次が、沖繩の人間であることを知つて頼つてきたらしいのだが、初めて珊瑚に訪れてきた時、挑発的な肉感美を湛えたお紅の豊満な肉体の蔭に、恥しそうに隠れていた朱実の姿は、岐阜提灯の灯影に浮いた何かの、秋の花みだいに蕩たけて、寂しく美しかつた。

ひとたまりも無くその朱実を好きになつた麗子は、朱実を自分の室に同宿させようと懸命になつたのだが、老巧なお紅のために、そのお株を他愛もなく奪われてしまつていた。

「落まないけど朱実ちゃんにはあたひと同じ石垣島の生れなのさ。麗ちゃんは宮古島だつたわね」

つんと取り澄したお紅に、そう嘯ぶかれて、麗子は口惜しさのため涙ぐんだ程である。咎められでもしたように、顔を少し赤くしたその時の、朱実の初々しさが、今も心の奥に灼けついて放れないのだ。

琉球古典舞踊の冠船流の衣鉢を継承しているといわれるお紅は洋舞の方でも相当の腕前であつた。

だが、その美しい肉体の表現する律動は、一つも麗子の情感を打たなかつた。何を思つたのか突然席を立つと、鉢植の檳榔樹の間を

縫いながら反対側の席の方へよろけて行つた。先刻から乱暴に呻つた洋酒が廻つたのであろう。整調を喪つた足元には、しどけない乱れとよろめきが見えた。

隅の、淡青の薄絹を張つた衝立に遮られた席には、真赤な深い椅子のクッションの中で、深く泥酔している雄作を胸の中に藏いこむように抱きとめている朱実の姿があつた。麗子はそんな二人を、果物店の林檎でも眺めるみたいひとわたり見渡してから声をかけた。

「町さん。ちよつと起きてよ」

朱実は不快な表情で、この不意の闖入者に対し難詰する眼を向けたが、黙つていた。麗子の眼が油ぎつて燃えながら、悪戯つぽく雄作に絡みつくの朱実を瞬間に見てとつたからだ。

「お話があるの。ね、しゃんとしてよオ」

「煩いね」

と雄作は呟くように言つた。彼の眼はもう水の腐つた古沼みたいにどんよりと翳つて、この礼儀を弁えない女に対する怒り、不快な感情も感じられそうな風になかつた。

「ね、町さん。あなたは何か故さういつも私からお逃げになるの。それを聞かして頂だい」

「僕が逃げるんだつて……」

硬ばつた舌を廻しかねながらさう言つて濁つた眼で麗子を見たが直ぐ折れるようにがくりと首を垂れた。空間が焰の如く揺めくのであつた。麗子の顔がその中に、火の渦に落ちた花みたいにくるくる廻つた。かと思ふとその顔は、夜煙火のように五つも六つも砕け、それはお紅の顔にも、朱実の顔にも見えた。

「そうよ。あなたはいつも私から逃げてばかりいるんだわ。先刻二階での宴会でだつてそオでしよ。人が折角お酌に行つてあげたのにふいと立つて社長さんの方へ逃げていつちまつたりして……輕蔑してゐるわ！」

「ばか、逃げたなんてあるか」

「ふん、お紅さんが怖いんでしよ。卑屈よ、町さんて方……」

「あゝ、町は仰せの如く卑屈者で、輕薄で、おつちよこちよいで、駄目な男なのさ」

「そして麗子の愛情なんて一つも認めようとなんかしないで、そんな愛情なんて豚か犬に食わせツちまつてるのね」

「ふん愛情……か。ミス珊瑚……麗子の愛情つて一体何だ。何の愛情だというのかね」

蟹の横腹に噴く泡のように、雄作はぶつぶつ同じことを囁言ささやみに繰り返した。

「私の愛情がお分りにならないの」

俄かに改まつた口調で麗子は言つた。その眼がらんと輝きを帯びてきた。

「分りませんねえ」

雄作は半意識の中で嗤笑した、沈黙があつた。突然、麗子の眼が炎立ち、野獸のような眼をよぎる情慾の閃きがあつた。かと思つて「私の愛情はね……こんなの！」

叫んだかと思つと、麗子はその顔を雄作の顔に投げ寄せた。渾身の力をこめて、その白い剣きだしの腕を力一ぱい雄作の首に巻きつけた。瞬間、彼女は血を吸う美しき蛭ひるかと思えた。雄作はあわて、身を退こうとしたが、彼の顔は麗子の強い緊縛のために動けなくな

つてしまつた。唇に甘酸っぱい異様な触感を感じ、むせるような麗子の激しい体臭が鼻を圧迫した。

それは傍はたの眼に、今や酔いしれ果てた雄作は、崩れ落ちた牡丹の花の下にあがいている小さい虫にも見えるのであつた。こうした麗子の思いがけない無暴な振舞は、朱実にとつては耐え難い刺戟であり、屈辱であつた。

「何を馬鹿な真似をなさるの。そんなたちの悪い惡戯いたづらお止しなさいよ」

憤いさはろしく朱実は懸命になつてそう叫んだ。

「はゝゝ惡戯いたづらに見えたか知ら……」

濡れた真赤な唇を拭きもしないでせゝら嗤うと、ともすれば身体を中心を失いそうな傍の雄作に、軽い一瞥を呉れて麗子は卓子の洋酒をやけにくつと呻つた。

「だつて町さんは随分酔つてらつしやるじやありませんか。そんな無抵抗な人の唇をおかすなんて……」

それを聞くと、突然麗子の顔に凄じい殺氣が迸ほとしつた。

「何だつて、おかした……？ばかっ！」

麗子の顔はまるで青い磁器のように冷たく硬ばつて血色が消えたかと思つと朱実の頬がびたつと激しい音をたてゝ鳴つた。朱実は反動的にその殴られた頬を片方の掌てのひらで押えたが凍りついた花みたいに、全く無抵抗にたろろがなかつた。

だが、次の瞬間、之は亦意外に麗子の頬が激しい平手打ちをくつて高鳴る音がしたのだ。雪白のドレスに十八貫の美しい均勢をもつた巨体をくるんだお紅が、麗子の前にすごい権幕で突つ立つていた。こうした場合、平常より幾層倍もお紅の顔は凄艶なものに見え、

まるで充滿した白羽二重の氣囊の如く爛熟した肉体が、威猛高に麗子を威圧した。

反動的に麗子も立ち上つたが、その青い頬には仄かな微笑が凍りついてゐた。お紅はそんな麗子をちよつと無視した風に

「私の踊をちよつとも見て下さらないと思つたら、何てざまなの町さん。獸^{けだもの}みたいに人の前なんかで変な真似したりして……」

深い色をこめた眼で情無^{なさけな}そうに酔いしびれている雄作を見下したが、雄作の頭脳には怒もなければ、判断も理性もありそうではなかつた。彼はお紅をぢろりと見上げたが、ぢき朱実の横腹に正体もなぐくず折れてしまつた。

「あら、獸で悪かつたね」

急に開き直つて、麗子はせゝら嗤つた。

「琉球の女は情に濃ゆいと言われてるけれど獸みたいなことはしないんだよ。押売接吻をするなんて、そんな珊瑚の暖簾^{のれん}や、朋輩の顔に泥を塗るような変態の真似なんか止してお呉れ！」

お紅は激しい口調でそう言つたが、麗子は酒氣も手伝つて、横柄な面つきで反抗的に微笑んでゆく許りであつた。

「ふん、その癖朱実ちゃんに負けまいと、町さんを籠絡しようと狙つてゐるの、何処の白豚だつたか知ら……」

と、麗子は叫んで嗤つた。それは麗子のとつて置きの腹一ぱいの罵倒であつた。

「何つ！」

とお紅は満面朱を注いで怒鳴つた。隙^{すき}さず振り上げた拳で強い一撃を麗子の頬に加えた。そうなるに麗子も負けていなかつた。敏捷な女豹のようにお紅に武者振りついた。然しお紅はその麗子を激し

く突き飛ばした。すると木煉瓦張りの床に打ち倒れた麗子は、ぢき又蝗^{いなご}のようにぱつと飛びかゝつてきた。

お紅は亦麗子の頭髮を掴むと苦もなく地べたへ彼女を引き倒した。理智とか意識の無い獸達の噛み合いみたいな女の乱闘が初まつた。

罵声、怒声、掌の音、靴の音、破れる音、裂ける音、割れる音、異様な肉体のぶつかり合う音：それらと共に解^{ほぐ}れ群^{たか}る、妖しくも美しい色彩をもつ塊^{かたまり}を、幾十かの酔客や女給達の眼が輪になつて取り巻いた。

「こいつは女の出歯亀なんだよ。恥知らずの獸なんだよ。お前のような女はこうしてやるんだ！」

腕づくでは麗子は象のように逞ましいお紅の敵ではなかつた。彼女はお紅のために木煉瓦の床へ組み敷かれてゐる。馬乗りになつたお紅はそう叫びながら、殴りつけ、掻きムシリ、着物をひき裂いた。麗子の唇から鮮紅の血がだらだらと流れ、ずたずたに引裂かれた着物から、刃物で斬つたように真赤に血走つた爪跡のついた乳房や、まくれあがつた裾から、土によれた真白いズロースや、贅肉に肥つた太ももが剥き出しにされ、皆の眼を痛ましく射た。だが、誰もこの凄惨な闘争を止めようとはしなかつた。寧ろふだん孔雀の如く驕^{おご}り高ぶつた驕慢な麗子の、傷つき喘ぐ肉体を或る距離をおいて眺めることによつて、人間の奥底に潜んでゐる惨忍性を楽しませているかの如くであつた。

2

向洋機工株式会社創立二十五周年記念祝賀会が、酒場珊瑚の階上畳の広間で開催された夜、珊瑚に開いた三色の花……として、この街

で囃されている、お紅と麗子が、その仲間の朱実の愛人を争奪するために、衆人環視の広間で、悲惨なる格闘をしたという噂が、ぱつと街の話題となった。

酒場「珊瑚」と言えば、経営者を初め、秀れた美貌をもつ粒揃いの十数名の女達も、悉くが沖繩の出身者である点で、この街では有名である。また代赭色の小さい土器から注がれる強度の泡盛も名物の一つであつたが、厳格に言えば、珊瑚の名声をほしきまゝにしてゐるのは、経営者が用意周到に、その女給に教養とか気品とかいったものを身につけた、一種の品格を持つてゐるものを選抜採用し、いわば高級の女給群を配し、格式ある酒場を形成してゐるからだと言えた。

だからこの酒場では、他の酒場みたいに、おき女給達に卓上の酒肴に蠅みたいたかられたり、せびられたり、おごらされたりする不快な場景は展開しなかつた。

そんな珊瑚の出来ごとである上に、女給群の雙璧であるお紅と麗子との痴情さだけに、素晴らしいニュースバリユウのある話題なのだつた。

だが、さてこの話題の種にされてしまつた肝腎の町雄作がこの珊瑚に、繁く通い初めたのは終戦後二年、南方から帰還して間もなく実父の寒河江俊之助に逝去されたからのことである。父の死は、石鹼玉のように美しい果ない一つの夢を雄作に与えてしまつたのだ。雄作はその夢を抱いて、珊瑚にくるようになった。

当時まだ、この街で婦人科医として開業してゐた父は、相当の酒豪で鳴つてゐたが、思いもかけぬ交通事故のため、あつけなく他界してしまつたのだつた。長男の雄太は、東京の大学で仏蘭西文学の

講師をしており、二男の雄作といえは兄を真似て医業を嫌い機械工学の方面に進んでおり、おまけに母親の妹に当る紅麗荘の女主人町雪江にせがまれて養子に呉れてしまつてゐるといつた有様で、父の寒河江医院は父の死を機に一代きりで閉院、整理してしまつた訳だが、その整理中のつれずれに、不図開いた父の日記の中に、雄作に夢を齎した頁があつたのである。そこには次のようなことが墨痕淋漓として認められてあつた。

昭和十八年十月九日。細雨蕭々。

本日休診なり。朝来安里の鵜友比嘉靖隆医伯来訪。

鵜卵の榮養と藥效につき、数千年來の言い伝え——漢法藥法の聖典「本草綱目」に掲載されたる、万病必治的鵜卵の効能果して真なりや……の閑語にて談笑久し。後、多年に互る比嘉老の仰望を容れ豚兒雄作に比嘉老の愛嬢比嘉倫子当十三歳の成人をまちて、妻として娶らんことを約定し、婚約誓文一札を認めて交ゆ。

如何にも漢學者の祖父の血をうけ継いだ洒脱な父らしい文章であつた。昭和十八年といへば、まだ父が沖繩の那覇で開業してゐた時代で、その当時矢張り那覇市の安里の開業医だつた比嘉老とは、医業よりも愛育してゐた鵜を通じて、随分深い親交があつたらしいことを、雄作は母親の里江から言い聞かせられて知つてゐた。然し七高時代に約一週間位那覇の両親の下で過した外、殆んど紅麗荘の叔母の家で大きくなつた雄作は、比嘉老や、倫子のことなんぞ知つてゐる筈がなかつた。母は勿論そのことは知つてゐたらしいのだが、父程倫子に対しての愛情は持つてゐなかつたのらしく、後日、米軍の沖繩上陸作戦当時痛ましくも花の蕾を散り果てた百合部隊の話を知り、終戦の時はもう倫子も十五だつた筈であるから、恐らく

白百合部隊の一員として玉碎したのに違いない……とお供養をあげたり、線香をとぼしたりまではしたのだ。そうだが、父の死んだ頃には完全に倫子のことはその記憶から抹殺されていたのらしく、その婚約誓文の所在も全然知っていなかった。

雄作はひそかにその誓文なるものを、根気強く整理かたがた念入りに探してみたら遂に発見できなかった。だがそうになると、人間の必然的な心理の推移として、倫子に対する不可思議な愛情が油然而として滾り上ってきた。

雄作はあらゆる手段を尽して、純情可憐な白百合部隊の女学生達の名を知ることに努めた。が然し、その中に比嘉倫子の名前は見出せなかった。その事実が雄作に、一つの夢を抱かせる始末になったのである。今ではもう二十一になつてゐる筈の比嘉倫子はきつと何処かに生きてゐる……そう思うと、雄作は如何なる苦心をしてゐるも探し出してみたい気がするであつた。それには沖縄出身の人々の出入の多い珊瑚で、それらの人々にそれとなく当つてみるのが一番良策のように思われた。雄次の珊瑚への道はこうして展けてきたのだ。然し不幸なことに彼はまだ、安里の比嘉家一族の人々を知つてゐる人に出



会つたことが無かつた。

そのうちに、彼は隣室にいるお紅が段々好きになつた。常に冷たい気品を見せ、隙の無い身構えで近寄り難い人間に思われる麗子も好きになつた。だが一番好きになれたのは、何と言つても最近東京から来たばかりの朱実であつた。

足の壊れてしまつた美しい人形のように落膽した悲しそうな表情で歩いてくる朱実……さまざまな感情の乱れ合つてゐる人みたいに黙々と、淋しげな微笑を湛えながら洋酒を注いで呉れる朱実……そんな朱実を見てゐると、雄作の胸に描いてゐる倫子の影像と、ぴたりと一致するように思われるのである。

比嘉倫子こそは、きつとこの朱実みたいな、清澄雅麗な、沈静の美しさを持つ女に違いない……何故かそんな気がしてならないのだ。だが、雄作の朱実に対するこの感情も、比嘉倫子の生死を確認するまでは、これも亦一つの夢として胸の中に藏つておかなければならぬのであつた。

雄作がその後朱実と会つたのは、珊瑚の押売接吻事件後、三日目の珊瑚公休日の、黄昏であつた。珍らしく朱実が一房の黄色いバナナを皿に載せて、しとやかに入つてきたのである。

「那覇から珊瑚に送ってきたんですって。みんなに配給があつたんですのよ。お召上りになりますか知ら……」

「あゝ、有難う。大好きだよ」

朱実の水色のデヨーゼット地に、渦巻を明るくぼかした古風な京染の華な浴衣に、レヨン応用の綴単帯をしめていた。丈は麗子より心持低い、その肉付は浴衣にまで健やかな隆起の波を打たせている。

「静かで宜いお室ですこと……」

両袖の大きな卓子、黒い牛皮に覆われた深い廻転椅子、青銅の彫物、書棚の仰山な書物、壁にかゝつたグローヴ、野球のユニフォーム等、凡そ男臭い室内をひと渡り、物珍しそうに見廻した揚句、窓外遠く、薄赤く焦げた街の夜空に、高く点滅している白粉の広告燈を眺めていたが、

「お月様か知ら……」

と呟いた。空のはての一端が刻々と卵黄色を帯びて、間もなく柿色に変色してゆくのだつた。雄作は煙草のすい殻を灰皿に突つ込むと静かに窓際に歩み寄つて行つた。その雄作を朱実は静かに振り返つた。

「ね、町さん」

「うむ……」

「先達の押売接吻……後味如何ですの？」

「ばか、何かと思つたら」

「でも私……ほんとに嫌だつたわ」

「あの夜は麗子だつて随分泥酔していたらしいんだ。仕方が無いぢやないか」

「でも……私一生涯あのことを忘れないわ」

「それは一体どういうことなの。僕が不倫なことでもしたと言うの？」

「掌中の何かを奪われたつて感じ……そう言つたら当るか知ら」

朱実はそう言つて、幾らか昂ぶりながら微笑した。

「そんなことを言つて君には僕の氣持が分らないの」

「……」

空に登つた月魄は血のように赤かつた。それを見つめている朱実の胸には別の感情が動いていた。

それは乳裏深く、ひそかにとぼしている灯を、ともすれば雄作のために掻き消されはしまいか……といった心配であつた。東京の同郷の人達の温かい友情と忠告をしりぞけて、九州の果の、この街まで遙々とあこがれてきたのも、この土地がその灯をとぼして呉れる人の郷土だと聞いていたからこそである。それなのに彼女はまたその探し求むる臉の人の消息すら掴むことができないでいるのだつた。

その人にはもう永遠に会えないのかも知れない……近頃はそう思う絶望の日ばかりが続いている。その心の隙間に何時の間にか雄作がしのび込んでいたのであつた。

今はもう、心の中から雄作を追ひ払うことが不可能に近いように思われた。唯一つ……生命をかけてとぼし続けてきた胸の灯も、その為には幾度か消されてしまふそうなのだつた。

電燈の光線に白々と浮いた朱実の横顔が彫物みたいに美しい。涙がにじんだのか、朱実は眼にそつと指を当てた。雄作は不図その手をとつて引寄せて見たい衝動にかられた。

「朱実……」

ぐつと握つた手が頼りなく小さい気がしたが、不意に強い力で引寄せられて、こちらの胸によるめきかゝつて来た身体は、熱つぽい弾力にはちきれそうであつた。

「あら、いけませんわ。ねお願い……放して」

脅えるように小さく叫び、身をよぢらせながら、黒耀石のかけらみたいにぴかりと光る眼で、一瞬刺し貫くように雄作を見据えたかと思うと、朱実は平手でびしやつ……と雄作の頬を殴りつけた。そして両手を顔に押し当てゝわつと声をあげて泣きながら、美しい風のように逃げ去つてしまった。

3

雄作は後味の悪い悪夢から醒めた思ひであつた。物のはづみとは言え、いきなりあんな下品な真似をするなんて……と、砂を噛んだような悔が胸を打ち、比嘉倫子の影像を思い浮べると、面も赤らむ思ひであつた。

朱実が逃げると間もなく上履スリッパの音がして、思ひがけなくお紅が入つてきた。いきなり、

「冗談止してよ」

と深々と笑窪を見せて、人を喰つたように笑い出した。

「泣かしたりして一体どうしたんですの。訳を聞かせてよ。それとも私が伺つては悪いご相談なの……」

「訳なんてあるか。愛している……と一言告白して置きたかつただけさ」

「それで殴られたのね」

「朱実つて爆弾みたいな女だね。知らなかつたよ」

恬淡と雄作は剛腹そうに笑つた。

「爆弾か何か知らないけど……向洋機工の技師さんを殴るなんて偉いわねえ」

お紅は糸切歯を美しく覗かせて笑つた。彼女は満々と肥つた肉体の上に、大柄な手拭地の浴衣ゆかたをきて挑発的な曲線美を見せ、雪のよな素足に赤い爪革の上履を穿いている。出窓の框かまちに太い髻かまちをかけると彼女は、上履の足をぶらぶらさせながら、

「でも悪く思わないで許してやつて頂だい。あの娘も町さんを好いてるんだけど、そうできない理由があるの」

「別に気になんかしてないさ」

「あの人ね、幻まほろしを追う愚人フイリスチンなんだから、はたから手を出さない方が賢明なのよ」

「幻を追う……？」

と雄作はおうむ返しに尋ねた。

「そオ。幻の愛人を追つてる人なの」

「アナタハン島に生きていた兵隊……つて部類かな」

「まア、そうかも知れないわね」

と、冷淡に言い放つと、傍の卓子の上の、ポオル、モオランの「恋の欧羅巴」をばらばらめくりながら、

「あ、何時かお話した沖繩の舞踊大会ね。話が纏つて急に公演することになったのよ。町さんの引受けて下さる前売券百枚だつたか知ら……会社の方家族まで合せて何名位なんですか」

「おやおやそれも押売りかい」

「安心して頂だい。押売接吻とは違いますからね。会社の人達には是非見せたいと言つてた癖に何を仰るの、たつた百枚位……」

と笑つたが、突然お紅はびつくりして顔色を変えて叫んだ。

「ちよつと町さん。この寒河江雄作つて人……一体誰なんですか?」

雄作は俄かに気色ばんだお紅の手に示されている「恋の欧羅巴」の、裏表紙の内側に書きこまれている、ペンの走り書を見て、何アんだ……と、苦笑した。

「誰でもない。僕さ」

「でも……どうして……」

「あわてなさんな。別に深い仔細つて無いさ。寒河江家の二男坊がこの叔母の町家に養子に來た……というだけのことさ」

「そ……!」

何か知ら容易ならぬ心の動揺の色を湛えた眼で、ちつと瞼めてくるお紅の素振りを、雄作は一寸気にして見返した。

「変におどろいて一体どうしたんだい」

「いいえね、私が女学校時代那覇の街に寒河江つて婦人科のお医者様がいらしたの。一寸変な名前でしょ。思い出したのよ」

それで驚いたのは今度は雄作の方だった。

「あつ!それが僕の実父の寒河江俊之助なんだ。なアんだ、知つてたのか」

「まア奇蹟!大なる奇蹟だわ」

急に噪きながら、突風に煽られた白牡丹みたいに美しく身体をくねらせて、窓の框から放れると、突然匂と共に覆いかぶさつてきて雄作の額に、生温かい真赤な唇を押しつけて、ちよつ……と鳴らした「町さん、朱実ちゃんに変な真似をなすつた罰として、後一週間謹

慎して頂くわ。その間朱実ちゃんとは絶交だと思つて頂だい」

冗談かと考えていると、お紅はその儘上履をべたべた鳴らして室から出て行つてしまった。だがお紅の言葉に嘘はなかつた。朱実の姿はお紅と共に、その夜から紅麗荘では見かけられなかつた。

雄作は間もよく、珊瑚の二階で、一週間後に街の劇場で公演される琉球舞踊の稽古が初まつていることを知つた。お紅達は泊り込みで他の女達と一緒に猛練習を続けているのらしかつた。

豊かな伝統を持つ琉球古典舞踊が、この街で公開されることは初めてで、この計画が新聞で発表されると、素晴らしいセンセーションをこの地方一帯に捲き起した。だから雄作はお紅から割当てられた百枚の前売券を捌くのに何の苦勞もいらなかつた。

出演者は、琉球舞踊冠船流の家元として知られている石垣典子嬢や、お紅の三窪紅子を初め、琉球舞踊研究会の沖縄出身者総勢三十名、予定通り一週間後には、街の文化劇場で、世界郷土舞踊の最高峰「琉球古典舞踊大公演会」の幕が華々しくきつて落された。

雄作がお紅達の好意で舞台中央の前面に設けられた、研究会員席に案内された時は、まだ開幕前だったが、既に席は一ぱいの満員で立錫の余地も無かつた。

席に落ちつくと、彼は暫く扇を胸のあたりでぱたぱた鳴らしていたが、煙草に火をつけると、入口で貰つたプログラムに丹念に眼を通し初めた。

順序は第一部と第二部に分けられて、王様の前で真先に踊られたという「寿の春」を劈頭に、浜千鳥節、スンドウ踊、仲里節、花風節、天川節、カセ掛、鳩間節といった風に未知の踊の題名ばかりが並んでいた。雄作はそれを何気なしに読んでいたが、突然、呀……

と驚いて叫び顔色を変えた。正に晴天のへきれき……といった驚愕にうたれたのだった。

天川節……としてある題名の下方に、三窪紅子——比嘉倫子——と出演者の名が並べてあるではないか。

比嘉倫子……比嘉倫子……同名異人……なのであろうか……それにしても夢寝の間にも忘れたことのない文字の発見であつた。雄次はすっかり落着を喪つてしまつた。舞台には既に幾つかの舞踊が進行して、今、白い琉球紵に藍の日傘、花染の手拭を持つた純情な乙女に扮した麗子が愛人の船出を切々たる気持で見送るといつた花風節を巧みな律動で踊つていた。が、雄作は今只ひたすらにその踊さえも一刻も速かに終つて、次の天川節に舞台が移るのを待つた。

麗子の踊がやつと終つて幕が閉ると間もなく、司会者の声が拡声器から流れてきた。

「さて皆様、次は有名な天川節をご紹介します。この踊は内地の皆様は七夕でご存じの牽牛星と織女星が、天の川をはさんで一度の逢う瀬を楽しむという伝説を舞踊化しましたもので、出演者は珊瑚の名花三窪紅子さんと比嘉倫子さんでございます。それから序で甚だ恐れ入りますが、朱実さんこと比嘉倫子さんは、この舞台を最後に珊瑚を去られ、数年前よりの婚約者でいらつしやる当市紅麗莊主町雄作様と華燭の点を挙げられ、直ちに琉球舞踊研究所を開設沖繩芸術の指導研究に専念されることになりましたので、御披露かたがた将来のご後援をお願い申上ぐる次第でございます」

途端にわ……と喚声があがつた。雄作は余りの意外さに心臓がとまるかと思ふ程の衝撃にうたれて、もう火のように爛々と炎上する凝視を舞台に射つけているばかりであつた。

やがて幕が上ると、きらきら灯影を反映する金屏風を背景にお紅とならび立つているのは、紛れもなく朱実であつた。お紅は古代紫の布で頭髮をくるみ、真球色の上衣に、金銀の刺繍を施した袖無を羽織り、黒と白の縞の脚絆に白足袋を穿いており、花染模様の手拭を冠つた朱実は、浅黄に薄青い井筒を散らした琉球紵を着て、茄子紺の帯を乳房の下一ぱいに拵げ、横腹のあたりで結んで端をなまめかしく垂らし、矢張り白足袋を穿いている。

琉球の音楽は哀愁の音楽であると言われており蛇の皮を貼つてあるという蛇皮線のもつ音色は悠々として迫らず、かと思ふと、ぽつんぽつんと淋しい哀音をこめて胸を打つ。然し天川節は珍らしく可成りテンポが早く、踊もそのリズムに乗つたものであつた。

天川の

池は千尋も立ちゆら

うりよりも

深く思うてたばれ

蛇皮線に合わせて、そんな唄が流れてくるその歌曲にのつて、綺羅美やかな光帯スベックタルのような照明の中で、二人は楽しそうに、南国の夢をけんらんたる舞台一ぱいにくり拵げた。踊りながら、お紅の悪戯いたづらっぽい眼がちらちら客席の雄作を探し求めてきた。だが手の捌きに独特の美しい魅力を見せ、くるくる舞いながら、朱実は雄作からいつ時も眼を放そうとはしなかつた。

この舞踊が終つたら、胸深く藏いこんでいる父から貰つた婚約誓文書を、雄作に開いて見せることにお紅と打ち合してあるのだ。朱実は、ず……と雄作を見つめるのだが、悲恋成就の喜びの涙で雄作の顔はさだかに見えなかつた。

終



永遠の男性美と女性美

的 場 通

生物にはすべて美がある。生物中最も高等に進んだ人間の身体美は、あらゆる他の生物の美を最も濃厚に、最も多く持つているものと考ええる。その肉体美は全く生物としての人間に、自己生存と種族継続との二つの原因から出来る。自己生存は、自己の寿命の長くしかして生存の間最も健全であることを要する。依つて自己生存は、一言すれば、身体の健全は通俗に言えば、精力の旺盛ということになる。

食べた食物がよく消化し、消化された養分は血液に混じて身体中を隅々まで循環して行つて、身体各部に当然出来る筈の老廢物を間断なく身体外に泄出し、外部にあつた事を滞りなく感じては直ぐに応え、心的活動の動作が滑かに行われる状態に緊張し、其結果、外面

から見て形容し難き一種の美観を呈する、之が真の自然の肉体美である。

然るに生存を全うするだけでは、未だ真の肉体美を生ずる原因の全部ではない。他の一つは種類継続である。即ち種類継続は身体成熟に達し始めて遂げられる故に肉体美の最も發揮するのは、此の種類継続の可能性を示したもので、即ち成熟に達しなければ發揮されない。

是まで未熟の子供の身体の外観は罪なくして極めて可愛らしき美観を呈するといわれて居たけれども、成熟しない未熟の状態、即ち生殖不能の状態に於ては、未だ完全に其個体の真の肉体美は發揮されない。斯く考えれば真に自然の肉体美の發揮されるのは、一個体として論ずれば漸次に来る。

生れて漸く成長し、罪なき子供の未熟の状態を通り、漸く成長して一人前となり、成熟期に達せんとしたとき、之が登り坂の最も精力の旺盛な時期である。即ち身体美の最も發揮されるときである。

故に真の肉体美の發揮された所を外部から見れば、勢い、情慾的、肉慾的の实感が起るのは当然である。けれども社会の秩序を保つために、此肉感を唆られるような真の肉体美を赤裸々に現わした絵画彫刻等の展覽は或る民族に於ては、全く禁止されて居る。

ものには種々の弊害があつて一利あるときは必ず一害の伴うものであるから、過ちを未然に防がんとするには、為政者に斯る用意は必要であらう。けれども赤裸々にいえば上述べた事が本当である。

故に健康であれば、即ち栄養充分であれば其肉体は内から光を発する。磨かずして真の自然の肉体美は発揮される。如何に貧困の生活をしていようと、身に綺羅を纏わずとも纏うに綺羅はなくとも、或は襤褸を纏うて居るにしても若し身体健全であれば、それが成長し漸く成熟の域に達したときは健全なる其精力は鬱として内に積みかねて、磨かずに光る肉体美を発揮するのである。

其皮膚の色によさ、到底油やグリセリン等の交種物を塗り付け、頬紅、口紅等によつて人工の扮飾を施したものは較ぶべくもない今こころみに真の自然の肉体美の発揮される事実を語れば、男子成年に達して、常に肉体練習に怠らぬ人の、浴せる後、水気を拭き取つて、静かに立つて居る其の肉体の美観、女子十七八才を中心としての前後極めて健康なる時期に於て、血色よき豊艶な丸味をもつた肉体を、其塵芥を去り、簡単な浴みの後、髪をとき、水気の潤いを去つた直後の美観は到底人工的の何者も之に較ぶべきでない。

人間は遺憾ながら他の生物同様に間断なく成長する遺伝的特性に浸たつてゐる。身体成熟に達して、磨かずして発揮される其肉体美は、自己生存と種類継続の能力、可能性が

濃厚になる時は最もよく発揮される。然る後刻一刻日一日と成長を続け、やがて、老衰の境に入る。

素より人は身体衰え頭髮白くならなければ老衰とは感じないだろうが、是は既に老衰にいつた証拠である。生物から受けた、生長の特性をもつて居る人間は、一旦成熟期に達して最大の自然の肉体美を発揮するときに頂上で、それから段々降り坂になる。従つて身体美は漸く衰える氣運に向うことは拒み得ない。

実は従来は斯る事柄は余り詳しく赤裸々に論ぜられて居なかつたけれども、實際成熟の時期が最も肉体美の発揮されるときであるという事は、自然の事実が明かに示して居る生物に於いては成熟の時期、即ち肉体美の発揮されるときは、必ず雌雄相求める標準になつて居る。肉体美の発揮されるときは、即ち自然淘汰の、進化の一大原因たる大活劇を演ずるときであつて、人々に於いても同様で、其個体の真の自然美が最も発揮されるときは即ち自然淘汰の、一大原因たる大活劇を演ずるときであつて、人間に於いても同様で、其個体の真の自然美が最も発揮されるときは、成熟可能に近ずかんとするときから、近ずい

たときの、寧ろ小期間で、男子丁年を中心としての前後、女子は十七八才を中心としての前後で、実は此時に或は恋愛其他の人生としては、波瀾重畳の活劇を演じ、幾多の喜劇と配するに悲劇をもつてしたのであつた。

古来の文学芸術等、若し此人生の所謂真の肉体美の発揮される時期の人々の演じた仕事を取り去れば極めて荒蕪たる淋しいものになつてしまふだろう。

画家が傑作をつくらんとする場合に、モデルは多く身体美の最も発揮するのときを選ぶ。其他世上の事若し注意を一度之に向ければ、すべて事實はそうであることを肯れるであろう。

是までは古来屢々性慾が身を誤る因をなしたという事実があるので、古の識者は之を戒めて、従つて便宜上人間の最も重んずべきは靈である。而して肉は戒むべきであるというように教えた。従つて肉体の事を語ることは心靈を語るとは區別して、余程浅ましいものとした。之をもつて心靈の尊さを説く教訓は沢山あるけれども、遺憾ながら肉体美の発揮は成熟のときであつて、即ち其性質上情熱的肉慾的の實感を唆らなければならぬようになつたことは事実が明かに示してゐる。

いうまでもなく精神美は尊重すべきものであるが身体美は眞の肉体美の根底で、是に加うるに人工的の装飾をもつてする。人の情としては一度栄えた其身体美の当然衰えるに向つたときは、極めて淋しい感じをもつことを拒み得ないであろう。

一時は美人と謳われた人も、時の力には抵抗し難く、いつの間にか鏡に向えば顔面に皺を生じ、鬢髪に一二莖の白髪を交え来たるのを見れば、以前の眞の肉体美を發揮した當時を思い起して、如何にも淋しい感じに打たれるであろう。

そこで賢い人間は、既に身体美の最も濃厚に發揮された時期を通り越して降り坂になつて居るに拘わらず、脂粉を施して人工的に肉体美の裏を隠さんと試みた。そして或は皮膚の皺を隠さんとし、皮膚の色漸く浮世の風に荒らされて来るのを防がんとし、事こまやかな種々の方法を用いて、曾てあつた美観を再び築きもうと努めるけれども、公平に批評すれば、生物の發育は、殊に人間の發育は遺伝的特性と、一度發揮された肉体の美は長くは止まらず、当然所謂色衰えるに拠つて居る。

若し強いて脂粉を施して、曾てあつた其皮

膚の豊艶なる肉体の美観を再び現わしたいと努むるは、恰も消えかかった蠟燭の暗くなるのを憾んでシンを二本にするか、或は疲れ切つた馬を鞭打つて、前の速力を再び出させようとするような訳で、却つて終りを早からしめることとなる。寧ろ年齢相當に發育の遺伝的特性に順応して、最も發揮された肉体の美の時期は既に過ぎたということを目に認めて其通りにする方が遙かに奥床しい、それが本當の人間の美でありはしまいか。

前に述べたように、人間の美は決して身体の美ばかりでなく、精神美というものがあるから寧ろ精神美の方に大いに深く入つて之を發揮せしめることに努める方が遺伝特性に順応する所以ではなからうかと考える。

身体の美には一個体と他の個体との比較の二つの方面がある。身体の美とは自ら其個体々々によつての特性がある故に彼是異なる個体が身体美を比較して優劣を極めようとすることは、恰も大根と蕪青と時計と鉛筆と何れが一番よいかというのと同じ訳になる。

すべて自然の肉体美は其個体々々毎に各々特性がある。従つて一個体の最も旺盛なる肉体美の發揮せると、他の個体の未だ肉体美を發揮させる場合と、又甲の個体の既に肉体美

を發揮して最早や降り坂になつたときの場合とを比較して、其優劣を論ずることになると丁度大根、蕪青、時計、鉛筆の優劣の場合と全く同一になる。

即ち個体美の優劣は、異なる個体間に於ては其判定は容易でない。唯だ或一標準を人工的に極めれば無論優劣を論ぜられよう。例えば色白きをもつて美とすれば黒き者は美でなからう。頭髮の黒きをもつて美とすれば頭髮の白きは美でなからう。鼻高きをもつて美とすれば、鼻低きは美でなからう、しかし是は人工的に或標準を独断的に極めた為めに起る問題は男性美と女性美の点である。

元来、生物は雌雄の別はなかつた。然るに雌雄の別を生ずるに至つた。今は詳しく論ずることはしないが生物の雌雄は決して雌が元で雄が出来た訳でもなければ雄が元で雌が出来た訳でもない。雌雄全く分離したものである。既にそうなつて来た後に人間が進化し来たのであるから、人間の男女に於いても男が元で女が出来た訳でもない。女が元で男が出来たのでもない。男女全く別々に分離したものである。所謂本家と末家というような区別は一切ない。

一面から見れば男女同等である。そこで男

は男、女は女として、性的に全く異なる兩方面に発達したのである。ゆえに男は男性的に、女は女性的に発達を遂げた。男子は男子特有の美があり、女子は女子特有の美がある到底混同し得ない。東洋風に論ずれば、常に男は優勢な位置を占めて居る。女は虐げられて居った。従つて歴史的に論ずれば、女は男の爲めに出来たもののように取扱われた。時には玩弄視された。そうして女の自然の肉体美の發揮は、寧ろ男の嗜好に副うようにした素より男性女性各々特有の遺伝発達を遂げたものであるから、如何に男が要求すればとて、女性の身体の構造を変化させることは出来なけれども、若し男の優勢であつた場合に、女性の顔面の丸い形を多く好むようになれば、顔面丸形の女性が珍重される。

社会の表面に立ち優勢を占める面長の女子が珍重されれば、絵画にしても、総てがそれを描きそれを珍重する。従つて面長の顔が優勢に社会に現われる。是が時代の女子の身体美の嗜好の標準になつて、斯ういう女性をして社会の表面に活動せしめたものである。

今日は東洋西洋の違つた風が段々混和して其の好みは相近ずき、女子は所謂解放され、

男子は決して女子を虐げつけるようなことはいふようになつた。殊に近代に於ては我國に於いても、東洋風に育つた女子も、男子の玩弄物視された境涯を全く脱して、極めて自由な解放的な生活を遂げるようになった。

教育は漸く進んで男子並びに女子の身体の方面の遺憾なく種々の方法を実際に行うようになり、従つて一面から見ると男性美と女性美は相接近したような形もある。否男性美に近づくのでなくして、女性美が寧ろ男性美を加味するようになつて来た傾きがあるけれども、其の根本の男性美、女性美の區別となるべき点を論ずれば、無論男性美は筋肉骨格の極めて発達した堅つくりの外形が男性美たる所以である。

女子は筋肉を見せない脂肪の調和宜しきを得て豊艶な優し味をもつた形が女性の眞の身体美である。無論何れにしても健康は其根柢をなすので、健康なきところには男性美も女性美も一切あり得ない。胃に病み、腸に病み肺に病み、脳に病み、故障百出の身体を提げて居る男子は、色白かろうが、到底男性美を發揮したものとは云えない。

所謂細腰纖張衣襟に堪えないというような

曾ては美人の典型とされたものは遠く既に過去の標準であつて、今日は伸び／＼とよく発達した、皮膚の潤いのある、寧ろ日光に陽化され健康さを満ち／＼ともつた豊艶な身体を持つが、眞の女性美の發揮者である。

更に歩を進めていえば、男性美と女性美共に眞の自然の肉体美だけでは余りに短い。之に人工裝飾を加えて留めようとすることは愚なことである。寧ろ精神美の領域に踏込んで心的能力の発達に身を入れる方が賢き途であると考え。

即ち男性の美は常に荒すくりの大体を分解綜合的に纏めるにあり、女性美は部分的の性に極めて細かしき周到の注意を向けてそれ／＼の部分にこれを誤りなく完成するような方面に発達するであらうと思う。これが男性美女性美の寿命を永遠に発達せしめる所以であると考え。

◆読者の体験告白記を募る◆

本誌をお読み下さる方なら変つた体験の一つや二つはお持ちだと存じます。文章の巧拙長短は問いません奮つて御投稿下さるようお願いいたします。

(編集部)

奇譚クラブ最近号 主要目次

○七月号 女天下時代特集○

○八月号 責めと男色特大号○

口絵 浴場と浴室のエロチズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史

変態コレクトマニヤ

男の天国・女情史

ソドミーとレスボスの愛

夢性の美少年

【変態心理】自虐淫楽

日本性見世物変遷史

乳房を失った女

男色殺人事件

男性的女子の記

特選 変化中条流

青い濁流

MとS

不貞の倫理

姦淫私刑考

悦虐の記録

◎喜多玲子習作集『縛られたる女の十五態』

◎折込口絵写真集

神戸暗黒街探訪記

「緊縛美の断片」
久木田 堅

○九月号 特集 倒錯の告白○

口絵 倒錯の告白画集

玲子習作二十態

縛られた女の写真集

狂い咲くカンナ

白い腋窩の幻想

僕という男

妖しい花びら

弱者の醍醐味

憂鬱症の転機

サディストの悲哀

足部憧憬の悲願

銷夏怪異漫語

変態心理を衝く

彫刻と性について

記 録 係

中国艶話 夜譚随録

邪恋の焰

サド候爵と殺生関白秀次

処女性の神秘

洋パンを囲む座談会

加虐淫虐症の種々相

吉原の淫虐魔

陸軍御用達千一夜

ケンプエル江戸参府紀行

平城夜話 俠盗犬磨

桜姫全伝 曙草紙

竹中英二郎

喜多 玲子

美の 緊縛

羽村 京子

三富 浩生

中野安太郎

寺尾 修治

村井 健司

蘭 守

天野 一郎

山本 貞輔

嵯峨あきら

波多野 新

池 長味

岡田 咲子

皆田 仁

松井 簫子

高取 辰治

的場 通

辻村 隆

仁比山 等

緑 猛比古

松本 公恵

伊吹慶太郎

庄司 浩平

山東 京伝

○十月号 特集 切支丹迫害史○

口絵

責め場面挿絵集 喜多玲子・構成

切支丹迫害史画集 五井野弘・画

縛られた女写真集 辻村隆・構成

切支丹迫害史

氷責めの断罪

遊女花菱の受難

江戸の刺青模様

マリヤ・マグダレナ

性慾の昇華

或る医師の告白

大衆文学に現れた「女の責め場」

愛と苦痛の交錯

恋の烙印

少女の像

呻される夢

男色の海

あらたま村の奥にて

アブニストの記 へぼきうり

夫婦愛と緊縛の考察

サーニン

宿命に哭く

悪 女

江戸時代の墮胎医

縛られた妻

遺 書

猿轡五態

喜多玲子・構成

五井野弘・画

辻村隆・構成

漆島 迫平

赤城 芳年

花山 剣作

潮 マリ

桂 牧次郎

赤坂 剛

亀岡 恭二

高月 大三

鳥上 源一

松井 簫子

栗村 由美

波多野 新

井口 正憲

二俣志津子

鬼山 絢策

辻村 隆

戸森 暁

浅田 正人

岡田 咲子

福森 耕司

早川新二郎

小峰登美子

喜多 玲子・画

○十一月号宗教刑罰戦慄画譜○

口絵 宗教刑罰戦慄画集

風俗便所考 淫書開好記

緊縛の受難(縛られた女の写真)

悲恋の答刑

局部裝飾としての文身

続・へぼきうり

羞恥と潮紅

ストリップ変態記

現代陰間茶屋談義

好き者放談

続・変態艶書

誌上難感

少年矯正院体験記

桃色の地獄

反戦論者の弁

夢性の美少年

墮胎と出産風俗

珍版・南国随筆

羞恥心の発達

都会の異態交響楽

江戸奇習 縁切寺

悪魔と口紅

癡狂文学者の研究

ジャンベルネル夫人の狂楽

男色魔の虜

性愛描写の文学

切支丹迫害史

○十二月号 惑溺の愉悅特集号○

口絵 フランス貴婦人の変態性生活

扉 甘き歓楽の後

耽美派小説名場面集(潤一郎の巻)

折込口絵写真 縛った女を写す(辻村 隆)

濁れる愛執

初夜

奴隷妻

指の秘密

男装寵姫伝

孤独なファンタジー

モンテカルロの佯僕男

中国艶話 毛のない女の物語

女性器崇拜

糊と泥と砂

4Sクラブ探訪記

非公開放映 世界の閨房

囚衣(或る人妻の生活記録)

墮に關する怪奇な報告

SODOMIEの珍裁判

ロマンチックなサディズム

香具師放談

女囚私刑体験記

セックスの記憶

錯乱の倫理

夕映え燕の教訓

狂い咲くカンナ其の後の告白

○新年号 縛った女を描く○

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

扉 愛の使徒 色刷口絵 椋鳥

口絵写真 縛った女を描く

アブニストの記・らぶ・すれいぶ鬼山 絢策

脱落者

徳川閨門痴情録

淫火(みだらび)

戦争処女の手記

長崎らしやめん考

お国自慢・好色民謡選

人妻告白記・妻の復讐

桃色のベールに包まれて

読者座談会「交悦に伴う責めの衝動心理」

マゾヒストの果て

糊の執著

鼻腔礼讃

変の字問答

告白記 僕の記録

女の責場を描く時の心境

少年の恋

貞操帯奇譚

あなたのムチの下に

赤につかれた男

男色の花道

風変りな作戦

風変りな作戦

淫 (みだらび) 火

松井 籟子

画・喜多子 玲子



玲

待つ間もなく止つた地下鉄に走るように乗つた小百合夫人は、まだ波立っている自分の気をしずめようとして、運転台の後に立つて暗い一筋のトンネルをみつめていた。何かそのまゝ地獄へでも運ばれて行くような気がして、自分が背を向けている車内に大勢の乗客がいることさえ忘れがちだつた。

ただ一筋に右も左も壁で囲れた地下道が、梅田近くなるとやや開

けて、丸い太い柱がいくつか立ち並んでみえ出した。コンクリートの冷たそうな柱だった。

小百合夫人は又しても、その柱にぐるぐる巻きにされる自分を想像する。後手にまわされた華奢な手首は荒縄でしめつけられると、ひり／＼と痛むだろう。そして一鞭、二鞭と責められる度に身悶えすると、ざらざらしたコンクリートの面に肌が傷つき赤くむけてくるかもしれない。そして、恥しい裸体の谷を電車が通る度に乗客の好奇な目でじろじろと見られ、電車がすぎると又鞭打たれる……。そんな刑罰はないかしらと、小百合夫人はふと思つた。そして、「いけない、いけない」と、頭を振りながら、酒に酔っているような頭の重さから早く正常に復したいと願つていた。そのくせ、そうした陶酔から抜け出すのが惜しいような気がしないでもなかった。梅田へ出ると、家へ帰りつくまで、もう少し自分の想いに酔つていたいと思つたのか、電車をやめてタクシーを拾つた。そして、まるで映画を見るように前方の窓硝子をみつめた。目を開いているのにその窓硝子をおして見える筈の街の風景は夫人の目に入らなかつた。運転手の後姿も、ハンドルも、バックミラーも、その横にぶら下つているマスコットの小さなお人形も、すべて夫人は見えていなかった。夫人が見ているものはそうしたもののすべてが目に入る位置の空気の中に、空気の様に普通の人の目には入らないスクリーンをしつらえて、チカチカと映写し出した過去の想い出だったのだ。

二

小百合夫人がまだ小学生の頃だった。

生れた時からかきずいてくれた乳母が一週間程故郷へ帰えることになった。今でこそ女中が盆と正月に一週間も十日も故郷へ帰えることが普通になったが、小百合夫人が幼い頃はよほどの理由がなければ一週間も休みをとるという事はなかつた。それだけに彼女があとを追うと、乳母も主家の娘のお守りかたがたなら、一週間の休みをとるのがとりよかつたのか、折から夏のことで、乳母の実家のある海岸の景色などを自慢しながら、小百合をとまなうことの許しを得た。小百合の家ではその頃東京にいたが毎年軽井沢の別荘へ行つていたので、娘の為に、たまには海岸の空気もいいと思つたのかもしれない。

「きたない所でございますよ」

と、乳母は言つていたが、小百合にとつてはじめての海だった。乳母の家のきたなさなど問題にならなかつた。

小百合とは乳兄弟に当る憲二という子の他に、その子の兄がいたふだんは乳母の母親がその子供達の面倒をみていたのだ。乳母の夫である子供達の父親は鰥船に乗つて行つて嵐にあい、死んだのだということだった。

「おやしきのお嬢様に悪い遊びをお教えしてはいけませんよ」
乳兄弟達は母にそうたしなめられると

「うん」

とうなずいたが、兄弟で顔を見合して、小百合の白い肌を物珍らしそうに見ていた。二人共赤銅色の肌をしていて、小百合とは違う国の人間のようなだった。

その内一緒においでとも何とも言わず二人はどん／＼海辺の砂丘をかけて行つた。小百合は大急ぎでそのあとを追つた。一步あるく

と半歩するような砂丘で、都会育ちの彼女にはなかなか追いつけなかった。その上砂は熱くて火傷しそうだ。月見草の根をよつて走つて行くと、網小屋の前で二人が手まねきしていた。

「お前とあそんでやつてもいいけど、おつ母さんに何にも言わねいか？」

「何にもつて？」「俺、おつかさんに叱られるとつまんねえも。はじめつからお前なんかと遊ばない方がいいと思ふだ」

兄の方が言つた。

「うんでも、折角東京から来ただべ、面白えこと教えてやつたらええと俺思ふだ」

弟が云う。

「そんで、お前が絶対に俺達のすることおつ母さんに言いつけなけりや、仲間に入れてやるだ」

兄が念を押した。

「私、何にも言いつけたり致しませんわ。御一緒に遊んでちようだいね」

小百合がいうと

「その大人みたいな言い方俺大きらいだ」

兄の方が言つた。

「そんな言葉つかつたらお前の口を一つ抓つてもいいか？」

小百合はだまつてこつくりした。無言にかぎると思つたのだ。

「じゃここへ来う」

兄の方が網小屋の戸をあけた。

小百合が中へ入ると、中はがらんとして、縄の切れはしやむしろが少し入っているだけで何にもなかった。

この土地は房総半島の丁度突端から少し内側に入つたあたりで、波が荒く、漁もないらしかった。土地の人は半漁半農で、海岸ですぐに網を引くとか、釣をするとかいうことはなく、男達は少しはなれた港から鰹船に乗るなどして出かせぎに行くのだ。海水浴も危険な程荒い波が白砂にくだけている。土地の子供達だけが素裸になつて遊んでいる、通る人もない砂丘だつた。

「その洋服ぬげよ」

兄の良太が言つた。

「あら、そんなことわたくしいやだわ」

良太はいきなり小百合の口を抓つた。

「あつ！」

と、ひるむ小百合に

「ぬげよ」

重ねて良太は言つた。

「俺達の仲間入りすんなら裸になれよ、女の子だつてみんな裸だぞ」

「いやよ、もう帰えらして、一緒に遊んでいただかないでもいいわ」

小百合が戸口の方へ引返えそうとすると、憲二が戸口に立ちふさがつた。良太が又小百合の口を抓つた。

「帰えつておつ母アにいいつけるつもりだべ？」

小百合は泣きそうな顔でだまつていた。乳母の顔を見れば、やつぱりこの兄弟のひどい仕打を言わずにはいられないだろうと思つた。「いいつけられるんならいいつけてみる。どんなことされるか教えてやらあ」

良太は小百合につかみかかつて、小百合の両手を後手にねじつた。
「痛い！はなして！」

小百合が叫んだが

「おう、憲、その縄とれ」

そういうと、弟のさし出す荒縄で小百合の両手を後手に縛つてしまつた。

「裸になるか？」小百合はだまつて首をふつた。へたに口をきいて抓られたくなかつたからだ。

しかし良太は縛つた手を背中をこすりあげるように上の方へ縄を引いた。手がねじれて「痛い！」という言葉さえ出なかつた。

「裸になるか？」

良太は縄をぐんぐん引きながら言う。小百合はしかし、二人の男の子の前に裸になるのはいやだつた。

「強情つばりだな」

良太はというと

「これでもか、これでもか」

と、縄を引いた。

小百合は足を泳がせるようにもがいた。

「足も縛つちまえ」

憲二まで兄に加勢して、小百合の足を棒のように縛つてしまつた。良太は村芝居か何かで見た悪者の形を真似するように、ぐるぐる巻に縛られた小百合の体に片足をのせてみえをきると、彼女のおさげをつかんで顔を引きおこした。

「裸になることはかんべんしてやらあ、そのかわり、これを食べろ」
良太が指のさきで小百合の顔の前へつき出したのは、げじげじの

ような虫だつた。大方積んであつたむしろの間にでもいたのだろう。
「かんになして……」

小百合がいうと

「食べないか。ようし。おい、憲、足のうら擦つてやれ」

良太は言つた。

憲二は「くすぐつたいぞ、くすぐつたいぞ。どうだ、降参か」と小百合の足のうらをくすぐり出した。

「ううっ！あーあッ！」

と、呻きながら、小百合は身悶えしようとしたが、体の上から良太の足にふんまえられ、おまけにおさげを引張られて、動けば生えぎわから血が出るかと思う程、目はつり上り、夜叉のような顔になつた。

「食べます。かんになして」

小百合が言うと、やつと二人とも小百合の体から手をはなしてくれた。小百合は縛られたまゝで口を開いて、良太が入れた虫を、思いきつてのみこんだ。

「よし、じゃ俺達の仲間に入れてやらあ。そのかわりおつ母アにしやべつたら、もつとひでい目にあわすぞ」

良太はそう言つて、やつと小百合の縄をほどいてくれた。ほどこかれてもしばらくは、腕がじーんとしびれて、動かせなかつた。

それから毎日そんな遊びがつづいた。

小百合は乳母に話そうかと思つたが、兄弟からいじめられることが恐かつた。それに、最初の日ほどには手荒いことはしなくなつていた。注射だといつて木の枝のさきをとがらしてつついたり、犬にされて首に縄をつけて四つん這いに這わされたり、砂の中に首まで

埋められる位のことだった。

だんだんに小百合はそうしていいめられている時だけ、乳兄弟達の愛情を感じるようになってしまった。何故なら、それ程親しくしていながら、寝る時とか御飯を食べる時、母親の前では嘘なほどおとなしく、小百合によそよそしいのだ。その兄弟の冷たい顔を見ていると、いじめられても兄弟達が自分に熱心になってくれる方が嬉しかったのだ。

そして、東京へ帰る前の日のことだった。

例のように小屋へ入ると

「今日は裸になれ」

と、良太が命じた。

小百合はズロース一枚になった。一週間いる間にこの

土地の女の子達が平気でズロース一枚で男の子と一緒に海辺で遊んでいるのを見かけていたからだ。

「お前はバテレンだから、はりつけにしておいてやる」

そう言つて、小屋の片隅に積んであつた長い板片をとり出して来た。網小屋というよりは海岸に流れよる木や板を拾い集めて焚つけにする為にしまつておく小屋なのだろう。はりつけ柱にしては薄つぺらだったが、小百合が手をひろげると、その手の幅よりよほど長い板があつた。それを弟にもたせておいて、良太は小百合の手を片方



玲

ずつ縄でくくりつけた。そしてもう一つの板片をたてに立てて、小百合の肩へ背負わせるように十文字に縄をかけた。

「そんなにきつくあそばさないで」

小百合が思わず口ばしすると、良太は又、小百合の口を抓つた。

小百合の通つていた学校は、学習院が定員で入れなかつた時に当時の華族の子女がえらんで行く女学校の附属だったので、運動会に子供達が「赤お勝ちあそばせ、白お勝ちあそばせ」というような、あそばせ言葉の学校だった。相手が田舎の子と知つていても、小百

合には急に丁寧な物言いをあらためることは出来なかつたのだ。

「バテレンお百合。どうだ、かんねんしたか、いいさまだ」

良太は芝居もどきに言つた。

「こつちへ歩け」

良太は小百合をつく。背中と両手に長い板をつけられたまゝ、小百合はよろ／＼と、小屋のすみへおしやられた。

「そうして立つていろ。一寸でも動くと承知しないぞ」

良太は命令した。そして弟に言つた。

「憲、昨夜考えたやつやろうよ、ほら、持つて来たぞ」

良太はズボンのポケットから洗濯ばさみを幾つかとり出した。そしてそれを二分して憲二に渡すと

「こうしてここへ並べろ」

と言つて、小百合のひろげてくくられている片方の腕へ将棋の駒でも立てるように、白い肉を右と左と同時に抓るようにはさまれると小百合は思わず

「ああつ！」

と声をたてて呻いた。

良太と憲二は両方から、小百合の腕一杯に洗濯ばさみを立て並べた。

「ジャンケンポン」

兄弟は小百合の目の前でジャンケンをした。良太が勝つた。良太は駒を動かすように洗濯ばさみを指の幅だけ胸へ近づけて、肩さきをはさみ直した。子供の遊ぶ陣とりを、小百合の裸の体でしようとしているのだ。

肩から胸へ、そしてお腹へ……。一度はさまれた所は赤く痕に残

つた。その痕がだんだん下へ移動していく、腕よりも胸が、胸よりもおなか痛かつた。その上、良太は一列に並んだ洗濯ばさみを逆なでになであげたりする。まるでピアノのキイをさあつとなでるように……。すると小百合は思わずその痛さに「ううつ！」と呻いてしまう。丁度木琴やピアノがそうして音をかすかに出すように……。とうとう良太の洗濯ばさみがズロースの上から足と胴のわかれ目まで来た。

「男の子だったら、ここをもう一つはさめて面白えのになあ」

良太はいうと、そつと手で彼女をなでた。その時小百合の体に痛さとは違つた妙な戦慄が走つて通つたのだ。彼女はぐつと声をのんでこらえたが、皮膚の表面が泡立つようだった。

良太は次々に彼の持ち駒の洗濯ばさみを胴から足へ動かす時、まるでそれではさむところがありはしないかとさぐるように、その間をなでた。その度に小百合の体の中の不思議な戦慄はおこつては消え、起つて消えていつた。それはお小水をこらえる気持にどこか似ていた。痛さでも苦しさでもくすぐつたさでもない、といつて快いという感じとも違う、不思議な感じだった。

そして小百合のその時感じた不可解なものが、彼女の体の中にもやの様に立ちこめて、はけ口を求めながらいつまでも忘れられなくなつてしまつたらしい。小百合自身そうした出来事をはつきり昨日の様に覚えていたわけではないのに、長じてから、ふとキリストのはりつけの絵などを見たりした瞬間、きまつたようにその時と同じ戦慄が体を走るようになってしまつたのだ。そのくせ小百合はその思い出を忘れようと無理にもおゝいかくして来た。

今、小百合夫人がタクシーのクッションに身をまかせながら、意

識してその思い出の中に陶酔しようとしているようなことは、曾つて一度もなかつたのだ。むしろ、その映像が無形のスクリーンにうつり出すと、あわてて消そうとするのが常だつた。

「今日はどうかしている……」

小百合夫人はつぶやいた。

そしてやつと、憑かれた者のようにすごした半日の余韻からわずかに解放されて、窓硝子の外の風景が、風景として目に入り出すと灯のついた街がもう西宮をすぎているらしかつた。

三

門を入ると犬小屋で夫の猟犬であるシェパードのモンローが女主人の帰宅を知つて声をたてずに鼻息だけで歓迎の尾を振っているようだつたが姿は見えなかつた。

玄関のベルを押した。小百合夫人独特のならし方があつて、鍵を中からあけながらに

「お帰えりあそばせ」

と、上女中が迎えた。その足許に真白い玩具が動いているようにスピッチ種の仔犬が喜んでいた。

小百合夫人は自分の持つていた風呂敷包みを女中に渡すと

「すぐ私の部屋まで持つてきてね」

と念を押して、仔犬を抱き上げた。

「旦那様がお食事をお待ちでございます」

女中が言つた。

「そう」

と聞き流して、小百合夫人は自分の部屋へ向う。夫に会う前に今

日一日の垢を流さないで、まだ自分が自分に立ち帰つたような気がしなかつた。

小百合夫人は部屋に入ると入つたとたん、甘い香りが部屋に立ちこめているのに気がついた。

後からついて来た女中が

「南部様が持つていらつしやいまして、さき程旦那様にうかつてこちらへいけておきました」

という。

三面鏡の横の吊り柵に、カットグラスの花瓶一ぱいにバラが匂つていた。

「で、南部さんは？」

と聞くと

「旦那様と撞球室においでございます」

という答えに、それでは急ぐこともないと小百合夫人は先ず風呂へ入ることにした。髪まで洗つて風呂から出ると、三面鏡の前に腰かけて、スリップの上から部屋着をひつかけて、クリームと白粉だけの簡単な化粧をした。体には石鹸の香りがほのかに残っている以外、何の残り香もなく、心の残滓もぬぐい去つて、夜の着物に着かえると、小百合夫人は今までの自分が嘘の自分で、今こうして、かぐわしい匂いだけにだけとりかこまれている自分が本当の自分の様ないきがしてくるのだつた。

「お待たせ致しました、ごめんあそばせ」

と撞球室のドアを開く小百合夫人には、燃えるような目で新世界の小屋がけの中に立つていた女の面影はもうどこにも見出せなかつた。



夫が目をかけている若いスポーツマンの南部邦彦の目の方が、むしろ何かしらんに燃えていた。そして、邦彦の燃える目差しを受けるとき、小百合夫人の瞳は反対に冴え冴えと澄んでくるのだった。

「お邪魔しています」

そう呼びかける言葉さえ、空気をそこだけ熱く吹きよせるようだった。

「お花を有難うございました」

と、夫人はやわらかく受けて

「さあ、どうぞ」

と、食堂へ誘うのだった。

小百合夫人はさきに立つて廊下を歩いて行つた。おくれで撞球室を出た夫と邦彦が、言い合わせたように手をふれ合つて、お互いの指先をからませるようにしながら、又、つと離れたのを、夫人は一寸も知らなかった。

玲

四

食卓にコアントロの瓶がのつていた。

コアントロというお酒はその名の通りトロツとしていて、甘く香り高い洋酒だった。

口あたりがいいからよけいに飲むと、ウイスキーと同じ位に酔うのだった。アペリチフ（食前酒）だというのが寝室で飲む酒だともいう人もある。

小百合夫人はフランス帰りの画家からこの酒の味を教つてから、洋酒ではこれが一番おいしいと思つていた。値の高さよりは、わりに日本では知られないのか、どこにもあるというものでもない。

銀の盃にコアントロを注いで唇に近付けると銀の冷たさが中のお酒までより一層おいしいものにした。そしてその透明な洋酒の味を此の家で味わされたものは、それがそのまゝ小百合夫人の美しさをたとえるのにふさわしいのに気づくのだった。

しかし生のまゝでは無色透明なこのお酒に一寸水を割

ると白く濁ってくるのもこの酒の特徴なのだ。

丁度香り高く澄んでいる小百合夫人が、時によつて白く濁るのに似ていた。

食事を終えてベチカ風に作つた書斎の煖炉の前にうつると、

「もう遅いから泊つていきたまえ」

と、夫の雄作が南部邦彦に言つた。

「本当に、そうあそばせな」

夫人も口をそろえた。夫の言い出したことはおなかの中でたとえ迷惑に思つても、夫に賛成するのがこの家の家風だつた。まして夫人は南部邦彦の泊つていくことをそう迷惑には思つていなかった。今日は特に夜更けるのが少し恐ろしい程で、まだ何か自分が白く濁ってくる時間が残つているように思われるのだ。同じ家に泊り客があれば、今夜一晩気がらくだつた。

「では泊めていただきます」

辞退もせずに邦彦がいうのを、夫人は青年らしい明るさのようにとつたが、そう言いながら彼の目に妖しい光がきらつとさしたのを心のすみでいぶかつた。

小百合夫人は自分の血の濁りを気にしていたが、夫の中に變質的な血の濁りのあることなど思つてもみなかつた。

女中に邦彦の為の寝間の用意をさせに立つたあとで

「雄ちゃん、随分大膽だな」

と邦彦が言うのだつた。

「あの人はとうてい僕達の事など察しようもないから大丈夫だよ」
雄作が言つた。

「だけど、この家ではやめましょうよ」

邦彦が言うのに

「何故？」

雄作が反問した。

「何故つて……。いくら何でも奥さんに悪いもの」

「べつに僕があの人を愛していないわけでもないし、君ではこの家の奥さんになることは出来ないのだからあの人に悪いことは一寸もないよ」

「あれつ、雄ちゃんは奥さんを愛しているの？」

「ばかだな、やきもちかい？」

「だつて……」

「だから今晚この家で僕が誰を愛しているか見せてあげるよ」

「とかなんとかいつて……うまいなあ、雄ちゃんは、とうとう僕に冒険させよつてわけかい」

「冒険はお互いさまだ。ただあの人とは寝室は別だし、よく話してゐるじゃないか、オルゴールの煙草入れで通信し合つてゐるつて……。煙草入れのふたをあけなければいいのだよ、向うでも誘つて来ても知らん顔していれば寝てしまつたものと思つて無理に部屋に入つても来ないし、お互いに鍵をかけることにしているのだから、大丈夫だよ」

「じゃあ、雄ちゃんの部屋でうつかり煙草入れのふたあけられないな」

「ああ、夜中にはね」

二人の男は声をそろえてたのしそりに笑つた。

「お話がもてますのね」

何にも知らず小百合夫人はその時部屋に入つて来た。

「じゃあ、もうやすみましようか」

雄作は急に叮嚀な言葉の調子になると小百合夫人に言った。

「はい」

と答えて、夫人は邦彦を促すような目でみながら

「あちらにおとこりましたから、どうぞ……。今、ねえやに案内させます」

と言った。

そして又しても邦彦の目の奥の不思議な光に誘われるように、自分の血が白く濁り出したのを感じた。

邦彦の目の光が小百合夫人には自分を不義に誘う光のように思っただ。

夫の後輩というだけでよくたずねてくる邦彦が、来る度に自分の手作りのバラだと言つて持つて来てくれる花の甘さは、自分を酔わせる為のものとしたと思われなかつた。酔わせて目をくらませて、邦彦の本当の目的をさとらせない為のものとは知りようもなかつた。小百合夫人は不義への期待に血がおののいた。それは夫の目をぬすんで不義をするという姦通そのものへの期待ではなく、不義をしたとわかつた時に夫が自分に科するであろう罰への期待だつた。

理由もなしに夫が自分を責めさいなむとは思えなかつた。しかし、もし姦通という事実を夫が知つたら……。その時こそ、夫の暴力の下に歓喜の声をあげることが出来るのだ。

小百合夫人にとつて、今日夫と同じ屋根の下に若い青年を泊めるということが或る意味を持つて浮かび上つて来たのだ。

姦通が目的ならひそかに夫に知られないように行動する機会は得られるだろう。しかし小百合夫人は姦通しなくてもいいのだ。それ

はただ夫に責めてもらう理由になればいいのだ。

小百合夫人の血の中が又白く濁つて来た。丁度コアントロに水を割つたように……。

(未完)

KK通信 第五号完成

益々好評、本号大增刷

(一)読者通信 (二)代理部便り

(三)連載第三回、地獄絵 和子

(四)編集部便り (五)短信往来

(六)連載第一回、赤い部屋

(七)読者論壇の外趣味記事満載

◎直接購読者に毎号贈呈す。

◎見本一部十円、半年分百円

御願

編集部発行所
に対する御照

会には必ず返信料の封入をお願い
ます。尚理由の如何に拘らず直
接の御訪問は固くお断り申し上
げます故悪しからず御諒承願い
ます。

☆ 本誌旧号は二十七年七月号
以降若干保有しております。十
二月号迄は一部送共九十円、新

年号は一部送共百円にて急送致
します故御申込下さい。 六月
号以前は全部品切です。

◎直接購読者募集◎

三月分(三冊)三百円
半年分(六冊)六百円
一年分(十二冊)千二百円
(各送料共)

送料共毎号品切れにて御迷惑
をかけていますが、目下の情勢
では末端の書店迄行き届きかね
る恐れがありますので最寄り有
名書店へ御予約下さい。また、
お買い洩れのないよう直接御購
読の御申込み下さい。KK通信
毎号贈呈の外、半年分御予約の
方には縛られた女の写真三枚一
組、一年分御申込みの方には八
枚一組サービス品として贈呈申
し上げます。

□

男性仮半陰陽とは、男性でありながら、其の外陰部の形態が恰も女性の如き外観を呈する者をいうので、即ち陰莖の發育が小さくして、さながら陰核の如く、左右の陰囊相癒合せずして其の間に空隙を残し、睪丸は陰囊内に下降せず、鼠蹊管若くは腹腔内に留止するが故に、その外陰部の状態は女子に於けるが如く、甚しきものは殆ど之と區別することの出来ない程酷似することがある。

それ故、實際は男性でありながら、分娩当時より女子として命名せられ教育せられるので、本人自身も女性なりと信じ、女子の職業に従事するようになり、又性慾も男子でありながら女性の如くにも男子を恋い、結婚することもある併し又他の一面に於ては、女性の生活をして居りながら、その性慾のみは男性的傾向を有し、女子を愛慕する者も尠く無い。

マルチニは、四十七才の産婆が屢々妙齡の婦人を強姦した一例を報告したことがあるが、その所見に依れば、その産婆の陰核は甚だ大きく、小陰唇の發育弱く、大陰唇の内には、能く還納し得べき睪丸を触れたので、男性仮半陰陽なることが判つた。

男性仮半陰陽者

アレキシナの日記

鳥 上 源 一

又一八八四年、フランス医学会に供覧せられたジュリアというものは、其の容貌温和柔順で、長い頭髮を有し、乳房が能く發育した等、女子に同じく、又其の陰部も一見すれば女子のようであるが、併しよく注意して見ると、陰核は異常に大にして二十五ミリメートルの長さを具え、且つ強く屈曲し

陸の開口部には処女膜なく、陸の長径は九ツオールあつたが盲嚢に終り、子宮を触れず、又卵巣も無く、月経は一回も来潮しなかつた処が、大陰唇の深部に於て、両側共に睪丸でなければならぬ物を触れた。而して未だ嘗て男子に愛着したこともなく、或男と接したこ

とを示し、且つその感情も明かに男性的であつた。

ローランの記述した処に依れば彼は十五六才許りの妙齡の女子と交際し、之に接触する毎に殆ど抑制すべからざる程の性的興奮を感じ、又往々に春夢に襲われ、その際精液の射出を感じ、朝に至つてその寝衣に斑点の附着するを発見したようなことがあつた。

法医学者タルジュは、処女として生活したこの半陰陽者アレキシナの日記より、性的感情に関する記事を抜抄して、之を学界に報告したことがあつた。今之を左に訳出して見よう。

「処女に於けるあらゆる美しさが現われてくる年頃となつても、私の身体は思春期の人々のように豊満快活とならなかつた。私の蒼白い病的の顔色は、年久しい苦悩のさまを語っているのだ。私の容貌は稍角張り、上唇と頬の一部とに

は粗毛が生え、日を逐うて濃くなるので、人がそれを見て私を嘲笑する。そのため私は鉄を時々剃刀に代えて薄毛の尖を切り取つていたが併し鬚鬚は次第々々に太くなつて、遂に人眼にも明らかに見える許りになつた。又私の身体には活字を植えたように毛が生えていたので、常に注意して腕を掩い隠し、非常に暑い時でも、決して腕を露出せぬようにしていた。私は可笑しい程、それを苦に病んだのである。

その上に、私は甚しく愛情に渴して同じ年わかい女に憧憬し、胸の内には絶えず熱烈なる焰が燃えていた。私が始めて深い仲となつたのは、一ヶ月前のテクラという処女であつた。快活でそして心優しい性質で、病的の上にも野呂間な私とは全く違つていたけれども二人の仲は鴛鴦の如くに睦まじく少しの間も相離るゝことの出来ぬ程であつた。

処がその後になつて、アレキシナは、他の女友達サラというものに愛を傾けるようになった。

前のテクラに対しての愛はブラトニックな愛し方であつたが、今度の愛は最早や肉体的の情調を帯びていた。彼は次の如くに記している。

「私は夜の祈禱を終つて後、サラの寢床に行き恰も母がその子供に對するやうに、手まわりの事をしつてやるのが何よりの楽しみであつた。そして毎夜サラの衣服を脱がしてやるのが、私の慣習となり、若し彼女が自身独りで其の衣服を脱ぐやうなことがあると、私は嫉妬の念に堪えられない程であつた。実に子供らしい馬鹿げた様なことであるが、それを思い止まつて了うことが出来なかつた。

私はサラをベットのの上に寝かしから、その傍に跪き、私の着る彼女の顔にあてゝ接吻した。かくしてサラが心地よげに眠り始める

と、私は熾烈なる情火に燃えながら、その可愛らしい姿を眺めいるのが常で、いつも其の傍より立ち去ることが出来ない程であつた。

私が彼女に対して抱いた感じは友愛の情でなくて、実に恋愛の心であつた。私は夜中屢々眼覚めてこつそりとサラのベットの処にまで忍び行き、愛に燃えつゝある我が唇を彼女の美しい顔に近づけながら、うつとりとして見つめることがある。こんな事をした夜分は十分に夜明けの鐘が鳴つても、ベットより起きることが出来難かつた。いつも八時少し前になると、サラは他の室に往つて衣服を着かえることになつて居るので、私は之に伴うて同じくその部屋にゆき彼女に身まわりのことを手伝つてやる。私は名状し難い愉悦を以て彼女の波の如き頭髮を梳り、帯をしめ、直ちに吾が唇をその露出した乳房に当てがつて接吻する。その時、私は女がその愛らしい顔に

紅葉をちらすのを幾度も見た。ある夜、私は彼女に同衾を請うた処が、直ちにその許しを得た。之を記するには言葉のない程で、あまりの喜ばしさに狂氣になつたやうな感じがした。私は彼女と同じベットの中で長らく睦まじげに語り合つた。それから後、彼女はとう／＼私の所有物となつて了つた」

以上はアレキシナの告白の一節を訳したものであるが、之を見て、女子として教育せられ又自らも女性と信ずる男性佯半陰陽者に於てもその性慾のみは普通で、女子を愛慕する者のあることが分る之に依つて考えるに世に屢々認めらるゝ女子同性の愛の中には、其の一方の相手が眞の女性に非ずして、上記の如き男性佯半陰陽者なるが如き事実も含まれて居るであらう。

このような点に注意して調査したならば、或は多少興味ある結果を得らるゝかも知れない。

クイズ物語



笹田 豊

一、事件の発端はこうだ

中井君はラヂオ・フアンの一人だ。
いや、フアンどころではない。フアンと云うのは英語のフアナチック——つまり「気違いじみた」と云う言葉の略だ。中井君は断じて「気違いじみ」てなぞいない。正に「気違いそのものずばり」の熱狂振りだからだ。
会社のある日は仕方がないが、日曜日ともなると、「お早う番組」から「お休み番組」まで一日中かけっ放しだ。おかげで下宿の小母さんから時々小言が出るが、そんな事には全然頓着しない。馬耳東風と聞き流す。

放送劇、歌謡曲、ジャズ、クラシック音楽その他手当たり次第に何でも聞くが、特に注意して聞くのは所謂「クイズ番組」だ。無論理由は簡単だ。娯楽と欲の道連れだ。そして、こいつは仲々馬鹿にならない。民間放送が始まつてからもう一年になるが、中井君は其の間に一万円に近い金額を稼いでいる。

「ウツカリ・テスト」にも出た。「音楽ファイル」にも出た。「のど自慢」には無論出たそれから、葉書に書いて出した解答が当つて石鹼や万年筆やを又かなり沢山貰いもした。だから、その夜、中井君がラヂオに耳をくつつけてクイズに聞き入っていたのは、当然

すぎる程当然の事だ。

「……ではいよ／＼これから皆さんお待ちかねのクイズを申し上げます……」

アナウンサーの声に中井君は、今迄より一層聞き耳を立てた。

「只今お送りしました歌謡曲の中で、ノットン・エドワーズが歌つたのは誰でしょう？……御正解の方には、当オリエンタル紡績製造の——」

ラヂオが此処迄云つた時、突然電気が消えて辺りが真暗になつた。停電だ。無論ラヂオも止つた。しかし中井君は、そう腹も立たなかつた。そのクイズの答が久保幸江である事も判つていたし、オリエンタル紡績の所在地も判つていたからだ。後は只金五円也の葉書に其の事を書きさえすればいい……。

しかし中井君は、多少困難を伴つても、そのクイズの賞品が何であるかを確かめておくべきであつた。

二、えらい事になつた

それから十日ばかり経つた。

その日、会社から帰ると中井君は、下宿の小母さんに小包を渡された。

「何ですの、それは？」

「さあ？……」

中井君は差出人の名前を見た。

「オリエンタル紡績……、あゝそうだ、ラヂオ・クイズの賞品ですよ」

中井君は羨やましそうな小母さんを残して元氣よく二階へ登つて行つた。

「何だろう？」

胸をどき／＼させ乍ら、中井君は包みを解いた。

「おや、こいつは……」

解き終つて包みの中から品物を取り出した中井君は、目を丸くして驚いた。

實際無理もなかった。

中井君の指先にぶら下つているのは、確かにピンク色の絹ズロースに違いなかった。

「弱つたな、こいつは……」

中井君は途方に暮れた。全く、独身青年とピンク色の婦人ズロースは、どう見ても余り釣合ひの取れたものではなかった。

中井君は段々変な氣持になり始めた。そしてやり切れなくなつた。

「どう処分すべきか？」

中井君は口に出して呟いて見た。

瞬間、恋人の美智子さんの顔が浮んだ。

「——と、とんでもない！」

中井君は慌てゝ此の考えを打消した。

幾ら恋人にしても、ズロースをプレゼントにする勇氣は到底持合わせていない。紳士を以て自ら任じている中井君には、これは許すべからざる考えであり、エチケットに反した物であつた。

「——とすれば、俺はどうすればいいんだ？」

中井君の考えは、同じ処を堂々廻りするばかりで、甘い結論は出なかつた。

中井君は、とう／＼、自分で自分に腹を立てた。ラヂオを呪つた。停電をうらんだ。

「少くとも停電さえないければ……」

クイズの賞品が何であるか判り、従つて解答は無論出さなかつたらうし、今の此の苦勞はなかつた筈だ。

「えゝい、こんな物、糞喰えだ！」

中井君はいら／＼し乍ら、汚れた下着をつゝこんだ箱の中へ、そのズロースを放りこんだ。

三、もうあかん

翌日は天氣の良い日曜日であつた。

中井君は昨夜の事なぞ綺麗に忘れて、ぼんやり青い空を眺めていた。

その時玄関に声がした。

「美智子さんだ！」

中井君は勢良く立上つて、下へ声をかけた「美智子さんでしよう？上つていらつしやい！」

美智子さんは遠慮なく上つてきた。

「良いお天気ね、氣持がいいわ……何していらつしるの？」

「冥想に耽つてたんですよ」

「迷想でしょ？」

二人は、幸福そうに声を合せて笑つた。

「処で、何か用事？」

「用事が無かつたら来てはいけないの？」

幸福な女の常として、美智子さんも中井君に一寸絡んだ。

「そう云う訳ぢやないけど……」

「本当はね——今日はお天気も好いし、私も暇だから、お洗濯をしてあげようと思つて来たの。どう、沢山たまつたでしょ？」

瞬間中井君は思い出した——洗濯箱へ抛り込んだ、あのピンクの品物を。

「そ、そりや君、たまるにはたまっているけど……何も今日でなくても良いよ」

中井君は慌てゝ口ごもつた。

「遠慮しなくていいわ……あなたらしくもない」

「だ、だつて……」

「男らしく、さっぱりなさいよ。洗濯物入れはどこ？」

「そう、急がなくても……」

「どうかしたの？変だわね」

美智子さんは一寸怪しんだ。

中井君は弱った。断れば怪しまれる。承知すれば尙困る。

しかし、遂に決心した。

そして、要領よく一件を隠して了おうと立ち上った。

しかし、美智子さんの方が素早かった。

あつと云う間に、押入れをあげ、洗濯箱を引き出した。

「あら……これ？……」

美智子さんは低い声で呟いた。そして例のズロースを指でつまみ上げた。

「き、きみ、それは……」

「……」

物も云わず、中井君を見詰めてた美智子さんの目は怒りにふるえていた。

「分りましたわ、あなたの慌てた訳が……私は欺かれていたんだわ……色魔よ、あなたはその手で沢山の女を欺して来たんだわ……口惜しい……ドンファン……」

「違うんですよ……誤解だ。それはラジオの……」

……」

「ラジオ？……ラジオとズロースに何の関係があるの？弁解は聞きたくないわ……さようなら……永久に……」

中井君は美智子さんの眼から滝の様に溢れ出る涙を見た。中井君はもう何も云う気になれなかった。そして、美智子さんが帰って来た、張りさけそうな胸の痛みに堪えかねて秘蔵の八球スーパールのラジオを、力一杯蹴飛ばした。

四、現代にも奇蹟はある

その日から美智子さんは床についた。頭がやけに熱く自分でも何を考えているのか訳が分らなかった。しかし、その間も、涙

だけは絶えず流れた。

家人はひどく心配した。しかし美智子さんは何も云わなかった。

医者は、何かひどいショックを受けた為だと云った。そして四、五日安静を続ければ、平静に戻るでしようかと診断した。

医者の云ったように、美智子さんは段々落付いて行つた。しかし落付きを取戻す事は同時に、絶望感を深める事でもあつた。

美智子さんは窓越しに見える春の青空を眺



め乍ら、もう死ぬより外ないと思つた。

三日目の夜が来た。

美智子さんは淋しくて堪らなかつた。心の何処かに大きな穴があきそこを冷たい風がさら／＼通るような氣持だつた。

美智子さんは何気なく、傍にあるラヂオのスイッチをひねつて見た。自分の氣持とは程遠いブギウギを、笠置しづ子が歌つていた美智子さんは消そうと思つて手を動かしかけたが、何となく臆劫になつて止めた。

「歌謡曲は終わりました。では皆様お待ちかねの前々のクイズ解答当せん者を発表致します。当せん者には既に、オリエンタル紡績製造の婦人用ズロースをお送りしました……」

ぼんやり聞いていた美智子さんは、アナウンスの最後の言葉に、思わずびくりと体を動かした。

「当せん者の方々は次の通りでございます——大阪市東成区大成通一丁目、村山正夫さん、神戸市須磨区磯馴町二丁目……」

美智子さんはごくりとかたずを飲んだ。

「……二丁目、中井一郎さん……」

美智子さんはもう、それから後の言葉なぞ耳に入らなかつた。

「無罪だわ。一郎さんは無罪だわ無罪だわ……」

……」
こんな文句ばかりをうわ言の様に呟いていた。

いつか美智子の頬には、涙の滴が幾筋も流れおちていた。そして胸の中には喜びとも悲しみともつかぬ不思議な感情が、嵐のように吼え狂つていた。

五、もう云う事はない

中井君と美智子さんは、新緑が目に見え、遂に目出度結婚式をあげた。

二人は現在、この上なく幸福だ。

二人については、もう云う事はない。

いや、まだ一つだけ残っている。

それは——新婚旅行の夜、美智子さんが中井君の為に初めて（二人の名誉の為に申し添えて置く）脱いだズロースは、オリエンタル紡績製造のピンク色の奴だと云う事だ——つまり、中井君がクイズの賞品として送られた例の運命のズロースだと云う事だ。

(FIN)

ハナヲタカクスル

問 私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答 先ず特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました。肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもっているのです。費用は八千円以上です。

大阪市北区梅田新道
交叉点東一丁電車通

・三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談

夜 開 く 孤 島

＝さまようウラニストたち＝

驟雨が小やみなくベーブメントにそそぎ、リリオデンドロンの街路樹の大ぶりの葉もせまり来る秋の夕の煙霧にとざされていた。五時を過ぎていた。クライスラーやナツシユの新型車が流れるようにすぎるのを見ると、一人か二人の色も白い種族が悠々と運転しているのだ。くわえているのはブライヤーのパイプ、アニーパイルの



横をすぎ、有楽町の駅に急ぐ勤を終った人達のレインコートの群とぶつかりそうになりながら、英介はさしせまった目的をもたぬ人のゆるやかな歩みで喫茶店ミラノの扉をおした。混んでいなかった。スプリングのきいた深々としたソファアーに腰をおとすと、軽い夕食を注文した。サウンドボックスからもれるようにひびいているのは多分リスゴウチイのシャンソンであろう。泣いているようなうたたえているようなやるせない柔かな声だ。

ね、もう一度いらつしてね

この苦しみをおわかりでしょ
あなたはきつとお見えになるわ

岡 真 史 郎

四 方 田 貫 ・ 画

英介は黙々として、ホークをおくと、香りの高いコーヒを飲んだがその眼は、店内にある、リビストーナの大きな葉をじつとみつめたままであつた。愛することの苦しさ、いま英介の胸をつぶしているのである。

英介が野中淳を世田谷の家からおくり出してからもう一年近く経つ。それまで、二人はその広くもない家に二人きりで同棲していた。淳はもう二〇才になっていた。彼は恩師の塩沢英介の家族が郷里の家から来ない間、厄介になつていたのである。もともと英介の方から淳を同居させたのである。淳はA大学にかよつていた。

塩沢英介といえばT大学の有名な史学の若手教授であり、その透徹した史学観と専攻するヨーロッパ中世史の深い学識は学界でも定評があつた。学内においては彼はよく雑談をした。学生達は英介を面白い奴だと云つていた。しかし其等は今の英介には何の興味もなかった。三十七年のすぎきし已をふりかえると、彼の顔はますます苦澁を加える。二十代より一層早くすぎ去る三十代。人は其の年齢を男の絶頂期といい、青春の挽歌のかなでられるのを、そう云つてごまかしている。英介の青春は暗たんたる戦争によつて空費されてしまつていた。今や四十代が一層の快速をもつて彼にせまりつゝあつた。英介があらゆるものを犠牲にして獲得した名誉ある地位とか業績とかが何と光彩なくしなびてしまふことだろう。しかも英介自体、生れながら光輝ある青春の台座にすわり得ない、肉体の弱点を持つていた。どうみても彼は美しい男ではなかつた。これもあれ程美に敏感であり、美をあがめ、美と溺れる彼にとつて、よしんば精神の美と称する奴があつたにしても、其をいれる器の貧しさには、がまんがなりかねた。彼は、かくも自分を失望させる己の肉体に軽

い、いきどおりすらおぼえる。その欠点をカバーするように彼の学業が彼にゆるされた唯一のプライドになつていたのである。もともと貧弱な肉体に今や老齡という、さくべからざる訪問者がやつてきていた。

「いまさら俺の顔に小じわの多少増えようが増えまいが、それが何だ。どんなに、見るるしくともみじめでも、之は珍しくもない俺の顔だ。この齡になつて、好いた、はれたでもあるまいし、中年男が容貌の美等問題にするのが、こつけいというものだ。男の社会ではこれでも結構みとめられている看板なんだ。」

と彼は一人想いにふける。淋しい自慰か、負け惜しみでなければ幸いである。

淳が上京して彼の家にやつて来た時、その黒々と、ウェーブした髪がすこし、その明るい額にかかり、青いかりあげが白いカラーにはえていたつけ。黒耀石のひとみは大きく、温かく、けがれを知らぬ純潔に輝いていた。貴族的な恰好の良い鼻が品よくしまつた唇。そして淳は笑うと、この上もなく、優しく、なまめかしくさえたつた。石英のように白い歯が青年のたくましさを示していた。英介は淳の肉体を知つてから数年になる。そして

「俺はなんと、不用意にたしなみなく、彼の肉体をあんなに、安直に汚してしまつたのだらう」

と思うのだつた。淳は極めてすなおな男だつた。英介の云うことは、何でもきく。夜寝床を並べてねると、たいていは、淳が先きに寝てしまう。英介は夜ふかしのくせがある。本を読み終えたと、だまつて、立つた淳は静かに寝衣に着かえると、「おやすみなさい」と云つて先にねてしまう。英介が眠になる時は寝ている。淳がやが

てスタンドを消し自分の寢床にもぐりこむ。英介は一人で興奮している。しばらく深い沈黙が続く。このままだと、淳は青年の健康な睡眠に入ってしまったらしく、軽い、いびきをたて始める。

「おい淳、」……

と云うと、もそもそしているが、かすかに、苦笑しながら、英介の寢床にもぐりこんでくる。彼は腹のなかでは

「先生つたら、好きだな、またか」

と思っている。あのたぐいなく美しい胸や腹、英介はあらゆる姿態を、この美しい青年の肉体の上に演じてみた。狂的な情熱の炎をその大理石のような、なめらかな肌にもちつけ、たくましいダビデの楯に口づけをし、女の豊かな乳房のような尻のふくらみを握りしめ、はては感極まると、あついペーゼをおくるのだった。楽器の奏者として、英介は、下手な一人よがりの演奏をしていたかもしれない。淳の肉体は完全に見事なヴァイオリンであつたろう。そして時々、そのヴァイオリンも鳴るのだった。インド人のシトクリチという愛のさゝやきの音楽が淳の唇からもれてくると、英介も情熱は爆発し奔騰し解放の歓喜に酔うのだった。しかし英介の胸のなかの或者が、そうした無我境においてすら、彼にささやくでないか。

「馬鹿なお前よ。一人で良い気になつて、この青年の肉体を玩具にし、弄び、それで満足なのかね。死んでも良いと思う程の法悦かねそうじゃない。英介、お前は彼の上で自慰しているにすぎない。彼はお前の乱行とは無関係なんだよ。あの冷然たる肉体を思つてごらん。あれは感激にふるえ、愛のせつなさ、のたうたないね。

どんなにお前が、あれの肉体を、汚しても、あれの魂は孤島であり、汚れない。あれはお前を好いている。お前を尊敬している。お

前にささげている。お前に彼の肉体を恥しげもなく、料理してもらっている。たゞそれだけなのだ。あれの魂はあれが愛する乙女との抱擁においてのみ、感泣するんだ。だから、お前が女とだき合つて愛のせつなさに泣くような、調子にはいかないよ、どだい無理だよプラスのお前がどうしてプラスを相手にし、マイナスを相手にしないのだ。あれのプラスがよしんば、その少年性の故に低くとも、要するにプラスはプラスさ。お前と合せてゼロにはならんのだ」

英介の魂は一人ではり出され、淋しさと腹立たしさを通りこし、こっけいさに笑い出して淳の肉体をほり出してしまふ。淳はしばらくは、その美しい全裸体をさらけ出して力なく横たわっているがやがて、敏捷に起きあがると自分の寢床に帰つてしまふ。やれやれと思ひながら、そうしたお勤めをいやな顔一つせず、はたしていたが、英介の方で自発的にやめてしまつたのである。英介は、そうした肉の交りの芝居に耐えられなかつたかもしれず、男二人世帯の不自然さに、いまさらの如く或る荒れを、精神の頹廢を感じずにいられなかつた。淳は気持の優しい青年だつたが、家事には無能力であつた。英介自身もそうである。料理は乱暴粗雑であり、衣類管理も掃除も一切が、なげやりで不潔でさえあつた。二人生活、男同志の同棲という嫌らしいものに慣れる程ますますそうなるのだつた。時々思い出したように英介は大掃除をし洗濯屋にもまめに通ひ、料理もしたが所詮こうした女中仕事に二人の学徒は慣れてもいず、時間も惜しかった。

淳は女好きのする顔だから、大学の女の子達から盛にモーションを、かけられる。彼はうれしくて時々アベックを楽しむ。そして盛に鏡をみて己のメーキャップに精を出す。そのくせ、靴下などは洗

わないで、押入のすみに、つつこんであるのだ。英介が買つてやつた、ギヤバのズボンを毎日プレスをかけ、靴だけは、はりこんで良いのを買ひ、此れも毎朝せつせと磨く。淳は己の容貌に絶対の自信があつた。沢山のラブレターも来るし、娘のウインクする者が多いのだ、でも英介のように淳の肉体を厳格に詳細に緻密にテストし、その完全な美に酔えるのだろうか。一体に若い女がああミケランジェロのダビデやロジンの青銅時代を、まじまじと眺めその渋い肉体の美に味をし得るのだろうか、英介は疑問に思うのである。彼には女のヌード写真も、マイルヨールやルノアールの裸婦もまして、セントラル劇場あたりのストリップなんかは用がない。「老人も欲情します」とか「モーニングアップ」とか「立てハズバンド」とか「大騒ぎマラカス・マンボ」とか等々の痴呆的せん情的なショウを次から次へと、これでもかこれでもかと、興業師達はやつてゐるのだが男共があつたものに集るのに女共の集る男のストリップ劇場はない。女は元来肉体に鈍感なのだと思ふ。世界中で淳の肉体の神秘的な一物にほくろのあるのを知つてゐるのは英介だけなのだ。淳は目黒の方へ引越して行つた。

「俺は汚れた好色の豚だ。つまらない」

英介は苦虫をかみつぶしたような顔をして、女給仕をよんだ。電話をかりると有楽町の喫茶店ボアにかけるのだつた。

「もしもし、トムちゃんいる？」

「ええ、まだ帰つて来ないのですけれど……どなたですか」

「この間行つた塩沢、どうしたの？ 君アルマンでしよう」

「ええ、トムは映画を、みに行つてまだ来ませんが、そのうち帰りますから、どうです、いらつしやいませんか、今どこにおいでです？」

？

「新橋に来てゐるの。ええ、……いづれ行きますが……じやまた後程」

といつて簡単に切つてしまつた。

ボアはその種の店では全国的に有名であり、男色が法律を犯す外国より来た兵士達や紳士達もよく来るから、そうした意味では今やインタナショナルなボアでさえあつた。大きなガラス窓には流れるように白く、コーヒの広告文が書かれ、バーテンダーには各種の洋酒瓶が並んでゐたし、オレンヂ色の電氣スタンドの笠、熱帯魚を飼つた水槽等が目につく。ボアには十五位の少年給仕がいた。二十才以前のハンサムボーイ達は其々フラワーネームを持つていた。一週間程前、英介はその店を訪れた。この種の店へ一人で訪れるにはよほど、なじみにならぬ限り、多少の心臓がゐるのである。ふりの客のようにコーヒ一杯で引き上げるつもりで、シートに腰かけるとマスターのビエルは「いらつしやいませ」

と云つたきりだし、ボーイ達も傍にはよつてこない。ボアの二階はカフェーになつてゐるが、二階に上る客がボアをねらつて態々訪れるのである。部屋全体はうす暗く、隣のボックスの様子もはつきりしない位である。風采の上らぬ英介はおよそ、こうしたフラワーボーイのゐる店と異質である。彼はもてようというやうな、山気も色気もないというより、あきらめてゐる。英介はつとめてかたくならぬよう、シートでコーヒを飲んでゐると、トムが通りがかり、にっこり笑つて、近ずいて来たので、英介は

「しばらく。トムちゃん。二階はお客さん？」

ときくと、トムは朗かに



「ええ、あいていますよ……、いらつしやいませんか」

と英介の腕をとる。英介はついふらふらと色気をおこして二階へ二人で上つて行く。

ボックスにつくと、次々と四人程、集つてきた。この時の英介の恥しさというものは、いいようのないものである。この店のナンバーワンのアルマンとトムと、ニューフェイスのジョルジュが、英介にサービスするのだつた。始め英介はこれ等の変童達^{カタマイ}をみた時、

「なんだ、そう驚く程ハンサムでもないじゃないか。俺の淳の方がずつと美しい」

と思つたけれど、こうして面と向つてみると、お互の対比は惨酷

に、べちやつくわけでもない。

「何処かできていらつしやつたんですか」

「そう、何しろ世界的に有名なんだから」

そして各自の名前とか、年齢とかの月並なことをきいてみるが、ピールのジョツキをかたむけると、溜息とも歎息とも感嘆ともわからぬものが、泡とともに咽に入つてくる。十八才のジョルジュは、いきなグリーン^{グリーン}の絹マフラーをして、眉を作つたり、うす化粧したりしているのだが、細面の顔はスペインの混血を示して、エキゾチックな美貌に蕩児の心をときめかすのだつた。テノールを鈴のようにふるわせながら

な程鮮かであつた。青春の光輝と美貌と精神の白痴美が老齡の陰惨と肉体の汚辱と精神の苦痛にみちた力の美に向つていた。この四対一の対立に負けまいとして英介は、カタマイト達にこびるのだつた。大学において、あの豪然とまた悠然と学生群に対するさつそうとした塩沢教授はこのウラニスト・クラブの肉体市においては、みじめにこつけいに、ピエロの役を演じねばならない一介の中年男英介にすぎないのだつた。しかも彼は自信を失い云うべき言葉を知らない。

「こう美しい君達にかこまれると、胸がわくわくして、しゃべれなくなる」

「面白いこと、おつしやいますね」

というが、別に、政府のナポリータのよう

「私だつて、本当に女ぎらいなんだもの。郷里じや随分さわがれて困つたんです。女学生はしよつちゆう騒ぐし、男だつて、つけねらうんだものね。私や、つんとすまして、片っぱしから、ふつて来たけど、一度、肉体的交渉でもしようものなら、町中うわさは拡つて学校にもいたたまれなくなるんです」

「でも、そんなに女学生から騒がれて、一体どんな氣持なの？ 悪くはないでしょう」

「ううん、何でもない、ぶん／＼蚊が云つてゐるみたい」

そうすると英介もまた一匹の蚊なのかもしれない。美少年の肉体を求めて、ぶん／＼飛び廻つてゐる好色蚊なのだ。

「一度なんか、中国人の船員が、私を波止場においつめて、ジャックナイフで私を手ごめにしようとするんです。でも私、その時云つてやつた。死んでもあんたなんかに、なびくものか。私の体は死んだつて、あんたのものじやない。殺したら良いでしょう、つてね。彼、やめちやつた。そう、不見転みたいに体売るのいやあね。ボアの信用にもかかりますもの」

「そうすると、さしづめ、僕なんかにとつては、君達は高嶺の花なんだね、一体どうなの。交渉はさ」

すると、アルマンが

「まあ始めは映画のお伴したり、銀座を散歩したりしますね。そして精神的にお友達になつて、いただいてからの方が良う御座いますよ」

という。アルマンは貴公子然とした、ヤセ型のギリシャ型の顔だが、ほりが深いので、みていると、英介は恐しくなつてぶるつとふるえ始めた。これも蕩児の唇を吸引してやまぬ美貌だが、凄味があ

る。

「外人は、アルマンとか、トムとかジャックとかを好みますね。毛唐好きの型なんでしょう。売れつ子ですよ」

「でも私、アルマンなんて名いやなんです。歩いてゐると、皆が大声でアルマンなんて呼ぶと、恥しくてたまりませんですよ。日本の名前の方が良いんですけれどね」

と、アルマンは、低いアルトでなめらかに云う。彼は赤縞のリリヤンのネクタイをしている。トムはだまつてゐる。

「どうしたの、トム。だまつてゐるじやないか」

トムは色白の細面の上品な顔をしている。すくなくとも皆の中では一番純潔と純情のようにみえる。アルマンが説明して

「この子は、いつもこうなんで御座いますの。まあおぼこいんでしよう」

というと、トムは可愛く笑つてゐる。英介がトムの手をとると、なめらかな形の良い指はすんなりとのびて、しわ一つない。そしてうぶ毛の生えている手くびすら、英介の欲情をそそののだった。

「一体君等は、若い人が好きなのでしょう」

と聞くと、皆いつせいに

「やつぱり、こう何ですか、中年のたくましいしつかりした人の方がひかれますね」

と云う。肉体の市においては、売り手はなるべく高い買手を求める。彼等とてそれにもれない。

二回目トムに会つた時、英介はきいてみた。

「それにしてもね、トムなんて、この方面の男とみえないじやないか。君が女嫌いなのか？」

「ええ、そうなんです。娘みたつて何ともないんです。学校で友達
がエロ絵をみているでしょう。みんな女の方をみて興奮しているん
ですけど、僕だけは男の方なんです。話も面白くないし」

「やつぱり君もそれだけ美しいんだから、騒ぐ娘もいただろう」

「ええ、随分。でも一寸もうれしくない。うるさいからさつさと帰
つちやう。友達と何処かちがうんですね、だから、皆と腹うちわつ
て友達になれないんです。僕がいつも皆とはなれて早く帰つちまう
もんだから、友達の奴等、僕に恋人があつて、宜しくやつているん
だと思つてゐるんです」

トムの齡頃で、およそこのような深刻な内部をつまり精神の恥部
を平気でしゃべつてゐるのを英介は理解出来なかつた。トムは二〇
にもならない。まだ煩悶の年齢に達しないのかしらとも思える。で
も、この男らしい美少年が英介の少年時代と全く同じコースをふん
でゐるのを見ると英介は一種の安心をすらおぼえる。トムにとつて
は毎度きかれる質問なのか、きかされる告白なのかそれは知らぬが
作り話をするにしては、まだ素朴すぎるようでもある。

「僕は一人子で、品川で育つた時、まわりはお婆さん、お母さん、
姉さん、女中といった女ばかりの中で育つたんです。女の子のつも
りで育つたんでしょう」

その時、ボックスにはトムとジョルジュしかいなかった。能弁の
彼は日頃無口のトムが、こんなこと云うので

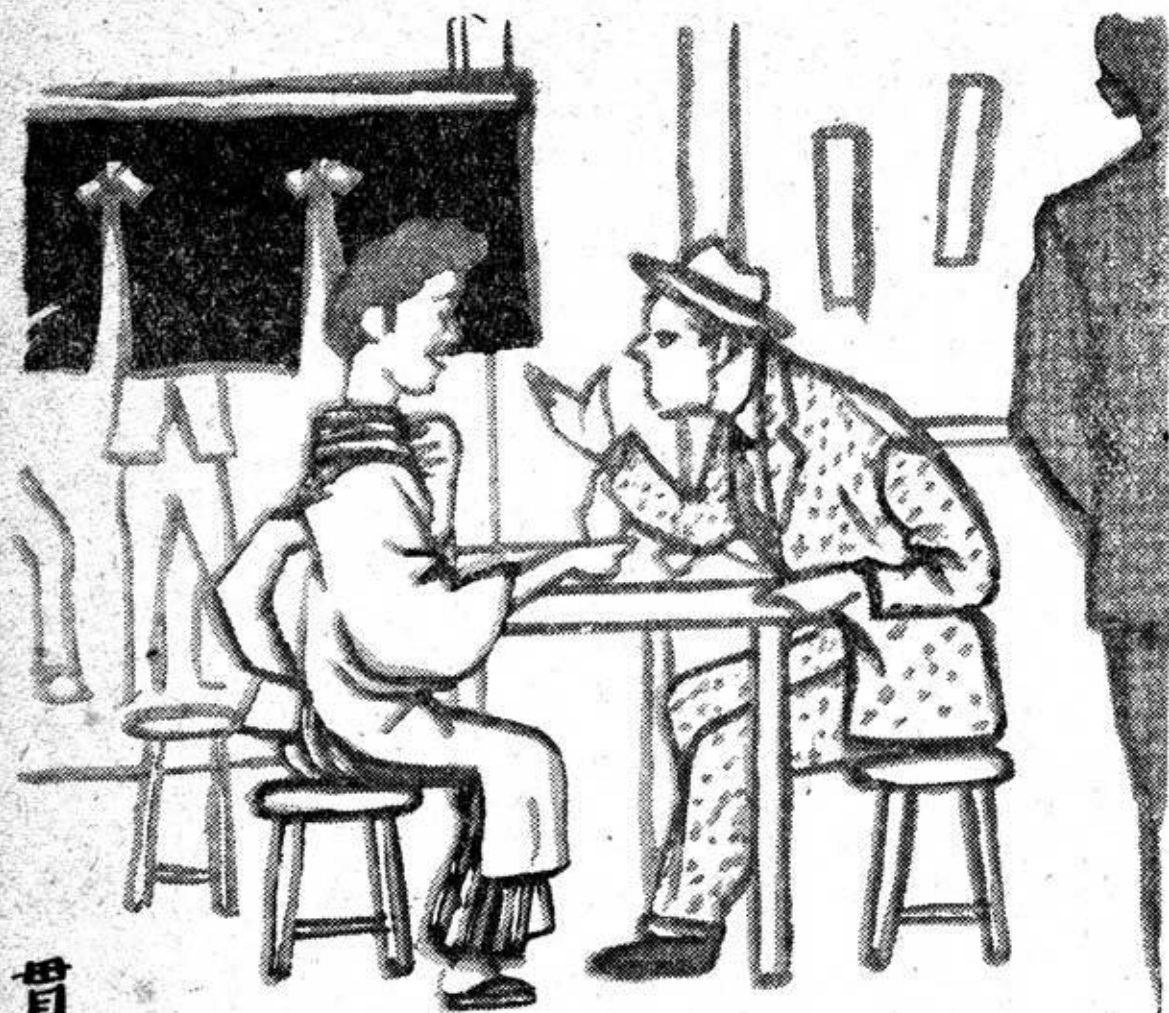
「ユーがそんなことしゃべるの珍しいね。私始めてきいた」

という。英介は、だまりつぽく坐つてゐる。トムもジョルジュも
だまつてゐる。フラワーボーイはガールのように、おきやんに騒い
だり、客にいちやついたりしない。彼等は貴公子然とかまえること

によつて、ボアへやつてくる紳士達の気持をひくすべを無意識にこ
ころえてゐる。他のボックスではなじみ客がなじみのボーイの肩に
しなだれかかり、手をからみあわせ、接吻しているのか顔に顔を重
ねてゐるのすらあるが、そのボックスには淫猥な沈黙があつた、英
介にはあんなことは出来ない。英介の肉体に反ばつてゐる彼の精
神がそうした恋の手れん手くだにもにた、ひめ言を拒否するのであ
る。英介はトムに彼の家へ遊びにこないかとさそつてみた。

「君の好きな物があるかもしれない。色々な物みせるよ、どう」
「ええ行きますよ。電話かけて下されば、出かけますから」

と氣さくに云う。その声すら英介には、心よげにひびいた。彼は
氣持良くその店を出た。トムは送つて来た。それから約束した日ま
で英介は齡甲斐もなく、楽しさの期待と、胸をふくらませて、トム
をまつてゐた。その日になると、朝から落ちつかず、菓子とか果物
とか、食事の用意までして待つてゐたが、遂に英介の意中の人は来
ないのであつた。彼は見事に肩すかしをくつた。いよいよ来ないと
判つた時英介の失望は大きかつた。この日なのである。ミラノから
近くのボアまで電話をかけると、トムは約束を覚えて映画を見に行
つてゐるのである。英介はあつた社会、アメリカのゲイの社会の
美少年を得るのにダイヤと黄金の山をきつき、もしくは美貌のスタ
イルでもつて、獲得するという冷徹な事実を忘れていたのであつた
「あの貧弱な先生がトムにあつたんですつて、笑わせるわね、
この社会に来るからにや、服装だつて、もつと、りゆうとしたので
なくちや、私達は、いきな花道の紳士に愛せられてしかるべき美貌
なんだもの」という声が、それらのカタマイト達にひそひそ、語ら
れてゐるのを英介は知つてゐるのだろうか。英介はよほどボアへ行



つてみて、直接トムに会うか、それとも電話でトムの口から、弁解でも、きこうかと思つた。しかし所詮それも無駄だろう。「情の中の情はただこれ男色衆道なり、しかれば至極上品の意気地なり、一夕の御懇情に百年の命をこころとなしても、ぬぎ捨の古わらじ同然いかなく惜気なし」と男色十寸鏡は書いてある。その道の先輩の

買

苦勞もさりながら、同じ趣向の少年に会つても、恋の道のままならぬことは男女の道といささかの変わりもないのであつた。無粋な者は所詮入場出来ないものである。雌と雄とが一瞬重り合うと、次の瞬間には雄が雌に無惨に食い殺されている、或種の昆虫のようなせつ那主義の恋愛のために、鼻の下の長いゲイの紳士が春服や外套やマフラーや靴をプレゼントし、数百円もするコースのフランス料理をおごり、気前良く金貨をにぎらせる。そうしたことが普通な社会にトムは生きている。祇園の舞妓のように、きれいに純真なお人形、男の子のお人形のようなものであつて、相手が変わる毎に莫大な気あげ料を吸収するのである、つまり女の方は一回なのだが、男の方は章貞料といつたようなものがないから、若い美少年である限りは何回もお初の買物を取ることが出来る。英介は自省する。トムのような並ぶ者のない美少年はいわば一個の完ぺきな美術品であるが、それを鑑賞し玩味する方もいわば美術品をいれる家なのだから、其の完全さに匹敵し、マツチした家でなければならぬ。ところが我が家は、ぼろ小屋ではないのか。苦笑に顔をゆがめると、英介はボアへよらず世田谷へまっすぐに帰つてしまつた。

それから一週間程たつた。英介の關係している出版社の招宴があつて、数人の学徒が新橋の料亭によばれた。社用族公用族用のこの種の建築はおよそ、みみっちい計算によるものもちがつて、思いきりずばりと粹にまたは豪勢に出来ていた。ビールや酒は広いつややかな卓上に林立し、きれいどころの姉さん達が数人やつてきては適度のお色気をもつて坐にはべつた。英介の属する大学の社会では、この種の宴會はおよそ縁のないものである。戦時インフレ時代彼が大陸や南洋にわたつた頃にはあつた。また戦後の出版ブーム時代に

も多少はあつた。でも最近においては、此の程の女達にとりまかれでれでれして良い気な酒を飲むのはよほど珍しいことである。

この夜の友人達のなかに、彼が戦後始めて会つた大学の輪上の同窓もいた。この男はある会社の課長をしていたから、他の連中とは一寸ちがつていたが、英介の第一印象は顔をみるなり、齢をとつたなということであつた。顔はその昔彼が庭球の名手として活躍していた頃とちがつて、幾重の小じわで刻まれ、齒のぬけた感じが何ともこつけないであつた。この感じは時間をへだてて、同窓生達が会した時互にちらと感じるものである。ただ男の社会においては肉体の敗退を補つて精神の活潑なおこりが君臨していた。彼は英介をつかまえて

「塩沢は齢とらんね、そうでもないつて？ いや、自分で意識するようになつちや最後さ。俺は齒にきやがつた。まだ頭は白くならんがね。それ、ハメ××というじやないか。始めが齒で次が目、そしてこれさ」

といつて手をふつて、自分の股間をさすのである。隣に坐つていたうりざね顔のはなやかな顔の芸者が

「なにいつてらつしやるのよ、課長さん。まだお若いじやないの。私ほればれしちやう」

といつて彼に酒をつぐ。世の普通の男女にとつて、男の齢なんてものは、こと色ごとに関する限りあまり問題じやない。容貌の代りに財力が智力が物を云い、男は力で秤量されるのだつたが、ゲイの社会では容色が一の資格であり、第一の力でさえある。つまり男と女との領分が重なりあつて人は男である、同時に女であることを意識している。かのハインリッヒ三世のカリカチュア絵に、ピカソの

ような両顔一頭の人物があつて、一方は王、一方は後の顔をしており、体は縦に二分して一方がウエスト、コート、ストッキングといったルイ王朝の貴族のスタイルであれば、一方はボデイス、アンタースリーブ、アクセサリーのついたローブといった大きな貴婦人服をまとつてゐる。あれなのだ。ハインリッヒ三世が両性的のヘルフロディテである醜聞は彼の宮廷のみならず、全歐洲の貴族サロンのスキヤンダルを賑わした。王の周囲には美女と小姓がひしめき、王自体しばしば役者のように王になつたり貴婦人になつたりした。

英介はかかる異常を好まない。彼が臨んでいる大学社会は智力の一の峰であり、人間は智的活動で秤量され、いささかも色慾のしるびよるすきまもない壁ではりめぐらされているのである。彼の教えている学生にも、同僚にも美男子はおろ、時たま彼の助平な心をそのかすような人間があつても、かかる挙動はつつしまれるべきであり、彼自身馬鹿らしいとして一笑にふし去り、世間を律しているノルマルな行動律に服しているのである。

新橋の宴がはねると彼は用事があると云つて、浅草にまわつた。

六区の映画街はストリップの繁昌で「ただいまより割引」なんて札がかかつており、一杯屋の屋台店には、アカニシのグロな内臓をサザエの壺焼と称して、一杯並べたてていた。ここは食慾と性慾の露骨なダンピング市であり、パンパンやアンチヤンやお上りさんや田舎娘や小僧の街でもある。

あるストリップ劇場を一寸入つた露路に軒を並べてある酒場の一に入口の戸をしめた「さつま亭」というのが、いささか酔つた英介がたどりついた店である。がらつと戸をあけて入ると、せまい店内

は天井の青い螢光燈によつて、割に明るい感じであつた。数人の男達がビール瓶と酒瓶の並んだスタンドを取りまいていた。

「いらつしやい」

と威勢良く声をかけたのは、マスターの四十年配の肥つた血色の良い男である。やせた五十年配の男と二人で酒をあたためたり、料理をしたりしている。生の松茸を皿にのせて果物と並べて置いてあつた。バナナが変に印象的である。

この店に集るのは年配の男達で、この道の修業に甲羅の干上つた連中であるが、三日にあげず或は一週間毎に、仲間ほしさに吸引されてやつて来るのだつた、店はこうした常連によつて結構もつていた。背広を着たこの連中が、その辺に活動している市井日常の男達と何処がちがうのだろう。英介の第一印象は「このじじむささはどうだ。この殺風景さ、花のない野菜畑じやないのか」ということ。そしてこの連中が互いにつーさんとかサーさんとか云つて、良い年配同志が接吻でもするかと思うと、彼は背筋が冷たくなつてくる。英介は心の淋しさと悩みを持つた男が、その悩みを理解してくれる同性の友が欲しくて来たのである。彼は別にその友を色情の対象としようとは思わない。

「俺は気分で来たのだ。ここで色目を使い相手を物色しようなんて嫌なこつた」

と思つてゐる。けれどガラス戸ががらつとあき、皆が或種の期待をもつてふりかえつてその新来の客を見る時、マスターが如何にもうれしそうに

「あら、小野さんいらつしやい。あなた来ないと淋しいのでね」

なんて云つて迎えた客が、割にさつぱりとした清潔なスタイルで

あり、高尙なネクタイをしめ、微笑しながら腰掛けた時の落ちついた、品格のある容貌をみると、心の中で軽い羨望と期待を感じるのはどうしたのだろう。英介のなかのヘルマホロディ的な雌の虫がめめしい感情を動かすのにちがいない。小野という四十年配の男は気さくなたちで、次々と酒や料理を注文すると隣席の客達の盃にいいでやる。

小野の隣にいたでつぷり肥つた血色のよい六十年配の男は皆から土田さんと呼ばれていたが、小豆色の粹な背広に黄色の輝くネクタイをしめ、ちよび鬚をたくわえ、盛んに大きな声でしゃべつていた「ねえ、小野さんなんで薄情だよ。顔でひつつくんだから。私は第一印象の氣振りでほれるの。これでも東京中のこの方面の男は知つてゐるんだから。小野さんだつて私がしこんだんだもの、ちえあな

た」

と小野の肩に手をかけると、小野は

「それや土田さんの胸毛とお尻は良いからな」という。土田は良い氣になつて

「私やこの齡になつて、小野さん達みたいにな、好いたほれたつてのは超越しちゃつたの。氣分で来るの。ほれられるのは苦痛ですよ。惚れるのは良いもんだけどね」

英介は好奇心にかられて

「土田さん、若いのがお好き、年寄りがお好きですか」

ときくと

「私や、十三から七十までより好みしない。こうして男ほしさに毎日この店に来てゐるんだけどね。大体若いのが好きな人は目つきで判りますよ。へえ、小児科か耳鼻科かつてことはね。小野さんなんか

小児科だあね。この恰幅じや皆惚れ惚れしちやう。大学時代から私
がきたえたんだが、次々と東京のナンバーワンをなぎたうしてもう
此の頃じや、私なんかお相手じやないけどさ」

マスターが小野のそばによつてきて

「ねえ、小野さん、よつてやつて下さいよ。良い子があるんです。

それはさつぱりした気性で、おぼこくて素直で、あなた向きですよ
中野の材木屋の息子さんなんですがね、……ねえ、今晚よつてや
て下さいよ、良い男前ですよ」

とすすめるのは、待合の女将が旦那に良い娘を世話しようとして
口説いているのと一寸も変りない。

「そう。行き度いけど、今晚は駄目だ。どんな良い人があつても駄
目。会社の出張で出かけるんだから……惜しいけど」

と云つていると、離れたところに坐つてゐる教員風の苦味走つた
顔の男から盃が小野に廻つてくる。英介は、この小野にしても土田
にしても九州風の男色が、いささかの陰気さも恥しさもなく堂々と
朗かに取引されているのをみて、この世界の広さに驚くのであつた
「マスターにかかつちや、皆、先生か社長か財閥だあね」

と土田がひやかす。マスターはにこにこしながら

「そんなこと、だつてそうでしょう、皆さん気持の良い人達ばかり
ですもの。ねえ、小野さん。あなたなんか、あんまり道楽すると奥
さんに悪いですよ」

「そうでもないさ。女房のやつ、一週間に二回位で、ヒステリーは
直るよ」

土田が後をひきうけて

「俺とこの女房なんて、男か女か判りやしない。毎日こうして遊び

に來ているから、ねえ、マスター、もつとサービスしなきや駄目じ
やないか。この間のあれさ、ほれ、……あの御仁はすごいね、六十
ですかね、二階に上つてね、たて続けに×××××気なの、×××きり
はいお次、はいお次、そしてお金は取らないの、だから皆申込殺到
して順番まつて切符制なの、そして下からまだ落まんななんて云つ
てるんだから、さすがの私も驚き。しかもあれはそのままなんです
からね。凄い精力だあね」

と云うと一同、あてられ顔で笑つてゐる。この店はこうした男色
猥談を公然とやれるところが、人気のあるところかも知れないし、
また客同志の取引が割合に気軽にやれるようでもあつた。さつきか
ら、隅で、鼠のセーターに赤ネクタイの記者風の青年と有閑壮年が
ねんごろにひそひそ話している。新聞記者らしい男が小唄を口ずさ
んでいると、隣の男がしきりにほめる。土田にやれという彼も一
寸良い声で、一曲歌つた。小野が

「土田さんのは尺八の唄だね、やつぱり」

と云つて笑うと土田はしやあしやあとして

「いえね、この頃声も駄目になつちやつた。昔は良い声だつたんだ
が、あまり××を飲むせいかな」

英介はこれ等の話はずみ、両刀使いの一同が思い思いに飲んだ
り話したりしている間、彼自身の同類のことも異様な空気に戸まど
いしてゐた。ここは彼がしたつて行つた男色の海の港であつたが、
凄腕の選手が技を競つていて、彼のような新米のまずい者はてんで
頭から問題にもされぬのであつた。そのくせ一同はすばらしいハン
サムなニューフェイスの現われるのを待つてゐるのである。英介は
此の道のいわば素人と云つても良かった。これ等の客達の何割が果

して、純粹に氣分的に飲みに行くのかあやしいものである。多くは肉慾にうずき或は新しい相手という刺激を求めて男こいしさに集つてくるのではないのか。かのボアがジンファイアスやカナディヤンに酔う小兒科であるなら、さつま亭は清酒と日本趣味の耳鼻科であるという差はある。おしなべて其所にあるものは精神性の欠除した痴呆的な肉体の惑溺なのである。

みたされぬ思いの一週間が過ぎた。或るコンプレックスというのか馬鹿らしい熱情のとりこに英介はなつていた。彼の学者的な好奇心が東京にあるこの種の男色社交場をかたっぱしから訪ねよと命令していた。上野の御徒町を一寸入った所にある「むらさき」という

酒場はさつま亭より更に小規模のもので、店内はうす暗くなっている。男色を表徴する紫色の小じんまりした暖簾がかかっている。小型電蓄の傍にマスターのいないマダムのお幸さんが立っている。彼は四十近い大年増の厚化粧で、コケツテツシユにお酌等するのだが英介がこの秋空に水の中へでも飛びこむような決心で一人漂然と入った後も、二人連れの会社員風の中年紳士を相手にしていた。

「だつて、サーさんつたら、私そんな女にみえて、……これでも舞台出なんですから、その辺の商売人とはちがいますよ。さあ、いかが」

とさしているが、英介の方はちらつと見ただけで「こちらへいら



つしやいよ」とも云わねば「始めまして、よくいらつしつて下さいましたわね」とも云わない。

こんなことは普通の酒場のマダム連中がいつも軽くなめらかに云うことである。英介は不興げに酒を飲んでゐる。二人の紳士達は顔を赤く染めながら、彼の方をちらちら見たりしている。

そのうち異様な物音がして、この狭い店の奥の調理場の隅にある階段から、どどと人が落ちてきた。べろべろに酔った若い男が頭を下にしてはつて出ようとするのだが、あちこち、衝突して傷まで出来、容易に立ちあがれないので、お幸さんが介抱してやらねばならない。若者の上から彼をひきずるようにして、やせ型の眼鏡をかけ

た、四十年配の男が降りてくる。

「まあ、どうしたのさ、マーちゃん」

「なに云つてやがねえ、……へ、面白くもね、……うう」

と若者はスタンドに顔を埋めている。四十年配の男は、つつと立つて外へ出て行く。お幸さんは

「じよう談じやない。あんたが、そんなにして私に恥をかかせるなら、もう御交際は出来ませんよ。うちは、それ程までしなくとも良う御さんすからね」

と歌舞伎調の、うら声で、つんとすねてみせる。若者は

「俺は帰るよ」

と一言ぼきりと云つて出て行つてしまつた。後をマダムが追いかけて行く。英介にとつては何のことだか判らない。やや暫くしてから、四十年配の男と前後して帰つてきたが、彼女は

「ねえ、こんなこと珍しいんですの、……ひどいわね、……あれでいくらでも酒は飲むですよ……まあたかりみたいなものだわね」と云つてゐる。二人の紳士はひきあげる。四十年配の男をマダムはとりなして

「だから私云つたでしょう……。結末はお二人でおつけなさいつて……私やそこまでお世話出来ませんよ。でもパパちゃん、かわいそう、……あら鼻の頭にお白粉つけてさ……奥さんに叱られるわよ。ふいてあげる」

パパちゃんといわれる男は英介の隣に坐ると、彼にもたれかかつてくる。

「ねえ、ママちゃん、わたし、さびしい……」

と女形のような声で、体をくねらせて云う。英介もぼつを合せて

「時には悲劇もあるでしょう。御同情します」

と云つてゐる。そのうち、三十年配の紺背広の男がふらつと入つて来て

「いまストリップと裸映画みてきた。前は見せないね、やはり、誰かつかまえなくちや。今日は良い男みつけた」

と云う。マダムが

「君ちゃん、そう、どんな男？」

「三十位……とても男ぶりの良い子」

と云つて、皿のソーセージをつまんで

「これ位かな……」

と一人にやにや笑つてゐる。

「省線がなくなれや、毎晩たいてい男はひつかかるんだけど」

パパちゃんは手をのばして、英介の太腿をにぎつたりするが、英介は動じない。パパちゃんはあきらめて勘定をはらつて出てしまふ

隣の酒場でさつきから騒いでいたアパッシユ風の青年が、ふらつと出てきて、この店に入るような恰好で腰をふらつかせてゐる。マダムは顔をつき出して

「あら……、良い男じやないの」

と感歎して云うと、紺背広の君ちゃんは

「へんだ。あんなの。Kushbre-manko でもつついてゐるだ」

と罵倒する。アパッシユ風は行つてしまつた。

二人連れの二十代の若者が入つてきた。かなり良い男前なので、マダムはいそいそとむかえる。英介は自分あまり歓迎されない客だとわかると、そろそろ去るべきだと思つた。彼が落ちこんだこの店の空気は一層倒錯性の劇しい純然たるヘルマフロデイトの毒気を

あやしい程ざらざら放つていた。ここには頽廢と耽美とけたるい物うさがあり、男だか女だか判らぬ無性の人間が蛇のように、のたうち、官能の舌を爬虫類のように、ちろちろ出しては互に相手の体をなめているのであつた。

もうあまり人影もない舗道を省線の方へとつて帰すと、君ちゃんと云われた気ぶりの良い男がおいかけて来て、英介の背中をだくなり

「ねえ、行きましよう……帰らないで、私の家この近くだから」

と云つてモーシヨンをかけてきた。今の英介は毒皿式の痴呆症になつていた。彼のような男にも食指をのばす者がいるのである。驚くべきことだ。ハイヤーは万年町の方へ廻つて行つた。君ちゃんは二階建のこじんまりした家に住んでおり、女中を使つてゐる。二階の八畳間が彼の居間なのだが桐簾簾は三ツも並び、茶簾簾も豪華な電蓄もある。真赤なカーテンのしかれた部屋には、はや女中が床をとつていてくれる。なんだか華かな部屋だ。長火鉢の傍に坐ると英介に風呂をすすめた。体がひえていたので、彼が新しい杉の五右衛門風呂に入つてゐると、後から君ちゃんが入つて来て、二人で湯ぶねに入ると、早速英介の……ぎる。

「私若いの大嫌い。外人も嫌い。年とつたのが好き、こう、もりもり盛りあがつた、あんたみたいにたくましいのが良い。お幸さんなんか若い好きでね、すぐ色気出しちやう。さつき来た若いのが来ると、でれでれしてビールでもおごつちまうの。そのくせ、あんたのような新しく来た氣に入らぬのには素氣ないでしょう。あれじや商売にならない」

「いやな奴。客をわけへだてして、氣持良く飲まさないなんて、下

手な商売だね。もう二度と行くもんか、あんな店」

「自分では、身を売らないなん云つていながら、好きな若いのが来ると、二階にあげて寝ちやうんだものね、……でもこの道でしつかり財産も持ち、家も持つてゐるのは少いのよ。私なんか上野中知らぬ者もない程有名なんだもの、着物も随分あるの」

「でも僕は君が男娼とは知らなかつた。買手の僕等みたいな客と思つていた。一寸みると道楽者のサラリーマンみたいだもの」

「そう？ 男の恰好してから皆もこの方が良いつて云つてくれる。昔は髪ものばしてゐたの、私の方が朗かで氣分が大ようでしょう。むらさきは何か影があつて陰氣だわね。だから、私のところへ来た人はまた来てくれるんですよ」

「でも豪勢なくらしだね、君は」

ふふんと笑つて

「いま大阪の或る会社の重役にかこわれているの。二号だね。家も建ててくれたんだけど、私も随分造作なんか直したのよね、お爺ちゃんね、七十ですもの。月に二回位来るかしら。の日は暇だから毎日こうして男ひつぱつてくる。男には不自由いのよ」

「ふうん。でも女の好きな普通の男がよくこんなことするね。どうするの」

「まあただとめてあげるのよ、酒飲ましてさ。一緒に寝るでしょう。私が……ると、観念してゐるんでしよう。たいてい××でもやるよ。私等みたいになると××しないと氣分出ない。私がしてやると、向うでもね、僕もしてあげましょうと云つてしてくれるわ。たいていの男つて多少こんな傾向あるんでしよう。かくしてゐるだ

けのことよ。映画俳優のSね、あの人も私関係あるの」

その俳優は英介も映画で良くなじみであり、そのすばらしい美貌に心をときめかしていた男なのである。二人は床に入つてほそほそ話している。お互にお互の……ながら。

「私さつきあんたがああやせたババちゃんに取られるのでないかと思つた。てつきり一緒に行くと思つた」

「へえ……でも僕は知らなかつたよ」

「まあ、あんなにウインクしてたじやないの」

「でも僕はあんなでれでれた女みたいの嫌だ」

英介がさつきの二階から落ちて来た若者のことをしやべると君ちやんは云う

「そう、それなの、ああした人達は、その道でないような男をいじつてみたいのよ。お幸さんが世話するの。学生でもアルバイトに申込があるのよ。お座敷かけるんですよ。勿論世話代つてのは、取るのよ。座敷料もさ。そうしたことはちやつかりしてるんですよ。私もしてみたいな」

「すれば良いじやないか。君の店ならはやるよ」

「でも、おやじがうるさくつて。さつきの若いの嫌だと云つて逃げたんでしよう」

「その道を知らないの？」

「いえね、知らぬことはないが、気分が向かないと、あばれるのよお幸さん、若いの好きでしょう。だから弱点にぎられてるのさ、それでも金にならないから、おこるのよ、……」

ただ官能の鬼のみがあつた。英介の相手のたくましい食欲は、がつがつと餓えた者のように英介の男性をむさぼり食い、吸収する。

この場合能動者は彼の相手であり、彼は子供のように自由自在に料理されるのである。彼の相手はその全技巧をつくして、……
「今日は駄目、君ちゃん、ゆるして、今日は……疲れちやつて仕事にさしつかえるから」

「何云つてんのよ。出しなさい。出させてやるから」

英介は淳をこうして自分自身が料理していた時に彼の方もエジヤキュレートするのは知つていた。今や立場が逆転した。彼は自分の肉体がふみにじられさいなまされるのに、むしろ異様な興奮すらおぼえるのだつた。しかし、ここにあるこのただれたような悪濁の味は、彼があんなにも神聖視している淳とのとはおよそ異つたもあつた。彼はこの肉体がトムであることを想像もした。英介的サディズムが彼自身の肉体すらこうして攻めさいなむマゾの立場において、どうにか落ちつくようだつた。それが男色の……漕いで彼が行きつく孤島なのであつた。

奇譚クラブ 第七巻第二号通刊第五十二号

二月号 定価百円 (送料八円)

昭和二十八年一月三十日印刷 (毎月一回一日発行)

昭和二十八年二月一日発行

編集人 箕田 京二 発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内 発行所 曙書房

菅原通四ノ三〇

振替口座 大阪三四九五六番